

海外生産育成調教実践研修報告

- 米国における生産および育成調教 -

遠藤 祥郎

日本中央競馬会

目次

はじめに.....	5
研修日程.....	7
1. 米国の競馬産業.....	8
1) 生産の中心ケンタッキー州レキシントン	8
2) 育成の中心フロリダ州オカラ	8
2. 繁殖および初期育成.....	10
1) ダービーダンファーム (Darby Dan Farm)	10
2) ウィンスターファーム (WinStar Farm)	53
3. 中期育成およびセールス・プレップ.....	76
ダービーダンファーム (Darby Dan Farm)	76
4. ブレーキング.....	116
ウィンスターファーム (WinStar Farm)	116
5. 育成牧場での調教（後期育成）	155
マーゴーフาร์ม (Margaux Farm)	155

6. 競馬場での調教および出走	201
スティーヴン・アスムッセン厩舎 (Steven Asmussen Racing Stable)	201
7. セリ	246
1) 1歳セリ	247
・ Fasig-Tipton The July Sale.....	247
・ Fasig-Tipton Saratoga Sale.....	259
・ Keeneland September Yearling Sale.....	264
2) 混合セリ	280
・ Fasig-Tipton The November Sale	280
・ Keeneland November Breeding Stock Sale	284
・ Keeneland January Horses of All Ages Sale.....	291
・ Fasig-Tipton Kentucky Winter Mixed.....	293
3) トレーニングセール.....	293
・ The Fasig-Tipton Florida Sale.....	293
・ OBS March Sale of 2YO in Training.....	301
・ Barretts Select 2YO in Training Sale	308
8. 獣医療.....	317
ハグヤード馬医療機関 (Hagyard Equine Medical Institute)	317
・ 往診部門 (Hagyard Field Care)	318
・ 繁殖部門 (McGee Fertility Center)	321
・ 内科部門 (McGee Medicine Center)	323
・ 外科部門 (Davidson Surgery Center)	325
9. フロリダ.....	338
オカラスタッド (Ocala Stud)	338

1 0. まとめ（日本と米国の違い）	377
1 1. <i>Summary</i>	382
おわりに.....	387

はじめに

本会入会后、私が生産育成部門を志望したのは大学時代に味わった苦い経験が動機になっています。当時、私は競走馬上がりのサラブレッドの（馬術競技馬としての）調教を任されていました。その馬は体格に恵まれ、競走成績は2戦2勝、私のような下手糞が乗ってもM-Bクラス（高さ130cm）を完走できる飛越能力を持っていたのですが、2戦のみで競走生活を終えたようにとにかく体質が弱く、特に馬格に反して蹄が薄く蹄質も悪かったため年の半分は跛行していてほとんどともに騎乗できないという有様でした。

私はこの馬のために青春時代を費やしました。放射線研究室に入ってレントゲンを撮ったり（蹄骨々折を発見しました）、蹄鉄を替えてみたり、サプリメントを与えてみたり・・・当時できることは全て試してみましたが、何より私自身の騎乗技術の未熟さも大きく、結局全国大会には出場できませんでした。馬の素質は文句なく高いのにかわらず、私の騎乗者としてのみならずホースマンとしての総合的な技術が不足していたため馬の全能力を発揮させることができなかったことは非常に悔しく、そして馬に対して申し訳ない気持ちで一杯でした。

その後、本会に入会し美浦トレセンで新米獣医師としてスタートを切るわけですが、その中で馬の治療をすることよりもむしろ馬が病気や怪我をしない飼養管理や調教法を追求したいと考えるようになりました。言うなれば「馬の全能力を発揮させる技術を身につけたい。」そのためには、「馬についてもっと総合的に勉強したい。」・・・そんな私にとって、本会内に「生産育成部門」なるセクションがあったことは、本当に幸運でした。

希望が叶い、日高育成牧場に異動してから最初の2年間は後期育成を担当しました。そこで故・坂本浩治副場長（当時）、石丸睦樹業務課長（当時）という2人の海外研修経験者から直接ブレイキングのご指導をいただけるなど、自分の中で基礎となる調教理論を学ぶことができました。次の2年間はホームブレッド担当として、繁殖から初期・中期育成を担当しました。ここでも海外研修から戻ってきたばかりの頃末憲治専門役（当時）から最新の技術を学ぶことができました。さらに、当時愛国で研修中だった富成雅尚専門役（当時）を訪ね、カラ調教場で競走馬に乗せていただくなど研修の具体的なイメージを持つことができました。このように海外研修を経験した上司からたくさんのことを教えていただきましたが、その中で「いつか自分も海外に出て勉強してみたい」という気持ちが強く湧いてきました。

念願が叶い渡米しましたが、昔と異なり今や日本の競馬レベルは世界トップクラスであり、研修先の全てが日本の技術より優れているというわけではありませんでした。しかし、米国のサラブレッド生産頭数は世界一であり、馬が多いということはそこで働くホースマンもまた多いということです。馬が100頭いたら100とおりの個性があり、優れたホースマンとは“引き出し”を多く持ちその個性1つ1つに対し最適な方法を選択し、馬の全能力

を発揮させてあげられる人物だと思います。私は米国でたくさんのホースマンたちから、その“引き出し”を1つでも増やせるように技術を盗んできたいと考えました。

研修では「見る」だけでなく自分がスタッフの一員となり現場で「実践する」ことで、五感をフルに使って学んでくることを心掛けました。報告書としてまとめるにあたり、インターネットを見ればわかるような情報は極力省きました。さらに、出発前にせっかく日本での生産から育成まで全てのステージを経験させてもらっていたので、「日本と米国で何が違うのか？」を主眼に記述しました。本書の377ページ以降にまとめを掲載しておりますので、時間のない方はまずそれだけでも読んでみてください。また、“恩返し”の意味で米国の友人達が読んでも内容をある程度理解できるように、英文のまとめも記載しました。

この研修にあたり人事部、国際部、馬事部、日高・宮崎両育成牧場のほか、ご尽力くださった全ての皆様にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。そして、いつも自分をサポートしてくれている妻子に改めて感謝します。

2020年7月吉日

遠藤 祥郎

研修日程

1. 研修期間

2015 年 6 月 14 日～2017 年 2 月 28 日

2. 研修国

アメリカ合衆国

3. 研修場所

Darby Dan Farm (2015 年 7 月～9 月、2016 年 1 月～6 月)
ダービーダンファーム

WinStar Farm (2015 年 10 月～12 月、2016 年 11 月～2017 年 1 月)
ウインスターファーム

Margaux Farm (2016 年 7 月～9 月)
マーゴーフアーム

Steven Asmussen Racing Stable (2016 年 10 月)
スティーヴン・アスムッセン厩舎

Hagyard Equine Medical Institute (2015 年 6 月、2016 年 4 月)
ハグヤード馬医療機関

Ocala Stud (2017 年 1 月～2 月)
オカラスタッド

1. 米国の競馬産業

米国のサラブレッド競走馬の生産育成の基本的な流れは、まず生まれてから 1 歳の秋までの約 1 年半を生産牧場で過ごす。その後、調教施設の整った育成牧場へ移動し、ブレーキング（騎乗馴致）がなされ基礎的な調教が行われる。米国では日本の地方競馬と同様、競走馬の調教は競馬場で行われている。各調教師が競馬場内に馬房を借りる内厩制である。育成牧場で調教された馬は競馬場の所属する厩舎へ移動し、最後の仕上げがほどこされ競走馬としてデビューを迎えることとなる。

1) 生産の中心ケンタッキー州レキシントン

レキシントン（Lexington）はケンタッキーダービーが行われるチャーチルダウンズ競馬場があるルイビル（Louisville）に続くケンタッキー州第 2 の都市である。人口は約 27 万人。競走馬の生産のほか、バーボンやタバコの生産、北部の隣町ジョージタウン（Georgetown）にあるトヨタの工場が有名である。

米国では毎年約 2 万頭のサラブレッドが生産されているが、中でもケンタッキー州は最大の馬産地であり、約 8,000 頭が生産されている。では、広い米国の中でもなぜケンタッキー州のレキシントン周辺が馬産に適しているかとされ、サラブレッドの生産が盛んに行われているのかについて、下記の 4 点が挙げられる。

- ①「ライムストーン」と呼ばれる石灰岩の地層が存在し、土壌中にカルシウム分が供給され、牧草中のミネラル分が豊富になり、馬の骨が丈夫になること。
- ②「ケンタッキーブルーグラス」という馬の放牧地に適した牧草が自生していたこと。
- ③夏は暑くなり過ぎず、冬は寒くなり過ぎない、馬に適した気候。日本でいうと新潟市と同じ緯度にある。
- ④東海岸に位置していることが挙げられる。米国東海岸にはニューヨークなどの大都市があり、経済の中心となっていることから馬主が集まりやすいという利点がある。

2) 育成の中心フロリダ州オカラ

米国における育成の中心地は、1 歳の秋から 2 歳の春にかけて競走馬としての初期調教が行われる時期の気候が温暖なフロリダ州である。中でもオカラ地区に育成牧場が多く集まっており、その数約 50 と言われている。フロリダ州オカラにある育成牧場 Wavertree Stables のアシスタント・トレーナーによると約 90% の 2 歳馬がフロリダで調教されているとのこと。ちなみに、アメリカン航空の機内誌によると、レキシントン地区の生産牧場の数は約 400 とのことである。両市はどちらも「Horse Capital of the World」を名乗っており、争ったこともあったようだ。フロリダ州の中でもオカラ地区に育成牧場が集まっている理由は下記の 4 点が挙げられる。

- ①天然の良質な砂地であり、調教コースおよびシェッドロー（引き運動をするための廊

1. 米国の競馬産業

下) を作るのに低コストであったから。

②「バヒアグラス」という栄養価の低い牧草が自生しており、放牧しながら馬体をしぼるのに都合が良いから。

③1 歳馬のブレイキングが開始される秋から冬にかけて温暖であり、2 歳馬の最後の仕上げをする春先の気温が高くなり過ぎない（朝方であれば 20℃以下）から。

④米国経済の中心である東海岸に近いから。



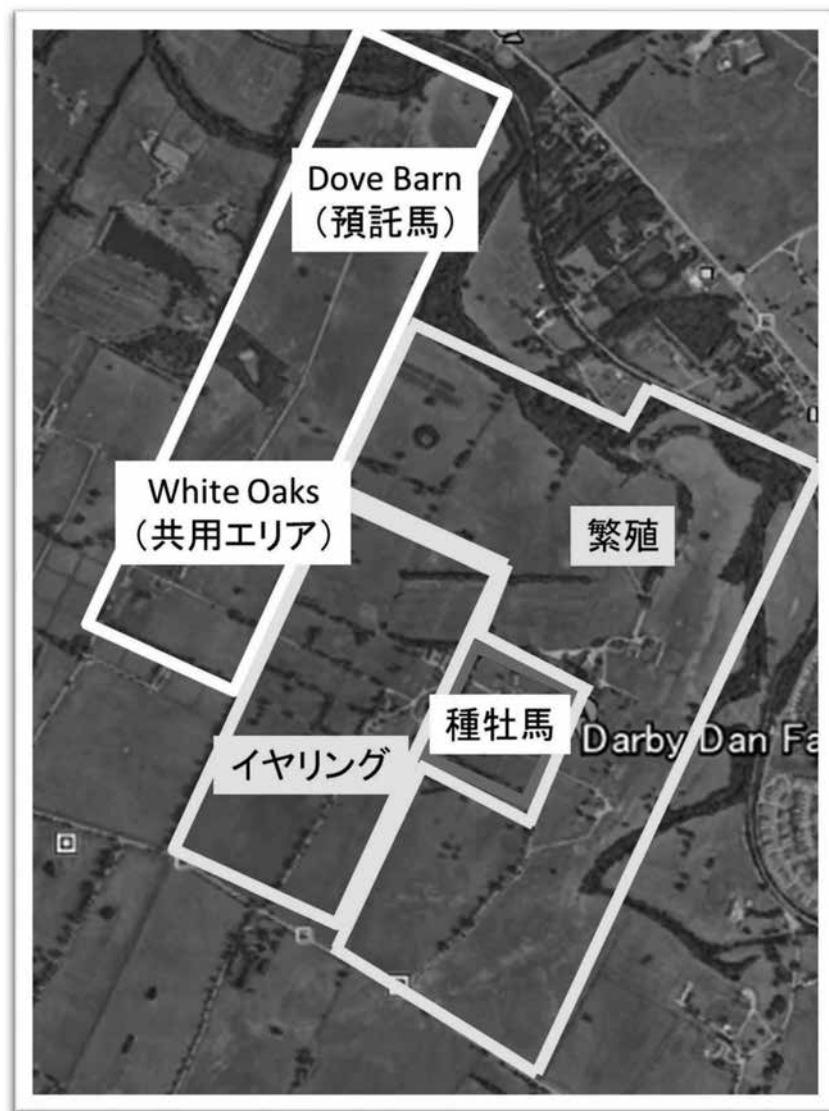
レキシントンとオカラは約 1,200km 離れている

2. 繁殖および初期育成

1) ダービーダンファーム (Darby Dan Farm)

ダービーダンファームは 1935 年に創立した歴史ある牧場で、米国クラシック三冠とブリーダーズカップ、さらにエプソムダービーを勝っている世界で唯一の牧場である。日本ではブライアンズタイム、グラスワンダーの生産牧場として知られている。年間約 60 頭生産している。

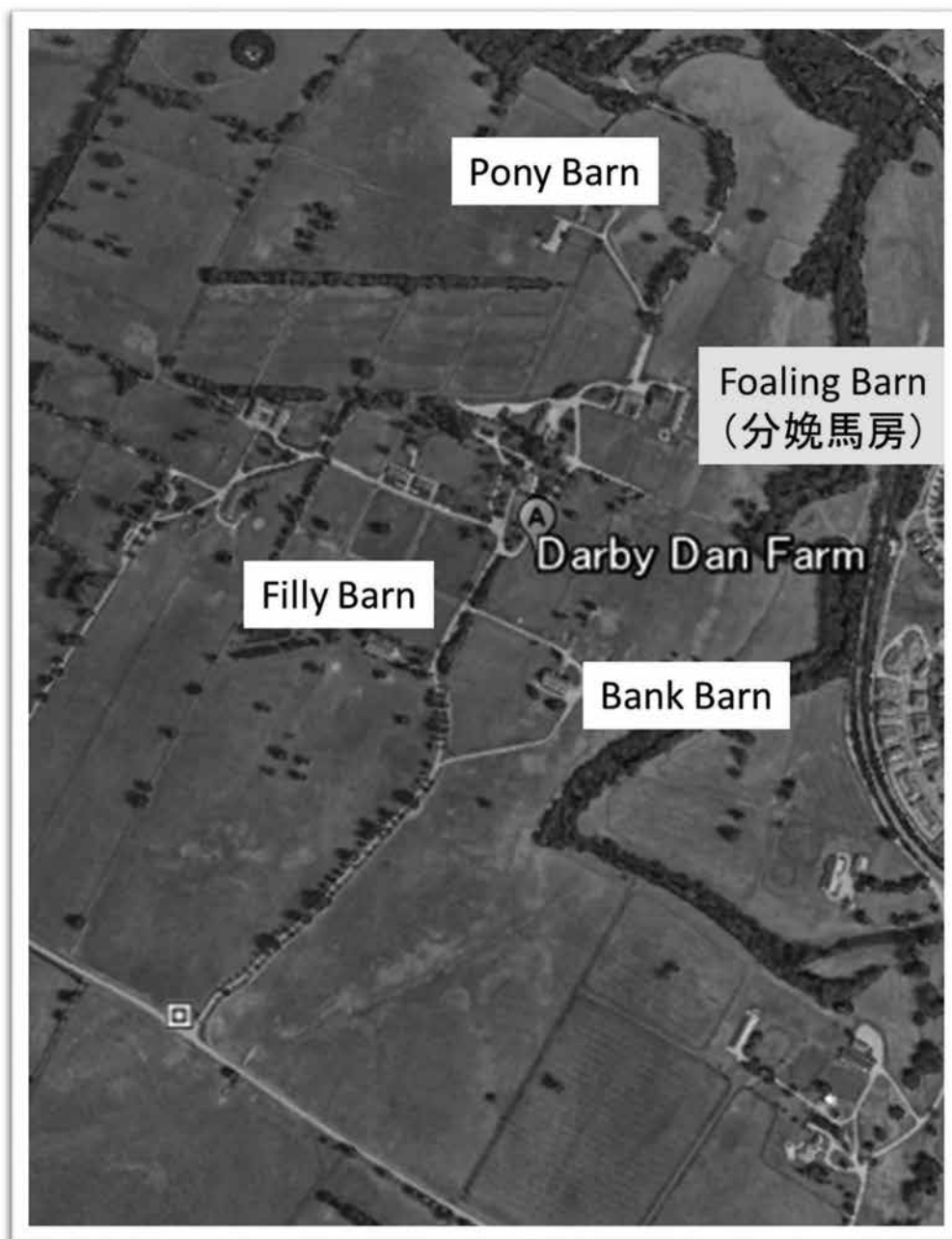
ダービーダンファームの本場は繁殖部門 (Broodmare Department)、イヤリング部門 (Yearling Department)、種牡馬部門 (Stallion Department) のほか、Broodmare と Yearling の共用エリアである White Oaks (元々 White Oaks Farm という別の牧場だった)、主に他州からの預託馬がいる Dove Barn からなる。



ダービーダンファーム (本場) 全体像

2. 繁殖および初期育成

本場の繁殖部門には分娩馬房のある Foaling Barn のほか、Pony Barn、Bank Barn、Filly Barn と計 4 つの厩舎があり、それぞれ周辺の放牧地を使用している。さらにダービーダン は Dearborn と呼ばれる分場を持っており、空胎馬はそちらで管理されていた（分場はそのほか、日本など他国への輸出検疫にも使用されている）。繁殖マネージャー（Broodmare Manager）は Sharee Woodhall という女性で、アメリカ人だが Irish National Stud の Breeding コースを卒業している。Indian Creek Farm というケンタッキー内にある別の牧場から移ってきた。



繁殖部門

2. 繁殖および初期育成

2月までは北海道のように雪では覆われていないものの草の伸びは完全に停止し、放牧地内に草架(hay feeder)を置かなくてはならない状況であった。3月になると新芽が伸び始め、中旬以降は温暖となり昼夜放牧が開始されるなどの変化があった。そのため、前半は2月までの管理、特に分娩から出生直後までの繁殖牝馬および新生子馬の管理について記載する。そして後半は3月以降の管理、特に出生直後から離乳までの管理について書きたい。

まず2月までの大まかなタイムスケジュールは下記。

- 7:00 集合、マネージャーが分娩兆候をチェックしながら妊娠馬および母子(2週齢以降)を放牧(投薬があればこの時に)
Pony、Bank、Filly Barnの妊娠馬の朝飼付&馬体チェック(放牧地で、投薬があればこの時に)
- 9:00 母子(2週齢以前)放牧、厩舎作業
- 10:30 獣医師来診
- 11:30 母子(2週齢以前)集牧、昼食
- 12:30 母子(2週齢以前)再放牧、厩舎作業続き
- 14:00 Pony、Bank、Filly Barnの妊娠馬の夕飼付&馬体チェック(放牧地で、投薬があればこの時に)
- 15:00 妊娠馬および母子を集牧、マネージャーが分娩兆候をチェック、キャスリック縫合の切開など(投薬があればこの時に)
- 16:00 解散(夜警が来る17:00まで1名残る=超勤処理)

・JRA日高育成牧場と異なっていた点

まずは日高育成牧場の管理と異なっていた点を列挙する。

1) 分娩前の妊娠馬に「ウォーキングマシンによる運動」を課さない
2) 分娩時、人が「介助」する(子馬を引っ張る)
3) 子馬は全頭出生翌日および1ヶ月後に「血漿製剤」を投与される
4) 子馬に「馬服」を着せない
5) 1人で母子を引く場合、「人が左・子馬が真ん中・母馬が右」という配置で歩く
6) 交配時、子馬は「馬房に置いて」母馬のみ行く
7) 交配には「輸送業者」が繁殖牝馬を連れて行く(牧場従業員は立ち会わない)
8) 繁殖牝馬は全頭「キャスリック縫合」されている

・繁殖牝馬の飼養管理

<放牧>

まず原則的に、豊かな土壌と温暖な気候を有しているため、繁殖シーズン以外は24時間放牧が基本である。飼付も放牧地で行う。ブラシ掛けや裏掘りはせず、飼付時に馬体をチェ

2. 繁殖および初期育成

ックするのみ。挫跖による跛行が多かったが、その場合も蹄に包帯（hoof packing）を巻いて、そのまま放牧を継続していた。レギュメイトなどの投薬も、放牧地で飼付時に行う。放牧地は基本的に雪には覆われていなかったが、1～2月は寒さのせいで草がほとんど伸びないため、放牧地内に放牧地に草架が置かれ、中にはルーサン乾草が入れられた（コンパクトが5～6個入る）。



放牧地で飼付

草架の中にルーサン

分娩予定日は単純に交配から11か月後で、例えば前年2月22日に種付けされた妊娠馬の分娩予定日は1月22日という具合である。ダービーダン全体としての繁殖牝馬の配置は下記の通り。

- 1) 分場に空胎馬
- 2) White Oaks に分娩予定の遅い妊娠馬（予定日まで2か月以上）
- 3) Pony、Bank、Filly Barn に分娩予定の近い妊娠馬（予定日まで1ヶ月以上）
- 4) Foaling Barn に分娩間近の妊娠馬（予定日まで1ヶ月未満）

そして、本場内での妊娠馬の放牧地および放牧時間だが、分娩が近い順に①Foaling Paddock で昼放牧、②Foaling Field で昼放牧（以上 Foaling Barn に所属）、③Pony Paddock で24時間放牧、④Pony Field で24時間放牧（以上 Pony Barn に所属）、⑤Filly Field で24時間放牧（Filly Barn に所属）という感じで放牧されていた。

昼放牧の馬は7:00に放牧され、15:00に集牧される。集牧後は基本的に裏掘りとごく簡単にブラシ掛けするのみ。雨の後などで泥だらけになった場合、天気良ければ水で馬体を洗う。JRA日高育成牧場とは異なり、分娩前の妊娠馬にはウォーキングマシンによる運動を負荷していない。そのため、四肢特に両後肢に浮腫が認められる妊娠馬が多数いた。

<厩舎>

分娩用の広い馬房は Foaling Barn 内にある。Foaling Barn には大中小3つのタイプの馬房があり、大が縦480cm×横540cm、中が縦480cm×横420cm、小が縦480cm×横355cm

である。大は分娩監視室の両隣に2つのみ、小が大の隣に2つずつ計4つあり（昔、中3つを大1つ小2つに改築した）、その他は中で18個。ということで、Foaling Barnには合計24馬房ある。分娩には使用しないPony Barnの馬房が縦400cm×横350cm、同じくFilly Barnの馬房が縦360cm×横420cmで、母子で入れると窮屈な印象。

Foaling Barnの敷料は麦稈を使用していた。また、分娩馬房の麦稈は衛生上分娩が終わると全部廃棄し、新品を入れていた。その他の厩舎では経費削減のため、敷料にケンタッキー産のブルーグラス乾草を使用していた。乾草はルーサンを使用。分娩前は2スライス（約4kg）、分娩後は3スライス（約6kg）を馬房の隅に置いておく。昼放牧の馬に対しては1日2回、昼夜放牧の馬に対しては1日1回給餌された。



Foaling Barn



敷料は麦稈、乾草はルーサン

<飼料>

妊娠馬に与えている濃厚飼料（ペレット）は、McCauley Bros.社製の Option 14 Pelleted。意外にもイヤリング（1歳馬）に使用されていたものと同じであった。2回飼付で、基本は朝・夕2スクープ（4ポンド＝約1.81kg）。BCSに応じて朝・夕0.5スクープ（1ポンド＝約0.45kg）から朝・夕2.5スクープ（5ポンド＝約2.27kg）まで増減する。昼放牧の際、朝飼付（バッグに入れておく）は4:00で夜警が担当。夕飼付は15:00の集牧後。集牧時に飼桶（feed pan）に入れてある。昼夜放牧の際の朝飼付は7:30の集牧後（同じく飼桶に入れておく）、夕飼付は15:00頃放牧地で行っていた。

分娩後3日間はブランマッシュを給餌する。内容はスイートフィード2スクープ、ブラン（ふすま）2スクープ、コーン油少々、お湯。流産した際も同様にブランマッシュを給餌していた。

2. 繁殖および初期育成



濃厚飼料（ペレット）は、1 歳馬と同じ



朝飼付は夜警が担当

分娩後 3 日間はブランマッシュ

Option 14 Pelleted（McCauley Bros.社製）の成分を下記に示す。

粗タンパク質（最小）	14.0%
粗脂肪（最小）	3.0%
粗繊維（最大）	13.0%
カルシウム（最小）	1.2%
カルシウム（最大）	1.7%
リン（最小）	0.7%
銅（最小）	30ppm
セレン（最小）	0.4ppm
亜鉛（最小）	100ppm
ビタミン A（最小）	4000IU/lb
ビタミン E（最小）	100IU/lb

<ライトコントロール>

夜警がいるのでタイマーは使用せず、下記の時間になったら夜警が電気を消す。JRA のように一律昼 14.5 時間・夜 9.5 時間にすることはなく、徐々に消灯時間を遅くして昼の時間（明期）を延ばす。

日付	消灯時間
12 月 1 日	19:00
12 月 8 日	19:45
12 月 15 日	20:30
12 月 22 日	21:15
12 月 29 日	21:30
1 月 5 日	21:45
1 月 12 日	22:00
1 月 19 日	22:15
1 月 26 日	22:30
2 月 2 日	22:45
2 月 9 日	23:00
2 月 16 日	23:15
2 月 23 日	23:30
3 月 2 日	23:45
3 月 9 日	24:00
3 月 16 日	24:15
3 月 23 日	24:30
3 月 30 日	24:45
4 月 6 日	01:00
5 月 1 日	終了

<分娩監視>

分娩があるなしにかかわらず牧場には年中夜警がいて、分娩シーズンには 1 名から 2 名に増員される。着目している分娩兆候としては日本と同様に乳腺の発達とワックス（乳ヤニ）、陰唇の弛緩、臀部の平坦化（仙坐靱帯の弛緩）などであるが、特にワックスを最重要視しており、そして実際にワックスが付いた妊娠馬は高確率でその日の夜に分娩した。

・分娩時の対応

まずは箇条書き。その後、詳細を記載する。

1) 母馬が落ち着かなくなったら、尾をブラウンバンテージで巻く。
2) 破水したら、マネージャーに電話。小さな馬房の馬は広い分娩馬房に移す。

2. 繁殖および初期育成

- | |
|---|
| 3) マネージャーが手を入れて胎位を確認。 |
| 4) 馬のいきみに合わせて、子馬を牽引（左前肢、右前肢、頭各1名）。 |
| 5) 子馬を拭きながら、臍帯の拍動の消失を待つ。切れたらクリップで止血&消毒。 |
| 6) 母馬にフルニキシン（バナミン）ペースト&後産をロープで縛る。子馬に浣腸。 |
| 7) 乳汁を採取し、Brix 値をチェック（低ければストック初乳を使用）。 |
| 8) 母馬にルーサン乾草と水を与える。 |
| 9) 後産が排出されたら、広げてチェックする。母馬の陰部を洗浄。 |
| 10) 子馬が自力で起立できなければ介助して立たせる。 |
| 11) 子馬が自力で哺乳できなければ介助して乳を吸わせる。 |

通常使う分娩セットは、新生子馬の体を拭くタオル、臍帯クリップ&消毒用のクロルヘキシジン（ヒビテン）、フルニキシンペースト、ゴム手袋&直検用手袋、浣腸など。緊急薬 Box の中身はナロキソン、アトロピン、エピネフリン、ドプラム、プレドニゾロンなど。



分娩セット



緊急薬 Box

- 1) 母馬が落ち着かなくなったら、尾をブラウンバンテージで巻く。

夜警が行う。周囲を気にする馬の場合は馬房の扉を閉めて、照明を消してそっとしておく。



尾をブラウン B で巻く



破水

2) 破水したら、マネージャーに電話。小さな馬房の馬は広い分娩馬房に移す。

破水したら夜警が繁殖マネージャーの Sharee とファームマネージャーの Wayne に電話。ダービーダンには分娩用の広い馬房が 2 つしかないので、必要に応じて移す。移す必要がなく、狭い馬房のままで良いとマネージャーが判断した場合は、そのまま産ませることもある。ちなみに、分娩翌日に母子を元の馬房に戻し、分娩馬房に敷かれていた麦稈は感染症予防のため全部廃棄する。



分娩前に広い馬房に移す

3) マネージャーが手を入れて胎位を確認。

4) 馬のいきみに合わせて、子馬を牽引（左前肢、右前肢、頭各 1 名）。

現・帯広畜産大学の南保教授（私が JRA 日高育成牧場にいた当時の生産育成研究室長）が推奨している“自然分娩”とは正反対で、全頭で分娩時に人為的に牽引を行っていた。左前肢、右前肢、頭各 1 名の計 3 名が必要。子馬の顔が出た時点で羊膜を破り、子馬の鼻道にある羊水を抜く。母馬のいきみに合わせて、真っ直ぐではなく遠位に向かって弧を描くように牽引する。余談であるが、新生子馬が娩出した瞬間に夜警の Mark が「Welcome to America!!」と叫ぶ。それを真似していたら、いつの間にかその役目が私のものになっていた。



マネージャーが胎位を確認

子馬を牽引

5) 子馬を拭きながら、臍帯の拍動の消失を待つ。切れたらクリップで止血&消毒。

娩出した新生子馬をタオルで拭く。拭いて濡れたタオルは母馬の鼻先に置く。育子放棄を防ぐため。臍帯は拍動の消失を待ち、拍動が無くなったら拳で根元付近（子馬側）をしっかり握り、子馬を移動させて無理矢理切る。切れたらクリップで止血し、クロルヘキシジンで消毒。余談だが、アメリカのクロルヘキシジンは青い。



子馬をタオルで拭く



臍を止血&消毒

6) 母馬にフルニキシンペースト&後産をロープで縛る。子馬に浣腸。

母馬には分娩後、全頭にフルニキシンペーストが投与された。投与量は体重 1,200 ポンド換算で。アメリカでは人医療において全員が無痛分娩を選択しているらしく、患者に痛みを感じさせるなんて野蛮という感覚らしい。後産を縛るのは日高育成牧場と一緒に。紐は乾草が縛られているナイロン紐（トワイン）を使用。子馬には全頭浣腸。「Fleet Saline Enema」という製剤を1頭につき1本使用。



全頭にバナミン投与



後産を縛る

7) 乳汁を採取し、Brix 値をチェック（低ければストック初乳を使用）。

検査用に乳汁を採取。アナログ式の糖度計で Brix 値をチェックする。20 以上だと初産馬 (maiden) を除き片方の乳房から初乳 (colostrum) を 1 パイント搾乳し、ストック（冷凍

保存)する。初産馬は初乳の量が少ないのと、ストレスになるため搾乳しないとのこと。20以下だとストック初乳を使用する。投与量は Brix 値が 15~19 だと 1 パイント、10~14 だと 2 パイント程度のような。哺乳瓶を使って、30 分に 1 回程度、瓶が空になるまで給与する。なお、規模が小さくストック初乳を持っていない牧場のため、Kentucky Thoroughbred Farm Manager Club (KTFMC) が初乳の寄付を呼び掛けており、小規模牧場はそこに寄付されたストック初乳を使用する。KTFMC にはファームマネージャーのほか獣医師も会員になっており、私も入会した。月 1 回程度夕食付きの講習会が開催されている。



1 パイントずつストック



ストック初乳は哺乳瓶で与える

8) 母馬にルーサン乾草を与える。

一息ついたところで、母馬にルーサン乾草と水を与える。ついでに、羊水で汚れた麦稈を捨てる。

9) 後産が排出されたら、広げてチェックする。母馬の陰部を洗浄。

後産が排出されたら、日高育成牧場と同様に F 字に広げてチェックする。その後、母馬の陰部を洗浄する (クロルヘキシジンおよび微温湯)。

10) 子馬が自力で起立できなければ介助して立たせる。

11) 子馬が自力で哺乳できなければ介助して乳を吸わせる。

これらの判断は非常に早い。1 回でも自力での起立に失敗すれば、すぐに補助起立を行っていた。子馬の両前肢を前に伸ばして、背中をスクラッチする (引っ掻く)。そして子馬が立ったらすぐに胸前を支える。もし二人いれば一人が胸前を支え、もう一人が背中をスクラッチし続けて、安定して立てるようになったら放す。

哺乳の介助も同様で、判断は非常に早い。指を吸わせて、乳頭に誘導する。介助しての授乳および自力での授乳の 2 回の授乳を確認して、マネージャーは帰宅する。あとは夜警が観察し、必要に応じて介助する。

補足だが、初産馬などで時々ある乳を飲ませない母馬に対しては、程度に応じてリップチェーン使用したり単純に引き手を保持するなどして保定を行い、母馬が拒絶しなくなったら介助を止める。子馬が哺乳（nursing）できているかどうかは子馬の口に乾いたミルクが付着していないか、母馬の乳房（bag）が硬くないか（硬ければ飲めていない、柔らかければ飲めている）で判断する。



補助起立

哺乳介助

・種付

交配適期の判断については別途ハグヤードの回に記載する。種付に行く日は、まず母馬を手入れする。そして輸送の直前にマネージャーが母馬にアセプロマジン（濃度は 10mg/ml）を 2ml 静注する（体重 500kg だとして 0.04mg/kg）、子馬に同じくアセプロマジン 0.75ml を投与（0.25ml 静注、0.50ml 筋注）する。代謝の速い静注で早く効かせ、代謝の遅い筋注で長く効かせるとのこと。

母馬のみ種馬場に連れて行くのだが、興味深かったのは牧場の従業員は誰一人立ち会わず、輸送業者が連れて行くこと（種馬場宛ての種付申込書はマネージャーが用意し、輸送業者に渡す）。一度だけ繁殖牝馬を 2 頭同時に種馬場に連れて行く際に帯同させてもらったが、輸送業者が一人で馬を下ろし、試情（当て馬）から陰部の洗浄まで繁殖牝馬を保持していた。さすがに種付中は種馬場の職員が保持していた。

母馬が種馬場に行っている間、子馬は馬房内で待たせられる。暴れて怪我をしないように、馬房内の水桶および飼桶を外し、上下の扉を両方閉める。幸い、レキシントン地区には種馬場が密集しているため、母馬不在の時間はおよそ 1 時間半から 2 時間である。

母馬を馬房に戻す際、特に最初の授乳の時に母馬が興奮して子馬を蹴ることがあるので注意が必要である。最初の授乳が無事に終わるまで母馬を保持する（場合によってはリップチェーンを使用する）。母馬帰厩後はしばらく放牧せず母子を馬房内で休ませる。種付の数時間後に日高育成牧場同様母馬にオキシトシンを投与する（余分な精液を排出させるため）。

念のため補足するが、アメリカでも牧場従業員が帯同する牧場もある。また、全頭ではなく場合によって（癖のある牝馬など）帯同する牧場もある。しかし、一般的には輸送業者に

まかせるのがアメリカンスタイルのようだ。

・新生子馬の飼養管理

＜放牧＞

新生子馬は生まれた翌日（早朝に生まれた場合は当日）からパドックに放牧される。たとえば 1 月生まれでも子馬に馬服は着せていなかった。最初の 1 週間は母子 1 組で小パドックに放牧され、子馬に休息を与えるため昼に一度集牧する。1 週齢になると 2 組で放牧するが、最初の日にはマネージャーが母馬にアセプロマジン（濃度は 10mg/ml）を 1ml 静注（体重 500kg だとして 0.02mg/kg）してから放牧する。2 週齢以降は 4 組程度で大きな放牧地に放す。この場合も最初の日には母馬を鎮静していた。4 週齢以降で、かつ 3 月中旬以降の温暖な気候になってから昼夜放牧が開始される。その際、朝飼付のみ馬房内で行い、夕飼付は放牧地で行われる。獣医師の検診がある場合は検診が終わってから放牧していた。

週齢	場所	頭数（組）	時間
0	小パドック	1	9:00～11:30 + 12:30～15:00
1	中パドック	2	9:00～15:00
2～3	大放牧地	4	7:00～15:00
4～	大放牧地	6～9	10:30～7:30

新生子馬の放牧



生まれた翌日から放牧

1 週齢になると 2 組で放牧



2 週齢以降は大きな放牧地に

4 週齢以降で昼夜放牧

<子馬の保定方法>

治療の際などの子馬の保定方法は、まず尻を壁に向ける。そして、尾を右手で持ち上げる。左手を頭の下から回し、右耳を持つ。子馬が倒れてしまったらそのまま寝かして処置する。その際、頭を押さえるか、両前肢を折り曲げて立てないようにする。

<飼料>

子馬へのクリープフィードの給餌はなし。ついでに盗食を防ぐ措置もないので、母馬の飼料（ペレット）を自由に採食している。しかし、疝痛などの悪影響は今までのところ観察されていない。

・獣医療

<妊娠馬へのレギュメイト投与>

妊娠鑑定時（交配後 14 日および 28 日）の血中プロジェステロン（P4）濃度測定で低値（ハグヤードで研修中に聞いて回ったところ、4ng/ml を基準にしている牧場と 6ng/ml を基準にしている牧場があった）だった妊娠馬には、プロジェステロン製剤（レギュメイト）の経口投与が続けられる。10～12ml（マネージャーの好みによる。前マネージャーは 10ml、現マネージャーは 12ml と指示していたので、現場は少々混乱していた）を 1 日 1 回経口投与する（それぞれ体重 500kg だとして 0.044mg/kg および 0.053mg/kg）。放牧地での朝飼い付け時に行っていたが、投与している馬はわかりやすいように無口頭絡の鼻革部分に赤いビニールテープが巻かれていた。分娩 1 ヶ月前に投与量を下げて 5ml の経口投与を 1 週間継続し、そして分娩まで投与を中止する（いきなり切らずに漸減する）。

2. 繁殖および初期育成



レギュメイト



投与している馬には赤いテープ

<予定日の1ヶ月前に超音波検査>

妊娠馬は予定日の1ヶ月前に獣医師による超音波検査が実施され、主に胎盤の厚さをチェックされた。ここで早期胎盤炎の兆候が認められた場合、分娩まで投薬が継続された。投薬内容は、Trentol（血管拡張薬＝Pentoxifylline、濃度は4g/30ml）40ml および EquiSul（サルファ剤＝Sulfadiazine および Trimethoprim の合剤、濃度は400mg/ml と書いてあるのだが、それぞれがどうなのかは不明）40ml の1日2回経口投与、加えてバナミンペースト体重1500ポンド用量1日1回の経口投与である。



血管拡張薬 Trentol



サルファ剤 EquiSul

<繁殖牝馬は全頭「キャスリック縫合」>

ダービーダンの繁殖牝馬は全頭「キャスリック縫合」が実施されている。米国では基本的に「キャスリック縫合」されるのが一般的だそう。分娩予定日前にマネージャーが切開する。集牧後の15:00から業務終了の16:00までの間に行われることが多かった。繁殖牝馬は鼻捻子し、馬房からお尻だけ出す。クロルヘキシジンでスクラブした後、リドカインで局所麻酔し、その後ハサミで切開する。縫合は、分娩1週間後に獣医師が行っていた。



リドカインで局所麻酔

ハサミで切開

<分娩前の妊娠馬の血液検査（NI スクリーニングテスト）>

母馬の血液を用いて、分娩前に血液型不適合（新生子溶血性黄疸、Neonatal Isoerythrolysis=NI）発症の可能性をチェックする NI スクリーニングテストが広く普及している。これは分娩予定日の 2～4 週前に母馬の血液中の赤血球に対する抗体の有無を調べる。抗体を持っていれば、NI（+）すなわち血液型不適合（新生子溶血性黄疸）発症の可能性ありと判断され、分娩後子馬に口カゴが装着され、母馬の初乳ではなくストック初乳の投与および粉ミルクが給餌される。しかしこれはあくまでも母馬側の血液のみを用いたスクリーニングテストであり、分娩後母馬の初乳と子馬の血液を用いた確定診断（Jaundiced Foal Agglutination=JFA Test）が行われる。この JFA Test が陰性であれば、子馬の口カゴは外され、母乳を飲むことがゆるされる。

この NI スクリーニングテストだが、特異度が低いらしく、陽性であっても JFA Test で陰性となることがかなり多いようだ。しかし、一度血液型不適合（新生子溶血性黄疸）が発症すると子馬にとって致命的なダメージとなるため、それを予防するために実施している。ダービーダン以外の牧場でもほぼ全ての牧場で実施しているようだ。

日本でも約 10 年前に実施されていたらしい（ラニの遠征で来たノースヒルズ福田 GM から教えていただいた）。当時 HBA が中心になって行っていたが、偽陽性が多く、そしてそもそも新生子溶血性黄疸の発症率が低いため行われなくなったとのこと。

<早期胎盤剥離（レッドバッグ）>

まともに全部剥離した症例にはいまだ遭遇できなかったが、胎盤の一部に早期剥離が認められた繁殖牝馬は 1 頭いた。胎子の呼吸に気をつけながらいつもどおり牽引して、特別問題なく分娩が完了した。



胎盤の一部に早期剥離が認められた繁殖牝馬

<胎盤の異常>

寒さに強く、放牧地にて冬季に優位に発育するトールフェスクの摂食によると思われる胎盤の異常（シストの形成）が数頭認められた。トールフェスク自体は問題ないが、トールフェスクに感染したカビによる毒が悪影響を及ぼす。これ以上病状が進行するとレッドバックになるとのこと。



トールフェスクによる胎盤の異常（シストの形成）

<新生子馬の獣医検査>

新生子馬は分娩翌日（早朝に生まれたらその日の午後）に獣医師による検査を受ける。内容は外観の視診および触診、特に眼（眼瞼内反していないか）、肋骨（骨折していないか）、口腔粘膜（黄疸がないか）が確認される。その後、採血（IgG の測定）および全頭に血漿製剤（高免疫血漿製剤 Hyper Immune Plasma）が投与される。この際使用される血漿製剤は *Rhodococcus equi* およびウェルシュ菌 (*Clostridium perfringens*) に対する抗体価を高めた 1 リットルのもの。太さ 16G 長さ 2 インチの留置針およびフィルターの付いた輸血セットを使用し、基本的に立位のまま投与する。子馬が長時間我慢できないので助手が輸液バックをしぼって急速静注していたが、後刻ハグヤードで研修中獣医師によっては自然落下で投

2. 繁殖および初期育成

与していた。ユニバーサルドナーから作成されているため拒絶反応が起こらないはずではあるが、本来は時間をかけて投与すべきものであるという認識は日本と変わらないようだ。触診にて肋骨骨折が疑われる場合はさらに胸部の USD が追加される。

1 ヶ月齢で再度血漿製剤が投与される。この際使用される血漿製剤は *Rhodococcus equi* のみに対する抗体価を高めた 300ml のもの。こちらもダービーダンでは助手が輸液バックをしぼって急速静注。

ハグヤードでの研修中も血漿製剤の投与はたくさん見た。米国ではかなり普及しているようである。1 本約 300 ドルと高価だが、一度ロドコッカス肺炎が発症すれば長期に渡る抗生剤の投薬必要となるので、それが予防できるなら結局安上がりだという考え方のようである。



血漿製剤①



立位で静脈内投与



肋骨骨折疑いは USD



血漿製剤②

<発情下痢>

子馬のお尻をお湯をつけた綿花で拭いて、ミネラルオイルを塗布する。

＜種付前の排卵促進剤の使用＞

排卵させたい時間の 12 時間前にデスロレリン製剤の投与が行われている。例えば翌朝 7:30 の種付けなら前日の 19:30 に投与する。詳細はハグヤードの回に記載する。

・装蹄

繁殖牝馬の削蹄は月 1 回装蹄師が来場し行われていた。削蹄料金は 1 頭 23 ドル。1 頭に要する時間は約 10 分。

・GPS 装置を用いた放牧地での運動量調査

GPS 装置（Transystem 社、747ProS）を用いて分娩直の妊娠馬の放牧地での運動量を調査した。分娩に近い順に①Foaling Paddock で昼放牧、②Foaling Field で昼放牧、③Pony Paddock で 24 時間放牧、④Pony Field で 24 時間放牧、⑤Filly Field で 24 時間放牧という感じで放牧されていた。そこで、①～⑤の各群のデータを取って比較した。

Foaling Paddock	分娩までの日数	時間	距離 (km)
Mare A	7	7	2.2
Mare B	13	9	1.9
Mare C	18	7	2.4
Mare D	21	9	3.4

①Foaling Paddock で昼放牧されている群の 1 日の移動距離

Foaling Field	分娩までの日数	時間	距離 (km)
Mare E	14	9	1.7
Mare F	17	8	2.3
Mare G	21	8	3.3
Mare H	38	8	3.7

②Foaling Field で昼放牧されている群の 1 日の移動距離

Pony Paddock	分娩までの日数	時間	距離 (km)
Mare I	22	25	6.0*
Mare J	26	24	4.5*

*草架使用

③Pony Paddock で 24 時間放牧されている群の 1 日の移動距離

2. 繁殖および初期育成

Pony Field	分娩までの日数	時間	距離 (km)
Mare K	23	24	10.7
Mare L	29	20	7.6*
Mare M	30	24	7.5
Mare N	32	24	5.7*

*草架使用

④Pony Field で 24 時間放牧されている群の 1 日の移動距離

Filly Field	分娩までの日数	時間	距離 (km)
Mare O	37	25	8.3
Mare P	48	24	8.1

⑤Filly Field で 24 時間放牧されている群の 1 日の移動距離

以上の 5 群のデータをまとめたものが、下記の表である。データは全て上段に中央値を示し、下段に最小値および最大値を示してある。頭数が少ないため統計学的な処理はできなかったが、分娩が近づくとつれて、妊娠馬の 1 日の移動距離は少なくなる傾向が認められた。妊娠直前の昼放牧にした群の移動距離は JRA 日高育成牧場のデータと同等であり、日高育成牧場ではウォーキングマシンを使用している分、移動距離がおよそ 2 倍になる計算である。四肢、特に両後肢に浮腫を防ぐためには 1 日 5km 程度の運動が必要ではないかと考えられた。

群	調査頭数	分娩までの日数	時間	距離 (km)
昼放牧 Foaling Paddock	4	15.5 (7-21)	8 (7-9)	2.3 (1.9-3.4)
昼放牧 Foaling Field	4	19 (14-38)	8 (8-9)	2.8 (1.7-3.7)
24 時間放牧 Pony Paddock	2	24 (22-26)	24.5 (24-25)	5.3 (4.5-6.0)
24 時間放牧 Pony Field	4	29.5 (23-32)	24 (20-24)	7.6 (5.7-10.7)
24 時間放牧 Filly Field	2	42.5 (37-48)	24.5 (24-25)	8.2 (8.1-8.3)
昼放牧 JRA 日高	-	-	7	2.5 (+WM2.5)

ダービーダン妊娠馬の 1 日の移動距離のまとめ

・種牡馬の飼養管理

基本的にパドック放牧で、騎乗運動やウォーキングマシンによる運動は行っていない。華氏 40 度 (40° F=約 4.44°C) を下回ると昼夜放牧を止め昼放牧 (7:00~13:00) に切り替える。真冬は馬服を着せたまま放牧。2 月中旬 (2016 年は 2 月 17 日) から種付開始。その前に温血種 (ウォームブラッド) の牝馬 2 頭を用いて試験が行われていた。

ダービーダンでの種付の流れは、まず Training Barn (もともと調教をおこなっていた場所にあるのでこの名前が残っている) で牝馬を下ろしてもらい、当て馬による壁越しの試情を行う。ダービーダンには 2 頭当て馬がおり、この時に使用されるのは競走馬を引退したサラブレッド。もう 1 頭はパロミノで、ダービーダンの繁殖牝馬の試情のため厩舎を回る。

その後、尾巻きをし、陰部をスクラブ洗浄した後潤滑ゼリーを塗布し、種馬場 (Breeding shed) へ向かう。種馬場では牝馬に革製の首カバーおよび両後肢にブーツが装着され、鼻捻子をされた状態で再度当て馬が入場し、今度は乗駕まで行う。この時の反応を見て、場合によっては牝馬に鎮静剤が投与される。その後、種牡馬が入場し、陰茎の消毒がされた後、種付となる。種付後は再度陰茎の消毒がなされ、種牡馬によっては牝馬の子宮内にシーメン・エクステンダーの注入が行われる。なお、種付自体は獣医師の立ち会いは不要だが、シーメン・エクステンダーの注入は獣医師でないと行えないため、必要な際にはハグヤードから若手獣医師が来場して種付けに立ち会う。なお、種付時間は①7:30、②11:00 もしくは 13:00、③16:00、まれに④20:00。



種牡馬はパドック放牧



Training Barn

2. 繁殖および初期育成



当て馬による試情



陰部の洗浄

種馬場へ



首カバーの装着

陰茎の消毒



種付

シーメン・エクステンダーの注入

2月までは北海道のように雪では覆われていないものの草の伸びは完全に停止し、放牧地内に草架を置かなくてはならない状況だったが、3月になると新芽が伸び始め、中旬以降は温暖となり昼夜放牧が開始されるなどの大きな変化があった。ここから3月以降の管理について記載する。

・3月以降の管理

昼夜放牧開始以降の放牧地の使い分けは下記のとおりであった。

- 1) 分場に空胎馬（初供用の繁殖牝馬を maiden、初供用ではない空胎馬を barren と呼ぶ）
- 2) White Oaks に出生が最も早かった子馬とその母馬
- 3) Filly Barn に出生が次に早かった子馬とその母馬
- 4) Foaling Barn に出生直後の子馬とその母馬、分娩間近の妊娠馬
- 5) Pony Barn に感染症が疑われる子馬とその母馬（隔離厩舎として使用）
- 6) Dove、Training Barn に他州から預託された繁殖牝馬（boarding mare）

昼夜放牧開始以降のタイムスケジュールは下記。

- 7:00 集合、馬房に朝飼および水を準備
- 7:30 集牧および投薬（昼放牧の馬はここで放牧）
- 8:15 子馬検温、母馬の乳房をチェック（軟らかく濡れているか＝哺乳しているか）
- 9:00 厩舎作業、子馬の裏掘りなど
- 10:30 放牧（その日獣医師の診察を受ける馬以外）
- 11:00 獣医師来場・診察、残りの馬を放牧
- 12:00 昼食（獣医師の来場時間によりずれる）
- 13:00 厩舎作業（ボロ出し）
- 14:30 昼放牧の馬の集牧
- 15:00 放牧地で夕飼および投薬

16:00 解散（17:30 頃まで残業する日も多々あり）

・繁殖牝馬の飼養管理

＜草架の撤去＞

4月2日に草架が撤去された。実際にはだいぶ前から繁殖牝馬たちは地面に生えてきた青草を食べ、乾草を食べていなかった。なお、当歳馬および1歳馬がいる放牧地には危険防止の観点から草架を使用していなかった。余談だが、ハグヤードで研修中、複数の牧場で草架が撤去されずそのままになっていた。気にしない牧場も多いようだ。ちなみに、掃除刈りは4月初旬から開始された。

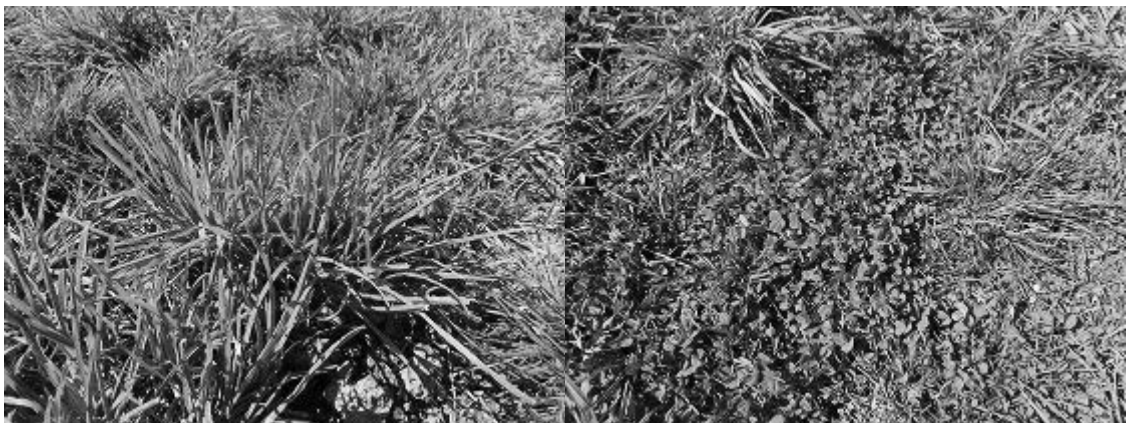
＜放牧地の草種＞

詳細は後述するが、ダービーダンではケンタッキーブルーグラス、オーチャードグラス、ペレニアルライグラスの3種類がミックスされた種を撒いている。もちろんその3種類が多いが、ケンタッキーブルーグラスは嗜好性が良いので放牧地を使い出すと真っ先に食べ尽くされていた。また、白クローバーや雑草もかなり混じっていた。



ケンタッキーブルーグラス

オーチャードグラス



ペレニアルライグラス

白クローバー

<繁殖牝馬の飼料>

2月までと変わらず。

<高齢馬の飼料>

高齢馬には McCauley Bros.社製の「ALAM」というペレットを使用していた。



高齢馬用飼料「ALAM」

高齢馬用飼料「ALAM」の成分を下記に示す。比較のため、カッコ内に通常の飼料「Option 14 Pelleted」の成分を示す。タンパク、カルシウム、リンは少なめ、脂肪、繊維、亜鉛、ビタミン E は多め、その他は変わらずである。

粗タンパク質 (最小)	11.0% (14.0%)
粗脂肪 (最小)	6.0% (3.0%)
粗繊維 (最大)	20.0% (13.0%)
カルシウム (最小)	0.7% (1.2%)
カルシウム (最大)	1.2% (1.7%)
リン (最小)	0.5% (0.7%)
銅 (最小)	30ppm (30ppm)
セレン (最小)	0.4ppm (0.4ppm)
亜鉛 (最小)	120ppm (100ppm)
ビタミン A (最小)	4000IU/lb (4000IU/lb)
ビタミン E (最小)	160IU/lb (100IU/lb)

<日米分娩時刻の比較>

夜警の Mark Terrell がダービーダンの過去 10 年間の分娩時刻のデータを提供してくれた

ので、日高育成牧場のデータと比較してみた。その結果、2つのグラフはほぼ一致し、日本でも米国でも分娩は午後10時前後に多いことがわかった。なお、グラフでは日高育成牧場のデータが少ないため単純に10倍した値と比較している。



ダービーダンと日高育成牧場の分娩時刻の比較

<分娩時なぜ子馬を引っ張るか？>

ダービーダンのみならず、米国では分娩時に子馬を引っ張るのが一般的らしい。理由について Winchester Farm を経営している吉田直哉氏からも意見を聞き考えてみたが、「子馬が大きいから」というのが一番になりそうだ。軽種馬飼養標準によると日本の新生子馬の体重は平均が57kg、正常範囲が50～64kgであるとされている。一方、ダービーダンでは体重計の故障によりわずか5頭しか測定できなかったが、平均が59kg、範囲が52～71kgであった（全頭無事に育ったので正常範囲と言って差し支えないであろう）。参考にウインスターファームの新生子馬のデータを聞いてみたが、20頭の平均が59kgであり、やはり日本の子馬よりも大きかった。

また、分娩時には必ず母馬にフルニキシンを投与する。これは米国ではヒトの出産時多くの母親が無痛分娩を選択するという文化に起因していると思われる。米国ではヒトの産休からの復帰日数が非常に短く、「お産をできるだけ軽くすることで早く仕事に復帰する」と

いう考え方。馬にも「お産をできるだけ軽くすることで早く次の妊娠に備える」という考え方のようだ。

以上のことから、「分娩時に母馬の負担を軽くするため」に子馬を引っ張るという行為を行っているものと推察される。なお、子馬を引っ張ることで一番多く起こる副作用は子馬の肋骨骨折であるが、肺に刺さって致命傷となることは非常に稀なので大きな問題にはなっていない。

<分娩時の各種情報の記録>

シーズン途中からマネージャーの Sharee が分娩時の各種情報の記録用のカードを作成し、繁殖牝馬 1 頭につき 1 枚のカードを使用し記録していくこととなった。記録する内容は、分娩予定日、分娩日、分娩時刻、後産排出時刻、初乳を採取したかもしくは与えたか（Brix 値も）、毛色と性別、分娩時の特記事項、浣腸、胎便排出、臍のクリップ、臍の消毒、起立時刻、哺乳時刻、母馬へのフルニキシン、鎮静剤、ナロキソン（出血性のショックを呈した際に使用される）、プレドニゾロン（同じくショック時に使用される）、分娩後最初の 5 日間の母子の体温（朝夕 2 回）。



分娩時の各種情報の記録用のカード

<分娩馬房の消毒>

シーズン途中から、分娩があったあとは分娩馬房の寝藁（麦稈）を汚れた部分だけではなく全て廃棄し、消毒する作業ことに変更された。消毒後はしばらく分娩の予定がなければそのまま空にし十分に乾燥させたあとで新しい麦稈を敷いていた。ただし、不測の事態に備えて 2 つある分娩馬房のうち 1 つは必ず麦稈が敷かれている状態にしていた。

<当て馬>

ダービーダンでは 2 頭当て馬を繋養していた。1 頭は引退後の競走馬（サラブレッド）で、ダービーダン繋養の種牡馬に交配に来た繁殖牝馬の試情に使われていた。もう 1 頭はパロミノ種で、繁殖マネージャーの Sharee が自ら運転する馬運車に載せ場内を巡回し、馬房の

前扉越しに試情を行っていた。目的は発情誘起ではなく発情周期の確認のためであり、主治医である Dr. Fallon から試情の結果を聞かれており交配適期の判断材料の 1 つとしていた。

<種付>

ダービーダンでは種付時は牧場の従業員は誰一人立ち会わず、輸送業者が連れて行くが、他の牧場では従業員が帯同する場合もあるようである。ヴァーセイルスで Polo Green Stable を経営している新木信隆氏によると、輸送業者に任せると楽だが、種付時の繁殖牝馬の様子を尋ねても「Good!!」しか言わず「当て馬を蹴った」だとか「今回は種牡馬が 2 回乗駕して 2 回目で射精した」とかいう情報を全く得ることができないため、彼の牧場では必ず従業員が種付に立ち会う（従業員が牧場の馬運車を運転して行く）ことにしているそうだ。

母馬が種馬場に行っている間、子馬は馬房内で待たせられる。暴れて怪我をしないように、馬房内の水桶および飼桶を外し、上下の扉を両方閉める。種付け後母馬を馬房に戻す際、特に最初の授乳の時に母馬が興奮して子馬を蹴ることがあるので注意が必要である。馬房に戻す前に上の扉だけ開けて母馬と子馬を対面させる。その後、最初の授乳が無事に終わるまで母馬を保持する（場合によってはリップチェーンを使用する）。

苦い経験として、当初それを知らずにそのまま母馬を入れたところ、最初の授乳で母馬が興奮して子馬の前腕部を思いっきり蹴ってしまったことがあった。直後に子馬は跛行を呈し、部位が部位だけに「橈骨が骨折したのではないか？」という不安が頭をよぎったが、幸いなことに跛行はすぐに治まり、軽い打撲のみで済んだ。この点、注意が必要である。

そのほか、ケンタッキーでは種牡馬が繋養されている牧場が集約されているため、どこに種付に行くにせよ往復で 1 時間半から長くても 2 時間以内には母子を再開させることができる。しかし、日本では例えば浦河から社台スタリオンに種付けに行けば往復で 5 時間近くかかるわけでストレスや栄養の観点からどれぐらいの時間母子を離していても大丈夫なのか、検討が必要であろう。



種付け後上の扉を開け母子を対面



最初の授乳まで母馬を保持

・新生子馬の飼養管理

＜放牧＞

我々の認識では昼放牧から昼夜放牧への切り替え時に子馬に大きなストレスがかかるため、小パドック⇒中パドック⇒大放牧地と順番に大きな放牧地に移し、その後昼夜放牧を開始するという考え方である。しかし、米国人は昼夜放牧をすることより、大放牧地に放すことの方が子馬にとってストレスになると考えているようだ。よって、大放牧地に放す前に中パドックでの昼夜放牧の期間があり、その後大放牧地に移すという順序で放牧管理が行われていた。

気候が良くなった 3 月以降は早ければ子馬が 2 週齢に達した時点から昼夜放牧が開始されていた。しかし、雷雨の時など悪天候時には昼夜放牧を中止していた。昼夜放牧が開始されてから、夕飼は放牧地で与えられていた。基本的に夕飼は全頭一律 4 ポンドで、朝飼の量で BCS をコントロールしていた。放牧地でも馬房でも子馬の盗食防止措置はとられておらず、クリープフィードを使わないまま離乳を行っていた。

週齢	場所	頭数（組）	時間
0	小パドック	1	9:00～11:30+12:30～15:00
1	中パドック	2	9:00～15:00
2～3	中パドック	2	10:30～7:30
4～	大放牧地	6～9	10:30～7:30

新生子馬の放牧（3 月以降）



夕飼は放牧地で

子馬の盗食防止措置はなし

＜子馬の引き方＞

中パドックに放牧している 3 週齢までは母馬と子馬と別々に 2 人で引く、大放牧地に放す 4 週齢以降は母子を 1 人で引くという感じ。引き方は人の右側に子馬さらにその右側に母馬というアメリカンスタイル。ハグヤードでの研修時に全牧場が必ずしもこのスタイルで引いている訳ではなく、日高育成牧場と同じく人が真ん中のヨーロッパンスタイルで引

いている牧場も多数あることがわかったが、アメリカンスタイルの長所は両手がフリーになり、子馬の操作に集中できることである。



人の右側に子馬さらにその右側に母馬というのがアメリカンスタイル

<体重測定>

マネージャーは子馬の体重を定期的に測定したかったようだが、新生子馬を 5 頭測ったところで体重計が故障。その後しばらく経ってから飼料会社の McCauley Bros.社の栄養コンサルタントが月に 1 回体重計を持ってきて測定することとなった。ちなみに、測るのは子馬のみで、繁殖牝馬の体重は測定していなかった。



飼料会社の McCauley Bros.社が月に 1 回体重計を持ってきて体重測定

<敷料の変更>

子馬が 1 ヶ月齢に達した頃から分娩馬房がある Foaling Barn から他の厩舎への移動が行われたが、同時に敷料が麦稈からブルーグラス乾草（ダービーダンでは自家生産していないので購入したもの）に変更された。ハグヤードで研修した際、スリーチムニーズファーム（Three Chimneys Farm）でも同じく 1 ヶ月齢から敷料をブルーグラス乾草に所以说っていたのでケンタッキーでは一般的なのだろうが、ブルーグラス乾草は基本的に馬がいる牧場の放牧地で作られている。ということは必ずその土地の土壌が少なからず含まれるは

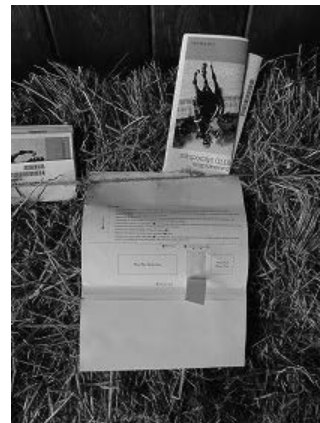
ずである。そして、肺炎の原因となるロドコッカス菌は環境の変化に極めて強い芽胞菌であり、土壤中に長らく生存することができる。一方で新生子馬の免疫状態であるが、生後 1.5～2 ヶ月齢が初乳以来の移行抗体が減少し、かといって自前で抗体を産生できず最も感染に弱い時期になっている。これらのことから、経費削減のために用いられているケンタッキー産のブルーグラス乾草がロドコッカス菌の供給源になっており、ロドコッカス肺炎がここまで多い原因になっているのではないだろうかと考えた。ちなみに、ブルーグラス乾草の作成は 6 月から始まった。そして、昼夜放牧開始後は 2 日に 1 回ボロ出しとなった。

<ジョッキークラブによる DNA 検査>

日本の JAIRS と同様、親子関係を証明するための DNA 検査が行われている。日本と異なるのは職員が来場しないこと。牧場のマネージャーが子馬の尾の毛を 50 本抜き、専用の封筒に入れてジョッキークラブに郵送する。米国でも 2017 年から当歳馬に全頭マイクロチップを埋め込むことが決まっているため、それ以降は変わるかもしれない。現時点で、特徴検査はセリの時などにジョッキークラブの職員がセリ場に来場して行われている。



尾の毛を 50 本抜く



専用の封筒で郵送

<離乳>

前年イヤリング部門で研修中に、離乳に 2 回立ち会うことができた。ダービーダンで行われている方法は子馬を馬房に残し、母馬を別の放牧地に移動させる方法で、種付時と同じ方法であった。すなわち、母馬が移動している間、子馬は暴れて怪我をしないように、馬房内の水桶および飼桶を外し、上下の扉を両方閉められた馬房内で待たせられる。もともと離乳がこういう方法だったので種付も同様にしているのか、もしくは種付時の対応を離乳時にも応用しているのかどちらが先かわからないが、とにかくこのやり方がアメリカの伝統的な離乳方法らしい。この方法の長所は母馬がいなくなって狂った子馬が牧柵に突っ込んで怪我をしないことである。しかし、短所はいきなり母馬がいなくなった子馬にかかるストレスが大きいことであろう。マーゴーファーム (Margaux Farm) では日高育成牧場と同じく「間引き法」を採用していた (リードホースはなし)。

2. 繁殖および初期育成



子馬を馬房に残す



母馬を引いて別の放牧地へ



子馬を馬房に残し、母馬を引いて別の放牧地に移動させる

・獣医療

＜伝貧検査およびワクチン接種＞

まずは競走馬の話。州によるが、伝貧検査は1年に1回もしくは6ヶ月に1回検査を受けなくてはならない。ワクチン接種はインフルエンザおよびライノウイルスの予防接種を4か月に1回、東部&西部馬脳炎が1年に1回、破傷風も1年に1回（ただし外科手術や大

きな外傷を受けた際にはその都度追加接種する)というのが一般的。日本ではインフル・日脳・破傷風の3種混合ワクチンが使われているが、米国ではそれがインフル&ライノ・東部&西部馬脳炎・破傷風の3本に置き換わるイメージである(ただし頻度が微妙に異なる)。そのほか、地域と感染症の流行状態によってはウエストナイルや狂犬病(犬ではなくスカンクが媒介)なども接種される(たいてい1年に1回)。動脈炎ウイルスに対するワクチンは打って抗体価が上昇すると輸出できなくなる国も出てくるため、よほど流行している場合などでない限りなるべく使用しないようにしている。

繁殖牝馬も競走馬に準じて伝貧検査およびワクチン接種されているが、それに加えて分娩前にボツリヌス毒素(30日前)、破傷風(3~6週前、生後24時間以内の子馬に接種する方法もある)、ロタウイルス(妊娠8、9、10か月の3回)、インフル(4~6週前、子馬には6ヶ月齢以降から接種を開始する)、EHV1(妊娠5、7、9か月の3回)、EHV4(4~6週前、子馬には4~6ヶ月齢以降から接種を開始する)。ウエストナイルは妊娠馬はワクチン接種後の抗体上昇が悪くなるので、日頃から接種しておく。

<乳量の少ない母馬へのドンペリドン製剤の投与>

乳腺の発達が悪く、乳量の少ない母馬に対してドンペリドン製剤が投与されていた。Equidone Gel という製品を1日2回経口投与。1回の投与量は550mg(およそ1mg/kg)。



乳腺の発達が悪い馬

ドンペリドン製剤

<産褥熱>

分娩後悪露が多く、発熱した繁殖牝馬にはトレンタール(ペントキシフィリン、血管拡張剤)40cc(=7.5mg/kg)、ビュートペースト(フェニルブタゾン)2g、バナミンペースト(フルニキシン)を体重1250ポンド換算で(シリンジに投与する馬の体重の目盛が書いてある、体重約567kg相当)を1日2回経口投与およびオキシトシンを1~2ml(20~40単位)1日1回筋肉内投与。あわせて獣医師による子宮洗浄(回数は程度による)。蹄葉炎疑いの馬には加えて氷水による冷却とブーツの装着が行われる。

<交配適期の判断および排卵誘発剤の使用> <黄体退行処置>

ハグヤードの回に詳細を記載。

<分娩後初回発情での種付>

分娩後初回発情での種付は行われていた。分娩後、超音波検査により子宮内に貯留液が認められる牝馬および子宮頸管スワブ検査で細菌が検出された牝馬、すなわち子宮内膜炎を発症している牝馬に関してはスキップし、治療に専念していた（場合によって黄体退行処置を実施）。

<妊娠馬へのレギュメイト投与>

交配後 14 日および 28 日での妊娠鑑定時に採血し、血中プロゲステロン（P4）濃度を測る。4ng/ml 以下ならプロゲステロン製剤であるレギュメイトを投与（投与量は 12ml、1 日 1 回。濃度 2.2mg/ml なので、体重 500kg として 0.053mg/kg）。

これだけレギュメイトが汎用されていると、繁殖牝馬が自身でプロゲステロンを作成できなくなるのではないかと不安になったが、2015-2016 シーズンの分娩前にレギュメイトを投与されていた繁殖牝馬は 62 頭中 12 頭（19.4%）いて、そのうち 2016-2017 シーズンもレギュメイトを投与された馬は 5 頭（41.7%）であった。反対に 2016-2017 シーズンにはレギュメイトが不要になった馬が 7 頭（58.3%）いるということで、“依存性”という観点では否定して良いのかと思われた。

ちなみに、2016-2017 シーズンに新たにレギュメイトが必要となった馬は 4 頭で、トータルで 61 頭中 9 頭（14.8%）と“投与率”は若干下がった。

<ロタウイルスによる下痢>

子馬が下痢を呈した場合、まず下痢がロタウイルスによるものかどうか糞便スワブを採取し Hagyard Laboratory で検査する。ロタウイルスによる下痢だった場合、まずは隔離される。馬房内休養かパドック放牧され、パドックは同年感染馬に対してしか使用されない。馬房に入る際はシューズカバーおよびゴム手袋を装着し、前後に靴の消毒を行う。投薬はオメプラゾール（250 ポンドの目盛、1 日 1 回）、スクラルファート（2 錠、1 日 4 回）、Relieve（下痢用の吸着剤、15ml、1 日 4 回）、Relyte（電解質製剤、10ml、1 日 4 回）、重曹（スプーン 3 杯、1 日 4 回）、ヨーグルト（30ml、1 日 3 回）、以上全て経口投与。1 日 3 回の場合は 8 時間毎、1 日 4 回の場合は 6 時間毎にきっちり投薬する。夜警がいるからこそなせる業である。また、下痢を発症したのが新生子馬だった場合は口カゴを装着し、30 分おきに着脱を繰り返す。母乳を飲み過ぎて下痢が悪化しないようにするための処置である。分娩を行っている Foaling Barn で子馬の下痢が発生した場合、隔離後その馬房を消毒し、しばらく使用禁止となった。



ロタウイルスによる下痢

シューズカバー・ゴム手袋

<ロドコッカス肺炎>

スリーチムニーズファームのように子馬全頭に対し生後 6 週齢時にスクリーニングとして肺 USD を実施している牧場もあるが、ダービーダンでは発熱や咳などの症状があった場合のみ獣医師に肺 USD を依頼していた。そのような有症状子馬 9 頭中 8 頭で肺に膿瘍が見つかった。発症馬は生後 4～8 週齢で、教科書に書かれている免疫グロブリンが最も低下する期間である 6～9 週齢よりも若干早い、概ね同じであった。

投薬はリファンピシンおよびクラリスロマイシンの併用が第一選択であり、投与量はリファンピシンが濃度 100mg/ml の製剤を 8ml なので 800mg、クラリスロマイシンが濃度 75mg/ml の製剤を 14ml なので 1050mg、子馬の体重を 150～200kg とすると、リファンピシンが 4.0～5.3mg/kg、クラリスロマイシンが 5.3～7.0mg/kg である。どちらも 1 日 2 回スタッフが経口投与する。膿瘍が小さい場合、クラリスロマイシンの代わりにミノサイクリンを投与することもあった。その場合の投与量は 1 カプセル 100mg の製剤を 6 カプセルすなわち 600mg、体重換算で 3～4mg/kg であった。こちらも 1 日 2 回経口投与。

また、稀ではあるが発咳のひどい子馬に対してベンチプルミンシロップが使われたこともあった。

肺 USD で膿瘍が見つからなかった場合（ロドコッカス肺炎ではなくただの感冒と判断された場合）は Equisul-SDT というサルファ剤（Sulfadiazine と Trimethoprim の合剤）が投与された。濃度が 400mg/ml の製剤を 8ml なので 3200mg、子馬の体重を 150～200kg とすると 16.0～21.3mg/kg、1 日 2 回経口投与。

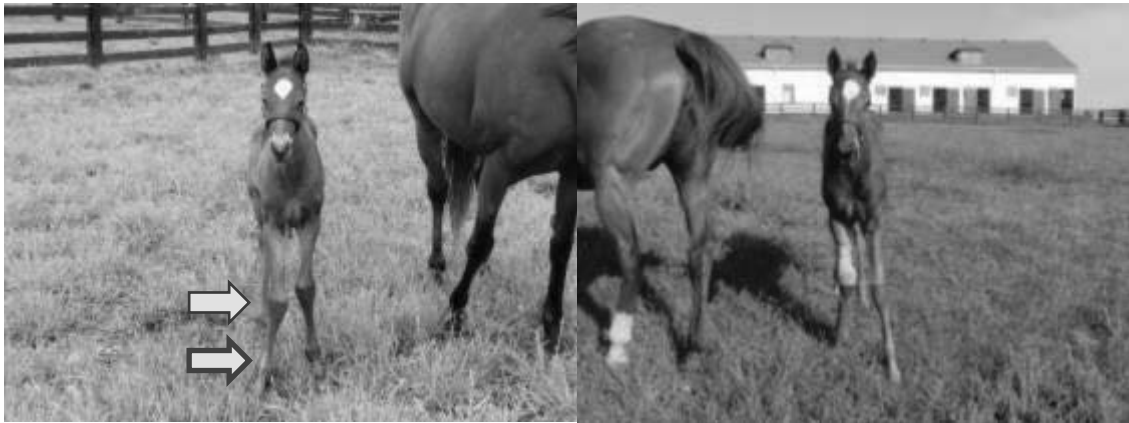
<肢軸のチェック>

月に 1 回定期的にハグヤードの Dr. Hunt が往診に来て、子馬全頭の肢軸をチェックしていた。矯正が必要とされれば成長板にスクリューを入れる手術となる。この時期の当歳馬の手術対象はほとんどが前肢球節の内反（第 3 中手骨遠位外側にスクリューを入れる）だが、稀に腕節（橈骨遠位）にもスクリューを入れる馬もいた。1 歳馬は逆にほとんどが腕節（橈

骨遠位) の矯正になる。理由は成長板の閉鎖時期が骨によって異なるためである。



Dr. Hunt による肢軸のチェック



球節および腕節の矯正手術が行われた当歳馬

成長板	急成長の停止 (月齢)	X 線検査上の閉鎖 (月齢)
脛骨遠位	8	17-24
橈骨遠位	8-10	20-42
中手 (足) 骨遠位	3-4	6-15
第 1 指 (趾) 骨近位	2-3	12-15
第 2 指 (趾) 骨近位	2-3	8-12

月齢における成長板の活動および閉鎖時間
(出典：Manual of Equine Neonatal Medicine)

- ・装蹄
- <繁殖牝馬の削蹄>
2 月までと一緒。

<子馬の削蹄>

月1回の頻度。初めて削蹄する子馬は、馬房内で壁に押しつけ、尾を持って保定する。

・草地管理

<チェーンハロー>

草が伸びてくるまで放牧地で乾草を与えていたこともあり、放牧地に乾草のカスおよびボロがたまってくる。それを春先にチェーンハローで碎いていた。放牧地が広過ぎるため、放牧地のボロを拾うということは一般的には行われていない。

<牧草の播種>

春と秋の2回、放牧地への牧草の播種を行っている。Southern States Coop, Inc 社の「Lexington Horse Pasture Mixture」という製品で、ケンタッキーブルーグラス、オーチャードグラス、ペレニアルライグラスの3種類のミックス。下記に成分を示す。

「Lexington Horse Pasture Mixture」(Southern States Coop, Inc 社)

・ペレニアルライグラス	32.80%
・ケンタッキーブルーグラス	32.52%
・オーチャードグラス	32.33%
・その他の作物	0.25%
・無生物	2.00%
・雑草	0.10%

ダービーダンに限らず、ケンタッキー全体の考え方として、繁殖牝馬（妊娠馬）を放牧する可能性がある放牧地には、胎盤の異常の原因になるフェスク系は播種しない。逆にイヤリングなど繁殖牝馬（妊娠馬）を放牧しない放牧地については寒さに強いフェスク系を播種することで冬季の間少しでも長く放牧地を緑に保てるようにしている。

<肥料>

ダービーダンでは堆肥を散布していない。ボロおよび汚れた敷料は集積場までトラクターで従業員が運び、そこからはマッシュルーム農家が定期的に運んでいく仕組み。

年1~2回のライミング（石灰散布）のみ。レキシントン周辺では天然のライムストーンが豊富にあるため、石灰が安く手に入る。

そのほか、ケンタッキーでは昔から堆肥になる前のボロと敷料を粉碎してそのまま放牧地に撒くという行為がなされていたそうで、今でもそれを行っている牧場があるとのこと。当然、熱で発酵させるという手順を行っていないので、寄生虫の虫卵が放牧地にばらまかれることになり、獣医師は警鐘を鳴らしているが、ボロの集積所を作る必要がなくなるので、

特にスペースのない小さな牧場では現在も行われているとのこと。



ボロは農家に分けている

ボロをそのまま放牧地に撒く（別の牧場）

<鹿対策>

使用していない放牧地および空き地にひまわりを植え、種を食べに来た鹿をハンティングしていた。

・他州からの預託馬（Boarding mare）

競馬は様々な州で開催されているが、ケンタッキー以外の各州ではその州内の生産を奨励するため州産馬限定レースが組まれている。日本でいう九州産馬限定レースと同様である。その州内で繋養されている種牡馬を交配した完全なる州産馬ももちろん多いが、中にはケンタッキー州内で繋養されている優れた種牡馬と交配し受胎が確認された後元いた州の牧場に戻って分娩するという繁殖牝馬も存在する。それらは Boarding mare と呼ばれ、ダービーダンでも複数頭預託を受けていた。感染症予防のため、Dove Barn と Training Barn に集約され、もともとダービーダンにいる繁殖牝馬からは隔離されていた。また、ダービーダン繋養以外の種牡馬と交配する馬も預かっていた。

基本的には安い馬ばかりでとにかく手がかかっておらず、まるで野生馬だった。セリでいう Book6 の馬のよう。子馬が捕まらないので“顎紐”が付けられていたり、24 時間放牧されていたのであろう、南部のニューメキシコ州から来た子馬は 5 月 5 日の時点ですでに“日焼け”していた。



顎紐が付けられた子馬

日焼けした子馬

・種牡馬

5月3日から種牡馬の昼夜放牧が開始された。太り易い馬には口カゴが装着されていた。

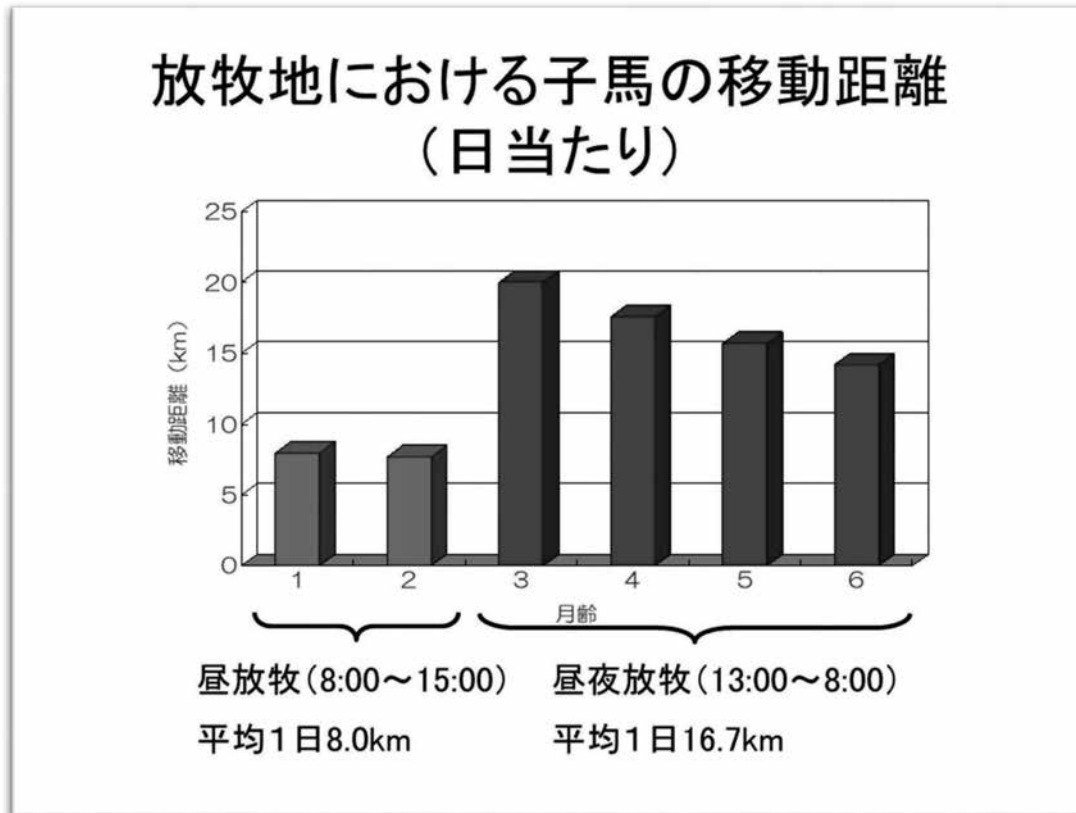


太り易い種牡馬には口カゴ装着（Jersey Town）

・GPS 装置を用いた放牧地での運動量調査

子馬にとって放牧地での運動量は骨や腱の発育のために重要な要素である。基本的には運動量が多ければ多いほど骨や腱が丈夫になるが、一方で骨格の未熟な子馬にとって過剰な運動は種子骨骨折などの運動器疾患を誘発する要因にもなり、適度な運動量を模索する必要がある。

JRA 日高育成牧場では長年放牧地での子馬の運動量を記録しており、昼夜放牧を開始した直後の3ヶ月齢で移動距離は最も長く、加齢とともに徐々に減少していくことがわかっている。今回は米国での子馬の運動量を把握し、我々のデータと比較するため、ダービーダンファームの子馬にGPS装置（Transystem社、747ProS）を装着し、放牧地での運動量を調査したので、概要を報告する。



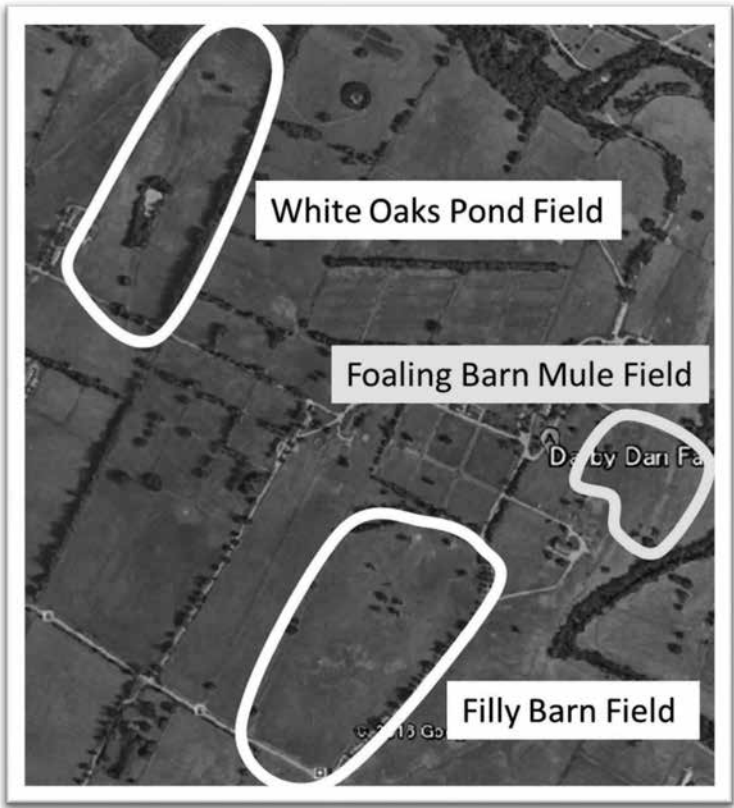
JRA 日高育成牧場での子馬の移動距離



GPS 装置

<子馬の放牧地>

今回調査を行った子馬の放牧地は「Foaling Barn Mule Field」(面積約 6ha)、「Filly Barn Field」(面積約 16ha)、「White Oaks Pond Field」(面積約 14ha) の 3 面。そのほか、参考までに疾病等で小パドック (Small Paddocks) に放牧されている子馬の移動距離も測定した。パドックの面積は 0.3~0.7ha。



子馬の放牧地

<結果>

「Foaling Barn Mule Field」、「Filly Barn Field」、「White Oaks Pond Field」および「小パドック (Small Paddocks)」で放牧されている子馬の1日の移動距離をそれぞれ表に示す。

Foaling Barn Mule Field	週齢	放牧時間	移動距離 (km)
Foal A	3	21	17.3
Foal B	5	21	16.8
Foal C	8	24	10.4
Foal D	9	19	14.0

Foaling Barn Mule Field で放牧されている子馬の1日の移動距離

Filly Barn Field	週齢	放牧時間	移動距離 (km)
Foal E	9	25	12.2
Foal F	10	25	12.5
Foal G	10	25	12.0
Foal H	15	21	11.2

Filly Barn Field で放牧されている子馬の1日の移動距離

2. 繁殖および初期育成

White Oaks Pond Field	週齢	放牧時間	移動距離 (km)
Foal I	12	24	10.8
Foal J	12	24	10.5
Foal K	13	24	9.6

White Oaks Pond Field で放牧されている子馬の 1 日の移動距離

Small Paddocks	週齢	放牧時間	移動距離 (km)
Foal L	3	25	16.4
Foal M	11	21	10.3
Foal N	14	21	8.7

小パドックで放牧されている子馬の 1 日の移動距離 (参考)

以上の 4 群のデータをまとめたものが、下記の表である。データは全て上段に中央値を示し、下段に最小値および最大値を示してある。頭数が少ないため統計学的な処理はできなかったが、JRA 日高育成牧場のデータと同様、週齢が進むにつれて子馬の 1 日の移動距離は徐々に減少する傾向が認められた (小パドック Small Paddocks は除く上 3 群をご覧ください)。

群	調査頭数	週齢	放牧時間	移動距離 (km)
Foaling Barn Mule Field	4	6.5 (3-9)	21 (19-24)	15.4 (10.4-17.3)
Filly Barn Field	4	10 (9-15)	25 (21-25)	12.1 (11.2-12.5)
White Oaks Pond Field	3	12 (12-13)	24 (24-24)	10.5 (9.6-10.8)
Small Paddocks	3	11 (3-14)	21 (21-25)	10.3 (8.7-16.4)
JRA 日高育成牧場	-	12-24	19	16.7

子馬の 1 日の移動距離のまとめ

ダービーダンでの GPS の結果から、例えば狭いパドックに放牧したとしても、放牧地での移動距離は分娩直後が最も長く、徐々に短くなっていった。これは過去に松井らが日高育成牧場で行った調査の結果と同じであった。

・ダービーダンの経営方針

ダービーダンファームは 1957 年にレキシントンの現在の場所に移り（元々はオハイオ州）、以降 1960 年代ケンタッキーダービー馬 2 頭（Chateaugay、Proud Clarion）、1970 年代に英国ダービー馬（Roberto）とブリークネス S およびベルモント S の勝ち馬（Little Current）、1980 年代に BC クラシック勝ち馬（Proud Truth）と日本に種牡馬として導入されたブライアンズタイム、サンシャインフォーエバー、1990 年代に BC フィリー&メアターフの勝ち馬（Soaring Softly）、グラスワンダー、2000 年代にブリークネス S 勝ち馬（Shackleford）を輩出している、極めて息の長い伝統のある牧場である。ライバルとしてはクレイボーンファーム（1947 年にバージニア州から移る）くらいしか思いつかない。

現在のオーナー John Phillips は 3 代目であるが、彼の経営方針は下記のとおりである。

- 1) 期待している牝馬は売らない。牡馬は売る。
- 2) 繋養している繁殖牝馬のほとんどは預託馬である。今年分娩した馬でいうと 55 頭（88.7%）が預託馬、残り 7 頭（11.3%）が自己所有もしくは共有馬。他州からの預託馬（数は不明）を合わせると預託馬の比率はさらに上昇する。
- 3) 種牡馬事業および預託繁殖牝馬で経営を安定させ、期待している牝馬は共有馬（フィリップス&パートナーズ名義）で走らせ、引退後繁殖牝馬として牧場に戻す。
- 4) 他の牧場の馬でも期待している新種牡馬の株は買う。
- 5) 自己所有の繁殖牝馬に種付けする種牡馬は基本的に毎年変えるが、活躍馬が出たら同じ種牡馬を交配する（全きょうだいを作る）。

繁殖牝馬のうち自己所有もしくは共有馬の割合が 10%程度で、なおかつ一度活躍馬が出たら同じ種牡馬を交配する（成功する可能性が高いし、牡なら高い値段で売れる）とは、かなり手堅い経営である。「経営を安定させた上で、成功する可能性が高い勝負をする」というのがジョン・フィリップスのポリシーであり、ダービーダンが長年続いている秘訣であろう。

2016 年最大のピンチとして、1 月上旬の分娩シーズン直前に繁殖部門の従業員が 4 名も他の牧場に引き抜かれ、62 頭も分娩予定があるのに私を含めて従業員が 3 名しかいないという非常事態が発生した。急ぎよ新たに従業員を集めたものの、シーズン中で優秀な人材は既に他の牧場に雇われてしまっており、来ても長続きしない者が多かった。そこで、ジョン・フィリップスはミーティングを開き、「30 日勤続すれば 100 ドルのボーナスを支給する」ことを約束し、従業員のモチベーションのアップを図った。その結果、以後退職する者はいなくなり、安定して仕事ができるようになった。

2) ウインスターファーム (WinStar Farm)

分娩前の繁殖牝馬の管理および分娩時の対応（ダービーダンファームとの違い）を学ぶことを目的に、ウインスターファームの繁殖部門 (Broodmare Department) で研修を行った。

ウインスターファームは 2000 年創立という新しい牧場だが、すでに Super Saver でケンタッキーダービー、Drosselmeyer でブリーダーズカップ・クラシックを勝つなど勢いのある牧場である。種牡馬事業に力を入れており、日本に関連する種牡馬ではかつてサマーバードを繋養、クリエイターⅡを所有していたことで有名。年間約 180 頭生産している。繁殖マネージャー (Broodmare Manager) の Jeff Danford の下に Assistant Broodmare Manager として Jimmy Tate、Alissa Burger の計 3 名という体制。マネージャーたちは牧場内に住んでおり、とりあえずシーズン当初 (1 月) の分娩は 3 名とも立ち会っていた。分娩のピーク時には疲労を避けるため、交代で誰か 1 名が分娩に立ち会うとのこと。

・放牧

各厩舎に 3 つの大放牧地および 3 つのパドック。大放牧地は面積が 40～45acre (16～18ha) で、ここに繁殖牝馬を 10 頭程度放牧。ウインスターでは放牧地の広さは 1 頭当たり 3acre 以上を基準としており (3 acre, 1 horse)、ケンタッキーの他の牧場の基準である 1 頭当たり 1acre 以上 (1 acre, 1 horse) の 3 倍。自然な発育 (develop naturally) が重要だと考えている。パドックには繁殖牝馬 2 頭ずつ放牧 (疾患により運動制限が必要な馬など)。放牧地はケンタッキーブルーグラスを牧草の主体とし非常に良好に管理されているが、12 月から 3 月までは牧草の伸びが悪くなるため草架を使用。繁殖牝馬用の放牧地にはフェスク系の牧草を播種していないが (種牡馬部門とブレイキング部門は播種している)、寒い時期にはトールフェスクが自生してくる (胎盤に悪影響)。放牧地の牧柵には一番上の板の内側に電気の流れるワイヤーが張られており、さく癖を防ぐ。放牧地のゲート周辺は雨が降ると泥々になるため、場所によっては砂を撒いて水はけを良くしている。



ケンタッキーブルーグラスが主体

12 月から 3 月までは草架使用



寒い時期はトールフェスクが自生

さく癖防止の電気牧柵

分娩予定日の1ヶ月前までは各厩舎で24時間放牧。分娩予定日の1ヶ月前になったらマネージャーがFoaling Barnまで馬運車で輸送。放牧地で分娩することがあるため、30分毎にクボタのバギーで放牧地を見回っていた。

なお、繁殖牝馬の集放牧時には2頭引きが基本。ただし、事故を防ぐため、放牧地に1頭だけ残すというシチュエーションは作らないようにしている。具体的には、残り3頭になったらまず1頭のみ集牧し、残り2頭の状態にして、最後にその2頭を引いてくる。



2頭引きが基本

最後は2頭残すようにする

・ Foaling Barn

分娩馬房のある厩舎。分娩の近い妊娠馬が集められる。マネージャーたちの事務室、獣医棟（Vet Office）もここにある。獣医棟には検査室、薬品庫、DR、ショックウェーブ、Natanya Nieman と Page Bouchard という獣医師2名と診療助手2名（ちなみに4名全員女性）のデスクがある。私も基本的にはこの厩舎で働いた。

通常の馬房がある棟と分娩馬房がある棟が廊下で繋がっている構造。通常の馬房の大きさは縦355cm×横405cm。床はプラスチックの格子で、毎年分娩シーズン前に消毒。分娩馬房の大きさは縦800cm×横450cm。床はウレタンのような滑り止め加工されたもの。こ

2. 繁殖および初期育成

ちかも、分娩シーズン前に消毒。分娩馬房がある棟はガラス戸を閉めて、暖房を入れて保温できる仕組みになっている。分娩馬房の四隅には出っ張りがあり、母馬が寝返りを打った際にはまらないようになっていた。



通常の馬房

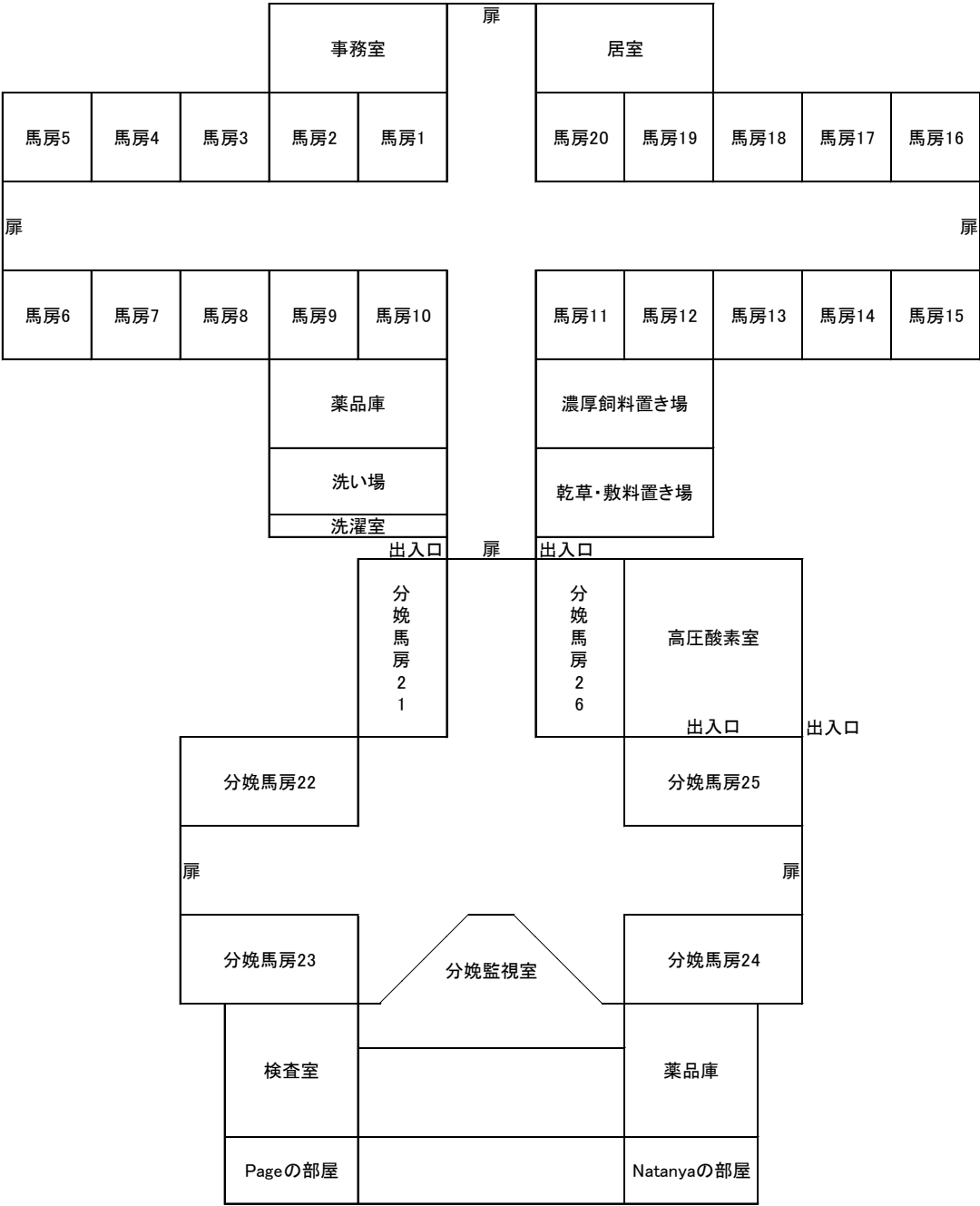
分娩馬房（左）と監視室（右）



ガラス戸を閉めて暖房できる

分娩馬房の四隅に出っ張り

2. 繁殖および初期育成



Foaling Barn（分娩厩舎＋獣医棟）

分娩予定日の1ヶ月前になったら、とりあえず通常の馬房に入れ、昼放牧に切り替える。乳ヤニが付くなど分娩兆候が見られたら、分娩馬房に移す。兆候が不明瞭なまま急に分娩する馬もいるので、分娩馬房は麦カンを敷いた状態で常に2～3個空けておく。そのような馬は分娩が始まったら（破水したら）移す。陰部縫合（キャスリック）はマネージャーが事前に切開しておく。

<24 時間放牧時のタイムスケジュール（クリスマス以前）>

7:00 集合

①投薬。

②放牧地の朝飼付（1 スクープ=3 クォーツ=約 3kg）、パドックは地面に置くタイプの飼い桶を使用、大放牧地は地面に直接置く。

③昼放牧の馬の放牧（蹄葉炎など）およびボロ出し。

④クリスマスまでの期間は、この後の時間でひたすら厩舎消毒作業をしていた。一般馬房の床は格子状のプラスチックが敷かれており、まずこれを剥がして、間に詰まったボロをハンマーで叩いて落とす。その後敷き直し、消毒。馬房の壁は、洗浄・消毒する際に水で濡れても良いように、木ではなくコンクリートブロックでできていた。消毒薬は二種類使用されていた。まず高圧洗浄機で洗浄する際には「99.9」という商品名（99.9%の細菌やウイルスを殺すという意味）の消毒薬を使用。内容はラベルに記載されていなかったが、臭いからしてアルコール系だと思われる。洗浄した後は乾燥させ、プラスチックの格子を床に戻して、隙間にはクレイドルサンド（cradle sand）を入れる。石灰のような物らしい。次に手動の噴霧器で「Bio Phene」という商品名のフェノール系の消毒薬を壁と床に噴霧していた。

12:00～13:00 昼休み。

13:00 から削蹄などの作業（ブレーキング部門と同じ装蹄師）。

14:00 過ぎに放牧地で夕飼付。レギュメイトを連続投与器で 10ml ずつ経口投与。

16:00 解散。



床のプラスチックを剥がす



間に詰まったボロを叩き落とす

2. 繁殖および初期育成



間に詰まっていた土やボロ



格子状のプラスチックを敷く



アルコール系消毒薬を噴霧し、馬房の壁と床を消毒



格子状のプラスチックの隙間にクレイドルサンドを入れる



最後にフェノール系の消毒薬を壁と床に噴霧

<昼放牧時のタイムスケジュール（クリスマス以後）>

5:00 夜警により朝飼付（2/3 スクープ＝2 クォーツ＝約 2kg）。

7:00 集合。

Jeff が妊娠馬の乳房および陰唇をチェックし、分娩兆候がないか確かめてから放牧。その後、ボロ出しなどの作業。

12:00～13:00 昼休み。

13:00～15:00 再び作業。

15:00 集牧、夕飼付（2/3 スクープ＝2 クォーツ＝約 2kg）。

16:00 解散。

23:00 夜警により夜飼付（2/3 スクープ＝2 クォーツ＝約 2kg）。

<分娩監視体制>

12 月 26 日の夜から夜間分娩監視を開始。夜警が 19:00～7:00 勤務。16:00～19:00 は昼間働いているスタッフが交代で分娩監視をする（週 2 回、3 時間だが 4 時間分の時給がもらえる）。昼放牧になり、当然ボロ出しが大変になったが（2 人で 20 馬房以上）、夜警がボロ拾いをしてワゴンに入れておくことで、昼間働くスタッフの労力を軽減していた。

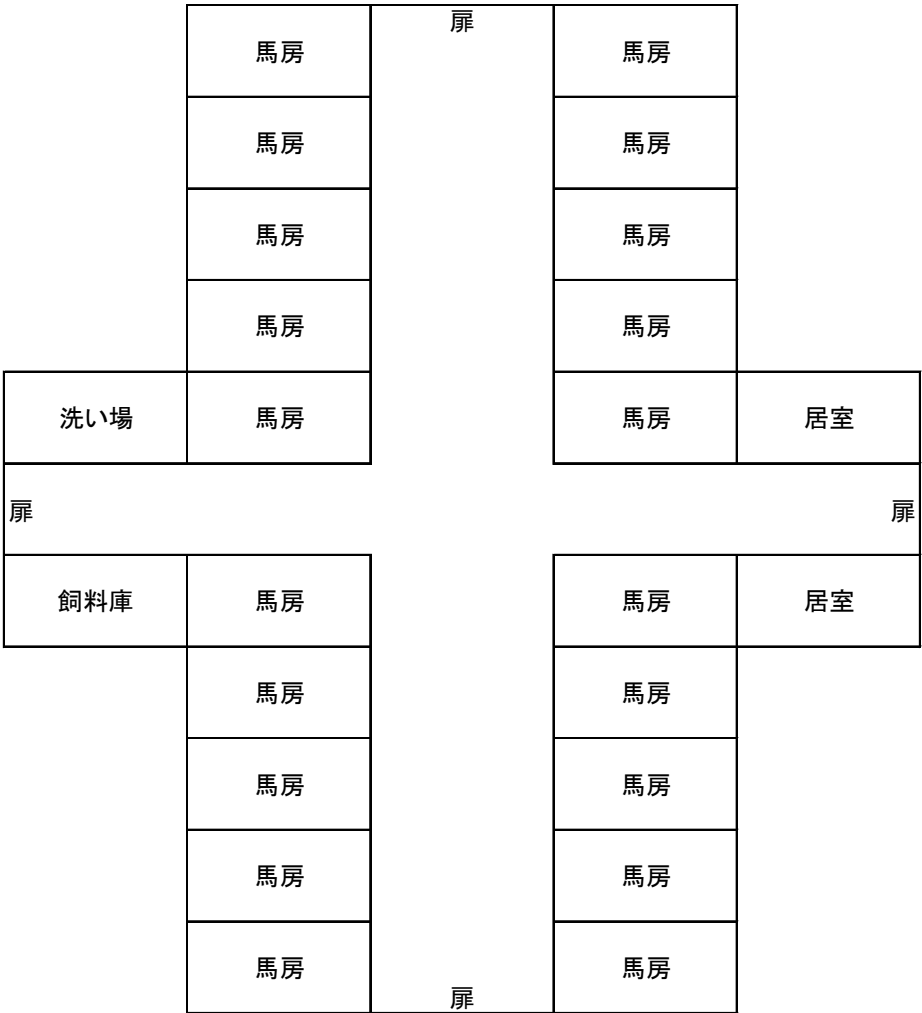
・Widow's Watch Barn

ジャン્યアリーセールに上場される繁殖牝馬がこの厩舎に集められ、セールスプレップが行われていた。ジャン્યアリーセールおよびフェブラリーセールともに約 10 頭ずつ上場することのこと。ウインスターファーム自体はセリでのコンサイナー事業をしておらず、セリ本番のみテイラーメイド、フォースター、ブルーウォーターの 3 社に預託する。真ん中に廊下のある対面式の作りで、馬房数は 20。馬房の大きさは縦 400cm×横 375cm。



Widow's Watch Barn

対面式で 20 馬房



Widow's Watch Barn（セールスプレッ厩舎）

<Widow's Watch Barn（セールスプレップ厩舎）のタイムスケジュール>

7:00 集合。

- 1) 昼放牧の馬の放牧。
- 2) 24 時間放牧の馬の朝飼付（放牧地で）。
- 3) 昼放牧の馬の馬房のボロ出し（2 人で 12 馬房）。
- 4) ブロワー&給水&朝飼をフィードバッグに入れておく（1 スクープ=3 クォーツ=約 3kg、ナイトウォッチが付ける）。

12:00～13:00 昼休み。

13:00 集牧し（2 頭引き）、タイチェーンで馬房内の壁に繋いで、手入れ。手入れの内容は、①裏掘り（蹄油は塗らない）、②ゴムブラシでマッサージ、③ブラシで毛や垢を落とす、④ショーシーンを全身にスプレーする、⑤黄色い布で全身を拭く、⑥たてがみ、尾に櫛をとおす、⑦馬服を着せる。1 頭当たり約 15 分。この厩舎に限らず、馬バエの卵が付いている馬が多かった。泥だらけの馬は水洗いする。その後、ショーシーンを全身にスプレーし、たてがみ、尾に櫛をとおす、裏掘り。

14:00 厩舎内および放牧地の繁殖牝馬に飼い付けを開始する（1 スクープ=3 クォーツ=約 3kg）。その後、厩舎内を箒で掃く。

16:00 解散。



セールスプレップ



泥だらけの馬は水洗い

・ Distaff Barn

かつて Stallion Barn だった建物を繁殖牝馬用に改装。



Distaff Barn

かつて Stallion Barn だった

・ Galaxy Barn

かつてランインシェッド（Run-in-Shed）だった部分を馬房に改装したつくり。基本的には Foaling Barn で分娩させるが、何せ 180 頭もいるため最盛期には Foaling Barn の馬房が足りなくなるので、その時は Foaling Barn のほか Galaxy Barn と Distaff Barn で分娩させるとのこと。ちなみに、昨シーズンは Foaling Barn、Galaxy Barn、Widow's Watch Barn で分娩させていたが、今シーズンは Widow's Watch Barn を改築する計画があるため、Distaff Barn を使用する。

馬房	馬房	馬房	馬房	馬房	馬房	馬房
扉						
馬房	馬房	乾草		居室	馬房	馬房
		飼料		薬品		
		馬房		馬房		
		馬房		馬房		
		馬房		馬房		
		馬房		馬房		
		扉				

Galaxy Barn（黄色い部分がかつてランインシェッドだったところ）

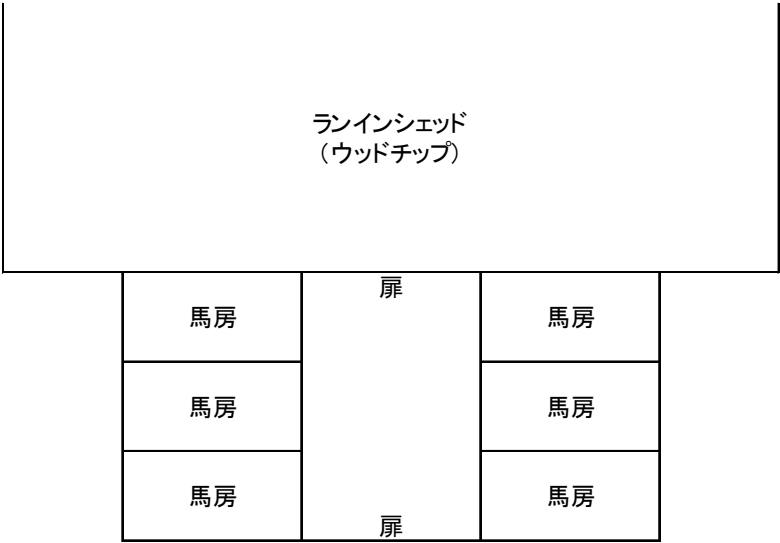
・ランインシェッド付きの厩舎

ウインスターの繁殖部門にはランインシェッド（日本ではシェルターと呼ばれている）付きの厩舎があった。



ランインシェッド

馬が入っているところ



ランインシェッド（シェルター）付きの厩舎

・繁殖牝馬の BCS

妊娠馬の BCS は 6～7 と太めで、ダービーダンより 1.0 高い印象。

・粗飼料

乾草はルーサン 70%とオーチャード 30%のミックス（放牧地も馬房内も同じ、分娩前も分娩後も同じ）。乾草はモンタナ州から仕入れている。コストを下げるため、一般的なコンパクトより大きなサイズのコンパクトで仕入れている。

<新しい草架>

昨年レーンズエンドファーム (Lane's End Farm) が導入し良かったらしく、今年ウインスターも導入。古い草架は頭を上げた姿勢で乾草を食べることになっていたが、新しい草架はより自然。古い草架よりも食べやすいのか乾草の減りが早いが、同時に食べこぼしも多い印象。しばらく古い草架と併用してみて、問題なさそうなので（新しい草架の方が嗜好性が良い）、古い草架は撤去。草架内には毎日乾草を補充していたが、濡れると食べなくなるため雨の日は乾草をあまり足さないようにしていた。



ルーサンオーチャードミックス



古い草架



新しい草架



食べやすいがこぼす

・濃厚飼料

ブレーキング部門と同じく、Hallway Feeds 社の製品を使用。オリジナル飼料である「WinStar Farm Custum Cube」という大粒のペレットが基本。成分は袋には記載されていないが、Jeff によると下記のとおり。比較のため、カッコ内にダービーダンの基本飼料「Option 14 Pelleted」の成分を示す。繊維、カルシウムは少なめ、脂肪、銅、セレン、亜鉛、ビタミン A は多め、その他は変わらずである。

粗タンパク質（最小）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13.5%（14.0%）

粗脂肪 (最小)	5.2% (3.0%)
粗繊維 (最大)	8.3% (13.0%)
カルシウム (最小)	0.8% (1.2%)
リン (最小)	0.7% (0.7%)
銅 (最小)	56.3ppm (30ppm)
セレン (最小)	0.66ppm (0.40ppm)
亜鉛 (最小)	150.5ppm (100ppm)
ビタミン A (最小)	7500IU/lb (4000IU/lb)
ビタミン E (最小)	106IU/lb (100IU/lb)

24 時間放牧時は 1 日 2 回、1 回 1 スクープ (=3 クォーツ=約 3kg)、合計約 6kg を放牧地で与える。大放牧地に集団放牧されている場合は直接地べたで与える。パドックに放牧されている場合は地面に置くタイプの飼桶使用。昼放牧にした後は 1 日 3 回、1 回 2/3 スクープ (=2 クォーツ=約 2kg)、合計はやはり約 6kg、に変更され、馬房で個別に与えられる。セリに上場する馬は毛づやを良くするため夕飼に米糠油 (ライスブランオイル) を 3 プッシュ加えていた。また、1 月から妊娠馬の夕飼にコーンオイルを 1 プッシュ加えていた。太りやすい馬 (easy keeper) には日高育成牧場でも使用している Stamm30 を給餌していた。Stamm30 は離乳後の当歳にも使用しているとのこと。寒いのでエサが凍らないように飼料庫は暖房を 24 時間つけっぱなしにしていた。その他、水道のホースなど凍ったら困る物は飼料庫に保管していた。毎週水曜日に Hallway Feeds 社が飼料を倉庫に搬入に来る。



「WinStar Farm Custom Cube」という大粒のペレットが基本

2. 繁殖および初期育成



地べたで与えられる

地面に置く飼料桶使用

・敷料

分娩馬房のある Foaling Barn は分娩馬房以外も全て麦稈、セールスプレップを行っている Widow's Watch Barn およびその他の厩舎は自家製のブルーグラス乾草を敷料にしていた。また、太りやすい馬にはウッドシェービングを使用していた。汚れた敷料は牧場内で堆肥にして、放牧地に撒いている。



麦稈のコンパクト

分娩厩舎は麦稈使用



ブルーグラス乾草

ウッドシェービング

・分娩対応

最後の1週間夜警として働かせてもらった。勤務時間は19:00～7:00。相棒は黒人のエイドリアンという人物で、ウインスターで働き始めて4年目だという。その前には4年間ヴァージニアの牧場で働いており、うち2年間は夜警を務めていたとのこと。



夜の Foaling Barn

監視室から分娩用馬房を見る

<夜警のタイムスケジュール>

19:00 集合。見回り（さく癖している馬の飼桶を外す）。その後、15分おきに見回り（料理用のタイマーを15分毎に鳴らし見回る）。

22:30～23:00 ボロ拾い。投薬。夜飼（馬によっては水および乾草を足す）。消灯。以後、懐中電灯で照らしながら見回る。大きな分娩馬房は照明をつけたまま一晩中消さない。

3:45 水を足す。

4:30～5:00 ボロ拾い。朝飼。乾草足す。

7:00 昼間働いているスタッフに引き継いで帰宅。



15分おきに見回り

分娩用馬房は消灯しない

<分娩>

分娩対応時より分娩3日後まで、分娩馬房に入る際は子馬の感染症を防ぐためガウン・

2. 繁殖および初期育成

ゴム手袋・シューズカバーを着用し、踏込槽で靴を消毒する。踏込槽には馬房に噴霧していたのと同じ「Bio Phene」という商品名のフェノール系の消毒薬を使用。子馬への無口頭絡の装着も分娩3日後以降に行う。分娩に必要な器具はあらかじめカートにまとめてある。破水したら夜警がマネージャーに電話連絡。マネージャーは娩出まで見て母子に問題がなければ初乳を飲むのを確認する前に帰っていた。



分娩3日後までガウン使用

必要な器具はカートにまとめる

分娩時の流れは、

- 1) カートを持ってくる
- 2) 尾巻
- 3) 胎位のチェック
- 4) 介助（引っ張る）
- 5) 子馬を拭く（拭いたタオルは母馬の鼻先へ）
- 6) 後産をヒモで縛る
- 7) 子馬の臍を消毒（クリップは使用せず手で止血）
- 8) 子馬を母馬の鼻先へ移動
- 9) 子馬に浣腸
- 10) 母馬にフルニキシン（パナミン）10ml 静脈内投与
- 11) 母馬の乳房および両後肢を洗浄
- 12) 後産が排出されたら、広げてチェックし、重さを測る
- 13) 漏乳するなどして初乳の Brix 値が低い（20%未満）場合には、子馬にストック初乳を哺乳瓶で与える
- 14) 尾巻を外す
- 15) 分娩翌日に小さな馬房に移す
- 16) 分娩に使用した馬房の麦稈は全て廃棄し、馬房を洗浄&消毒する

2. 繁殖および初期育成



カートを持ってくる



尾巻



胎位のチェック



介助（引っ張る）



子馬を拭く



後産をヒモで縛る



子馬を母馬の鼻先へ移動

母馬の乳房および両後肢を洗浄



後産を広げてチェック

ストック初乳を与える

初産の母馬は子馬が初乳を飲む前にヒトが乳房に触って馴らしておく。母馬が蹴る場合、キシラジン 2ml (200mg) 静脈内投与で鎮静。子馬が弱くて乳が飲めない場合は、母馬の乳汁を採取して哺乳瓶で与える。自力で上手く寝られない子馬には介助して寝かせる。分娩した日は夜飼いおよび朝飼いはなし。翌日は放牧せず、翌々日からパドック昼放牧。なお、ストック初乳は買ったら 1 パイント 130 ドルするとのこと。

<新生子溶血性黄疸対策>

分娩前の検査で NI (+) だった繁殖牝馬が分娩した後、牧場常駐の獣医師である Page が来て、新生子溶血性黄疸の確定診断である JFA Test を行う。手順は、子馬から EDTA 管で採血し、母馬から乳汁をプレーン管で採取し、試験管内で混和し遠心した後、試験官をひっくり返し中身を捨てる。その際に赤血球が流れれば陰性、赤血球が固まって試験官の底に残っていれば陽性である。JFA Test が陰性であれば（たいてい陰性。NI Test は偽陽性が多い）、そのまま自由に初乳を飲ませる。ダービーダンでは牧場常駐の獣医師が居ないため翌朝まで子馬に口カゴを装着し（ストック初乳を与え）、獣医師の到着と検査を

待たなくてはならなかったが、ウインスターでは待つ必要がなく牧場常駐の獣医師が居るメリットの一つと考えられた。ちなみに、ウインスターのラボでは CBC、生化学、IgG の測定のほか、細菌培養検査まで実施できる。NI Test はハグヤードで行っているとのこと。



子馬から採血



母馬から搾乳

<血漿製剤>

出生後、IgG を測定して低くなければ血漿製剤は投与しない。低ければ投与する。その際の血漿製剤は 5 種類の病原体 (*C. difficile*、*C. perfringens* A、*R. equi*、Rotavirus、*Salmonella*) に対する抗体入りのもの。

・獣医療

<レギュメイト>

1 日 1 回朝飼時もしくは夕飼時に放牧地で投与する（朝か夕かは厩舎による）。レギュメイトを投与されている妊娠馬には、無口頭絡に赤いテープが貼られている。連続投与器で 10ml ずつ経口投与。ダービーダンでは漸減していたが、ウインスターでは分娩予定日の 1 ヶ月前に 24 時間放牧から昼放牧に切り替えたタイミングでいきなりゼロにしていた。



レギュメイトを連続投与器で 10ml ずつ経口投与

<クッシング病の馬にペルゴリド (Pergolide) の投与>

いわゆるクッシング病（最近では下垂体中葉機能不全:PPID と呼びましようということになっている）が疑われる繁殖牝馬にはペルゴリド製剤が投与されていた。ドーパミン作動薬で、ヒトのパーキンソン病に用いられている。ベーリンガーインゲルハイム社の「Prascend」という製剤を1日1回1錠経口投与（シリンジ内でお湯で溶かして）。ペルゴリドを投与されている繁殖牝馬には、無口頭絡に白いビニールテープが巻かれ、一目でわかるようになっていた。



PPID の牝馬にはペルゴリド製剤「Prascend」を1日1回1錠経口投与

<胎盤炎>

分娩予定日の約1ヶ月前に超音波検査が実施され、CTUP が厚いなど胎盤炎の兆候がある馬にはSMZ15 錠およびトレントール 40ml が1日2回分娩まで経口投与されていた。

<流産>

12月22日に1頭流産。胎盤からヘリコバクター菌が検出されたとのこと。ニトロフラゾンを追加した乳酸リングルで毎日1回子宮洗浄。12月30日にも1頭流産（詳細不明）。



流産した牝馬に子宮洗浄

<外傷>

繁殖牝馬（妊娠馬）が1頭、放牧地で右後管部に外傷を負っているのを朝飼時に発見した。第3中足骨が露出するほど重度な裂創であった。マネージャーのJeffに電話し、とりあえず集牧し、牧場専属の獣医師 Natanya Nieman が処置。鎮静した後、毛刈り、スクラブ、局所麻酔（メピバカイン 50ml でたっぷり）、念入りに洗浄、その後ドレーンを留置し、タオル鉗子で皮膚を寄せてから単純結紮縫合していた。その後、高圧酸素療法を実施。



重度な裂創

ドレーンを留置し縫合

<高圧酸素室（O₂チャンバー）>

Training Barn にもあったが、Foaling Barn にももう1つあり、それぞれに1名ずつテクニシャンが張り付いていた。Foaling Barn のチャンバーは分娩馬房の1つと繋がっていて、低酸素脳症の新生子馬が毎日簡単に通えるようになっていた。1セット 75 分間。蹄に融雪剤がついていると機械にとって良くないとのことで、入れる前にしっかり洗浄して落としていた。金属が付いている馬具を装着したまま入ると引火する恐れがあるため、普段付けている革の無口（金具の部分が鉄）をナイロンの無口（金具は使用せずプラスチックでできている）に交換してから入っていた。もし蹄鉄を履いていれば事前に除鉄する。



O₂ チャンバーが分娩馬房の1つと繋がっていた

<妊娠馬のワクチネーション>

分娩予定日の1ヶ月前に東部および西部馬脳炎の混合ワクチン、ウエストナイル、ボツリヌス、ロタウイルス、ウェルシュ菌 (*C. perfringens*) に対するワクチンをそれぞれ筋肉内投与。EHV4 のワクチンは妊娠5ヶ月、7ヶ月、9ヶ月の3回投与（ちなみに生ワクチンではなく不活化ワクチンであった）。そのほか、馬主が希望すれば狂犬病とレプトスピラのワクチンを追加する。レプトスピラのワクチンは2015年に発売されたばかりで、吸収不全などの副作用が多いとのこと。

・装削蹄および蹄病

<通常の削蹄>

装削蹄は Steve というブレーキング部門にも来ていた装蹄師のグループ（Steve+弟子2名）が担当。24時間放牧中の繁殖牝馬は野外で削蹄する。1頭にかかる時間は約10分と速い。

<挫跖の治療>

DRで確認後、Clean Track で消毒、アニマルインテックスを自壊しそうな部位に当ててから湿布。



Clean Track で消毒

湿布

<蹄病の治療>

挫跖以外の本格的な蹄病は、「Bur Oak Veterinary & Podiatry Services」という病院を開業している Vernon C. Dryden, DVM, CJF（Certified Journeyman Farrier の略で認定された熟練装蹄師という意味）とその弟子の Ben Bright, CF（Certified Farrier＝認定された装蹄師という意味）の2名が来て治療していた。Dr. Dryden は獣医師兼装蹄師で、ロードアンドリドルで Podiatrist として働いた後、独立。



元ルードアンドリドルの Podiatrist である Dr. Dryden が蹄病を治療

ウインスターは高齢の繁殖牝馬には放牧地が良過ぎて蹄葉炎が多い印象だった。通常は良い放牧地⇒Weanling（離乳後の当歳馬）、Yearling（1 歳馬）、普通の放牧地⇒Maiden（上がり繁殖牝馬）、Foal（離乳前の当歳馬）、悪い放牧地⇒Mare（繁殖牝馬）という使い方をしている牧場が多いが、ウインスターは全ての放牧地を完璧に管理しており、ステージによってはかえってそのことがマイナスに作用していると感じた。

・当歳から 1 歳にかけて冬期の管理

基本的に 24 時間放牧。放牧地内に草架を設置しており、運動量のことは考えていない印象だった。セリに出す馬は昼放牧に切り替えられていた。ちなみに、雪が降っても 1 週間で融ける。気温はマイナス 10℃くらいまで下がるが、内陸のため日中はプラス気温になる。



当歳から 1 歳にかけての冬期は基本的に 24 時間放牧（草架使用）

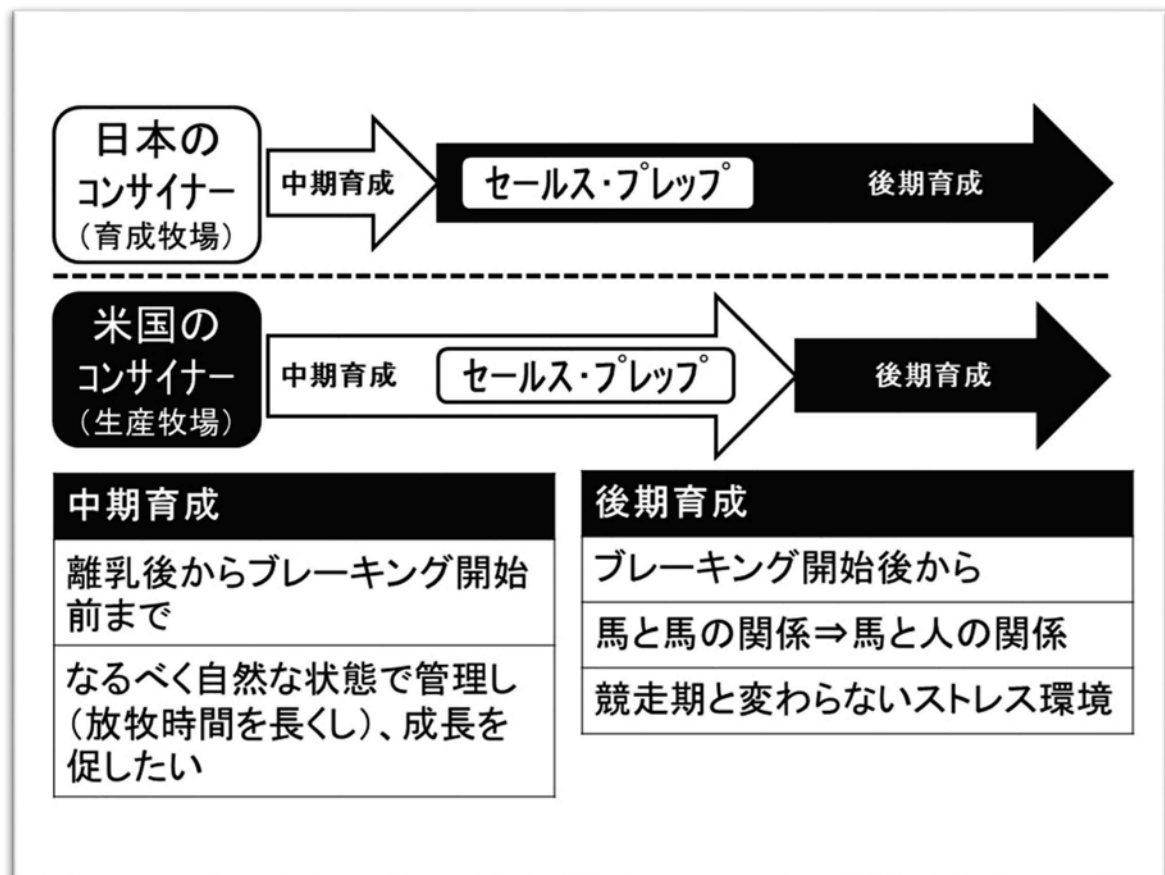
3. 中期育成およびセールス・プレップ

ダービーダンファーム (Darby Dan Farm)

・セールスプレップに対する考え方の違い

いきなり結論から話すような形になってしまうが、まずダービーダンのセールスプレップについての考え方がそもそも日本の多くのコンサイナーと異なっていることがわかった。

日本の多くのコンサイナーは育成牧場が主に行っていることもあり、セールスプレップが始まった時点で昼夜放牧は中止するなどそれまで生産牧場で行われていた中期育成は終了し、セールスプレップが「後期育成の“入り口”」であるかのごとく引き運動やランジングを行い、今後のブレイキングに繋がるような人と馬との関係構築を重視するやり方を行っているところが多いと考えられる。一方、生産牧場であるダービーダンではセールスプレップを「中期育成の“延長”」と考えて、なるべく自然な状態で管理し、成長を促すことを最優先していた。そして、あくまでもその上で売却に関して不利を受けないよう見た目をきれいにするために日焼けを防ぐなどの処置が行われていた。どちらの方法にもメリット・デメリットがあるが、今後日本でも（育成牧場ではなく）生産牧場でセールスプレップを行う際にはケンタッキーのやり方は参考になると思われた。



セールスプレップに対する考え方の違い

・イヤリング部門 (Yearling Department)

2015 年 7～9 月にダービーダンファームのイヤリング部門で研修を行った。イヤリングマネージャー (Yearling Manager) はイギリス人の Ian Cole で、ダービーダンに来るまでは米国の 1 歳セリで最大のコンサイナーであるテイラーメイドファーム (Taylor Made Farm) で働いていたとのことであった。

・施設

イヤリング部門の施設であるが、厩舎は 3 つ、馬房が背中合わせにくっ付いていて周囲にシェッドロー (ウッドチップが敷かれている) があるタイプの Colt Barn が 24 馬房、コの字型の Court Barn が 33 馬房、そして馬房が対面式の 7 Stall Barn が文字通り 7 馬房である。他にウォーキングマシン (Walker) が 1 機、洗い場が 2 頭分、ラウンドペンが 1 つある。Colt Barn と Court Barn がメイン厩舎で、7 Stall Barn はセリで購入した馬や例えば Hagyard で手術を受けるために一時的に預託された馬などを収容しており、入れ替えが激しかった。



Colt Barn (24 馬房)

めす									空き	
牡	めす	めす	めす	空き	居室	めす	めす	めす	めす	牡
牡	牡	牡	牡	空き		めす	めす	めす	めす	牡
牡									牡	

Colt Barn 馬房図

3. 中期育成およびセールス・プレップ



Court Barn (33 馬房)

犬(イアン の ロットワイラー)	めす	めす	めす	めす	めす	めす	めす	めす	めす	倉庫	空き		母子
牡											居室		空き
牡											空き		空き
牡											空き		空き
牡											空き		空き
牡											空き		空き
牡											空き		空き
牡											空き		空き
牡											空き		空き
牡											めす		めす

Court Barn 馬房図



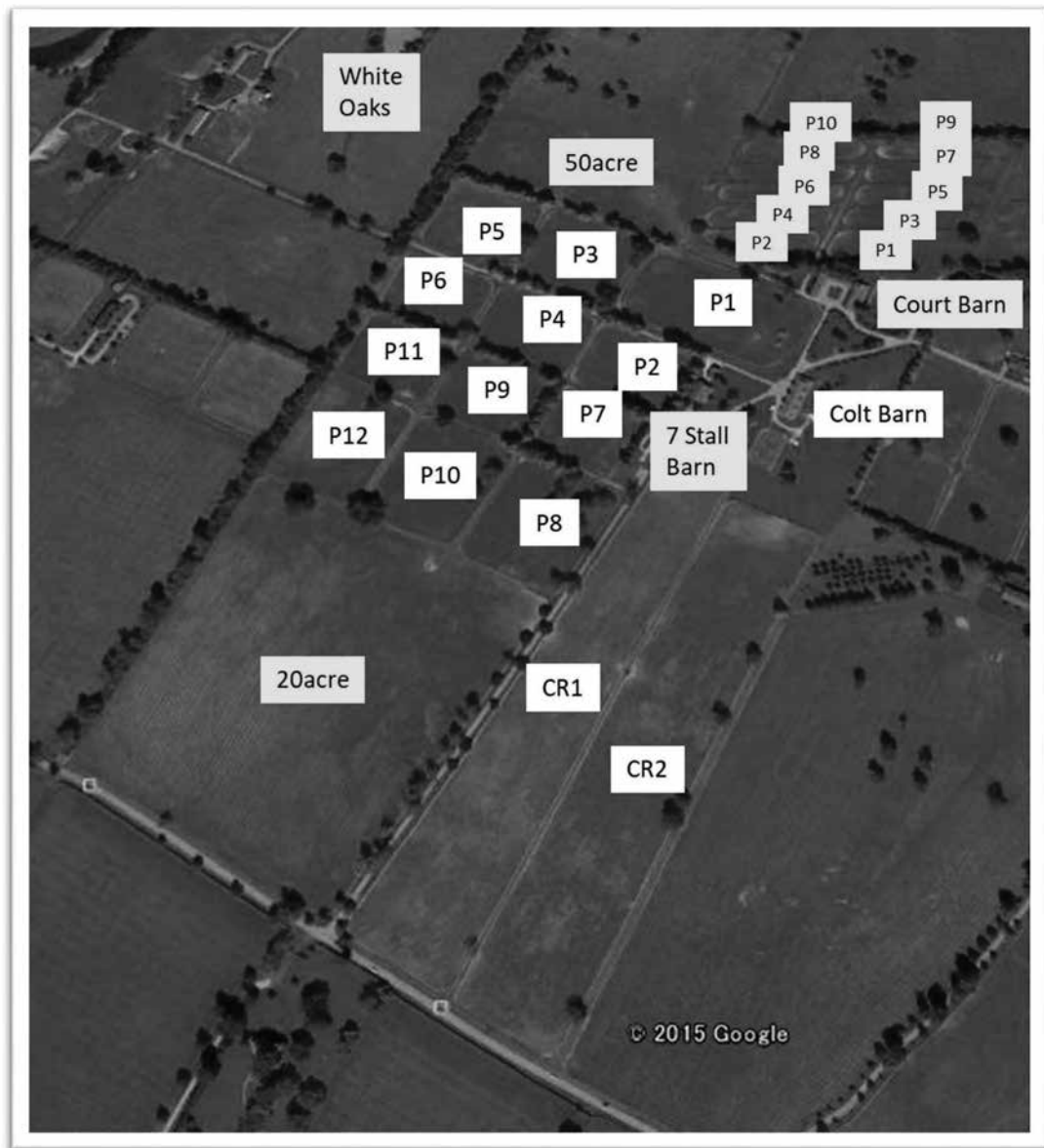
7 Stall Barn (7 馬房)

空き		居室
空き		空き
空き		開腹手術後の 繁殖牝馬
空き		競走馬 (めす)

7 Stall Barn 馬房図

・「1 acre, 1 horse」

イヤリング部門に附属している放牧地を図に示す。まず、Colt Barn には 1 区画約 0.7ha の正方形の中パドックが 10 面あり、他に CR1 および CR2 (CR とは Colt Run の略) と呼ばれる約 4.0ha の長方形の放牧地が 2 面ある。次に、Court Barn には 1 区画約 0.3ha の長方形の小パドックが 10 面あり、他に 20acre と呼ばれる約 8.0ha の正方形の放牧地が 1 面ある。基本的に、牡は咬んで傷つけ合うとの理由で 1 頭ずつパドックを使用し、牝は広い放牧地に 4～6 頭で放牧されていた。7 Stall Barn には基本的に休養馬が入るため、7 Stall Barn の馬は馬房内休養 (Stall Rest) かもしくは Colt Barn に附属する P2 辺りのパドックを使用していた。ちなみに、放牧地の広さの基準は「1 acre, 1 horse」。すなわち、放牧地 1 エーカー (=約 0.4ha) につき馬 1 頭が目安であった。



イヤリング部門放牧地

・セリに上場しない1歳馬の管理

セールス・プレップについて述べる前に、セリに上場しない1歳馬の管理について触れておきたい。こちらがベースとなる考え方だからである。セリに上場しない馬(基本的にはダービーダン生産馬)のうち、牡(5頭)は50acre(かつて50エーカーの広い放牧地であったということで現在は3分割されており、使用している放牧地は一番手前の最も小さい区画で約1.5ha)という放牧地、牝(18頭)はWhite Oaks(約14ha)という放牧地に24時間放牧されっぱなしであった。中にはFrankelやTapitの推定1億円以上する産駒もいた。これらの馬は2週間に1回程度集牧され、その際にペレットを約2kg与えられていた(馬房にいるの

3. 中期育成およびセールス・プレップ

は4時間程度)。これはすなわち栄養補給のための収牧ではなく、馬体検査のための集牧である。栄養は基本的に放牧地の青草から補給されており、1日1回馬体の確認（外傷の有無など）のため放牧地にて1頭当たり同じく約2kg ペレットが給餌されている。これをしないと馬が完全に野生化し、人に近寄ってこなくなるとのことである。しかし、基本的に放牧地の青草しか食べていないのにもかかわらず、驚くべきことに痩せている馬(BCSが4.5以下の馬)は1頭もおらず、この地がケンタッキー州の中でもブルーグラス地区と呼ばれる特に肥沃な土壌を持つ地域であることを改めて痛感させられた。

装蹄師が来た際にはセリに上場する馬と同様に削蹄されていたが、正直なところ普段人に触られていないので決して従順ではなく、保定が大変だった。肢勢に関してはこの時点で問題のある馬はおらず(当歳のうちに矯正する)、表層裂など軽度な裂蹄を発症している馬が数頭いたが支障なく全頭24時間放牧が継続された。



White Oaks での放牧風景



放牧地での給餌

・ダービーダンでのセールスプレップ

話をセールス・プレップに戻す。平日および土日のタイムスケジュールを記載する。晴れの日には馬を日焼けさせないため、15:00 に一旦解散し、19:00 に再集合して夜間放牧を行っていたのが最大の特徴である。そして、それは土日も変わらず徹底していた。

★平日のタイムスケジュール（セプテンバーセールまで）

6:00 集合、朝飼付、昼夜放牧している馬の集牧、昼放牧している馬の放牧

7:30 厩舎作業（ウォーキングマシン、馬体洗浄、7 Stall Barn のボロ出しなど）

8:30 朝食休憩

8:45 厩舎作業（続き）

10:30 厩舎作業（引き続きウォーキングマシン、馬体洗浄＋乾いた馬の手入れ開始）

11:00 厩舎の給水

11:30 昼食休憩

（晴れの日）

12:30 手入れ (2 人 1 組で)
14:00 昼放牧している馬を集牧
14:30 厩舎の給水、乾草給餌、昼飼付、7 月最終週からはフライ・マスク装着
15:00 一旦解散
19:00 再集合、昼夜放牧している馬を放牧
19:45 ボロ出し
20:30 解散
(曇りもしくは雨の日)
12:30 手入れ (2 人 1 組で)
14:00 昼放牧している馬を集牧
14:30 厩舎の給水、乾草給餌、昼飼付
15:00 昼夜放牧している馬を放牧
16:00 ボロ出し
17:00 解散

★土日のタイムスケジュール (セプテンバーセールまで)

7:00 集合、朝飼付、昼夜放牧している馬の集牧、昼放牧している馬の放牧
8:30 朝食休憩
8:45 厩舎作業&雑務 (7 Stall Barn のボロ出し、草刈りなど)
11:00 昼食休憩
(晴れの日)
13:00 厩舎雑務 (草刈り、手入れなど)
14:00 昼放牧している馬を集牧、
14:30 厩舎の給水、乾草給餌、昼飼付、7 月最終週からはフライ・マスク装着
15:00 一旦解散
19:00 再集合、昼夜放牧している馬を放牧
19:45 ボロ出し
20:30 解散
(曇りもしくは雨の日)
13:00 厩舎雑務 (草刈り、手入れなど)
14:00 昼放牧している馬を集牧、
14:30 厩舎の給水、乾草給餌、昼飼付
15:00 昼夜放牧している馬を放牧
16:00 ボロ出し
17:00 解散

3. 中期育成およびセールス・プレップ

集放牧であるが、私を含め約 8 名で行われ 1 人当たり約 7 頭引き馬をする。マネージャーの Ian は基本的には引き馬を行わず、ピックアップトラックで我々を送り迎えするほか、厩舎の前で馬体チェックをする。チェックは基本的には目視によるものだが、跛行している場合などは歩様検査および触診が行われる。どこの放牧地も高さ約 130cm 木製 4 段の牧柵 (fence) が使用され、白または黒の防腐剤入りのペンキが塗られていた。金属の網製のフェンスは使用されていなかった。入り口は鉄製の簡素な扉 (gate、130cm×360cm) および鎖が付いており、アイルランドのように二重にはなっていない。なお、収牧時は各自で扉および鎖を閉めていが、鹿などの大型の野生動物が放牧地に侵入しているのを見ることはなかった。野生のウサギ、アライグマ、スカンクは生息していた。細かい話であるが、集放牧時は馬になるべく砂利の路面を歩かせず、アスファルト上もしくは芝生上を歩かせることを注意された。馬が挫跖を発症する恐れがあるからである。



集牧の様子



集牧時の Ian による馬体チェック



ゲートは自分で閉める



馬は芝生上を歩かせる

放牧に関しては、前述したとおり馬を日焼けさせないことを最優先して、基本的に夜 19:00 にスタッフが再集合して行われていた。また、7 月の最終週からはサシバエが増えてくるのに合わせてフライマスク (fly mask) を基本的に全頭 (一度放牧地で破壊してきた馬

3. 中期育成およびセールス・プレップ

以外)に装着していた。なお、サシバエは人も刺す。雨の日はサシバエが飛ばないので、フライマスクの装着は行われなかった。



サシバエ



フライマスク



フライマスクの装着

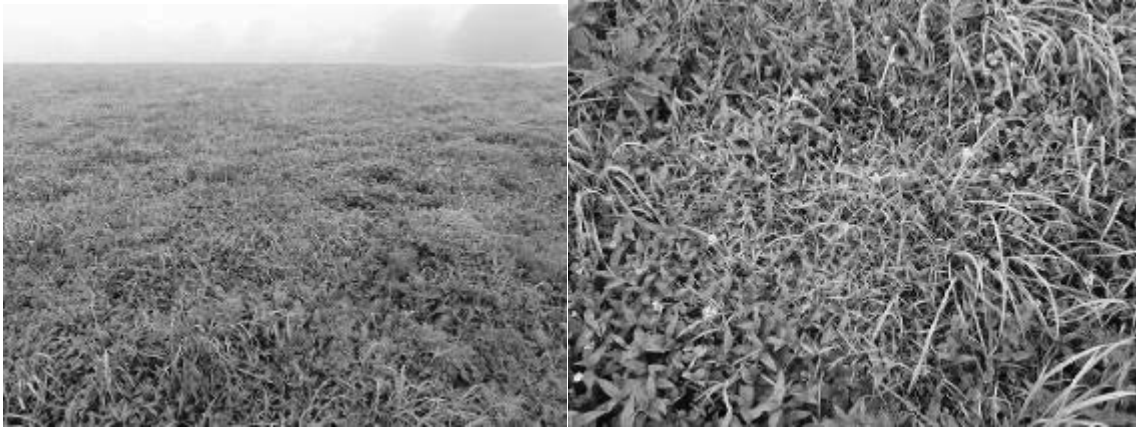


フライマスクを付けて放牧

・放牧地 (field) について

基本的にライムストーン (Lime Stone、石灰石) の地層の上に牧場が作られているため、放牧地の土壌はアルカリ性であり草にミネラル分が豊富に移行する。放牧地に生えている草はこの地の特産であるケンタッキーブルーグラスが主体であるが、雑草も多かった。私はこちらに来るまで、「ヨーロッパは自然のままの草地で馬を管理し、馬に食べたい草種を好きに選んで食べさせる (ことで栄養バランスを保つ)」「アメリカはケンタッキーブルーグラス単播の草地で、とにかく栄養のある草を食べさせる (栄養バランスは濃厚飼料で調整する)」と思い込んでいたのだが、そんなことはなく、馬は自分が食べたい草種を好きに選んで食べることができていた。

3. 中期育成およびセールス・プレップ



ケンタッキーブルーグラスが主体だが、雑草も多い



白クローバー

赤クローバー



アカマンマ (イヌタデ)

オオバコ

3. 中期育成およびセールス・プレップ



ダイス

名称不明（ニンジンに似ている）

放牧地は月に 1 回程度掃除刈りを行っていた。草刈りはイヤリング部門のスタッフではなく、メンテナンス部門（Maintenance Department）の仕事である。草丈は 10～20cm と短めであり、刈りカスは回収せずそのまま残していた。これは言葉では語れないことであるが、掃除刈りの後放牧地の草が再生するスピードは日本では考えられない早さで、さすがはレキシントンの土壌の豊饒さだと感嘆せざるを得なかった。なお、チェーン・ハロー、エアレーションなどの作業、放牧地の更新、化学肥料の散布、放牧地のボロ拾い、除草剤（ラウンドアップ）の散布は研修中一度も見かけなかった。堆肥の散布および土壌の pH を上げるためのライミングは行われていた。ライミングはダービーダンのスタッフではなく、専門の業者が来て行っていた。なお、放牧地の地面にも時々石が露出しているが、こちらはスリック・ストーン（Slick Stone）と呼ばれ、ライムストーンと区別されていた。ライムストーンは地中 8 フィートより深い地層にあり、斜面でなければ掘らずに露出することはないとのことである。



ライミング

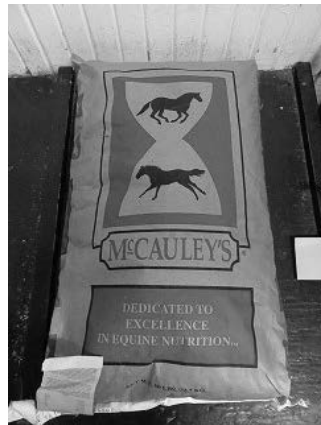
地表に露出した石（Slick Stone）

・飼料

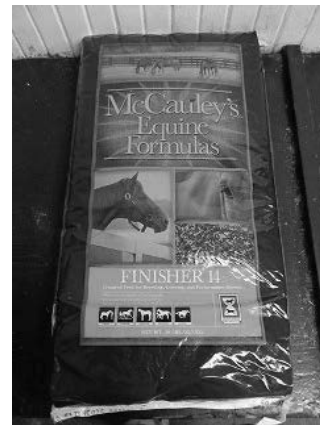
飼料は繁殖牝馬と同じ大粒のペレット Option 14 Pelleted（McCauley Bros.社製）を朝と

3. 中期育成およびセールス・プレップ

昼の2回給餌していた。馬のBCSに合わせて、2×2（朝2スクープ、昼2スクープの意味、約1.5kg）から5×5（朝5スクープ、昼5スクープの意味、約2kg）の4段階に分かれているのであるが、いずれにせよ1回量は最大で2kgであり、日本のコンサイナーと比較して少ない。ペレットを食べ残す馬にはスウィートフィードが与えられていた。給餌量は同じである。なお、後述するウォーキングマシンに入れた場合は疝痛予防のため直後には飼付せず、30分以後に飼付を行っていた。



ペレット



スウィートフィード

Option 14 Pelleted（McCauley Bros.社製）の成分を下記に示す。

粗タンパク質（最小）	14.0%
粗脂肪（最小）	3.0%
粗繊維（最大）	13.0%
カルシウム（最小）	1.2%
カルシウム（最大）	1.7%
リン（最小）	0.7%
銅（最小）	30ppm
セレン（最小）	0.4ppm
亜鉛（最小）	100ppm
ビタミンA（最小）	4000IU/lb
ビタミンE（最小）	100IU/lb

サラトガセールに上場する馬など、特に期待している馬には Red Cell（ミネラルのサプリメント）や Endure（ビタミンのサプリメント）、Rice Bran Oil（米ふすま油、毛艶を良くする）といったサプリメントが使用されていた。

・ウォーキングマシン馴致

セリに上場される1歳馬は全頭、ウォーキングマシン（WM）による運動が課せられてい

3. 中期育成およびセールス・プレップ

た。初めて WM に入れる場合の馴致の手順であるが、まず放牧地が同じもしくは近い馬同士、3 頭もしくは 6 頭が一緒に入れられていた。ダービーダンの WM は最大 6 頭が入られるタイプで、間の仕切りには電撃が流れる仕組みになっていた。3 頭を入れる場合は 1 頭分のスペースを空けて使っていた。必ず牡なら牡馬のみ、牝なら牝馬のみの同性同士が WM に入れられ、牡牝混合で運動することはなかった。最初の 2～3 周、日高でいう“周回”のスピードで人がついて引き馬を行った後、最初から電撃をオンにして運動を行っていた。馬が慣れないうちのトラブルとしてくぐって前のスペースに入ってしまう馬や額に軽い挫創を負った馬、外傷性鼻出血を発症した馬がいたが、重大な事故が起こったことはなかった。また、WM による運動を中止した馬もいなかった。



6 頭一緒に



最初は引き馬で



最初から電撃オン



外傷性鼻出血を発症した馬

ダービーダンでの WM による運動の特徴は、その“速さ”にある。基本的に左右 15 分ずつ（途中で左右回りを変える）、速度は目測で時速 8km 程度（速歩にならざるを得ない速さ）で運動させるのであるが、この“速歩にならざるを得ない速さ”というところがミソであった。馬は最初汗ビッショリになりながらほぼ全て速歩による運動をせざるを得ないのであるが、慣れてくると徐々にストライドを伸ばした常歩ができるようになるのである。これがセリ

の下見の際に大きなスピード感のある常歩ができることに繋がるという理屈であった。

・馬体洗浄

WM の後は洗い場で馬体洗浄が行われていた。手順は下記のとおりであった。

- 1) 馬体全体に水を掛ける
- 2) 全身にシャンプーの泡を掛ける
- 3) ゴムブラシで馬体を擦る
- 4) 水でシャンプーを流す
- 5) スクレイパーで馬体の水を切る
- 6) 馬によっては赤いワックス（トリートメント）を掛ける（水で流さないでそのまま乾燥させる）



馬体全体に水を掛ける



馬体洗浄用のシャンプー



全身にシャンプーの泡を掛ける



ゴムブラシで馬体を擦る

3. 中期育成およびセールス・プレップ



水でシャンプーを流す



スクレイパーで馬体の水を切る



馬体用のワックス



水で流さないでそのまま乾燥させる

基本的に2人1組で行うのであるが、人手が足りない時は1人で馬を保持しながら洗わなくてはならず、大変であった。場合によっては1および5だけの水洗いの時もあった。皮膚病を患っている馬には抗真菌薬(ケトコナゾールおよびトリクロサン)入りのシャンプーが使用されていた。なお、初めて洗い場に入る馬は物見をしてなかなか入らないが、水を掛けて追ってみて、それでもダメな場合は後退させて入れていた。



皮膚病



抗真菌薬入りのシャンプー

・馬の手入れ（Grooming）およびトリミング

ダービーダンファームでのセールスプレップにおいて、最も力を入れていたのがこの手入れである。日焼けした体毛を早く抜き、新たな体毛に変えて見栄えを良くすることが目的である。Grooming はその日 WM に入れられなかった馬に対して実施されていた。すなわち、Colt Barn の馬が WM&馬体洗浄の日は Court Barn の馬が Grooming、反対に Colt Barn の馬が Grooming の日は Court Barn の馬が WM&馬体洗浄というわけである。

スタッフの好みによって若干の違いがあったが、手順は概ね下記のとおりであった。なお、作業は基本的に2人1組で行っていたが人手がない場合は一人馬房内で行っていた（基本的にはシェッドローで行っていた）。Grooming の道具は各自が自分の名前が書かれたプラスチックの箱に入れて管理していた。こうしないと道具がなくなるとのことである。



シェッドローでの Grooming



各自の Grooming Box

Grooming の手順

- 1) 虫除けスプレー（fly spray）を下肢部に掛ける
- 2) ゴムブラシ（rubber brush）で全身を強く擦り、古い体毛をできるだけ抜く
- 3) ハードブラシ（固い方の根ブラシ）で抜けた体毛を取り除き、ソフトブラシ（柔らかい

3. 中期育成およびセールス・プレップ

方の根ブラシ) で下肢部および顔をきれいにする

4) ショーシーンを尾に掛ける。※たてがみには掛けない！トリミングの際、引っ掛からなくなるから

5) たてがみ、尾をくしでとく

6) 顔を布もしくはスポンジで拭く

7) 裏掘りおよび蹄油（蹄冠部まで）



虫除けスプレー



下肢部のみにスプレーする



ゴムブラシで全身を強く擦る



根ブラシをかける

3. 中期育成およびセールス・プレップ



ショーシーン



尾のみにスプレーする



たてがみ、尾をくしでとく



顔を布もしくはスポンジで拭く



裏掘り



蹄油を塗って完了

本当に地道な作業であったが、この作業を繰り返すことで日焼けした体毛が早く抜け、新

たな体毛に変わり見栄えが明らかに良くなることが実感できた。



日焼けした馬



セリ直前の馬

トリミングはマネージャーが担当して、他のスタッフが行うことはなかった。セリ会場への輸送の本当に直前に行われるのであるが、その理由としては①昼夜放牧をしているうちは耳毛や距毛が必要（雨や虫を除ける）、②たてがみを編まなくても良い（長いまま右に倒す癖をつける）、③セリを欠場したら無駄になる、とのことであった。

米国ではたてがみをすくための専用のブラシが売られていた。これはブラシの部分が短く、一度に大量のたてがみを取ってしまうことがないのと、ブラシの部分が二重の仕掛けになっていて、レバーを引くとたてがみをつかめるようになっていた。バリカン（clipper）でブライドルパスと距毛のほか、下顎および口周りのひげも刈っていた。おとなしい馬には鎮静なしで行っていたが、うるさい馬にはキシラジンおよび場合によっては鼻捻子（twitch）、耳捻子が用いられていた。そのほか、セリに上場する牡馬に対してはペニスの洗浄も行われた。

・ボロ出し（cleaning）

ボロ出しの方法は日本と特に変わらない。厩舎によって一輪車を使用して汚れた敷料を運び出してトラクターの荷台に載せるか、もしくは直接トラクターを厩舎内まで乗り付けていた。1点のみ異なっていたのは、馬房の床が土であり尿の跡で濡れている地面にはカルシウムの粉末を撒いていたことである。消臭効果があるらしい。

3. 中期育成およびセールス・プレップ



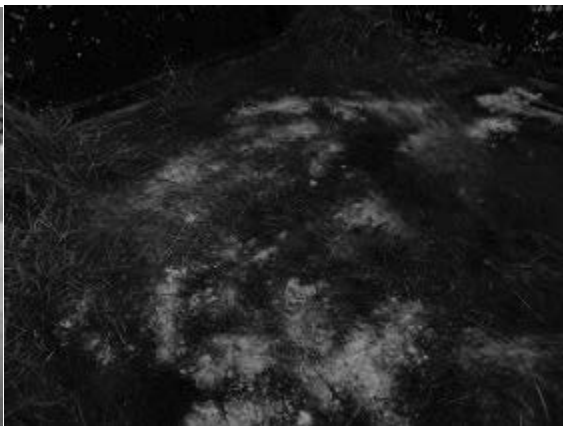
一輪車でトラクターに載せる



トラクターに直接載せる



カルシウムの粉末



消臭効果があるとのこと

また、敷料は基本的には麦稈を使用していたが、7 Stall Barn にいる休養馬はケンタッキーブルーグラスの乾草を使用していた。

馬房の大きさは Colt Barn が 360cm×360cm、Court Barn が 360cm×345cm、7 Stall Barn が 470cm×470cm であり、一部を除きどの馬房も隣の馬が見えるようになっていた。



通常は麦稈を使用



休養馬にはブルーグラス乾草を使用

3. 中期育成およびセールス・プレップ

・削蹄および装蹄

4週間に1回の頻度で、装蹄師が削蹄に来ていた。親方1名および弟子2名というメンバー構成で、まず全頭の歩様をチェックした後、親方がどのように削蹄するかメモを記載する。その後、弟子たちはメモを見ながら、3人全員が1人1頭ずつ削蹄していくというスタイルであった。1頭当たりの削蹄にかかる時間は約5分と非常に手際が良かった。削蹄後の歩様のチェックはしていなかった。表層裂などの簡単な異常にはこの時に処置していた。なお、セリに上場される馬は直前に両前肢の装蹄が行われた。さらに、装蹄後は放牧時にワンコを装着し、落鉄を予防していた。



装蹄車



歩様をチェックし、親方がメモ



親方のメモ



メモを見ながら1人1頭削蹄

3. 中期育成およびセールス・プレップ



表層裂などの簡単な異常にはこの時に処置



セリ上場馬は両前肢の装蹄実施

放牧時はワンコを装着

・体重測定

月に1度、飼料会社である McCauley Bros.社の栄養コンサルタントがポータブルの体重計をピックアップトラックで持ってきて体重測定を行っていた。もちろんポンド表示である。8月の時点で900～1000ポンドであり、これはキログラムに換算すると405～450kgとなる。比較のため、私が担当していた頃のJRA ホームブレッド（2010年生まれおよび2011年生まれ）の数値を確認すると904～1129ポンド（411～513kg）であったので、ダービーダンが1歳馬を太らせないように注意していることがわかる。



業者が体重計を持参して、体重測定

・口カゴ (Muzzle) の装着

8月21日より太っている馬には放牧時口カゴが装着された。渡米前に雑誌「The Horse」などを読んで、Equine Metabolic Syndrome の繁殖牝馬には採食制限のために口カゴが用いられていることを知っていたが、まさか 1 歳馬にも使用されているとは思わなかった。やはり、ストレスが大きいらしく、集牧時に口カゴが外れている頻度はフライマスクの比ではなく、下顎の皮膚に褥瘡ができることもしばしば観察され、決して良い方法であるという印象は持てなかった。なお、太りやすい馬のことを英語で「easy keeper」と呼ぶ。



口カゴを装着し放牧

口カゴによる褥瘡

・幹部の視察および下見対応

新しく馬が入厩した際には Owner の John Phillips、Vice Chairman の Robert Hammond、Sales and Bloodstock Director の Carl McEntee、Director of Client Development の John Hamilton が視察しにきていた。また、時々ダービーダンファームに馬を預託している馬主が視察にきていた。セプテンバーセールに上場する馬の下見に来る客は少なく、来たとして

も Book1 もしくは Book2 の馬のみを下見していった。



新入厩馬の幹部の視察



預託している馬主の視察

・レポジトリーほかセリに関連した獣医マター

9月14日から始まるセプテンバーセールに上場する馬の検査が7月17日に行われた。まず、マネージャーの Ian と私でプレーン管を2本ずつ採血していった。この血液を使用してハグヤードにて伝貧検査（コギンズテスト）が行われるとのことである。2頭ほどうるさくて採血させない馬がいたが、肩を取って採血した。治療の際の保定は、肩取り⇒鼻捻子⇒耳捻子と日本と同じである。なお、Ian は注射をどこかの学校で習ったわけではなく、職場で先輩マネージャーから教わったそうである。彼にとってダービーダンとは3つ目の職場で、前職のテイラーメイドファームで現在 Polo Green Stable を開業している日本人・新木信隆氏と一緒に働いていたそうだ。

同じ日の午後には Dr. Luke Fallon がアシスタントと来て、馬の特徴を記載していった（白徴など）。



伝貧検査用の採血



うるさい馬は肩取り

また、8月6日にハグヤードの別の獣医師が来てライノウイルス感染症とウエストナイルウイルス感染症の予防接種を行った。予防接種歴などは、日本の健康手帳に相当する馬

3. 中期育成およびセールス・プレップ

毎のパスポートに記載される。また、競走馬として登録された後、上唇に入れ墨を入れる処置がなされる。

レポジトリーの検査は8月25日より開始された。X線検査は1日7頭程度のペースで進められた。内視鏡検査で異常が見つかった場合、鍼治療もしくはThroat Spray およびドキシサイクリンといった内服薬による治療が行われた。



予防接種



X線検査



内視鏡検査



鍼治療



Throat Spray



ドキシサイクリン（抗菌薬）

・日常診療と常備薬

米国の牧場では日常において薬剤を使用することに全く抵抗がなく、ほんの少しの症状でも躊躇なく薬剤を使用していた。この考えはヒトに対しても同様で、米国では24時間営業のスーパーマーケットで日本では医師の処方箋が必要な薬剤も容易に手に入れることができる。また、馬具屋には馬用の薬品や器材が売られており、簡単に入手することができる。各厩舎の Tack Room（本来は馬具置き場という意味）には常備薬および包帯などの医療用器材がずらりと並んでいた。とても全てを紹介するのは不可能であるが、使用されている現場を見た薬について簡単に紹介する。



Colt Barn の Tack Room



7 Stall Barn の Tack Room

また、これは治療という訳ではないが、サルトガセールやセプテンバーセールの Book1 および Book2 に上場されるような特に高値での取引が期待される馬については「Re-Borne」というカルシウムの液体のサプリメントが与えられた（1日1回 10ml 経口投与）。また、発咳を呈する馬にはベンチプルミン・シロップが与えられた（1日1回 6ml 経口投与）。

軽度な腕節の骨端炎（橈骨遠位の骨端炎）にはアップタイトが塗られ、そのまま放牧されていた。ちなみに、英語で“Mud”（泥を意味する）と呼ばれていた。腕節は“Knee”（ひざ）と呼ばれているので、“Mud on both knees”という表現になる。



アップタイト



塗られた状態で放牧

繫輝（heel）には消毒薬の軟膏“Dew Poisoning”が塗られ、そのまま放牧されていた。内容は日本のオロナイン軟膏とほぼ同一である。そもそも、こちらでは繫輝を発症する馬が少なかった。早朝の集牧時に放牧地を歩くと靴がびしょり濡れるぐらい朝露があるのにもかかわらず、である。トリミングのタイミングをぎりぎりまで遅くして、基本的に距毛が残っている状態で放牧に出されているのであるが、それだけで繫輝を防げているとの到底思えない。やはり日本と比較して雨が少ないことが一番の要因であろう。重症化して包帯を巻いたり、放牧を中止しなくてはならなくなるような馬は1頭もいなかった。白い肢に発症しやすく、そしてそれを皆が認識しているのは同じであった。なお、軟膏を塗る際にはなるべくかさぶたをはぐように指示された。



繫輝用軟膏「Dew Poisoning」

シェッドローに出して塗る

獣医師を呼ぶほどではない軽度な傷には同じく消毒薬の軟膏“Corona Ointment”が塗られていた。Corona といえばメキシコ人に大人気のビールの名称と同じであるので、実際に使用するメキシコ人厩務員たちのウケを狙ったネーミングなのかもしれない。Corona には軟膏だけでなくシャンプーなどもあり、シリーズ化されていた。成分はやはり日本のオロナイン軟膏とほぼ同一であった。獣医師である私でも放っておくようなごく軽度な傷でも、彼らが見つけるととにかく何らかの処置をしないと気が済まないようであった。

駆虫剤は、セリに上場する馬（毎日集牧する馬）については「Panacur」というフェンベンダゾール製剤を5日間連続で、1日1回20ml経口投与していた。セリに上場しない馬（毎日集牧しない馬）については「Zimecterin Gold」という日本のエクイバラン・ゴールドと全く同じイベルメクチンとプラジカンテルの合剤を1本経口投与していた。駆虫の頻度に関しては2か月に1回行っているとのことである。糞便の虫卵検査は行われていなかった。

3. 中期育成およびセールス・プレップ



Panacur



Zimecterin Gold

収牧時に時折跛行を呈した馬が認められたが、そのほとんどの原因が挫跖であった。①運動制限（夜間放牧→昼放牧→馬房内休養）、②消炎鎮痛剤 NSAIDs（バナミン or ビュート）、③湿布（アニマルインテックス＋ベトラップ＋Duct Tape）の組み合わせで対応していた。湿布は外れるまで巻かれっぱなしであった。Duct Tape が防水かつ頑丈であるので、上手く巻けるとヒトが外さない限り巻き付いていた。



Duct Tape



あらかじめ蹄底に合わせておく

3. 中期育成およびセールス・プレップ



まずベトラップを巻く



最後に Duct Tape を巻く



蹄湿布



巻かれたまま放牧

虫刺されによるアレルギー反応でできた丘疹は hives と呼ばれ、ひどいものはコルチコステロイドが投与された（デキサメタゾン を 3ml 静脈内投与）。軽度なものは硫黄が主成分の製剤「Lime Sulphur」（日本の「ムトウハップ」と同じ臭いがする）がスプレーされた。



虫刺されによるアレルギー反応でできた丘疹“hives”

3. 中期育成およびセールス・プレップ



硫黄製剤「Lime Sulphur」（日本の「ムトウハップ」と同じ臭い）

新入厩の牝馬で、陰部にダニ（tick）が寄生している馬がいた。様々な感染症を媒介するので、非常に嫌われている。この馬はオハイオ州から来た馬であった。ダービーダンファームでは収牧後ダニが寄生している馬を見なかったため、ダニは撲滅されているようであった。日本のように放牧地内で鹿を見なかったことも影響しているだろう。ケンタッキーの牧場は基本的にまず牧場全体が牧柵で囲まれており、放牧地にはさらに牧柵がある。なので、フェンス式の牧柵を使用していなくても鹿のような大型の野生動物が放牧地に侵入するのは困難な仕組みになっていた。



新入厩の牝馬の陰部に寄生していたダニ

セリに上場しない、24 時間放牧の馬の肢に馬バエの卵が寄生していたことがあった。接着力が非常に強く、軽石のようなもので擦るか、もしくは毛を切らないと除去することができなかった。なお、この軽石は要するに馬の体毛をカットする効果があるため、日焼けした馬の体毛がグルーミングだけではどうしても間に合わない時に使用することがあるとのことであった。

3. 中期育成およびセールス・プレップ



馬バエの卵



除去用の軽石

一度だけよだれ病を発症している馬を見た。日本と同じくクローバーのカビ毒が原因と考えられており、特に気にしていなかった。治療も行われなかった。



よだれ病

治療という訳ではないが、頻繁に寝違える馬については、馬房内にタイヤが置かれた。その後もしばしば寝違えていたことから、効果は薄いと思われた。「寝違え予防用の板を壁に貼ったりはしないのか？」と尋ねたが、「そういう方法があるのは知っているし、スリーチムニーズの種牡馬厩舎はそのような処置がなされている。もう少し様子を見る。」との返答であった。



寝違い予防用のタイヤ

・症例

<類皮嚢胞>

7月14日、ハグヤードの Dr. Fallon が来て、1歳馬の背中の正中線にできた類皮嚢胞を切除していた。ブレーキングが始まる前の今時期に切除するのが米国では普通であるらしい。イソジンでスクラブした後、メスで切開し、毛玉を摘出し、縫合していた。通常どおり放牧に出され、1週間後に抜糸された。全く問題なかった。



類皮嚢胞を切除



毛玉を摘出



摘出された毛玉

縫合（矢印）

<ウォブラー症候群>

詳しい経過はわからないが、ハグヤードの獣医師によりウォブラー症候群で予後不良と診断され、安楽殺処分になった1歳馬もいた。ペントバルビタール製剤を100ml 静脈内投与（78mg/kg）していた。剖検は行われなかった。



ウォブラーで安楽殺

ペントバルビタール製剤

<小腸捻転>

小腸捻転により開腹手術を受けた繁殖牝馬もイヤリング部門で管理していた。これは7 Stall Barnの馬房が470cm×470cmと広く、舎飼に適しているのと、小パドックを多数持っているためである（繁殖部門は基本的に大放牧地のみ）。術後の投薬は、抗菌薬（バイトリル、経口投与）、NSAIDs（パナミン静脈内投与）、乳酸菌製剤（経口投与）、さらに妊娠馬であるため黄体ホルモン製剤（レギュメイト、経口投与）の4種類であった。また、術創を毎日アルコール消毒していた。パドック放牧時には腹圧がかかるとの理由で腹帯が装着された。

3. 中期育成およびセールス・プレップ



術後の投薬

術創は毎日アルコール消毒



パドック放牧時には腹帯装着

<角膜潰瘍>

私がサラトガへ行っている間に、1頭の1歳馬が角膜潰瘍を罹患していた。2日間牧場で治療し様子を見たが改善しないため、ハグヤードに入院したとのこと。退院後は4種類（アトロピン、ネオマイシン&ポリミキシンB、シプロフロキサシン、Hypromellose）の眼軟膏を使用していた。眼帯は使用せず、昼間にパドック放牧がなされた。



角膜潰瘍の症例（退院後）



4 種類の眼軟膏

<飛節炎>

2歳の競走馬の右飛節の関節液が増量しているという理由で、ハグヤードの獣医師の診断を受けるため一時的にダービーダンに預託された馬もいた。Dr. Fallon がX線撮影を行ったがOCDなどの所見が認められなかったため、とりあえず関節液を吸引し、プレドニゾロンのデポ剤を注入することになった。細菌感染予防処置として、関節液吸引前にイソジンで念入りにスクラブされ、抗菌薬アミカシンも関節内に注入された。処置後はエラスチコンを用いた包帯がなされ。しばらく舎飼となった。



関節液の吸引



エラスチコンを用いた包帯

・馬輸送

ダービーダンでは普段は革の無口頭絡を使用しているが、そのままだと滑りが悪くて輸送で擦り傷ができやすらしく、輸送の前には必ず包帯で無口頭絡を巻く処置を施していた。また、落鉄予防のため装蹄している両前肢にワンコを装着していた。

3. 中期育成およびセールス・プレップ



輸送時は革頭絡に包帯を巻く

アメリカでは様々なタイプの馬運車があるが、ピックアップトラックで牽引するトレーラータイプが最も一般的であった。基本的に馬はロープで繋がれたりせず、フリーである。床には麦稈が敷かれ、馬房と同様にしていた。3頭積みのトレーラーが多かった（一番前は荷物）。大型の馬運車に積み替えるのではなく、サラトガまでこのトレーラーのまま行くとのことであった。



馬運車

・GPS 装置を用いた放牧地での運動量調査

GPS 装置（Transystem 社、747ProS）を用いてダービーダンファームの1歳馬の放牧地での運動量を調査したので、概要を報告する。



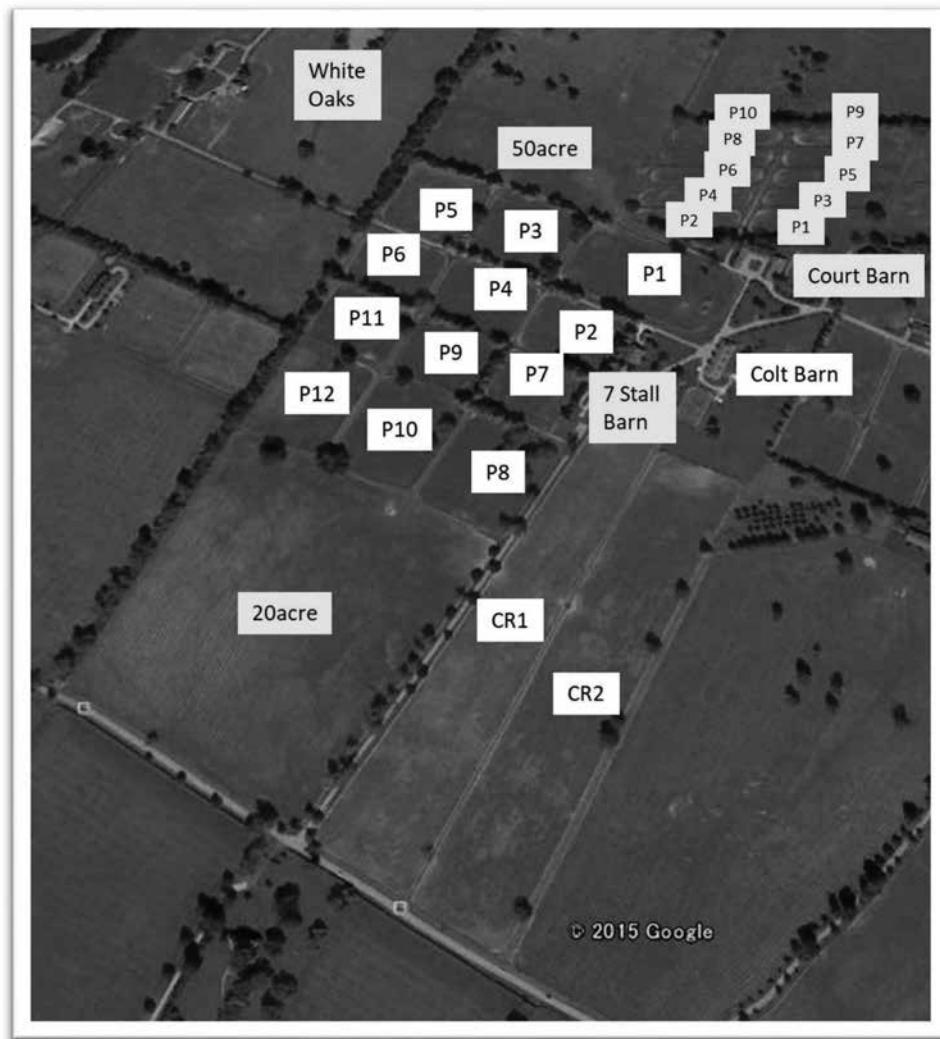
GPS 装置



無口頭絡に装着

・イヤリング部門の放牧地

内容が重複するが、イヤリング部門に附属している放牧地を図に示す。まず、Colt Barn には 1 区画約 0.7ha の正方形の中パドックが 10 面あり、他に CR1 および CR2 (CR とは Colt Run の略) と呼ばれる約 4.0ha の長方形の放牧地が 2 面ある。次に、Court Barn には 1 区画約 0.3ha の長方形の小パドックが 10 面あり、他に 20acre と呼ばれる約 8.0ha の正方形の放牧地が 1 面ある。基本的に、牡は咬んで傷つけ合うとの理由で 1 頭ずつパドックを使用し、牝は広い放牧地に 4~6 頭で放牧されていた。7 Stall Barn には基本的に休養馬が入るため、7 Stall Barn の馬は馬房内休養 (Stall Rest) かもしくは Colt Barn に附属する P2 辺りのパドックを使用していた。ちなみに、放牧地の広さの基準は「1 acre, 1 horse」。すなわち、放牧地 1 エーカー (=約 0.4ha) につき馬 1 頭が目安であった。



イヤリング部門放牧地

<結果>

とりあえずやみくもにデータを集めていたのだが、その中である傾向があることに気が付いた。パドック放牧の馬の運動量が少ないのは予想したとおりだったが、大放牧地に放されている牝馬において、CR1 や CR2 といった細長い放牧地に放されている群より、ほぼ正方形の 20acre に放されている群の方が移動距離が多かったのだ。そこで、1 歳馬を下記の 4 群に分け、それぞれ 5 頭ずつデータを取って比較した。

- ①パドックに放牧されている群
 - ②細長い放牧地に放牧されている群
 - ③正方形の放牧地に放牧されている群
 - ④セリに上場されない 24 時間放牧の群
- まず、各群のデータを表 1～4 に示す。

3. 中期育成およびセールス・プレップ

パドック	性別	放牧時間	移動距離 (km)
Yearling A	めす	14	3.3
Yearling B	牡	12	3.4
Yearling C	牡	12	3.5
Yearling D	牡	13	3.8
Yearling E	牡	13	4.1

①パドックに放牧されている群の1日の移動距離

細長い放牧地	性別	放牧時間	移動距離 (km)
Yearling F	めす	13	5.0
Yearling G	めす	13	5.3
Yearling H	めす	13	7.1
Yearling I	めす	13	8.6
Yearling J	めす	13	8.7

②細長い放牧地に放牧されている群の1日の移動距離

正方形の放牧地	性別	放牧時間	移動距離 (km)
Yearling K	めす	13	7.3
Yearling L	めす	13	8.3
Yearling M	めす	13	9.1
Yearling N	めす	13	9.8
Yearling O	めす	13	9.9

③正方形の放牧地に放牧されている群の1日の移動距離

大放牧地（非上場馬）	性別	放牧時間	移動距離 (km)
Yearling P	めす	23	8.4
Yearling Q	めす	20	8.5
Yearling R	めす	23	8.6
Yearling S	牡	23	8.7
Yearling T	牡	22	11.6

④セリに上場されない24時間放牧の群の1日の移動距離

以上4群のデータをまとめたものが、下記。データは全て上段に中央値、下段に最小値と最大値を示してある。統計学的にまず同一条件である②と③の間に有意差が認められた（マン・ホイットニ検定、 $p < 0.05$ ）。また、単位時間当たりの移動距離に換算すると①と②、①

と③、③と④の間にそれぞれ有意差が認められた(多重比較検定 Tukey-Kramer 法、 $p<0.01$)。

群	調査頭数	放牧時間	移動距離 (km)
①パドック	5 頭 (牡 4 めす 1)	13 (12-14)	3.5 (3.3-4.1)
②細長い放牧地	5 頭 (全頭めす)	13 (13-13)	7.1 (5.0-8.7)
③正方形の放牧地	5 頭 (全頭めす)	13 (13-13)	9.1 (7.3-9.9)
④大放牧地 (非上場馬)	5 頭 (牡 2 めす 3)	22 (20-23)	8.6 (8.4-11.6)

ダービーダン 1 歳馬の 1 日の移動距離のまとめ

このことから、放牧時間を 24 時間から 13 時間程度の夜間放牧に短縮しても、十分な広さで正方形の放牧地を使用すれば、放牧地での運動量は確保できる可能性が示唆された。このことはやり方次第では馬の成長を妨げることなくセリに向けた準備を行える可能性を示した非常に重要なデータだと思われた。

・まとめ) ダービーダンファームにおける中期育成およびセールス・プレップ

冒頭での話と重複するが、まずダービーダンのセールス・プレップについての考え方がそもそも日本の多くのコンサイナーと異なっていた。すなわち、ダービーダンではセールス・プレップを「中期育成の“延長”」と考えて、なるべく自然な状態で管理し、成長を促すことを最優先していた。セリ用のパンフレットにも「(前略) the horses have been raised and prepped with the desire to produce a ‘racehorse’, not just a ‘sales’ horse.」と明記されており、長い歴史と実績のあるダービーダンファームの強いポリシーを感じた。セールス・プレップは売却に関して不利を受けないよう見た目をきれいにするために日焼けを防ぐなどの処置が行われているだけで、あくまでも彼らの目線は競走馬としてその馬が成功することに向いていた。

米国でも昼夜放牧を中止し、引き運動を行い、さらに体形の欠点を隠し見た目を立派に見せるため成長に必要な量以上の濃厚飼料を給餌し、馬を太らせているコンサイナーが存在するようだ。しかし、ダービーダンでは馬を太らせるような処置は一切行われず、むしろ放牧地で牧草を食べ過ぎて BCS が 5.0 を超えているような馬には濃厚飼料の量を減らし、口カゴの装着まで行っていた。

さらに、GPS 装置を用いた放牧地での運動量調査から、放牧時間を 24 時間から 13 時間程度の夜間放牧に短縮しても、十分な広さで正方形の放牧地を使用すれば、放牧地での運動量は確保できる可能性が示唆された。このことはやり方次第では馬の成長を妨げることなくセリに向けた準備を行える可能性を示した非常に重要なデータだと思われた。

4. ブレーキング

ウインスターファーム (WinStar Farm)

ダービーダンファームは育成部門を持っていないため、2015 年 9 月（セプテンバーセール終了後）から 12 月までウインスターファームにてブレーキングの研修を受けた。

・ Hopewell Department

ウインスターファームのブレーキング部門が Hopewell Department である。研修に来る前、1 歳馬のブレーキングは周回コースおよび米国では珍しい坂路コースのあるトレーニング部門 (Training Barn) で行われているものと思っていたが、別であった。2 年前に Hopewell Farm という牧場を買収し改修した施設であるため、その名前が残っている。施設としては放牧地のほか、厩舎が 2 棟、ラウンドペン(直径約 16m)、屋根付きの角馬場(arena、縦 60m×横 24m)、ウォーキングマシン、馴致用ゲートがあり、オールウェザー馬場が使用されていた。この施設を利用するのが今年 2 シーズン目とのこと。



角馬場 (左) および Barn1 (右)

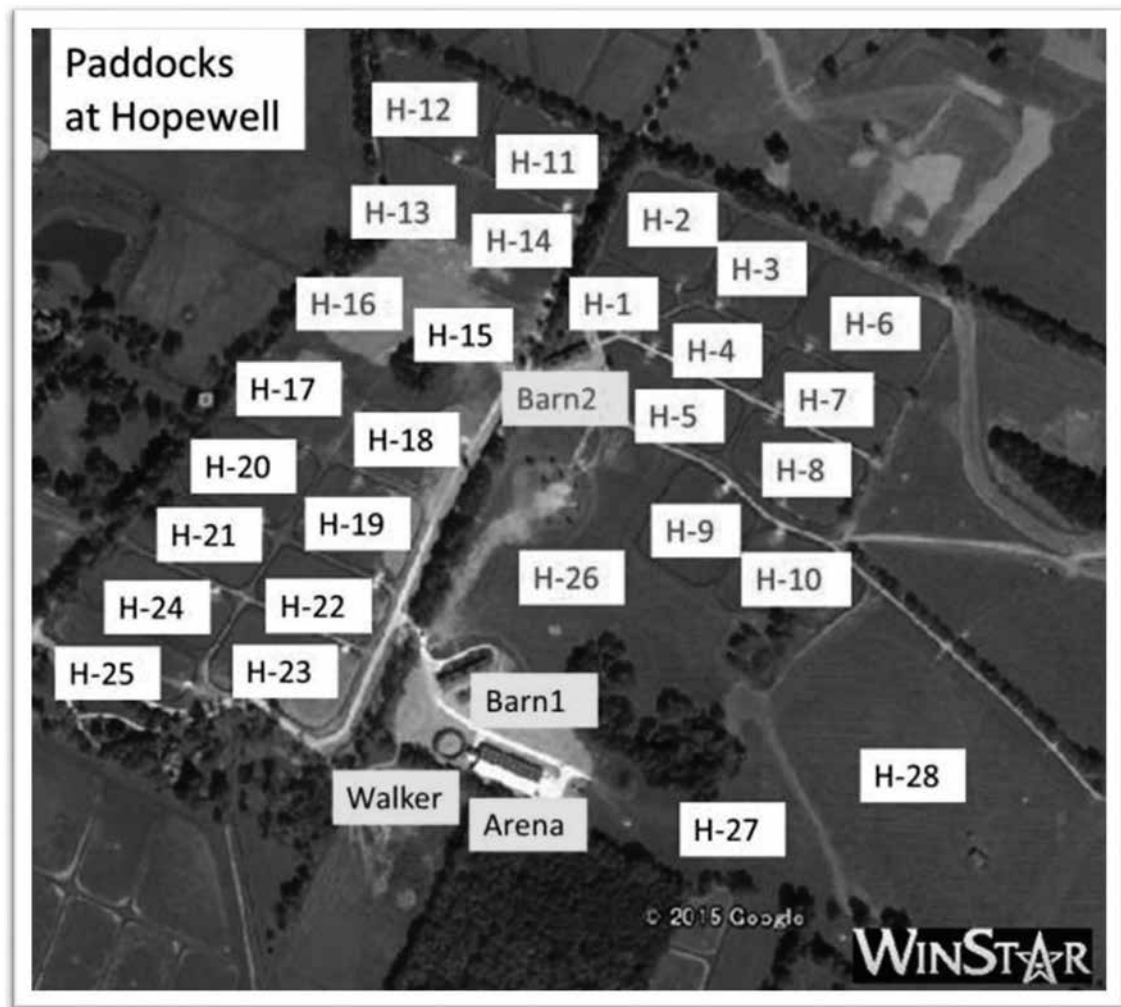
Barn2

騎乗スタッフ (ライダー) が米国人 4 名、厩務員 (グルーム) がメキシコ人 6 名である。ブレーキング・マネージャーの Pierce Buckingham がサウスカロライナの牧場 (Darley Aiken Training Track Stable) から移籍して働き始めたばかりだったので、ゼネラル・マネージャーの David Hanley が時々監督に来て、アドバイスしていた。

1 歳馬は 2 群に分けられ、1 群 (全て牡、20 頭) は 9 月 9 日から、2 群 (牡 17 頭、めす 8 頭の計 25 頭) はちょうど私が研修を開始した 9 月 28 日からブレーキングが開始された。

タイムスケジュールは、朝 7 時に厩舎 (Barn1) に集合し、午前中は 2 群のブレーキング、概ね 12 時から 13 時の昼食休憩をとり、午後は 1 群のブレーキング (騎乗運動)、16 時に解散という流れであった。土曜日の午後および日曜日は騎乗を行っていなかった。馬は基本的にほぼ 24 時間放牧されており、牡は 0.5~1ha のパドックに 2 頭ずつ、めすは約 8ha の大放牧地に 8 頭で放牧されていた。グルームはひたすら集牧、手入れ (ブラシ掛け、裏掘

り、検温)、そして騎乗後放牧を繰り返し、ライダーはひたすらブレーキング（騎乗）するだけである。マネージャーは集牧時に下肢部を触ってチェックし、その他の時間はブレーキングの様子を見ていた。朝飼は、7時から9時の間に馬が馬房にいれば馬房で、馬が放牧地にいれば放牧地で与えられる。夕飼は15時以降に全て放牧地で与えられていた。飼料は日高育成牧場で用いられている Stamm30 のメーカーである Hallway Feeds 社にオリジナル飼料（スウィートフィード）を作らせており、中身は企業秘密であった。これを1頭当たり朝夕ともに1.5スクープ（約2kg）ずつ与えていた。放牧地では飼桶を牧柵に掛けて使用するか、もしくは直接地面に撒いて与えていた。



Hopewell Department 放牧地（めすは H-28、牡はその他のパドックを使用）



ウインスター・オリジナル飼料（Hallway Feeds 社製）



放牧地での飼付（左：飼桶使用、右：地面に直接撒く）

厩舎の構造を図に示す。図があまりにも縦長になってしまうため、便宜上馬房を長方形に描いたが、実際はほぼ正方形である。大きさは縦 3.35m×横 3.55m。敷料は自家製のケンタッキーブルーグラスの乾草を使用していた。食用の乾草はオハイオ州産のルーサン（アルファルファ）を使用していた。馬房は 2 頭でシェアしていた。馬の頭数に対して馬房の数が少ない（全頭分の馬房があるわけではない）からである。馬は基本的にブレーキングの前に馬房に引き付けられ、終了後直ちに放牧に出されるため、それで全く問題はない。敷料もほとんど汚れないため、毎日ボロを拾うだけであった。毎日の作業としてはその他、全ての調教が終わった後乾草を足し、水桶の水を捨てる。水は毎日集牧前に入れていた。

馬房		馬房
馬房		馬房
馬房		馬房
馬房		馬房
馬房		馬房
馬房		馬房
飼料庫 馬具庫		居室
馬房		洗い場
馬房		馬房
馬房		馬房
馬房		馬房
馬房		馬房
馬房		馬房

厩舎の構造（実際の馬房はほぼ正方形）



敷料は自家製乾草



食用の乾草はルーサン

放牧地は新しく造成されたばかりということもあり、非常にきれいに管理されており、研修に行った時期にはケンタッキーブルーグラスのみが生い茂り、雑草はほぼ見かけなかった。実際は Horse Pasture Mix という商品名の種を使用しており（後刻インターネットで調べたが複数のメーカーが同様の製品を出しており、どのメーカーのものかはわからなかった）、ケンタッキーブルーグラス、クローバー、ライグラスおよびオーチャードの4種の牧草の混播である。David Hanley 氏によると、この種の特徴は季節に応じて別の種類の牧草が常に生い茂ってくれることだそうである。実際、研修の後半にはブルーグラスが枯れてきたが、代わりにオーチャードが生えてきて緑を保っていた。



ほぼブルーグラスのみの草地

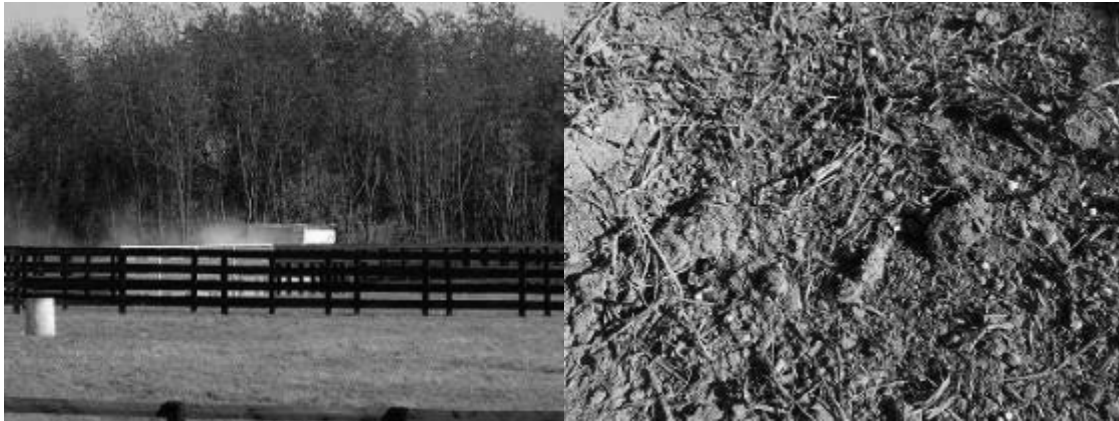
枯れるとオーチャードが生える

放牧地の整備には非常に力を入れており、研修中にも堆肥の散布やライミング（石灰の散布）を行っていた。草丈は20～25cmと長めに掃除刈りされていた。堆肥はいわゆる野積み状態で、右の麦稈とボロの状態から左の完熟堆肥の状態まで、順番に置き管理されていた。ライミングはダービーダンと同じく、業者のトラックが直接放牧地に入って石灰を散布していた。散布している石灰はケンタッキーのライムストーンを粒状に切り出しているものとのこと。



堆肥置場（左が完熟、右が未熟）

堆肥の散布



ライミング (石灰の散布)

石灰は粒状

・ウインスターファームでのブレーキング

さて本題に入るが、まず JRA 育成牧場と異なる点を列挙する。

- 1) 24 時間放牧を継続したままブレーキングを行う
- 2) ストラップ馴致は行わず、ローラーを馬房内で1日目に装着する
- 3) 1 日目に馬房内で騎乗する
- 4) ダブルレーンによるランジングおよびドライビングは行わない
- 5) 1 週目は馬房内のみ、2～4 週目はペンおよび角馬場、5 週目以降は放牧地で騎乗
- 6) アメリカ式の誘導馬に慣らすため、2 頭併走の練習を行う

これだけ読むとかなり野蛮な(?) 印象を受けるかもしれないが、実際はどの馬もおとなしく、特に大きなトラブルなくブレーキングが進められていた。以下、具体的に解説する。

・ Week1

1 週目は全て馬房内で行われていた。基本的に1頭の馬につきライダー1人でブレーキングを行い、介助が必要な時はライダーが別のライダーもしくはグルームに声を掛けて援助を求めている。基本的に1頭にかかる時間は15分程度であり、何か問題があった場合はその課題をクリアした時点でその日は終了。先に進むのは翌日以降にしていた。この時点ではまだ誰がどの馬に乗るといった担当は決められておらず、1頭ずつブレーキングの内容をメモしておいて、翌日の調教内容の決定に繋げていた。

Day1

馬装は頭絡をいつも使っている革の無口からヒモでできた無口に変える。馬に“頭突き”された場合、安全だからである。無口にナイロンの引き手(米国では lead shank と呼ぶが本著では以後リードと呼ばせていただく)を1本のみ装着する。ライダーはヘルメットをかぶらず、ボディプロテクターもなし。キュロットではなくジーンズにジョッパーブーツもしくは

はウエスタンブーツを履いていた。

①まずは常歩で馬房内回転がスムーズにできるように教える。左手前で行った後、右手前でも同様に行く。馬が動かない場合は、リードの余端で馬のお尻をたたく。②次にローラーを装着する。まず緩めに装着した状態で同じく馬房内回転をし、次にきつく締めて馬房内回転。これも左手前で行った後、右手前でも同様に行く。馬がかぶった場合、ライダーは馬房から出て馬を馬房内に放置する。そして、馬が落ち着いたところでライダーが再び馬房に入り、ローラーを外し、鞍下のみ載せて馬房内回転をする。かぶった馬はここで終了する。ちなみに2群25頭中、かぶった馬は1頭だけであった。③リードの端を無口に繋いで、手綱のようにする。ローラーを外す。この状態で馬房内回転をする。④1～2回横乗りをしてから、跨る。そして馬房内回転。馬が動かない場合は助手（他のライダー）に引いてもらう。馬が跳ねてライダーが落馬した場合は、横乗りまでで終了する。ちなみに2群25頭中、落馬させた馬は1頭だけであった。人を乗せた状態でスムーズに馬房内回転ができるようになれば初日は終了である。



ヒモ無口に交換



リードで馬房内回転



ローラー装着

かぶった場合は馬房内に放置



初日に跨る



助手に引いてもらう

Day2

馬装は革の無口の上からヒモの無口を付け、リードを手綱のように無口に繋ぐ。そして分厚い羊毛製の鞍下とローラーをいきなり装着する。ライダーはヘルメットもボディプロテクターもなしである。①まずは常歩で馬房内回転。左手前で行った後、右手前でも同様に行う。その後ローラーをきつく締めて、また馬房内回転。②鞍下とローラーを外さずそのまま騎乗し、馬房内回転。左手前の後、右手前。2日目のポイントは鞍下とローラーを装着したまま騎乗すること。その後の鞍の装着に備える。



鞍下とローラーを付けて回転



そのまま騎乗

Day3

この日から鞍を付ける。馬装は革の無口の上からヒモの無口を付け、リードを手綱のように無口に繋ぐ。そして分厚い羊毛製の鞍下の上に鞍を載せる。鞍には鐙が付いており、最初は上げておく。鞍は競馬用のいわゆる調教鞍であるが、鐙はいわゆる安全鐙ではなく乗馬用のものであった。ライダーはここでようやくヘルメットをかぶる。

①まずは常歩で馬房内回転。左手前で行った後、右手前でも同様に行う。②その後、鐙を下して、すぐに騎乗する。そして馬房内回転。左手前の後、右手前。鐙に反応する馬につい

ては、鐙を下して乗らずにそのまま馬房内回転をし、この日はここで終了する。騎乗して跳ねた馬については、落ち着くまで何もしないで待つ。そして落ち着いたら馬房内回転を行い、スムーズに回転できたら終了する。



装鞍して馬房内回転

鐙を下して、すぐに騎乗

Day4

基本的に Day3 と同じ。馬によっては騎乗し、シェッドローを歩く。鞭に慣らす。

Day5

この日からハミ（頭絡）を付ける。ハミはライダーによって異なり、Toby と Sarah はエッグビッド、Heather は枝バミを使用していた。馬装は革の無口の上からハミ付きの頭絡（ナイロン製）、手綱は太いゴム手綱である。そして分厚い羊毛製の鞍下の上に鞍を載せる。ライダーはヘルメットのみでボディプロテクターは着ていなかった。鞭を持つ。

①騎乗する前に引き馬で馬房内回転（左→右）。②その後騎乗し、馬房内回転（左→右）。



馬装して馬房内回転

騎乗して馬房内回転

Day6

厩舎の移動を行ったため、この日は騎乗なし。

・ Week2

2 週目からラウンドペンおよび角馬場が使用された。基本的に 1 頭当たりの騎乗時間は 15 分程度であり、負荷のかけ過ぎに注意していた。また、担当馬が決まり、同じライダーが継続して同じ馬に乗っていた。馬装は革の無口の上からハミ付きの頭絡（ナイロン製）をつけ、革製のネックストラップを使用し（マルタンは使用しない）、調教鞍および羊毛製の腹帯カバーを使用していた。ライダーはヘルメット、ボディプロテクターを着用し、鞭を手につく。馬装およびライダーの装備ともに以後変化なく同一である。

Day7

馬房内で馬装。①引き馬でラウンドペンまで連れて行き、②我々が使用しているような長い調馬策（ロングレーン）には交換せずリードのままランジング。当然、非常に小回りになるが（ラウンドペンであるが外壁を利用しない）、1 週間馬房内回転を続けていた成果か比較的スムーズに回れる馬が多い。ランジングは速歩までで、駈歩は行わない。③その後騎乗し、常歩でラウンドペンの外壁沿いの蹄跡を歩いて終了。



リードのままランジング



外壁沿いの蹄跡を歩いて終了

Day8

Day7 と同一の内容+ラウンドペンの外壁沿いの蹄跡を速歩して終了。

Day9

馬房内で馬装。①引き馬で角馬場まで連れて行き、②リードのままランジング。上手く回れない馬は隅角の壁を利用する。ランジングは速歩までで、駈歩は行わない。③その後騎乗し、この日は常歩で角馬場の外壁沿いの蹄跡を歩いて終了。



リードのままランジング



外壁沿いの蹄跡を歩いて終了

Day10

Day9 の内容＋角馬場の外壁沿いの蹄跡を速歩。その後、外乗へ（厩舎周辺）。



騎乗後に厩舎周辺を外乗

Day11

馬房内で馬装。①騎乗して角馬場まで行き、②常歩を少ししたあと、速歩でまず外壁沿いの蹄跡を進み、輪乗りおよび8の字乗りを行う。その後、外乗へ（厩舎周辺）。



速歩で外壁沿いの蹄跡を進む



輪乗りおよび8の字乗りを行う

Day12

内容は Day11 とほぼ同じだが、角馬場での運動は 3 頭一緒に部班のように行う。

・ Week3

馬房内で馬装をし、シェッドローですぐ騎乗もしくは角馬場でランジングをした後に騎乗。まず外壁沿いの蹄跡を常歩および停止の指示を繰り返して、移行を教える。その後、速歩で外壁沿いの蹄跡を進み、輪乗りを入れたり、蛇乗りをしたり、8 の字乗りをしたりしてライダーが内方手綱を使った場合は内側に曲がらなければならないことを馬に根気強く教える。ドライビングを行っていないせいであろう、時々外に大きくふくれる馬が多いが、ライダーが騎乗した状態でとにかく根気強く教えていた。騎乗した状態で上手く曲がれない馬については騎乗前にランジングを行っていたが、短いリードのまま角馬場で（外壁を利用せず）行うため結果的に内方のハミを中心に回ることを覚えるようになる。基本的に角馬場での 1 頭当たりの騎乗時間は 15 分程度。



停止を繰り返して、移行を教える

時々外にふくれる馬が多い

・ Week4

まず馬房内で馬装をし、シェッドローもしくは角馬場で騎乗。2～3 頭で常歩を少ししたあと、速歩でまず外壁沿いの蹄跡を進み、輪乗りおよび 8 の字乗りを行う。その後、駈歩で外壁沿いの蹄跡を進む。駈歩の手前が違ったら、隅角を利用してゆっくり直す（決して焦らない）。駈歩はしっかり座って、右手でネクストラップをつかむ。左手には鞭を持つ。基本的に角馬場での 1 頭当たりの騎乗時間は 15 分程度。その後、ゲートを通り（逆からも入る）、外乗へ（厩舎周辺）。馬場入りやゲート入りを告げた時は人が先に歩き（引きはしない）、その後を付いてこさせるという方法をとっていた。1 週間かけて徐々に角馬場内での駈歩のボリュームを増やし、速歩での輪乗りもきれいな図形を描けるように（しっかりとした内方姿勢がとれるように）調教していく。

練習用のゲートはクッションからクッションまでの横幅が 75cm の枠が 2 つあるもので、これは競馬場と同じサイズとのこと。競馬場と同じく、枠の左側にはゲートボーイが立つた

めのステップがある。角馬場での騎乗後に通過していたほか、牝馬に関しては朝の集牧時にも引き馬で通過していた。

そのほか、週の後半には誘導馬（リードポニー）が登場した。ポニーと呼ばれているが、ウインスターでは競走馬上がりのサラブレッド（6歳・せん）を使用していた。サラブレッドを使用する場合は競走馬としてはあまり活躍しなかった、おとなしい馬を選ぶのだそう。競馬場でもクォータホースやペイントホースに交じって意外とサラブレッドが使用されているとのことである。アメリカ式の誘導に慣らすため、2頭併せてポニーの騎乗者（マネージャーのPierce）が隣の馬を引く。またポニーがいない時も3頭併せて外・中・内と場所を変えて運動するなど、馬群に慣らす練習をしていた。



2頭で輪乗りおよび8の字乗り



ゲートを通過（逆から）



練習用のゲート（幅75cm）



集牧時にも引き馬で通過



ポニーの騎乗者が隣の馬を引く

3 頭併せて運動

・ Week5

まず馬房内で馬装をし、シェッドローで騎乗。角馬場ではなく、放牧地へ。4 頭で常歩を少ししたあと、速歩でまず外壁沿いの蹄跡を進み、輪乗りおよび 8 の字乗りを行う。その後、駈歩で同様の運動。全て含めて 15 分程度。その後、外乗へ（パドックとパドックの間の馬道および芝生の上を歩いて、厩舎に戻る）。

放牧地で騎乗することについて、Pierce に訊ねたところ、不整地をあえて走らせることで、馬が足元に注意するようになるとのことであつた。全く平らな馬場ばかりでトレーニングしていると、注意しなくなるとのことである。この時期の馬には不整地で人を乗せてバランスを取ることは難しいことらしく、時々バランスを崩してつまずく馬がいた。この状態から、不整地で人を乗せてもバランスを取りながら走れるだけの筋力を養成していくのである。さらに言えば、基本的に手綱は張らずルーズな状態である。曲がりたい時だけ内側の手綱を引いて張る。馬にとってはハミでバランスを取ることができないので、なおさらきついはずである。



5 週目から放牧地で乗る

基本的に手綱はルーズ

・ Week6

まず馬房内で馬装をし、シェッドローで騎乗。4頭で放牧地へ。2頭ずつのペアに分かれ、片方のペアは左回り、もう片方のペアは右回りで速歩開始。2頭は距離を空けずぴったり併走する。これは将来競馬場へ行った時のリードポニーの併走に慣らすことを目的に行っている。速歩で放牧地の外壁沿いの蹄跡を1周した後、駈歩で同じく1周、その後手前を変えて速歩1周、駈歩1周。全て含めて30分程度。馬にとってかなり負担がかかるため、20頭中12頭しか乗らない。馬の疲労度を見て、8頭は休ませる。



2頭ずつのペアで乗る

2頭はぴったり併走

・ Week7

まず馬房内で馬装をし、シェッドローで騎乗。4頭およびリードポニーで広い放牧地（40acre）へ行き、外周を常歩および速歩。騎乗時間は30分程度。今週は馬をリフレッシュさせる感じ。先週と同じく20頭中12頭しか乗らず、8頭は休ませていた。



広い放牧地（40acre）へ行き、外周を常歩および速歩

・ 番外編）ドライビング

疼痛を伴う真菌性皮膚炎のため装鞍できない馬に対し、Heatherがドライビングを行ったことがあった。普段全く行っていないのかかわらず、非常に高度な技術を持っていたのに

大変驚いた。内方を中心に回転させ、速歩でもスムーズに手前変換を行っていた。普段ドライビングを行っていないだけで、内方を中心に回転させるという考え方、馬の作り方は同じであることを実感できた。彼らは日頃ドライビングの代わりに馬房内回転と、短いリードでのランジングで馬に内方姿勢をとらせるトレーニングを行っているのである！

・ブレーキング全体を通して

まず 24 時間放牧を継続しながらブレーキングを開始することに関して。これは「馬が疲れていておとなしいから」という考えで行われているものではない（米国のライダーはまさに“怖いもの知らず”で、うるさい馬を全く恐れない）。まだこの時期の 1 歳馬は成長が見込めること、ブレーキングのストレスを放牧によって軽減できること、そしてこの方法（放牧しながらブレーキングを行う）はケンタッキーの長所である肥沃な土地があることを最大限に生かした方法だからこそ、ここウインスターファームではこういう方法を取り入れているのである。もう 1 つ、敷料の使用量の減少に伴うコストの削減を考える方もいらっしゃるかもしれないが、ウインスターでは放牧地の維持管理に莫大な費用（具体的にはわからないが、“クレイジーなくらい”と専属獣医師の Natanya Nieman は言っていた）をかけているのである。コストの削減は結果として多少はあるかもしれないが、決して“目的”ではなかった。

ウインスターのライダーたち、特に主力の Toby と Heather の 2 人は非常に高い運動能力と恐れを知らない勇猛果敢な性格を持ち、多くの経験から（理屈が説明できるかはともかく）正しい調教理論を身に付けており、そして馬が現在何を考えているのか状態把握する能力に長けていた。彼らが言うには、ブレーキングで大切なことはとにかく馬のテンションを上げないこと。テンションが上がったら、馬が落ち着くまで待つこと。ここはあくまでもトレーニング部門ではなく、ブレーキング部門であり、“人に騎乗されている状態が当たり前のことである（Ride is Off）”と馬に覚えさせるのが目標であると語っていた。そして印象的だったのが、馬がライダーの要求を受け入れた時、「OK」でもなく「All right」でもなく、「Thank you!!」と声を掛けていたことである。馬たちは人に乗られることを決して望んでいる訳ではないということを、彼らはきちんと認識しているのである。

ブレーキングとは、馬同士の関係を壊して（break）、人と馬との関係を作るものと教わっていたので、ここに来るまで“ブレーキングとは人と馬とが向き合うもの”という認識が自分の中にあった。しかし、ウインスターでのやり方を見ていると“ブレーキングとは人と馬とが同じ方向を向き、協力し合って進むもの”という認識が変わった。人は馬たちのストレスを最小限にすることを考え、馬の本来の飼い方である 24 時間放牧を継続し、ブレーキングを行う際のみ馬たちから“少しだけ人に協力してもらう時間”を借りるのであった。なお、米国では騎乗馴致のことをブレーキングというよりスターティング（starting）と呼ばれることが多い。“乗り始め”というイメージだろうか。

この牧場の放牧地にいる馬たちを見ていると、本当に幸せそうであった。ここに来るまで

は米国では 2 歳戦が日本以上に盛んに行われているため、てっきり早い内から強い調教を行っているものとばかり思っていた。ここではむしろ、騎乗時間は 15～30 分程度しかなく、しかも全頭毎日騎乗しているわけではなかった。ひょっとしたら早い内から強い調教を行うよりむしろ、このブレーキング時期に放牧地でじっくり成長を促すような飼い方をすることでかえって馬体の完成が早まり、結果として馬を早い時期から活躍させることに繋がるのではないかと、今までの考え方を 180 度転換する必要性に迫られた。



幸せそうな馬たち

肝心の調教理論自体に関して。ウインスターのライダーたちは日頃ドライビングを行わない代わりに馬房内回転と、短いリードでのランジングを根気強く行うことで馬に“正しい”内方姿勢（“円柱形”での内方姿勢）をとらせるトレーニングを行っていた。なぜ馬房の中でクルクル回すのか、ラウンドペンの全周を使わず短いレーンでクルクル回すのか、当初理解できていなかったが、幸いにも背中 of 皮膚病のため騎乗できない馬に Heather がドライビングを行っている場面を見ることができたので、その瞬間に「ああ、これは同じことなのだ！」と理解することができた。

さらに放牧地（不整地）での騎乗を繰り返すことによって、“肉体面”では“馬が人を乗せた状態のまま自分でバランスをとって走れる筋肉を作る”、そして“精神面”では“馬が人を乗せていることが当たり前”の状態であることを理解させることをブレーキングセッションでの目標としていた。“肉体面”について補足すると、ライダーは基本的にハミをあえて外した状態で騎乗し、その状態でも馬が自分でバランスをとれるように調教していった。当初ハミに依存していないとバランスが取れない、前のめりのバランスの馬もいたが、そういう馬は角馬場を出て放牧地で乗り始めると途端につまずくようになった。私を含めて日本の普通のライダーであれば怖くて余計ハミを持って、どんどん馬が前のめりのバランスになっていく悪循環にはまりそうなシチュエーションだが、彼らは笑いながら手綱を緩めて乗っていた。この辺り、日本と欧米でのライダーの技術以前の度胸面での大きな差を感じた。また、そもそもウエスタン馬術ではブリティッシュ馬術と異なりハミに頼らず乗るため、こ

の乗り方のベースとなっているものと考えられた。馬の“精神面”について補足すると、積極的に外乗に行き毎日違う場所を経験させ、“どんな場所でもライダーと一緒に大丈夫”という精神力を馬につけさせていた。日本（日高）と同じく、外乗中鹿などの野生動物が出てきたり車両が通りかかったりするものであるが、馬が飛んだり跳ねたりする場面は少なかった。これはおそらく、人の精神面（度胸）の問題であると思う。すなわち、ライダーが怖いもの知らずで何事にも動じなければ馬はそれほど驚かず早く冷静に戻る。これは私自身がへばいたため日本のライダーに強制することはできないが、おそらく日本のライダーと欧米のライダーの技量の差に繋がっているものと思われる。また、リードポニーに対する馴致も、日本では競馬には直接必要ないが、“馬群に慣らす”という点で有用であると思われる。

・米国におけるウインスター以外の牧場でのブレーキング

マネージャーの Pierce から古巣 Darley Aiken Training Track Stable（サウスカロライナ州、9月1日閉場）でのブレーキングはどのような方法であったが聞いてみたところ、ほとんど同じとのことであった。異なる点は厩舎に口の字型のシェッドローがあるため、Week1ではそこを常歩するのが加わること、角馬場がないため Week2 から放牧地で騎乗することの2点であった。パドックを2頭一緒に使うのも同じだそうだ。

・獣医療

ウインスターでは毎日騎乗前に検温を行っており、102° F（約 38.9°C）以上でマネージャーに報告する決まりとなっていた。発熱時の治療はたいてい経口のサルファ剤（Sulfamethoxazole and Trimethoprim Tablets）を1日2回12錠ずつ投与していた。

ブレーキングを始める前に、歯科処置を行っている。ウインスターには専属の獣医師が2名（両者とも女性）いるのだが、歯科処置はハグヤードから Dr. Smith が来て行っていた。内容は我々と同じく狼歯の抜歯および斜歯の整歯である。枡場は使わず馬房内で処置していた。デトミジンで鎮静、水で口腔内を洗浄した後、開口器を装着し、LED ライトを使ってまず口腔内を目視で確認する。馬の顎の下には人間用の松葉杖を台の代わりに使用していた。専用の台に比べて軽くて機動力が良いそうである。斜歯は電動歯鋸を使用して削っていた。狼歯はまず円形の刃が付いた狼歯抜糸用の鉗子を用いて歯肉に切れ込みを入れた後、半円形の刃が付いたエレベーターで狼歯周囲の歯肉を剥離して抜歯していた。



斜歯には電動歯鑷を使用

狼歯拔糸用の鉗子とエレベーター

ウインスターでは単に駆虫だけでなく、糞便の虫卵検査を行っていた。4 週間しかいなかったため駆虫および糞便検査の頻度は不明だが、駆虫は Quest Plus という商品（モキシデクチンとプラジカンテルの合剤）を使用しており、糞便検査は新入厩の馬および駆虫後の馬に対して行っていた。牧場内にラボラトリーを持っており、糞便検査はそこでやっている。



駆虫剤「Quest Plus」



糞便検査を実施

研修中、1 群の馬で 1 頭、後肢の跛行を呈する症例がいた。診断の手順として、膝関節のレントゲンを撮った後異常がなく、ダービーダンにも来ているカイロプラクターの Shirley の診察を受けたが特に原因が見つからず、左膝関節の診断麻酔を行ったが良化せず、右膝関節の診断麻酔を行ったところ跛行の改善が認められたため、右の膝関節炎と診断された。膝関節の診断麻酔はメピバカインを 2 ヶ所の関節に入れていた。このように牧場に所属獣医師がいるため、どんなに時間をかけてでも正確に診断するように努めていた。ちなみに、治療は週 1 回のハイオネートおよびレジェンド投与、運動はしばらく騎乗して常歩で放牧地の間を歩くのみとなった。



膝関節の診断麻酔

疼痛を伴う真菌性皮膚炎のため騎乗できずドライビングを行っていた馬については、イソジン・スクラブでの馬体洗浄（イソジンをなじませた後 10 分間放置してから流す）、抗真菌薬のスプレー（ヒビテンとケトコナゾールの合剤）および抗真菌薬の経口投与（グリセオフルビン、10cc、1 日 1 回）が行われた。なお、皮膚病の蔓延を防ぐため、ブラシは 1 頭につき 1 個使用し、毎日調教後に回収しブリーチ（漂白剤）でブラシを消毒した後乾燥させていた。日本と異なり雨が少ないので、繫輝を含めて皮膚病の発生は非常に少なかった。雨が少ないということも 24 時間放牧を継続しながらブレーキングを行う上で重要な点であろう。おそらく同じことを日本で行えば、皮膚病の発生に悩まされるはずである。



疼痛を伴う真菌性皮膚炎



イソジン・スクラブ



抗真菌薬のスプレー



抗真菌薬の経口剤

・ウインスターの馬のレベルと方針

種牡馬事業を根幹としているため、牡馬が多く、牝馬が少なかった。そして自己所有もしくは共有馬が多く、預託馬は少なかった。この段階に来るまでに厳しく馬の選抜を行っており（期待していない生産馬は売り、セリで良い馬がいたら買う）、どの馬も①骨太で、②胸が深く、③前肢帯および後肢帯の筋肉が発達している馬ばかりであり、そして集放牧の引き馬時など本当に良く歩ける（大きなストライドでかつきびきび歩ける）馬ばかりで驚いた。ちなみに、集放牧時はあえてチフニーやチェーンシャंकを用いず、馬の大きな歩きを阻害しないような配慮がなされていた。2群はセリで買ってきた馬が多く、無口に他のコンサイナーのネームプレートが付いていた。自家生産馬、セリで買ってきた馬ともに BCS は 5.5～6.0 と高めであった（太かった）。

日本の馬にも興味があるらしく、2015 年のセレクトセールで購買した 1 歳馬 3 頭のうち、ヒルダズパッションの 14（牡、父ハーツクライ、ノーザンファーム生産、後の Yoshida）、レーヴドフィユの 14（牡、父エンパイアメーカー、千代田牧場生産）、ジョリーダンスの 14（牡、父エンパイアメーカー、錦岡牧場生産）がブレーキングされていた。同じくセレクトセールで当歳馬も 3 頭購買したが（サンドスラッシュの 15、めす、父ディーブインパクト、下河辺牧場生産。ナンの 15、牡、父ステイゴールド、バカパカファーム生産。オールアイキャンセイズワウの 15、牡、父エンパイアメーカー、バカパカファーム生産。）、これらの馬は離乳後に輸入したとのことで 2015 年 10 月 11 日にイヤリング部門に到着したそうである。



レーヴドフィユの 14（左）とヒルダズパッションの 14（右、後の Yoshida）

ブレーキングをされていた日本生産馬 3 頭は他の米国産の馬よりも明らかに興奮しやすい気性を持っていた。激しい気性を持っていたサンデーサイレンスの血が行き渡っているからか、そういう気性の馬が日本の競馬に向いているから生き残っているせいか、原因はわからない。しかし、そのような気性を持つ彼らも、放牧地ではうるさかったが、騎乗されている時は従順であり、米国式（ウインスター式）の調教は日本の馬に対しても有効であると思われた。

・ GPS 装置を用いた放牧地での運動量調査

ダービーダンと同じく、GPS 装置（Transystem 社、747ProS）を用いてウインスターファームの 1 歳馬の放牧地での運動量を調査したので、概要を報告する。



GPS 装置

無口頭絡に装着

・ 結果

まず、ウインスターでは牡馬を 2 頭ずつ 0.5～1ha のパドックに放牧していた。ダービーダンではセリ前に咬み傷を防ぐため 1 頭ずつ放牧していたが、移動距離に大きな差が認め

られた。ダービーダンでは日焼けを防ぐため夜間放牧だったので放牧時間の差が 9 時間ほどあるものの、1 頭ずつ放牧していたダービーダンの馬が 1 日 3.3～4.1km しか移動していなかったのに対し、2 頭ずつ放牧しているウインスターの牡馬は 1 日 8.5～11.1km も移動していた。



2 頭ずつ放牧 (ウインスター)

1 頭ずつ放牧 (ダービーダン)

パドック (2 頭ずつ)	性別	放牧時間	移動距離 (km)
WinStar Yearling A	牡	23	8.5
WinStar Yearling B	牡	22	8.5
WinStar Yearling C	牡	23	9.0
WinStar Yearling D	牡	22	9.3
WinStar Yearling E	牡	22	11.1

パドック放牧されている馬の移動距離 (ウインスター)

パドック (1 頭ずつ)	性別	放牧時間	移動距離 (km)
Darby Dan Yearling A	めす	14	3.3
Darby Dan Yearling B	牡	12	3.4
Darby Dan Yearling C	牡	12	3.5
Darby Dan Yearling D	牡	13	3.8
Darby Dan Yearling E	牡	13	4.1

パドック放牧されている馬の移動距離 (ダービーダン)

一方、ウインスターのめすは約 8ha の大放牧地に 8 頭で放牧されていた。ダービーダンのセリに上場されないめすは約 14ha の大放牧地に 18 頭で 24 時間放牧されており、同じくセリに上場されない牡は約 1.5ha の放牧地に 5 頭で 24 時間放牧されていた。どちらも同じような条件のため差はないかと思っていたが、ダービーダンの馬が 1 日 8.4～11.6km 移動していたのに対し、ウインスターのめすは 1 日 11.3～13.7km 移動していた。これは、ダー

ビーダンのデータを取ったのが真夏の8月であったため、馬の活性が下がっていたことが原因であると考えられる。



8ha に 8 頭（ウインスター）

14ha に 18 頭（ダービーダン）

大放牧地	性別	放牧時間	移動距離 (km)
WinStar Yearling F	めす	23	11.3
WinStar Yearling G	めす	22	11.5
WinStar Yearling H	めす	22	12.1
WinStar Yearling I	めす	23	12.6
WinStar Yearling J	めす	23	13.7

大放牧地の馬の移動距離（ウインスター）

大放牧地	性別	放牧時間	移動距離 (km)
Darby Dan Yearling A	めす	23	8.4
Darby Dan Yearling B	めす	20	8.5
Darby Dan Yearling C	めす	23	8.6
Darby Dan Yearling D	牡	23	8.7
Darby Dan Yearling E	牡	22	11.6

大放牧地の馬の移動距離（ダービーダン）

以上の結果をまとめると、下記の表になる。特にパドック放牧での移送距離に大きな差が認められた。馬は本来単独飼育すべき動物ではないということであろう。しかし、セリに上場する際に、咬み傷などの外傷があると見栄えが悪いのもまた事実である。ウインスターでも、セリに上場する牡馬は単独でパドックに放すと言っていた。我々管理者はこの点を理解し、状況に応じて使い分ける必要がある。



咬み傷（ウインスター）

牧場	群	調査頭数	放牧時間	移動距離 (km)
WinStar	パドック (2 頭ずつ)	5 頭 (全頭牡)	22 (22-23)	9.0 (8.5-11.1)
Darby Dan	パドック (1 頭ずつ)	5 頭 (牡 4 めす 1)	13 (12-14)	3.5 (3.3-4.1)
WinStar	大放牧地	5 頭 (全頭めす)	23 (22-23)	12.1 (11.3-13.7)
Darby Dan	大放牧地	5 頭 (牡 2 めす 3)	22 (20-23)	8.6 (8.4-11.6)

1 歳馬の移動距離比較（ウインスターVS ダービーダン）

・ Training after Breaking at WinStar

2015 年の November Sales の後、再びウインスターファームのブレーキング部門（Hopewell Department）に戻り、ブレーキング後の初期トレーニングについて研修した。

・ 飼養管理上の変更点

ほぼ 24 時間の放牧を継続しながら調教を行っていた。変更されていたのは、まず放牧地内での飼付時に直接地面に置くタイプの飼い桶を使用するようになったことである。これは馬が食べ残した飼料を、馬原虫性脊髄脳炎(Equine Protozoal Myeloencephalitis:EPM)を媒介するオポッサムが食べに来るのを防ぐためとのことである。



放牧地内での飼付時に直接地面に置くタイプの飼桶を使用

また、寒くなるにつれ放牧地の草が伸びなくなってきたため、濃厚飼料（Hallway Feeds 社製ウインスターオリジナルスウィートフィード）の量を朝夕 1.5 スクープから 2 スクープに増量していた。一部、BCS が 6.0 以上ある肥満している個体には 1 スクープに減量して与えていた。逆に BCS が 5.0 程度に痩せてきた馬には、昼飼として 1 スクープを馬房内もしくは放牧地で与えていた。

さらに 12 月初旬には放牧地にルーサン乾草を撒き始めた（馬房内で与えているものと一緒）。これは我々が離乳後の当歳馬に行っている放牧地での運動量を増やす目的で行っているわけではなく、単純に栄養補給を目的に放牧地内の 1 ヶ所に置いていた。不思議だったのは、我々の経験では放牧地に少量でも草が生えていれば乾草を入れても初めは食べないのであるが、ウインスターファームの馬はすぐに放牧地に投げ入れたルーサンを喜んで食べていた。普段馬房内で与えている（慣れている）から嗜好性が良いのか、そもそもルーサンの質が高いから嗜好性が良いのかかわからないが、放牧地に撒く前に“馬房内で慣らしておく”という工程も重要なかもしれない。



ルーサン乾草を配布

放牧地内 1 カ所に置く

手入れに関しても基本的に裏掘りとブラシ掛けだけのシンプルなものであった。馬は騎

乗時以外は基本的に放牧地にいるため、雨の日の翌日など馬体が泥だらけになっていることもしばしばあったが、「寒くて馬が風邪をひくから」という理由で下肢部以外の洗浄は行っていなかった。

さすがに寒くなってきたので（12月に入ると最低気温がマイナス一桁、最高気温がプラス一桁という日も多くなってきた）、雨が4日間続いたある日、大放牧地にいる牝馬8頭以外の放牧を中止し、一晩だけ馬房で休ませたこともあった。

また、12月初旬にはウォーキングマシンの使用も開始した。ダービーダンと同じく、速歩になるかならないか限界の速度（時速6.75km）で歩かせ、常歩でのストライドを伸ばそうと試みていた。この方法はどうやら米国でのスタンダードな使い方の方である。馬は最初はほとんど速歩をしているが、慣れてくると常歩で歩けるようになっていった。ちなみに、ダービーダンのイヤリングマネージャーである Ian Cole はイギリス人のため「Walker」と呼んでいたが、米国では「Walking machine」と呼ぶのが普通であるらしい。



ウォーキングマシン



常歩で歩ける限界の速度

・Week8～14

タイチェーン（米国ではバンジーbungee と呼ぶ、バンジージャンプのバンジーと同じ。伸縮性のゴムのことをそう呼ぶらしい）を使用していた。バンジーは常に馬房の壁に吊っており、張る際には無口の左側の穴に装着していた。米国では周回コースでの調教が常に左回りだったり、どうも馬を左右均等に保つべきという意識が低いように思われる。安全対策のため、最初はバンジーと壁の間にナイロン紐を使用し、馬が後引きしたら切れるようになっていたが、慣れてきたと判断されるとそのまま壁に繋いでいた。ちなみに、馬が本気で後引きするとゴムが切れる。Training Barn での研修中にその場面を見る機会があった。

馬装は革の無口の上からハミ付きの頭絡をつけ、革製のネクストラップおよびビブ・マルタンを使用し、薄い布の鞍下の上に低反発のクッション、さらに羊毛のクッションを置いたのち調教鞍を装着。羊毛製の腹帯カバーを使用していた。骨瘤が出ている馬につい

ではポロ・バンテージ（伸縮性の布でできた肢巻）を運動時のみ使用していた。

無口の上からハミ付きの頭絡をつけることに関しては、グルームが引いて介助する際にカップランに直接リードをつけて馬を引っ張るとハミに対する作用が強過ぎて若馬には良くない（口角を傷つける）ので、介助する際にはカップランではなく無口の顎下のリングにリードをつけて馬を引くのが（“アタリ”が柔らかくて良い）良いという理由らしい。

ちなみに、馬装した後も馬はしばらくバンジーで壁に繋がれ、ライダーがそのままトイレに行くなんてことも日常茶飯事であった。



馬装後も馬はしばらくバンジーで壁に繋がれる

サンクスギビングデーやクリスマスなどの祝日を除いて、基本的に日曜日のみ調教が休みとなったが、毎日全頭騎乗するわけではなく、馬の疲労度を見て週に1～2日は休みにしていた。逆に言うと馬たちは週に4～5日しか乗られていないことになり、結果的に週6日調教が始まるまでの我々の運動量と変わらないということになる。

ブレーキング開始8週目から14週目の調教は、天候および馬の疲労度を加味し、下記の3パターンで行われていた。

1) 大放牧地コース (Big field)

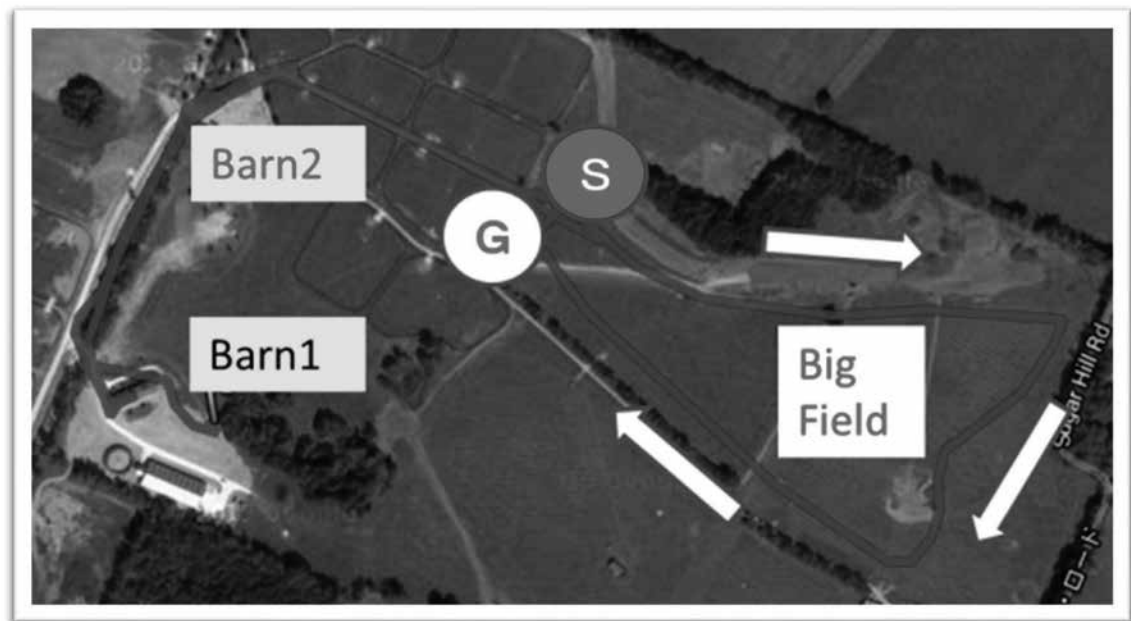
距離：コースまでの常歩込みで3.7km (2.3miles)

勾配：なし

雨天時：△

負荷：小

面積約40acreの広い放牧地。1周すると約1,400mになる。基本的に速歩と駈歩が半々（約700mずつ）という調教を行うが、雨で地面がぬかるんでいる場合は速歩のみで3周（約4,200m）という調教を行ったこともあった。



大放牧地コース



広い放牧地（40acre）へ行き、外周を速歩および駢歩

2) グラス坂路コース（Turf course）

距離：コースまでの常歩込みで 2.9km（1.8miles）

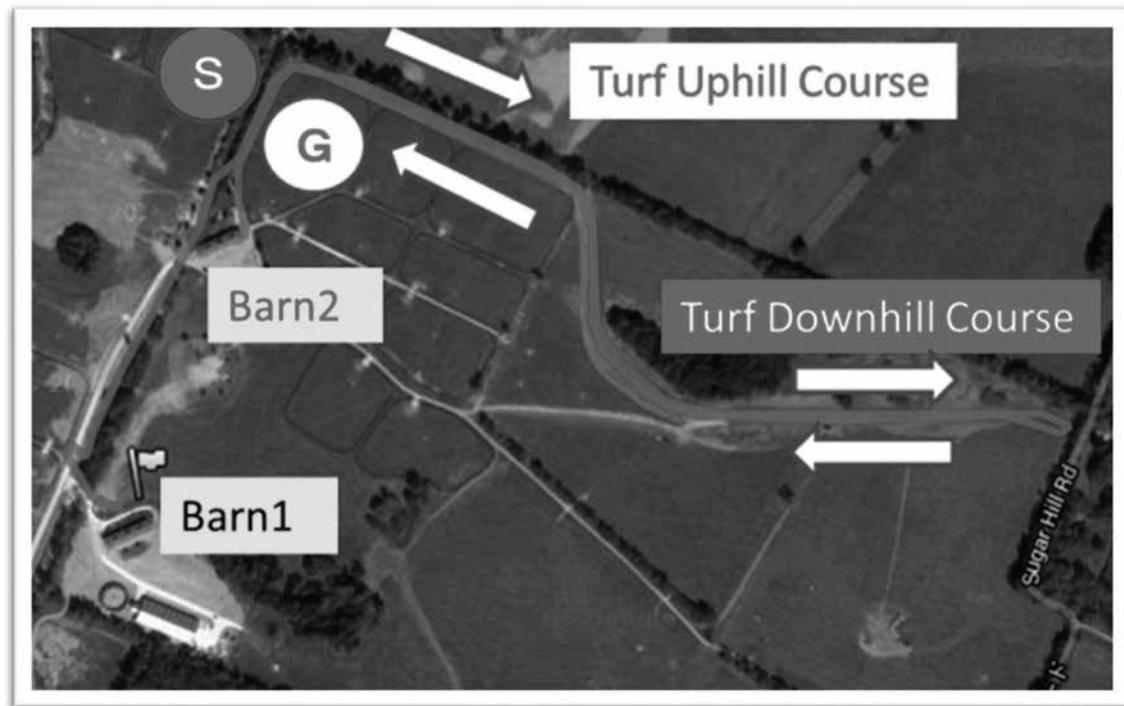
勾配：行き上り部分約 6%、下り約 4%、帰り上り部分約 4%、下り約 6%

雨天時：×

負荷：中

パドックと隣の牧場との間のスペースに埒を立て、芝コースとしていた。全長（片道）が約 1,100m であり、スタートして最初の 3 分の 1 は上り、曲線部分を経て、最後の 3 分の 1 は下りとなっている。すなわち、馬たちは約 400m 上り、約 300m 曲線部分を走った

後、約 400m 下る。そして、折り返して約 400m 上り、約 300m 曲線部分を走った後、約 400m 下り、合計約 2,200m 速歩および駈歩を行うことになる。行きは上り部分の勾配が約 6%ときつい。下り部分の勾配は約 4%。帰りは逆になる。



グラス坂路コース



グラス坂路（行きの上り）

グラス坂路（帰りの上り）

3) 周回コースおよび坂路コース (Track)

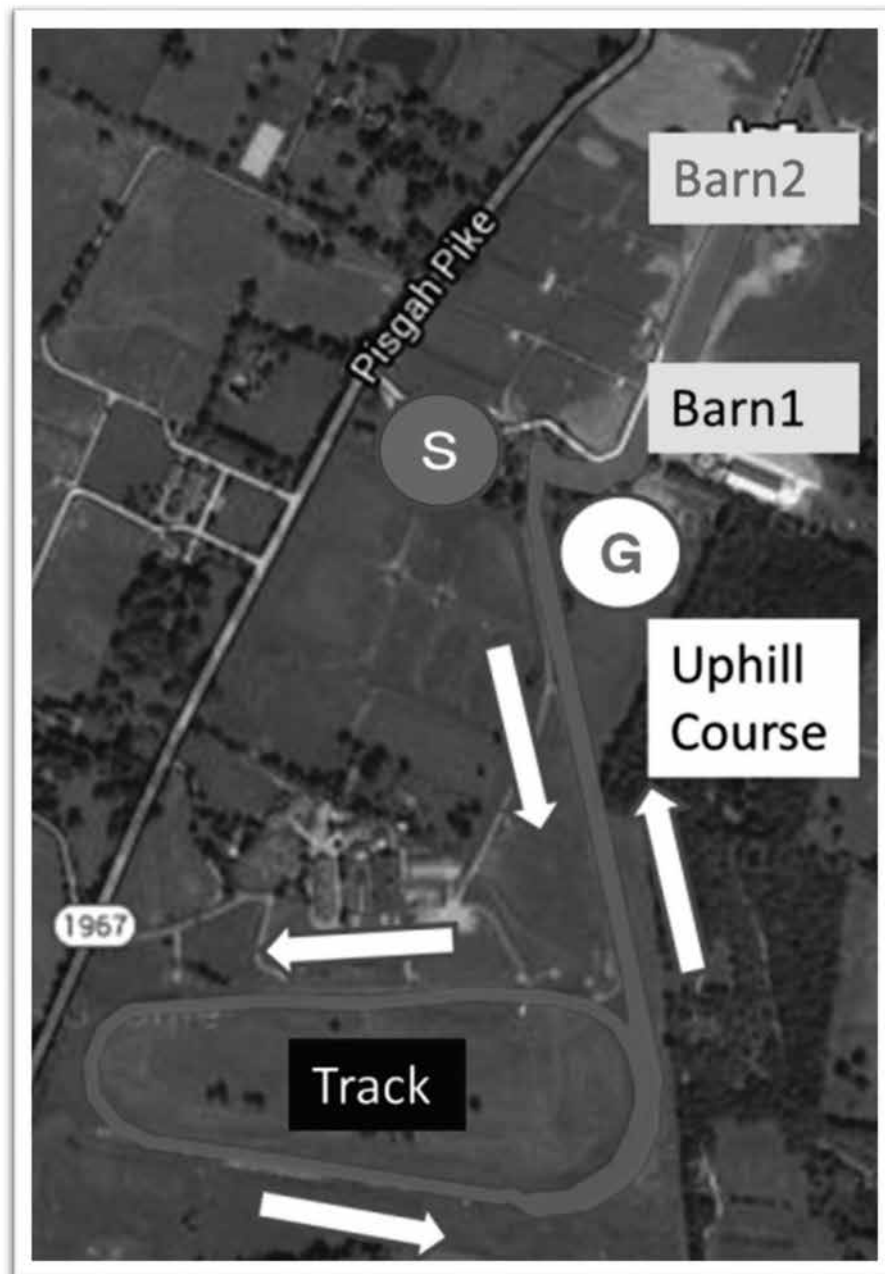
距離：コースまでの常歩込みで 5.1km (3.2miles)

勾配：坂路約 3%

雨天時：○

負荷：大

周回コースが1周 1,400m、坂路コースが約 800m である。どちらも素材はオールウェザーであったが、12 月上旬に坂路のみオールウェザーからファイバーサンドに改修された。従来のオールウェザーではグリップが良過ぎて特に後肢の故障が多かったとのこと、砂と3種類の繊維のみで、ワックスもゴム素材も使用していないファイバーサンドに変更したとのこと。坂路の勾配は約 3%。



周回コースおよび坂路コース



周回コース

坂路コース

途中、10 頭（牡 8 頭、牝 2 頭）がフロリダへ輸送された。うち牡馬 8 頭はウインスター所有ではない預託馬であり、馬主の意向で本格的に寒くなる前に温暖な地に移動させたとのこと。牝馬 2 頭はウインスター所有だが外側管骨瘤が出るなど順調ではなく、トレーニング・セールに上場され売却されるとのこと。輸送時、四肢に肢巻を（装蹄している馬はワンコも）装着するほか、疝痛予防のためミネラルオイルを約 500ml 経鼻投与していた。ちなみに、日本の流動パラフィン（流パラ）よりもだいぶサラサラしている印象で、英語の疝痛の教科書に書いてあるミネラルオイルと流動パラフィンは別物ではないかと思った。興奮する馬に対しては鎮静剤（アセプロマジン 1ml 静脈内投与）を使用していた。ちなみに、フロリダまでの輸送時間は約 12 時間であり、トレーラーから途中の営業所で大きなトラックに積み替えるとのことであった。



輸送前にオイル



フロリダへ輸送される牝馬

・ Week15～

12 月 14 日、25 頭がウインスターファームのトレーニング部門（Training Barn）へ移動した。この日は馬装して騎乗、そして周回コースで調教した後、そのまま Training

Barn に行き、馬装を解いて馬を置き、ライダーのみ車で帰ってきた。約半数の馬が移動したことになる、残った馬は 27 頭となった。ライダーも、Toby と Heather の二人は馬と一緒にトレーニング部門に移動し、Sarah と Jess そして時折トレーニング&リハビリ・アシスタントの Karen がトレーニング部門から来て乗っていた。

・ Training Barn

12 月 21 日から私もトレーニング部門 (Training Barn) に移って研修することになった。Farm Trainer の Richard Budge はイギリス人で、フランスとアメリカで修業。1997 年に調教師免許を取得し、テキサス州で開業していたが、2002 年からウインスターファームに移った。その下に Assistant Trainer として Heather Andress、Foreman として Destin Heath という 2 名のアメリカ人がサポートしている。ほかに Training & Rehab Assistant として Karen Bublitz が働いていた。このほか、ライダー 9 名 (アメリカ人、メキシコ人)、グルーム十数名 (メキシコ人、グアテマラ人) で運営されている。グルームは朝 6 時集合で夜間放牧の馬を集牧する。ライダーは朝 7 時集合で基本乗るだけ。1 日 5 ～10 鞍騎乗。1 鞍目は 7:25 騎乗開始、1 鞍約 35 分。最終が 12:40 騎乗開始。その後ライダーは解散。グルームは 15 時に再集合し、収放牧および夕飼い付けをする。

施設としては、1 周 1,400m の周回コース (オールウェザー)、長さ約 800m で勾配が約 3% の坂路コース (ファイバーサンド)、厩舎 4 棟、パドック 18 個、ウォーキングマシン 2 基のほか、リハビリ用にスイミングプール、ウォータートレッドミル、ウォータースパ、Thera Plate、高圧酸素治療機まであった。※高圧酸素治療機はハグヤード、KESMARC にもあり、ハグヤードで 1 回 400 ドル。

馬房は全部合わせて、約 120。12 月時点で 1 歳 25 頭、2 歳以上約 40 頭。春から夏にかけて最も頭数が多くなり、その際には 200 頭程度までいくことがあるとのこと。馬房が足りない場合は放牧地との入れ替えも実施 (昼放牧と夜間放牧の馬で馬房をシェア)。



ウインスターファームの Training Barn



スイミングプール



ウォーターTM



ウォータースパ



高圧酸素治療機

・1歳馬の飼養管理

夜間放牧（15時から6時）を基本的に継続していたが、放牧地が足りないため一部の馬は昼放牧（調教後から15時）とし、放牧地（パドック）をシェアしていた。大きな放牧地は移動式の牧柵を使用し、小さく区切って使用していた。毎週調教が休みの日曜日に移動し、常に草がある状態にしているとのこと。放牧時に馬服は使用していなかった。



夜間放牧を継続



移動式の牧柵を使用

馬体の下半分の被毛をクリッピングしていた。これはウインスターの従業員が立会いの下、クリッピング専門の業者が1頭100ドルで行っていた。クリッピングをしている馬としていない馬で汗の量が全然違った。



鎮静剤投与

クリッピング



クリッピングの有無で汗の量が大きく変わる

朝 6 時および夕方 14 時 30 分の 2 回飼付で、濃厚飼料（Hallway Feeds 社製ウインスターオリジナルスウィートフィード）を 1 スクープずつ給餌。やや強め調教の際は夕飼いを 1.5 スクープに増量し、調教をしない日には朝飼いをなくすことで減量していた。乾草はルーサンではなく、チモシーを給餌（飽食）。BCS を 6.0 から徐々に下げていく方針とのこと。

グルームは集放牧のほか、馬房のボロ拾い、騎乗前のブラシ掛け、騎乗後に馬に水を飲ませてウォーキングマシンへ連れて行く。馬房の敷料には麦稈で作られたペレットが使用され、粉々になると新しいペレットを足していた。



調教後、水を飲ませて WM へ

敷料は麦稈のペレット

・1 歳馬の調教

基本的に 2 頭併走。日曜日は調教せず、放牧のみ。概ね下記の 2 パターン。

通常調教（週 5 日）→周回コースを F22～30 程度で 1,400m

（実際には少し流しているのので約 1,600m）

やや強め調教（週 1 日）→周回コースを F20～22 程度で 1,400m（同上）

ウォーミングアップは騎乗してシェッドローを約 10 分常歩、クーリングダウンはウォーキングマシンで約 10 分常歩。速度は 3.5（単位不明）。



2 頭併走が基本

クーリングダウンは WM を使用

・2 歳以上の馬

基本的に馬房内で管理。うるさい馬は昼放牧。古馬もクリッピングしていた。1 日 3 回飼付（夏は 4 回）。朝 3 時、昼 11 時、夕方 16 時 30 分（夏は夜 22 時も）にスウィートフィードおよびペレット・亜麻仁粕を給餌。給餌量は朝 1kg、昼 2～3kg、夕方 2～3kg。乾草はチモシー。敷料は基本的にウッドシェービングを使用していた。

調教は基本的に単走。日曜日は引き運動 15 分。概ね下記の 3 パターン。

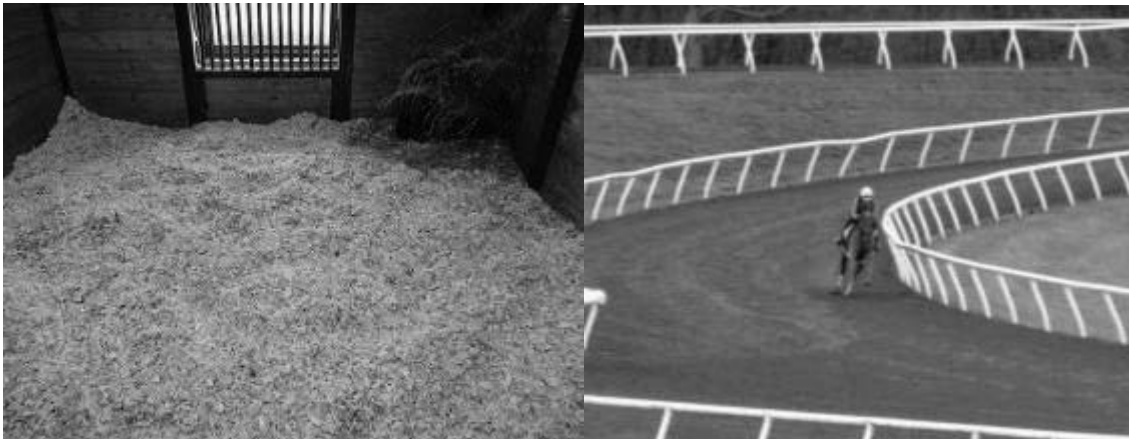
通常調教（週 5 日）→周回コースを F20 程度で 1,400m（実際は約 1,600m）

強め（週1日） → 周回コースを F13～14 で馬の状態に応じて 400m～1,000m

始めの 600～1,200m で F20→15 程度まで上げていき、それぞれ指示された距離を強めに調教する。ゴール後は約 400m 流すので総駈歩距離としては約 2,200m。

軽め（週1日、強めの翌日） → 速歩1周（1400m）もしくはタックウォーク（シェッドローを騎乗して常歩）

ウォーミングアップは騎乗してシェッドローを約 10 分常歩、クーリングダウンは引き馬でシェッドローを約 10 分常歩。



敷料はウッドシェービング

単走が基本

・獣医療

12 月に入ってから、1 群として順調にメニューをこなしていた 2 頭の球節の剥離骨折の関節鏡手術が行われた。2 頭とも、1 歳セリでのレポジトリー検査で骨片が確認されていたものの、放牧地の状態が良い夏から秋にかけては放牧を中止することで成長が阻害されるのを嫌い、そのままブレーキングを実施した後、冬になるのを待って手術した、というわけである。ウインスターではそれぐらい“放牧による成長”を重視しているのである。

また、皮膚病対策に手入れ用のブラシを 1 頭ずつ交換し、毎日調教後にブリーチで消毒・乾燥させていた。



皮膚病予防のため、ブラシは毎日消毒、乾燥

・装蹄

1歳はまだほとんど装蹄していない。速い調教（breezing）を行う前まで装蹄しないとのこと。蹄質が弱く、両前のみ例外的に装蹄している馬は2頭いた。なお、毎週水曜日に全頭ケラテックスとヨードが混ざったような液体を塗布。特殊装蹄などが必要な際には、ルードアンドリドルより Dr.Scott Morrison が来場する。

5. 育成牧場での調教（後期育成）

マーゴーフาร์ม（Margaux Farm）

2016 年 7 月から 9 月にかけて、競走馬の調教とリハビリテーションを学ぶためマーゴーフาร์มで研修した。

マーゴーフาร์มはかつてローズズインメイなどを輩出した生産牧場だったが、2012 年に育成牧場になった。管理しているのはほぼ預託馬で、1 歳馬のブレーキングと休養馬のトレーニングを行っている。現在のオーナーはカナダ人の Susan and Jim Hill 夫妻だが、彼らはカナダ在住でめったに来場しないため、ゼネラル・マネージャーの Michael Hardy が実質牧場全般を仕切っていた。彼は北アイルランドの出身で、父はメイショウドトウの生産者（P. Hardy）。ダーレーフライングスタートの卒業生で、アイルランドのセリ会社 Goffs に勤務した後、マーゴーフาร์มへ。

・牧場の規模

牧場の全体像を図に示す。競走馬は 7 月現在約 40 頭在厩しており、内訳は約 20 頭が 2 歳馬、約 20 頭が休養馬。生産馬は毎年約 20 頭で、現在当歳馬が約 20 頭、1 歳馬が約 20 頭、繁殖牝馬が約 30 頭いる。

厩舎は 11 棟あり、内訳は下記のとおり（Barn10 は以前あったが、オーナーが代わってから取り壊されてしまったため現在はない）。

Stallion Barn（SB）→功労馬（Devil His Due）

Barn1→セリに出す 1 歳馬（ダービーダンと同じく日焼けを防ぐため夜間放牧）

Barn2→改築中

Barn3→母子

Barn4→子なし繁殖牝馬（Barren & Maiden）

Barn5→競走馬（牡）

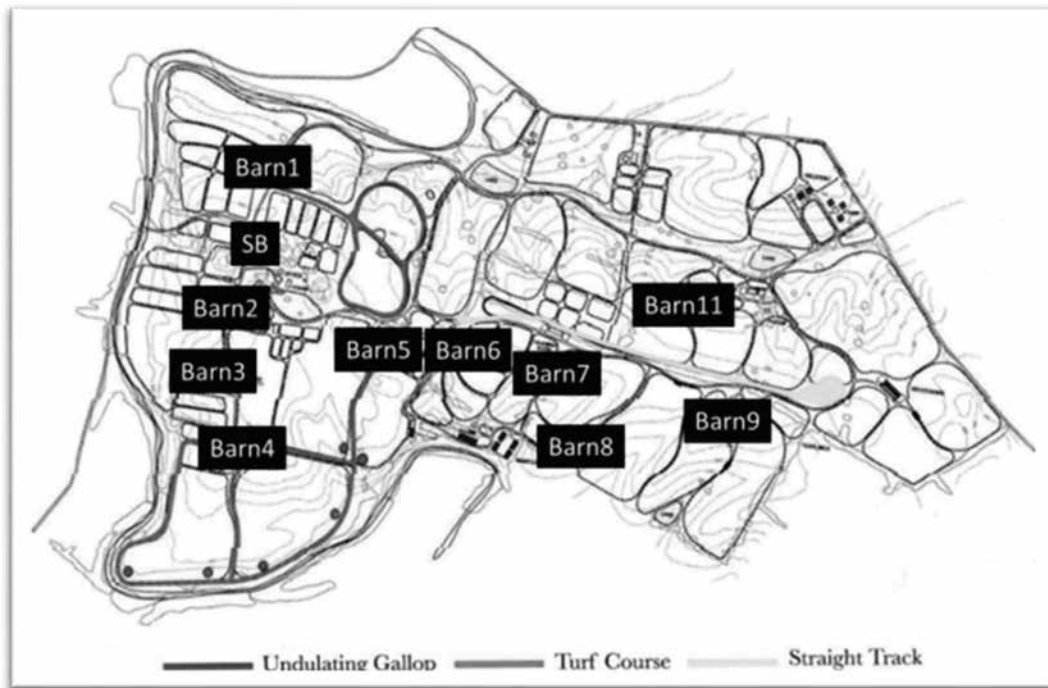
Barn6→競走馬（牝）

Barn7→競走馬（牝）

Barn8→輸出検疫厩舎（ドバイ行き、牡 1 頭・牝 1 頭）

Barn9→リハビリ中の競走馬 & セリに出さない 1 歳馬

Barn11→現在は使用していないが競走馬が増えたら使う



牧場の全体像

・厩舎

私が配属された Barn7 は 18 馬房あり、他の厩舎も馬房数の多少はあるが対面式で真ん中にシェッドローがある同じ構造であった。競馬場に入厩する馬、反対に競馬場から休養に来た馬など出入りがあったが、だいたい常に 18 頭おり馬房は満杯であった。馬房の広さは縦 340cm×横 415cm。扉には馬が顔を出せるように隙間が空いているが、シェッドローを引き運動する際に歩いている馬にちょっかいをかける馬などの馬房には隙間を閉じられる仕組みになっていた。2012 年にオーナーが変わったばかりの新しい牧場のためあちこち改修中であったが、研修中に前掻き対策として馬房の前面の扉周辺にゴムマットが敷かれた。その他の床は火山灰の土間である。



Barn7



対面式の構造

5. 育成牧場での調教（後期育成）

馬房		居室
馬房		洗い場
馬房		馬房
馬房		馬房
馬房		馬房
馬房		馬房
馬房		馬房
馬房		馬房
馬房		馬房
馬房		馬房

厩舎の構造（実際の馬房は横長）

・スタッフ

スタッフは①トレーニング（Training）と②繁殖&イヤリング&メンテナンス（Broodmare&Yearling&Maintenance）の2つの部門に分かれている。①トレーニング部門では各厩舎2〜3名スタッフが固定され、基本的にその指定された厩舎の仕事のみを行う。私が配属された Barn7 では3名が働いていた。競馬場のようにグルームとホットウォーカーの区別はない。①トレーニング部門はファームトレーナー（Farm Trainer）である Dermot Littlefield（アイルランド人）が監督していた。後述するが、乗り役はフリーのライダーを“外注”している。

②繁殖&イヤリング&メンテナンス部門のスタッフは、母子が20組、1歳馬が20頭しかいないため、朝夕集放牧をした後、日中はトラクターに乗って掃除刈りなどを行う。非常に効率的なシステムである。馬を扱える上にトラクターも運転できなくてはならないため、ベテランが多かった。繁殖&イヤリングマネージャー（Broodmare & Yearling Manager）である Jon Carpenter（アメリカ人）が監督していた。マネージャーたちは調教がない日曜日が休日で、スタッフは交代で週休1日。長年勤務しているスタッフには社宅も貸し与えており、社宅に住むと夜間放牧（19:00）の当番が週に1〜2回まわってくる。

この牧場の特徴として、朝の作業は7時からだが調教開始は11時からであることが挙げられる。朝遅いのは良い乗り役を確保するためだそう。乗り役はフリーのライダーを“外注”している。レキシントン界限にはキーンランド競馬場とサラブレッドセンターという2つの調教施設が存在するが、そこで普段乗っているライダーのうち腕達者に声を掛け集めている。確かに上手かった。拳が上下に動くなど馬術的には決して上手くないが、とにかく引っ張らない。手綱は常に緩んでいる。Michaelいわく、「馬の口は繊細」。掛かる馬は単騎で行かせるなど、調教を工夫する。腕達者を“副業”のような形で毎日“本業”の終了後に稼ぐ場所としてマーゴーフームに来て乗ってもらっているのである。米国のライダーは“歩合制”で、通常1鞍15ドル、ブレーキングは20ドルというのが相場である。ライダーはキーンランド競馬場もしくはサラブレッドセンターで7～8鞍乗った後、マーゴーフームでも同じく7～8鞍乗る。1日210～320ドル稼いでいる計算になる。通年来ているのは5名で、うち1名のみがコロンビア人で、他はメキシコ人であった。

・タイムスケジュール

- 7:00 集合、夜間放牧の馬の馬房のボロ出し、朝飼付
昼夜放牧の馬の集牧および昼間放牧の馬の放牧、投薬（必要な馬のみ）
- 8:00 昼間放牧の馬の馬房のボロ出し、全馬房に乾草および水を足す
- 9:00 馬の手入れおよび検温
- 10:00 “ボロ出しマシン”およびブロワー、昼間放牧の馬の集牧、調教時の肢巻の用意
- 11:00 調教開始（グランドスタッフの昼休みは調教中に時間をずらしてとる）
- 13:30 調教終了、昼飼付
- 14:00 昼夜放牧の馬の放牧およびボロ出し、
昼間放牧および夜間放牧の馬の馬房に乾草および水を足す
（飼い桶は外して時々洗う）
- 15:00 “ボロ出しマシン”およびブロワー、厩舎肢巻の装着、昼間放牧の馬の無口を外す
- 16:00 解散
- 19:00 当番制で再集合、夜警と当番者で夜間放牧の馬の放牧

・飼養管理

<放牧>

馬は昼夜放牧（14:00～7:00；17時間）、夜間放牧（19:00～7:00；12時間）、昼間放牧（7:00～10:00；3時間）の3群に分けられていた。使い分けであるが、昼夜放牧はデビューがまだ先の2歳新馬や休養馬のうち肢元に問題のない馬、夜間放牧はやはり競馬に出走するのはまだ先だが脚部不安があり運動量と採食量を制限したい馬（後にGPS調査により運動量には差がないことが判明）、昼間放牧は手術後のリハビリ中の馬や競馬場への入厩が近い馬である。

5. 育成牧場での調教（後期育成）

放牧地には砂パドック、小パドック、中パドック、大放牧地があり、昼間放牧は必ずパドックが使用されていたが、昼夜放牧や夜間放牧は大放牧地とは限らずパドックに昼夜放牧されている馬もいた。砂パドックは手術後のリハビリ期間などで採食制限したい馬に便利である。なお、牧柵は4段のタイプで、一番上の段の横木には電牧が張られており、さく癖を防止していた。

牡はケンカするため1頭でパドックに放牧されるのが基本。牝は同じく1頭で小パドックに放牧されることもあれば、2頭で中パドックに放牧されることもあり、3~4頭で大放牧地に放牧されることもあった。なお、集団放牧される馬は両後肢の蹄鉄が外される。競馬場への入厩に近い馬は四肢裸蹄であった。さらに、新しい群を作って放牧する際には、キシラジンで鎮静してから放牧していた（濃度 100mg/ml を 1.5ml 静脈内投与、体重 500kg だとして 0.3mg/kg）。また、夏だったので放牧時には馬にフライマスクを着用していた。基本的に無口に引き手のみで引き、チフニーやチェーンシャンクは使用しない。競馬場から帰ってきたばかりで興奮する馬にはチェーンシャンク（鎖の長さが 65cm のもの）を鼻の上に回して使用。夜間放牧は 19:00 に牧場内の社宅に住んでいるグランドスタッフが当番制で夜警と一緒に放牧していた。



大放牧地で昼夜放牧

リハビリ用の砂パドック

<肢元のチェック>

朝の集牧時（昼間放牧の馬は放牧前）にスタッフが肢元をチェックするというのを習慣づけていた。最大で 200 頭近くの頭数になるため、ファームトレーナーの Dermot 一人では全頭見切れないというのが理由。スタッフが外傷や腫脹を発見した場合は Dermot に電話で連絡し、処置の指示を仰ぐ。そのほか、毎週火曜日と金曜日に契約している装蹄師が来場するので、その日の朝は蹄鉄を念入りにチェックし異常があれば Dermot および装蹄師に伝える。



大放牧地での集牧

肢元をチェック

<濃厚飼料>

基本的には朝と昼の2回飼付。Hallway Feeds 社製のスウィートフィードが使用されていた。M (Margaux Custom)、S (Special 13)、R (Race 13) の3種類があり、基本的にはMを使用し、リハビリ中の休養馬や引退が決まり繁殖牝馬になる馬にはS、競馬場への入厩が近い競走馬にはRが使用されていた。Mはマーゴーフาร์มオリジナルブランドで、ウインスターの時と同じく袋に組成が書かれていないため内容は不明。どの飼料も蛋白質含量が13%であることにはこだわっていて、Mも蛋白質含量が13%であることだけはわかっている。

Sの組成は下記。比較のため、カッコ内にダービーダンの基本飼料「Option 14 Pelleted」の成分を示す。繊維、カルシウム、ビタミンEは少なめ、銅、亜鉛、ビタミンAは多め、その他は変わらずである。

粗タンパク質 (最小)	13.0% (14.0%)
粗脂肪 (最小)	3.5% (3.0%)
粗繊維 (最大)	8.0% (13.0%)
カルシウム (最小)	0.7% (1.2%)
カルシウム (最大)	1.2% (1.7%)
リン (最小)	0.6% (0.7%)
銅 (最小)	44ppm (30ppm)
セレン (最小)	0.3ppm (0.4ppm)
亜鉛 (最小)	125ppm (100ppm)
ビタミンA (最小)	6750IU/lb (4000IU/lb)
ビタミンE (最小)	50IU/lb (100IU/lb)

もう一種、Rの組成は下記。比較のため、カッコ内にダービーダンの基本飼料「Option 14 Pelleted」の成分を示す。繊維、カルシウム、ビタミンEは少なめ、脂肪、銅、ビタミンA

5. 育成牧場での調教（後期育成）

は多め、その他は変わらずである。

粗タンパク質（最小）	13.0% (14.0%)
粗脂肪（最小）	6.0% (3.0%)
粗繊維（最大）	10.0% (13.0%)
酸性デタージェント繊維（最大）	10.5% (-)
中性デタージェント繊維（最大）	18.0% (-)
カルシウム（最小）	0.75% (1.2%)
カルシウム（最大）	1.25% (1.7%)
リン（最小）	0.55% (0.7%)
銅（最小）	40ppm (30ppm)
セレン（最小）	0.3ppm (0.4ppm)
亜鉛（最小）	110ppm (100ppm)
ビタミン A（最小）	6000IU/lb (4000IU/lb)
ビタミン D（最小）	750IU/lb (-)
ビタミン E（最小）	100IU/lb (100IU/lb)

1 回の給与量は 2～6 ポンド（0.9～2.7kg）であり、1 日 2 回のため 1 日量としては 4～12 ポンド（1.8～5.4kg）となる。給与量はファームトレーナーの Dermot が時々 BCS をチェックして増減を決めていた。台車にスウィートフィードを入れ、満杯が 3 ポンドのスクープで飼桶に入れていく。昼間放牧の馬の飼桶には鉱塩を入れる。Tie-Back 手術を受けた馬は咳をしやすいうように低い位置に飼桶を付ける。なお、暑い日は昼飼に電解質（Finish Line 社製「Apple-A-Day Electrolyte」という製品）を 1 スプーン加える。

スプーン 1 杯＝38g 中に含まれる電解質の組成は下記。

カルシウム（最小）	5.9%
カルシウム（最大）	6.9%
塩（最小）	35%
塩（最大）	36.5%
ナトリウム（最小）	19%
ナトリウム（最大）	21%
ポタシウム（最小）	12%
マグネシウム（最小）	0.5%
マンガン（最小）	300ppm
亜鉛（最小）	40ppm
鉄（最小）	100ppm
銅（最小）	10ppm
コバルト（最小）	0.3ppm



スウィートフィード

電解質

<BCS>

入厩している馬のボディ・コンディション・スコア（BCS）には4.5～6.0とばらつきがあった。Dermotが時々チェックする。競馬場から帰ってきたばかりの休養馬は低めであり、まだ入厩が先で昼夜放牧を続けている2歳新馬は高めであった。全体として、アメリカの競走馬のBCSは日本のと比較して高い印象である（日本が平均4.0でアメリカが平均5.0ぐらいのイメージ）。ケンタッキーの牧草（青草）は栄養価が高いため放牧をしているとどうしても太ってしまうのだが、競馬場へ入厩するまでに5.5以下となるように調整されていた。この点、伝統的に牧草（青草）の栄養価が低いフロリダ（ケンタッキーブルーグラスではなくバヒアグラス）で育成されているのは、馬を太らせないでかつストレスを軽減できるということで理に適っていると思われた。

<競馬場への入厩準備>

競馬場への入厩が近づいた馬は、環境の急激な変化を緩和するため、濃厚飼料の増量（16ポンド＝7.2kgなど）、放牧の中止という措置がとられる。マーゴーフームでは手入れや馬装の際にタイチェーンを使っていないが（放牧をしているせいか馬は皆おとなしく、フリーでも全く危険はなかった）、競馬場では壁に繋がれるのが一般的なので事前に馴致しておく。タイチェーンのみではなくビニール紐を使い、馬がソッパしたら切れるようにしておくのはJRAの育成牧場と同じである。

5. 育成牧場での調教（後期育成）



入厩前に濃厚飼料を増量



タイチェーンの馴致

思えば、サラブレッドが生まれてから競走馬になるまでの過程は、自然から人工へと向かう流れである。生産牧場では馬はほとんどの時間を放牧地で過ごすため、ある意味野生馬とほぼ変わらない環境である。逆に競馬場では放牧されず馬房から出ると調教されるというストレスフルな環境で、かつ濃厚飼料が多給される。このような環境で飼われている馬は他にいない。日本と同じく、生産牧場⇒育成牧場⇒競馬場（日本の場合はトレセンに当たる）という経過を辿る米国では、競走馬の調教とはいかに急激なストレスをかけないで馬に“我慢”を教えるか、ということになるだろう。

<粗飼料>

ルーサン（アルファルファ乾草）もしくはルーサンとチモシーのミックスの乾草が使われていた。通常は前者を与え、太り易い馬もしくは競馬場への入厩が近い馬には後者を与える。日に焼けていて茶色く変色している乾草で、明らかにダービーダンやウインスターで使われていたオハイオ州産の物の方が品質が良さそうだったが、オーナーがカナダ人ということでその繋がりでもカナダ産の物を使用しているとのことであった。色は悪かったが、嗜好性は良かった。



ルーサン乾草



カナダから輸送

<敷料>

基本は自家製のブルーグラス乾草。ブルーグラスを食べてしまい、太る馬（BCS が 6.0 以上）にはウッドシェービングを使用。捨てる際には両者を区別せず搬送し、牧場内で堆肥を作っている。珍しいのは、“ボロ出しマシン”を使用していること。これは本来、掃除刈りした後の刈りカスを集めるための装置らしいのだが、ボロをシェッドローの真ん中に装置が吸い込める幅に置いておくことで、ボロをトラクターの荷台に積み上げる手間を省くことができる。“ボロ出しマシン”はトラクターで牽引する。難点は時々詰まること。やはり元々は草を吸い込む機械なので、ブルーグラス乾草の上に上手くボロやウッドシェービングを載せなければ詰まってしまう。多少のコツは要るが、しかし大幅な省力化ができるのでマーゴーフームのように真ん中にシェッドローがあるタイプの厩舎の牧場では導入を検討しても良いかもしれない。なお、ボロ出しの際、馬房に消臭用の粉を撒いていなかったが、代わりに Pine-Sol というレモンの香りがする洗剤を 1 日の最後にシェッドローに撒くことで消臭していた。昼間放牧および夜間放牧の馬の馬房は毎日ボロ出しをする。昼夜放牧の馬の馬房は 1 日おきにボロ拾いの日とボロ出しの日と分かれていた。



ブルーグラス乾草

ウッドシェービング



ボロをシェッドローの真ん中に

“ボロ出しマシン”

5. 育成牧場での調教（後期育成）



“ボロ出しマシン”



Pine-Sol という洗剤を1日の最後にシェッドローに撒くことで消臭

<調教時の肢巻>

Elastics と呼ばれる伸縮性のバンテージと Polo と呼ばれる地厚のボロバンテージを使い分けていた。前者は着地の際の衝撃を緩和するものとして認識されており、主に球節炎および繋靭帯炎の馬に使用されていた。後者は交突から物理的に保護するものと認識されており、主に内側管骨瘤の馬に使用されていた。四肢に巻く馬もいれば、両前肢もしくは両後肢のみに巻く馬もいた。どちらの肢巻にもマジックテープが付いていたが、調教中に外れることを防ぐため必ず最後にビニールテープを巻いていた。なお、早く巻き過ぎると馬が馬房内で噛んで外してしまうことがあるとのことで、必ず馬装の直前に巻いていた。なお、肢巻および鞍下の洗濯は夜警の仕事で、バケツに入れておくと翌朝洗濯・乾燥された肢巻が返ってくるので、それを巻き直して使う。夜警は分娩シーズン以外は 16:00～24:00 の 8 時間勤務で、肢巻および鞍下の洗濯のほか 19:00 の放牧（競走馬だけでなくセリに上場するイヤリングも）、各厩舎に置いてあるブロワーの混合油（ガソリンとオイルのミックス）の給油も仕事であるが、しばしば給油は忘れられていた。



調教時の肢巻

<馬装>

まず、ライダーの道具（ヘルメット、安全ベスト、チャップス、ブーツ、鞭）はライダーが自前で用意する。馬具（頭絡、鞍、腹帯、ビブマルタン）は牧場の備品で Barn5 の馬具庫に置いてあり、ライダーは牧場に到着したらまずそこに行き、馬具を自家用車に載せて持ってくる。鞍下、腹帯カバー、肢巻は各厩舎に置かれており、グランドスタッフが準備する。ライダーの車が見えた時点で、グランドスタッフは肢巻を巻く。そしてライダーが馬装し、騎乗する。マーゴーファームの特徴は、全頭に枝バミを使用していることである。若馬だけでなく、休養のため戻ってきた古馬にもここにいるうちに改めて開き手綱によって内方姿勢をとることを教え込んで、口向きをリセットして再び競馬場に赴いて欲しいという思惑が込められている。



馬具庫



馬具を自家用車に載せて運ぶ

5. 育成牧場での調教（後期育成）



ライダーが馬装



全頭枝バミを使用

・調教コース

研修開始時には直線坂路コース（Straight Track）が路盤改修中であり、常に勾配付き周回コース（Undulating Gallop）を使用していた。8月26日から今度は勾配付き周回コースの路盤改修が始まり、常に直線坂路コースが使われていた。

本来は月曜日から金曜日の通常調教に勾配付き周回コースを使用し、土曜日の追切に直線坂路コースを使用しているようだ。日曜日は調教しない。

改修の目的は水はけの改善であり、路盤には①砂利が敷かれた後、②透水性のシートが敷かれ、③最後にポリトラックが敷かれていた。さらに両端には穴の開いたプラスチックにポリトラックが流れないようにメッシュを巻いたものが置かれ、雨水が地面に浸透するだけでなく両側から排水されるように工夫されていた。ポリトラックは「True Stride」という New York の会社の製品らしい。砂、繊維、ゴム、油で構成されている。坂路も周回コースも同じ製品を使っている。ポリトラックの厚さは7インチ＝17.8cm。新しいポリトラックは最初は明るい色をしているが、日に焼けて徐々に黒くなっていくとのこと。なお、ハローは2種類のものが使用されており、基本的には全調教が終了後に1回入っていたが、日によっては中間ハローが入ることもあった。



坂路コースの路盤改修

透水性のシート



新しいポリトラック「True Stride」

なぜウッドチップを使わないのか Dermot に聞いてみたが、馬場が安定しないため馬の腰に大きな負担がかかるので好きではないとの返答であった。このことに関して、私が研修に行っていた時期はデビューが遅れている2歳馬が多かったせいか、どの馬もトップラインの筋肉（最長筋）が弱い気がした。検温していても尾が細い馬が多く、乗ってみてもそれを感じた。日本だとラブミーチャンが中央の坂路調教が合わなくて地方に行き成功した例として有名だが、思えば彼女も米国血統だった。米国血統はトップラインの筋肉（最長筋）が弱いのか？弱くても生き残れるのか？逆に、日本の芝馬は肘の上にある筋肉（上腕三頭筋）および“ヨロ”（大腿二頭筋）が発達していなくてもトップラインの筋肉（最長筋）が強いのか？ちなみに、ダートは雨に弱く、砂が流れてしまうのと馬場が悪化してしまうので良くないと言っていた。

芝周回コース（Turf Course）は芝が得意な競走馬（Turf Runner）に使うほか、ブレーキング後の若馬にも使う。筋肉をつけ、ミスステップしない馬を作るのに有用とのこと。

・調教内容

通常調教の基本メニューは勾配付き周回コースで速歩で1周した後、駈歩で2周というもの。これを月曜日から金曜日まで繰り返す。乗り役はあえて手綱を緩めて乗り、馬がハミに頼らなくてもセルフキャリッジしてバランスをとって走行できるようにしていく。競馬場から休養に来たばかりの馬などは始め引っ掛かるが、馬場に起伏（Undulating）があるため足下に注意して走る必要があり、かつきれいな楕円形ではなくハート型（空豆型）なので窪みの部分で減速する必要がある、徐々に馬が落ち着いてくる（sedate）。デビュー前の2歳馬ももうかなり調教が進んでいたこともあり、調教は2歳馬と古馬が混合で行われていた。前進氣勢を促したい時には2頭併せで（主に2歳馬）、抑えたい時には単走で（主に古馬）調教が行われていた。

追切は土曜日に直線坂路コースで行われる。まず速歩で上り、涙滴（tear drop）部分に入る前に左手前の駈歩で発進し、スローキャンターで坂路の一番下まで下る。ここまでが

ウォーミングアップとしての運動である。その後坂路の一番下から発進し、直線部分で追切をする。入り口で右にカーブしており、これは右手前が出やすくなることを意味しており、全て左回りの米国の競馬場では最後の直線が右手前になるので、ゴール前の苦しい無酸素運動を模していることになる。涙滴部分を“流し”、速歩で退場する。坂路の頂上が涙滴形になっているので、馬が突然止まる心配がないため、馬の肢元にも良いだろうし、乗り役が落馬するリスクも軽減されている。涙滴部分は必ず左回りで走っていた。

運動強度的には、ここから競馬場に入厩してから約6週間で競馬に出走するぐらいのイメージで調教メニューを決めているとのこと。今まで研修してきた場所で比較すると、競馬場>ウインスター・トレーニング部門>マーゴーフาร์ม>ウインスター・ブレーキング部門という感じである。

<勾配付き周回コースでの通常調教>

GPS装置を用いて、移動距離と速度を測定した。まずは勾配付き周回コースでの通常調教。測定を行った馬は3歳牝馬で、呼吸器系の問題でプアパフォーマンスを呈し休養のためマーゴーフาร์มに来ていた。調教メニューは速歩で馬場まで向かった後、駈歩で2周（1周目がハロン21～27秒、2周目がハロン18～24秒）。騎乗してから下馬するまで15分18秒。総移動距離は4.3km。なお、馬場までの行き帰りは速歩。



勾配付き周回コース

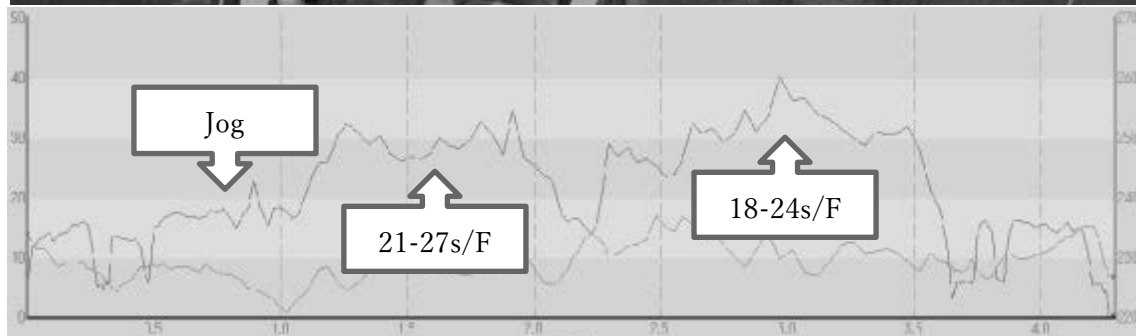
5. 育成牧場での調教（後期育成）



調教の様子



手綱はルーズ



勾配付き周回コースでの通常調教

5. 育成牧場での調教（後期育成）



厩舎から馬場までは速歩

路盤改修工事

<直線坂路コースでの追切>

続いて直線坂路コースでの追切。測定を行った馬は7歳せん馬で、肢元等に特に問題はなく単純に休養のためマーゴーフาร์มに来ていた。調教メニューは3ハロン速歩で上ったあと、涙滴部分に入る前に左手前の駈歩で発進し坂路の一番下まで下る（ハロン22.5～27.7秒）。その後、折り返し追切（ハロン12.9～14.7秒）。騎乗してから下馬するまで12分40秒。総移動距離は4.6km。



坂路の一番下

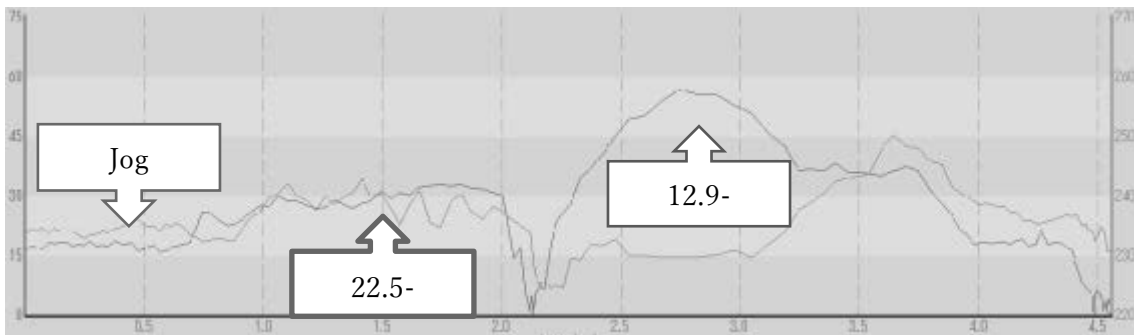
頂上は涙滴（tear drop）形

5. 育成牧場での調教（後期育成）



やはり手綱はルーズに

追切でも鑑革は長め



直線坂路コースでの追切

<芝周回コースでの調教>

芝周回コースは繁殖牝馬の放牧地の周囲に作られ、外埒はない。内埒も放牧地の牧柵である。芝が得意な競走馬に時々使っていた。そのほか、ブレーキング後の若馬にも使う。筋肉をつけ、ミスステップしない馬を作るのに有用とのこと。

5. 育成牧場での調教（後期育成）



芝周回コースでの調教

<スイミングプールの使用>

馬によっては時々、サラブレッドセンターの隣の Mill Iron Farm という牧場にあるスイミングプールを使用して調教していた。2015 年の BC スプリントの覇者 Runhappy が毎日使用しているそう。Michael が馬運車を運転して連れて行く。KESMARC というヴァーセイルスにあるリハビリ施設にもプールがありかつて使っていたが、KESMARC の方が若干利用料が高かったため場所を変えた（Mill Iron Farm は 1 回 25 ドル、KESMARC は 30 ドル）。マーゴーフาร์มでは屈腱に問題のある馬、喉に問題のある馬に対して週に 1 回程度使用している。最初は直線のプールで馴らし、2 回目から円形のプールに入れる。



最初は直線のプール

2 回目から円形のプール

<角馬場（arena）での 8 の字乗り>

マーゴーフาร์มでは 1 つのパドックに砂を入れ、角馬場として使用していた。口向きが悪い馬には角馬場で 8 の字乗りを繰り返し、中心部分で手前変換を繰り返すことで内方中心での回転を徹底して教え込んでいた。

5. 育成牧場での調教（後期育成）



パドックに砂を入れ角馬場に



8の字乗りを繰り返して矯正

<放牧地での騎乗>

月に1回程度、馬のリフレッシュ（気分転換）と捻挫をしない筋力バランスを思い出させるため、放牧地の芝の上で調教を行っていた。内容は速歩で1周、駈歩で1周と軽かった。



放牧地での騎乗

<ラウンドペンでの騎乗>

雨がひどい日はラウンドペンで騎乗していた。ブレーキングの過程では前後の距離がな
いぐらい集団でラウンドペンで騎乗するという調教を行っている。

5. 育成牧場での調教（後期育成）



ラウンドペンでの騎乗（写真はブレイキング段階でのもの）

<ゲート練習>

Barn5 と Barn6 の間に練習用のゲートがあり、Barn5 と Barn6 に在厩している馬は調教前後に常歩で通過する。その他の厩舎の馬は毎日はやらない。

坂路の一番下にもゲートがあるので、本格的な練習はそこで時々行っていた。手順はグランドスタッフが引いて入れ、扉は前後とも開けっ放しで、しばらく駐立させた後、速歩で出て行く。引く際には革の引手で、スナップ（金具）を使わず、いつでも放せるように革の部分を折り返してカップランに掛ける。ゲートの幅は2フィート（60.96cm）で、3つとも同じ幅。バッテリーを接続すれば電動で開けられるのだが、そこまではやっていなかった。



調教前後に常歩で通過



坂路の一番下にもゲート

<調教後の引き運動>

調教後は騎乗したまま馬房に入り、ライダーはそこで下馬し、次の馬に使用するため鞍と頭絡を外して持っていく。グランドスタッフは肢巻を外し、クーリングダウンのためシェッドローを引き運動する。通常調教後、馬の息が上がっていないとすぐに洗い場に連れて行き、水洗いをする。シャンプーは毎日使用せず、週に2回程度使っていた。人手

に余裕がある時は2人1組で（持つ者と洗う者に分かれる）、ない時は1人で（片手で馬を持って、もう一方の手で蛇口を持って）洗っていた。洗浄後、馬体はスクレイパー（靴べらのような形をしている）で水を切り、肢元は手で水を切り最後に繫輝予防のため、繫の後面にベビーパウダー（コーンスターチ）を振り掛けていた。洗った後、通常調教の日は5分間、追切の日は10分間引き運動する。追切の後は水桶を廊下に吊るし、時々少しずつ水を飲ませながら引き馬する。さらに、暑い日は運動直後の息が上がっている状態で馬体を冷やすために一度水をかけ、引き馬し、馬の呼吸が落ち着いてから水洗いする。基本的に無口に引き手のみで引き、チフニーやチェーンシャンクは使用しない。競馬場から帰ってきたばかりで興奮する馬にはチェーンシャンク（鎖の長さが65cmのもの）を鼻の上に回して使用。



調教後の引き運動

馬体の水洗い

<スタッフの昼休み>

グランドスタッフの昼休みは調教中に時間をずらしてとっていた。すなわち、調教がBarn5から始まる日はBarn7のスタッフは調教前に昼休みをとり、逆にBarn7から始まる日は調教後にとっていた。状況によっては4名グランドスタッフがいて2名ずつ時間をずらして休憩する場合もあったが、1日1時間の昼休みは必ず保証されていた。

ライダーはみな個人事業主でありマーゴーフームが雇用している訳ではないので、昼休みはなし。しかし、13:30に調教が終わった後、ブレイキングのシーズンを除いてはもう他に調教を行っている牧場はないため、そこで1日の仕事は終了となる。ちなみに、キーンランドの馬場開場が朝5:30であるため、毎朝5:15頃から9:30頃までキーンランド（もしくはサラブレッドセンター）で働き、その後マーゴーフームに来て、ブレイキングシーズンはさらに生産牧場でブレイキングまでを行っている牧場がいくつかあり、そこで働いている。米国流のブレイキング方法では円馬場さえあれば後はしばらく放牧地で騎乗するので、生産牧場でもブレイキングができる。9～10月のフロリダはまだ残暑が厳しく、暑さを嫌う一部の馬主はブレイキングまでをケンタッキーで行って、それからフロリダへ輸送して本格的な調教を開始するという選択肢をとっている。

・調教のポリシー

米国で生まれたサラブレッドは、生産牧場から育成牧場を経て競馬場へ入厩するのだが、Michael は育成牧場での役割は「馬に正しい（速く走れて、疲労を軽減し、故障しにくい）走行フォームを教え込むこと」と定めており、徹底していた。

ここでの調教は、要するに、有酸素運動を周回コースでやり、無酸素運動（迫切）を坂路でやる。そして、周回コースでの有酸素運動時（タイムがゆっくりの時）に口向きや走行フォームを改善する。メインとして使用している AW 周回コースは馬場に起伏（Undulating）があるため足下に注意して走る必要があり、かつきれいな楕円形ではなくハート型（空豆型）なので窪みの部分で減速する必要があり、徐々に馬が落ち着いてくる（sedate）。まずは馬が落ち着いていること（calm）、Michael はそれから調教が始まると考えている。

基本的に調教は左回りだが、時々右回りでも行う。この牧場にいる間は左右の筋肉をバランス良く鍛えてやりたいと考えている。また、若馬も休養馬も牧場にいる期間は枝バミを使用。若馬には開き手綱を教えやすいというメリットがあり（内方中心に曲げる）、古馬には休養している間に口向きを直したいという気持ちがある。普段ライダーはあえて手綱を緩めて乗り、馬がハミに頼らなくてもセルフキャリッジしてバランスをとって走行できるようにしていく。そして、必要な時だけ開き手綱を使って口向きを作っていく。口向きが悪い馬には角馬場で8の字乗りを繰り返し、中心部分で手前変換を繰り返すことで「ハミが口に当たった時にはライダーの指示に従う」ことを徹底して教え込む。そこで前述したとおり“良いライダー”すなわち普段からむやみやたらに“馬の口を引っ張らなくてもバランスをとって乗れるライダー”が必要になる、と繋がってくる。

余談になるが、私が馬術を始めた帯広畜産大学の馬術部では、馬が障害を飛ぶのを邪魔しないことが最重要課題であり、“障害を飛越中に馬の口を絶対に引っ張らないこと”を徹底して守るように教えられたが、それを思い出した。さらにいえば体がつき遅れないように膝と鐙でバランスを取るツーポイントでの騎乗も同時に教えられたのだが、障害馬術で大切な“馬の口を引っ張らないこと”と“馬の上でバランスを取る”ことは競走馬術でも全く同じと言える。ただし、競走馬術ではスピードが速くなる分、馬の動きにつき遅れないために鐙革を短くして乗る必要があり、膝と鐙のツーポイントでは馬にブレーキを掛けられなくなるために鐙のみのワンポイントで騎乗する運動神経が求められる。難しい馬術理論は知らなくても良いので、とにかく拳には頼らず鐙1点のみでバランスがとれるぐらい運動神経の良いライダーをマーゴーフาร์มは求めている（そして難しい理論はマネージャーが考える）。

・入退厩

<競馬場への入厩>

マーゴーフาร์มから近いキーンランド（Keeneland）、チャーチルダウンズ（Churchill Downs）、ターフウェイパーク（Turfway Park）、ベルテラパーク（Belterra Park）競馬場

5. 育成牧場での調教（後期育成）

までは Michael が馬運車を運転して連れて行く。近距離の輸送であれば両前肢のみ、遠距離であれば四肢に厩舎肢巻を巻く（到着後、外して回収）。入厩検疫はなく、ガードマンに必要な書類を渡せば入厩でき、調教師と引き継ぎの会話をして空き馬房に馬を置いて帰る。



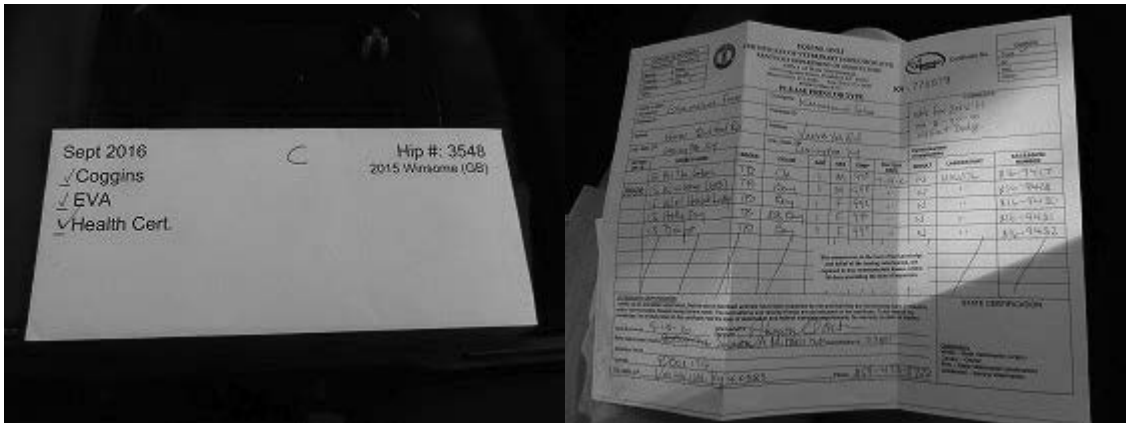
両前肢に肢巻



入厩検疫はない

<セリ会場からの入厩>

セプテンバーセールで落札された1歳馬を取りに行く際には、キーンランド競馬場の Stable Office に必要な書類を提出し、馬運車を馬積場に置いて、馬房までチェーンシヤックを持って歩いて行く。帰りに出口のガードマンに必要な書類を提出して終了。



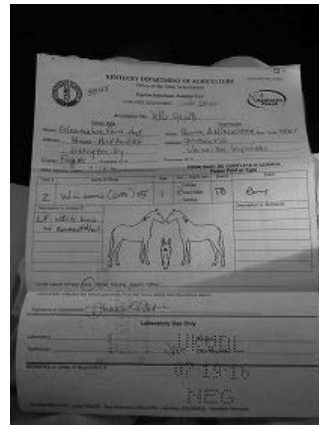
封筒にチェック欄が

伝貧の陰性証明

5. 育成牧場での調教（後期育成）



EVA の陰性証明



獣医師による健康証明

<他州からの入厩>

フロリダなど他州から入厩があった場合は、獣医師による健康診断と特徴検査（白と旋毛）および伝貧および EVA の抗体検査のための採血が行われる。ケンタッキーに限らず、繋養州が変わった際には州政府に提出する必要があるとのこと。米国ではジョッキークラブへの登録と、州政府への登録と、2通りの登録があるということになる。ちなみに、伝貧および EVA の抗体検査はセリに上場する際にも必要で一応 EVA は任意ということになっており、「EVA 検査結果未提出」という馬もいる。

・獣医療

ウインスターファームのブレーキング部門に歯科処置に来ていたハグヤードの Dr. Smith がマーゴーフームの主治医として往診に来ていた。

<Ice Boots>

屈腱がモヤモヤしている馬には Ice Boots と呼ばれる水の中に入れて冷やすブーツを履かせていた。マジックテープがすぐに弱くなるため、ダックテープ（ガムテープのようなもの）で留めていた。昼休み明けから放牧に出す前までに約 1 時間装着していた。馬によっては噛んで外してしまうため、Rap Last というトウガラシエキスのスプレーを噴霧し、噛まないようにしていた。クリボックスより刺激が強く、効果的である。メキシコ人たちは「Chili Spray（トウガラシスプレー）」と呼んでいる。

5. 育成牧場での調教（後期育成）



Ice Boots



Rap Last

＜ポルティス＞

日本でいうアップタイトもしくは粘土。内側管骨瘤などで普段から毎日塗布している馬と、追切後のみ両前肢腕節以下に塗る馬がいる。追切後は、その馬が昼間放牧もしくは夜間放牧されている馬であればポルティスを塗った後水で濡らした紙を貼り、さらに“布団”を当て肢巻を巻く（ポルティス・バンテージと呼んでいた）。昼夜放牧されている馬はただ腕節以下に塗布するのみで、流さずにそのまま放牧し、翌朝シャワーで洗い流す。



ポルティスの塗布

水で濡らした紙を貼る

5. 育成牧場での調教（後期育成）



“布団”を当て肢巻を巻く

<厩舎肢巻（Stable Bandage）>

昼間放牧もしくは夜間放牧の馬のうち、足が浮腫む馬には厩舎肢巻を装着する。毎日15:00頃、Dermot が指定した馬、指定した肢に巻く。70%イソプロをかけて手でマッサージした後、ペーパータオルを巻き、“布団”を当てて肢巻を巻き、最後は紙テープで留める。包帯を噛む馬には紙テープの上に Rap Last を噴霧する。昼間放牧の馬は翌朝まで巻きっぱなし。夜間放牧の馬は放牧前（19:00）に外す。厩舎肢巻は毎日とは選択せず、汚れていなければ再使用する。



マッサージ

ペーパータオル

5. 育成牧場での調教（後期育成）



布包”を当てて肢巻を巻く

翌朝まで巻きっぱなし

<セラプレート>

Barn5 にはセラプレート（TheraPlate）という地面が細かく振動するリハビリ装置があり、内側管骨瘤の馬などに用いられていた。毎日 20～30 分、ヘイネットに入れた乾草を食べさせながら一人が保持して使用する。



セラプレート

一人が保持

<カイロプラクティック>

女性の開業獣医師もしくはハグヤードの Dr. Monge が時々来場し、歩様に問題のある馬（特に寛跛行）にカイロプラクティックの施術を行っていた。両者とも鍼治療も行っている。女性獣医師は小柄なため、スーツケースにカバーをかぶせたものを持ち運び、台として使用し背腰の施術を行っていた。アイルランド人であるファームトレーナーの Dermot は、レーザーやショックウェーブは「自然じゃないから」という理由で嫌っていた。一度、繋靱帯炎の馬に試してみて効かなかったこともショックウェーブ嫌いになった原因らしい。ちなみに、ショックウェーブは 1 回約 400 ドルと高価で儲かるため、獣医師はさかんに勧めてくるとのこと。



女性獣医師

Dr. Monge

<Blue Lotion>

カイロプラクティックが得意な Dr. Monge が背腰の弱い馬に使用を勧めていたローション。中身はサリチル酸メチルが 3.0%、メントールが 1.7%、カンフルが 1.7%。1 本 18 ドル。これを調教直前に腰に塗り、お湯で温めたタオルを掛けて 15 分放置せよとの指示。効果を判定する前に同馬は薬剤を塗っていた場所に皮膚炎を起こし、使用が中止された。



Blue Lotion



腰に塗り温めたタオルを掛ける

<内側管骨瘤>

夏のこの時点でまだ競馬場に入厩できていない 2 歳馬たちは、運動器に疾患を抱えているものが多かった。特に多かったのがオフセットニーと高めの内側管骨瘤のパターンである。内側管骨瘤には①ポルティスの塗布、②コルチコステロイドの皮下注射、③凍結外科（cryosurgery）、④焼烙（pin fire）の 4 つの治療法が選択されていた。軽症では①が選択され、重症になるにつれて②<③<④と進んでいく。

②コルチコステロイドの皮下注射は、ハグヤードの跛行診断部門である Sport Horse から女性獣医師が来て行っていた。デトミジンとブトルファノールで鎮静した後、ヒビテンでスクラブし、骨瘤の直上の皮下にベタメサゾン 1V（30mg/5ml）とアミカシン 1V

5. 育成牧場での調教（後期育成）

（500mg/2ml）を混合したものを 18G 針で注射していた。処置後は乾包帯。



内側管骨瘤

コルチコステロイドの皮下注射

③凍結外科（cryosurgery）は、ハグヤード（外科）から Dr. Rodgeron が助手を連れて来て行っていた。実際に施術したのはインターン。魔法瓶から液体窒素が噴き出る専用の装置「CRYOGUN」を使い、骨瘤に当てていた。狙いは鎮痛で、一時的に神経を凍傷で破壊し（6週間効果あり）、痛みを感じていない間に炎症は治まるだろうという感覚。競馬場で出走前の競走馬にも使用して良いそう。毛が白くなって痕が残る。骨瘤のほか、サルコイドにも使われている。術後は抗生剤（バシトラシン・ネオマイシン・ポリミキシン B の合剤）の軟膏を塗布し、乾包帯。3日間ほど放牧を中止する。



液体窒素が噴き出る専用の装置「CRYOGUN」を使い、骨瘤に当てる

④焼烙（pin fire）は日本のよりもだいぶ深く焼く。1カ所辺り約6秒焼きゴテを当てる。皮下の神経を焼き切るイメージである。処置後は45日間調教せず休養させる。処置後20日間毎日患部にイソジンとメタノールの合剤を塗布し、乾包帯装着。その後は良好であれば包帯を外す。



皮下の神経を焼き切る



乾包帯装着

<屈腱炎および繋靱帯炎>

まずは超音波検査で状態を把握する。以前はショックウェーブを行っていたが、どうも効果を感じられず、現在は行っていない。いまだ治療法に決め手がないのが現状。

<ブリストスター>

これだけ獣医療が進んだ米国でもまだブリストスターが使用されていた。オーナーの希望で、超音波検査で浅屈腱が太い（immature なだけ）と言われた2歳馬に対して行われていた（Dermot がしぶしぶ行っていた）。まず周囲の皮膚にワセリンを塗布して保護し、歯ブラシでブリストスター剤を屈腱（の上の皮膚）に塗る。処置後は馬が舐めないように“涎掛け”を装着。ブリストスター剤の塗布は1ヶ月に1回を4回繰り返す。4ヶ月間放牧はせず、引き運動のみとなる。

<馬具の擦傷>

馬具が当たる部分の擦傷（皮膚炎）にはミネラルオイル（日本の流パラよりさらさらしている）を塗布していた。

<繋輝>

昼夜放牧をしている馬が多いのにもかかわらず、湿度が低いせいか繋輝は日本と比較し圧倒的に少ない。もし痂皮があればミネラルオイルを塗り軟らかくしてから擦って落とす。

<パピローマ>

米国では伝統的に（？）バナナの皮の内側（果実側）を塗れば効くという迷信（？）があるようだ。正式な治療薬としては Wart Compound（薬品名 Podophyllum20%）というイソジンのような液体を2ml ポンプで吸い、口の周りの腫瘤に1日1回（昼飼後放牧前

5. 育成牧場での調教（後期育成）

に) 塗布していた。「いずれ治る」という感覚で、正直なところ薬の塗布を忘れる日も多々あったが、自然に治っていた。



パピローマにはバナナ

Wart Compound

<挫創>

例えば集牧時に挫創が見つかった場合、重度であれば獣医師の診察を受け縫合が必要かどうか判断する。軽症の場合、洗浄した後「Fura-Zone」というニトロフラゾン（抗生剤）の入った黄色い軟膏を塗布し、ラップを巻いてから“布団”を当て、肢巻を巻く。これを Sweat Bandage と呼んでいた。



ニトロフラゾンの軟膏を塗布



ラップを巻いてから“布団”を当て、肢巻を巻く

マーゴーファームに限らず米国の牧場では、フレグモーネの予防に抗生剤を使う場合はトレセンのカナマイ、育成牧場のマイシリンのような感覚で SMZ と呼ばれるサルファ剤の錠剤（Sulfamethoxazole and Trimethoprim Tablets）が使われている。12 錠を 1 日 2 回経口投与する。

<打撲傷>

腫脹があるが明らかな外傷が見つからない時は、「ButaVet Sweat」というルードアンドリドルが作っているフェニルブタゾンとヒドロコルチゾンを調合した白い軟膏を塗布し、ラップを巻いてから“布団”を当て、肢巻を巻く。これも同じく Sweat Bandage と呼んでいた。

<血腫>

複数頭で放牧しているため、胸前などに血腫ができることが時々あった。基本的には切開せず、DMSO の軟膏とニトロフラゾンの軟膏を混ぜて塗布していた。

<Bone Scan>

核シンチグラフィ検査が必要になった際はハグヤードで 1 泊する（放射性同位体を使うため）。絶食など特に事前の準備は必要ない。検査を行った 1 頭、古馬の牝馬は、もともと後肢の歩様が良くなかったため検査を受け、Bone Scan で両脛骨の骨折（放射性同位体の集積を骨折 fracture と呼んでいた）が見つかったため引退し、繁殖牝馬にするとのこと。

<プアパフォーマンスを呈する馬>

プアパフォーマンスを呈して競馬場から休養に来た馬に対しては、ハグヤード（外科）から Dr. Hunt を呼んで内視鏡検査および心音の聴診を行い、必要があれば運動時内視鏡

検査（Dynamic Endoscope）を実施する。この馬は呼吸音自体には異常がなかったため、運動時内視鏡検査は実施されず。内視鏡検査にて気管粘液の増量が認められ、小気道炎症性疾患（Small Airway Inflammatory Disease=SAID）と診断され、2種類の気管支拡張剤（Albuterol Sulfate1日2回および Fluticasone Propionate1日1回）を処方された。気管支拡張剤は簡易式ネブライザーで投与された。薬が入ったスプレー缶をプラスチック製のネブライザーに取り付け、缶を押すと薬が気化される。



気管支拡張剤投与用の簡易式ネブライザー

別の馬では、Equine Analysis Systems 社の Dr. Rainbow を呼んで運動時の呼吸音の検査および運動後の血液検査を行った。Dr. Rainbow による運動時の呼吸音の検査では、頭絡に特殊なマイクを装着し、そのほか乗り役にカメラを装着し、腹帯に GPS を装着し、タイムを測定していた。運動時の呼吸音の検査とは音を解析することで異常呼吸音をより客観的に理解でき、ブアパフォーマンスに繋がっているかわかるという。

運動後の血液検査では、追い切り 20 分後に採血し、全血だけでなく厩舎に遠心分離機を持ち込み血漿を分離していた。乳酸値ではなく独自の数値を測定しているそうだが、企業秘密のため教えてくれなかった。色々試してみて、乳酸値より良い数値を発見したとのこと。Equine Analysis Systems 社はセリの際に心エコーや尾の毛を使った DNA 検査などを行って顧客に良い馬を勧める獣医系のエージェンツ集団であるが、セリのない時期はこうして育成牧場で運動科学的な仕事も行っている。なお、Dr. Rainbow はダーレーフライングスタートの卒業生である。



運動時の呼吸音の検査

<去勢>

ハグヤード（外科）から Dr. Rodgerson が助手を連れて来て行っていた。実際に執刀したのはインターン。去勢されたのはうるさくかつ種牡馬にするほどの血統的な価値がないという2歳馬2頭。馬房内で立位鎮静下で馬の左側から行っていた。鎮静にはデトミジンとブトルファノールを静脈内投与。局麻はリドカインを精索ではなく精巣に注入していた。イソジンでスクラブした後、メスで切皮。蹴られるのを防ぐため、まず右の陰嚢を切皮し、次に左の陰嚢を切皮。JRAのように1個ずつ精巣を挫切するのではなく、2個とも露出させてから挫切していた。精索が太いため、精管と血管の2つに分けて、精巣1つにつき2回挫切していた（一度にまとめて挫切してしまうと組織の挫滅があまりになり出血が多くなるため）。去勢鉗子は一撃で挫切されるタイプを使用。挫折した後は血液が溜まらないように皮膚を切開して終了。術後に抗生剤（ペニシリン、ゲンタマイシン）、抗炎症剤（フルニキシソン）のほか、破傷風のワクチンを打つ。

術後は出血を促すために放牧し、調教も行う（速歩のみ）。放牧は虫を防ぐため、夜間放牧にする。毎日、術創を水で洗浄し（指で開いて溜まっている血液を出す）、15分程度流水で冷やす。



局所麻酔

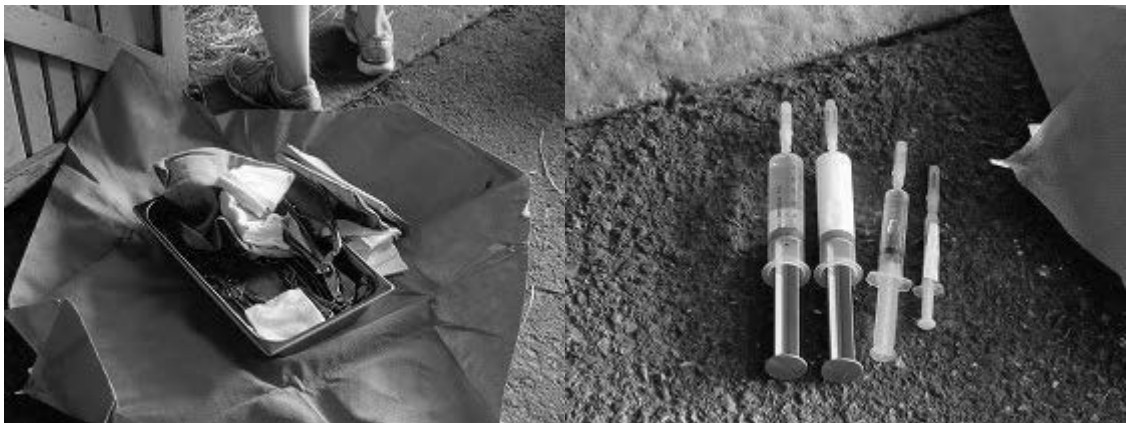
メスで切皮

5. 育成牧場での調教（後期育成）



2 個とも露出

挫切



挫切鉗ほか器具

術後投薬する薬剤

<Tie-Back 後の術後管理>

ハグヤードで Tie-Back 手術を受けた直後の馬が入厩したこともあった。術後の投薬はゲンタマイシン（1 日 1 回静脈内投与）、ペニシリン（濃度 30 万 IU/ml の製剤を 30ml なので 18,000IU/kg、1 日 2 回筋肉内投与）、フェニルブタゾン（1g を 1 日 2 回経口投与）、ガストロガードを 4 日間。その他、術部の洗浄、冷却（冷水で濡らした綿を当てる）、Alu Spray の塗布を 1 日 2 回、術部の腫脹が無くなるまで継続された。舎飼にし 1 日 2 回 20 分程度引き運動していたが、これはちょうど昼間放牧に使えるパドックが足りなかったためとのことであった。なお、Tie-Back 手術を受けた馬は咳をしやすいうように低い位置に飼い桶を付ける。



術部には Alu Spray

飼い桶は低い位置に

<牝馬に対するキャスリック縫合>

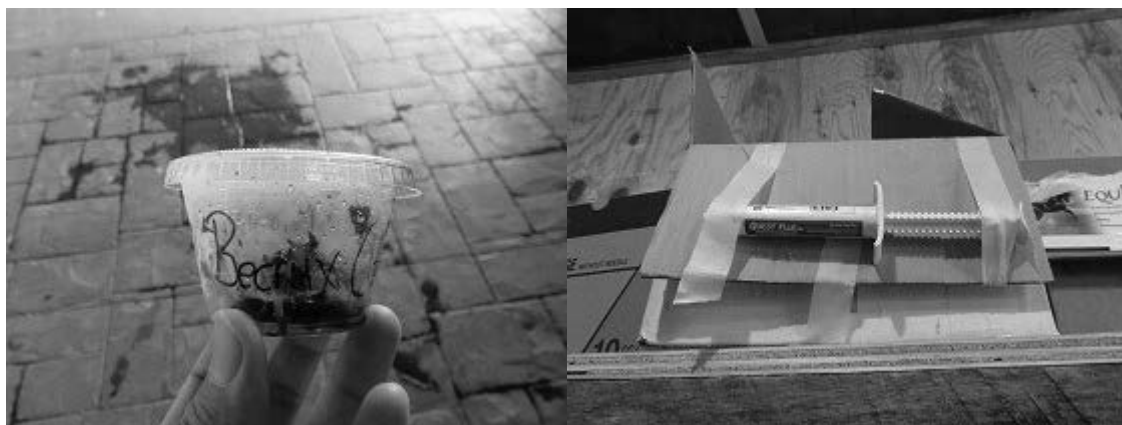
繁殖分野の報告書に記載してきたが、米国ではガフでなくてもキャスリック縫合されるのが一般的である。何と競走馬のうちから陰部を縫合されている馬もいる。マーゴーフームでは必要ないと感じているため積極的には行っていないが、他の牧場から移ってきた牝馬の中にはまだ2歳なのにかかわらずすでに陰部縫合されている馬がいた。

<フケ止め>

発情（フケ）が来て調教に支障をきたすような牝馬には、プロジェステロン製剤であるレギュメイトの経口投与が行われていた。

<糞便検査および駆虫>

新入厩の馬および在厩馬は3ヶ月に1回、糞便中の虫卵検査を実施していた。駆虫は基本的に Quest Plus（モキシデクチン+ブラジカンテル）、Equi Max（イベルメクチン+ブラジカンテル）、Panacur（フェンベンダゾール、5日間連続で投与する必要がある）の3剤のローテーション。



糞便検査

Quest Plus

5. 育成牧場での調教（後期育成）



Equi Max

Panacur

<伝貧検査およびワクチン接種>

ダービーダンファーム繁殖部門の回に記載。

<ドバイへの輸出検疫>

Barn8 が輸出検疫用の厩舎として使用され、ドバイへ行く牡1頭・牝1頭が入っていた（2頭ともデビュー前の2歳馬）。厩舎に立ち入る際には、靴を消毒し、タイベックを着る。そして、名前と入退室時間を紙に記録していた。放牧はできないため、午前と午後の2回、グラスビッキングと引き運動を行っていた。そして、午前の引き運動時に2名で来て、1名が引き運動をしている間にもう1名がボロ出しをする。敷料は麦稈を使用し、ボロと汚れた麦稈は細かく砕いて放牧地に撒いていた。ちなみに、麦稈はインディアナ州産であった。これらの馬の調教は、他の馬より先に行われていた。しかし、美浦での輸出検疫時のように調教後の馬場の消毒はなく、単純に他の馬（米国に留まる馬）と分けて調教を行えば良いらしい。



入退室時間を記録



汚れた麦稈は放牧地に撒く

＜フレグモーネ＞

実は7月29日の朝の作業中に輸出検疫中の牝馬の方が放馬してしまい、両後肢の球節前面に挫創を負った。外傷自体は右後肢の創が深く、獣医師が生理食塩水を関節内に投与し、その創から漏れ出ないかすなわち関節包が破綻していないかの検査がなされ、結果としては破綻していなかった。しかし、治療に時間がかかるということで、輸出は延期され検疫は一時解除された。

同馬はその後、8月4日に右後肢にフレグモーネを発症してしまった。同じ獣医師が診てまず傷口から出ている滲出液をスワブで採材し、細菌培養検査に出していた。また、DRで骨に異常がないことを確認した。細菌培養検査の結果が出るまで、とりあえずオキシテトラサイクリンとゲンタマイシンの投与が開始された。ニトロフラゾンの入った黄色い軟膏を塗布し、ラップを巻いてから“布団”を当て、肢巻を巻いた（Sweat Bandage）。毎日水冷20分。



フレグモーネ

傷口のスワブ検査

さらに、8月12日には排膿したため、Sweat Bandage から通常の厩舎肢巻に変更。再度滲出液をスワブで採材し、細菌培養検査に出していた。DR および USD を実施し、異常なし。投薬を SMZ およびフェニルブタゾンの経口投与に変更。

欠損創がなかなか埋まらないため、8月16日にはオゾン療法が試みられた。これはオゾン療法を専門にやっている業者の診療助手が来て、電話で獣医師に指示を仰ぎながら行っていた。ヒト用のシューズカバーをかぶせて30分オゾンガスに曝露していた。特に免許は必要ないとのこと。

5. 育成牧場での調教（後期育成）



オゾン療法



シューズカバーを利用

・装蹄

毎週火曜日と金曜日の2回、契約している装蹄師が来場し、順次装削蹄を行っていた（月に1回の改装が基本で、緩んだりした馬がいたら随時変える）。私が研修していた期間で牧場全体で1日7～8頭。ブレーキングが始まる秋以降には馬が増えるため、装削蹄の頭数も増える。多くは両前肢のみ装蹄していた。競馬場で使われているスパイク鉄（Toe Grab）ではなく、通常のアルミニウムの兼用蹄鉄。鉄の減りが速い馬はアルミではなくスチール製の蹄鉄を履かせていた。繋の立っている馬には反回を良くするため、セットバックで装蹄されていた。競馬場への入厩が近く、パドックで1頭で放牧されている馬の中には四肢装蹄されている馬もいた。逆に競馬場の入厩予定がまだ先の2歳馬は四肢裸蹄が多かった。朝の集牧時に落鉄が見つかった馬については、通常調教については落鉄したまま調教し、迫切の日は装蹄師を呼び出して装蹄してから調教していた。

マーゴーファームでの研修中に削蹄および装蹄にかかる料金を聞くことができた。概ね日本と変わらないが、特殊装蹄になると米国の方が割高になるようである。

	日本	米国
当歳（削蹄）	30/4	25-50/4
当歳（矯正）	60/1	150/1
1歳（削蹄）	30/4	25-50/4
繁殖牝馬（削蹄）	40/4	25-50/4
繁殖牝馬（特殊装蹄）	100/1	250/1
装蹄（両前肢）	90/2	100/2
競走蹄鉄（四肢）	120-200/4	150-200/4
競走蹄鉄（接着）	100/1	200/1
乗馬蹄鉄（四肢）	100-150/4	200-250/4

削蹄および装蹄料金（単位は米ドル）

<落鉄予防のためワンコを装着>

放牧中の落鉄を防ぐため、対側肢の蹄鉄を踏んで落鉄させたことのある馬には大きめのワンコを装着していた（前肢のみ）。常时装着しっぱなしで、調教中も外さない。洗浄時は反転させて、そのまましばらく乾燥させ、放牧前に通常に戻す。

・放牧地の管理

放牧地の管理は繁殖&イヤリングマネージャーの Jon が指示していた。

<自家製乾草作り>

メンテナンス部門と繁殖・イヤリング部門のスタッフは兼務。朝夕集放牧をし、日中はトラクターに乗っている。乾草作り（敷料にする）は、刈り倒しとテッター掛けまではスタッフが行い、人手と時間のかかるロールにする作業は専門の業者に外注していた。



刈り倒し

テッター掛け

<堆肥>

マーゴーフームでは日頃出るボロと敷料で堆肥を作成し、放牧地に散布していた。

<石灰散布（ライミング）>

ケンタッキーの他の牧場と同じく、放牧地の pH を上げるため業者に依頼して石灰を散布している。天然のライムストーンを粒状にしたもの。



石灰の散布

粒状

<雑草の除去>

雑草（weed）の除去に使われているのは日本と同じくラウンドアップ（Roundup）であった。ジョークで「ガソリンを撒けば全て死ぬぞ」と言っていた。そういう事故がたびたび起きているらしい。

<播種>

放牧地に蒔いている種はブルーグラス、ライグラス、フェスクが主体のミックス。やはりこの牧場でも、育成馬の放牧地にはフェスクを蒔く（寒さに強く、冬も緑を保てるため）。しかし、繁殖牝馬がいる放牧地にはフェスクを蒔かないとのことであった（胎盤の異常を引き起こすため）。

ちなみに、検疫厩舎の馬をグラスピッキングする際によく観察していると、ブルーグラスと赤クローバーの嗜好性が高いようである。新しい放牧地に馬を放すと、まず真っ先にその2種類が食べ尽くされる。



放牧地への播種

・GPS 装置を用いた放牧地での運動量調査

マーゴーフาร์มには休養馬が多くおり、放牧している際にどのくらい運動しているか把握することはリハビリメニューを考える上で重要である。GPS 装置（Transystem 社、747ProS、）での運動量調査を提案したところ、Michael はとても喜んでくれた。今回は移動距離だけでなく、常歩、速歩、駈歩の割合も計算した。概要を報告する。



GPS 装置



無口頭絡に装着

・結果

<砂パドック (Round Pen) >

関節鏡手術後のリハビリ中の馬などは砂パドック（全て円形であり Round Pen と呼ばれていたが、調教を行う円馬場は別、面積約 0.15ha）に昼間放牧されていた。Michael の思惑どおり移動距離は少ないものの、馬によっては食べ物がないためか落ち着かない（速歩や駈歩の割合が多い）馬もいるようだ。運動制限は必要だが採食制限は必要ない馬に関しては、ヘイネットを使用し乾草を与えるなどした方が良いのかもしれない。

昼放牧（砂 P）	性別	年齢	時間	距離	静止	常歩	速歩	駈歩
Horse A	めす	2	2	1.2	75.7	23.8	0.5	0.0
Horse B	めす	1	5	3.5	67.4	29.4	2.9	0.7

砂パドックに昼放牧されている馬の移動距離

<パドック>

マーゴーフาร์มには小パドック（約 0.3ha）と中パドック（約 0.7～0.8ha）があったが、分けるとデータ数が少なくなるため同一として扱った。まずは昼放牧されている馬のデータだが、Horse C の数値を見ると、初めてパドックに放牧された日とその 1 週間後で移動距離および速歩、駈歩の割合が異なることがわかる。これは初日はどうしても興奮するためであり、運動器疾患があって走らせたくない馬に関しては集団放牧でなくても初日はキシラジンなどで鎮静した方が良いのかもしれない。また、6 時間放牧されているのは騎乗調教を行っていなかった馬たちのデータであり、騎乗しないと速歩および駈歩の割合が増えるこ

5. 育成牧場での調教（後期育成）

とがわかる。

昼放牧 (P)	性別	年齢	時間	距離	静止	常歩	速歩	駈歩
Horse C (1wk)	めす	3	2	1.0	67.8	30.5	1.7	0.0
Horse D	めす	3	3	1.6	70.2	26.9	2.7	0.2
Horse C (1Day)	めす	3	3	2.8	60.1	33.9	4.9	1.1
Horse E	めす	2	6	4.3	67.8	28.7	3.1	0.4
Horse F	めす	2	6	4.4	66.4	28.9	4.1	0.6

パドックに昼放牧されている馬の移動距離

次に昼夜放牧されている馬のデータである。放牧されている時間に比例して移動距離は長くなるものの、静止している割合が増えることがわかった。

昼夜放牧 (P)	性別	年齢	時間	距離	静止	常歩	速歩	駈歩
Horse G	めす	2	18	6.8	82.3	16.5	1.1	0.1
Horse H	めす	2	18	7.8	78.4	19.8	1.7	0.1
Horse I	めす	2	18	8.6	78.3	19.9	1.7	0.1
Horse J	めす	2	18	8.8	70.2	28.3	1.4	0.1

パドックに昼夜放牧されている馬の移動距離

<大放牧地>

デビューがまだ先の2歳新馬や休養馬のうち肢元に問題のない馬は14:00から昼夜放牧され、やはり競馬に出走するのはまだ先だが脚部不安があり運動量と採食量を制限したい馬は19:00から夜間放牧されていたのだが、今回の調査により運動量には差がないことが判明した。放牧地の面積は、昼夜放牧に使用されていた放牧地が約5.6ha。夜間放牧に使用されていた放牧地が約2.1ha。

まずは昼夜放牧のデータだが、パドックでの昼夜放牧と同じく移動距離は長いが静止している割合が多い。

昼夜放牧（大放牧地）	性別	年齢	時間	距離	静止	常歩	速歩	駈歩
Horse K	めす	2	17	6.4	79.0	19.9	1.0	0.1
Horse L	めす	2	17	8.6	74.7	24.0	1.3	0.0
Horse M	めす	2	17	9.8	78.1	19.3	2.5	0.1

大放牧地に昼夜放牧されている馬の移動距離

次に夜間放牧のデータでは、放牧時間は約5時間短縮されていたにもかかわらず、移動距離は同等かむしろ長いぐらいで、静止している割合が少ないことがわかる。

5. 育成牧場での調教（後期育成）

夜間放牧（大放牧地）	性別	年齢	時間	距離	静止	常歩	速歩	駈歩
Horse N	めす	3	12	6.4	78.7	20.0	1.1	0.2
Horse O	めす	3	12	10.0	71.3	26.1	2.4	0.2
Horse P	めす	2	12	10.0	73.3	24.7	2.0	0.0

大放牧地に夜間放牧されている馬の移動距離

以上の結果をまとめたのが下表である。データは中央値（最小値 - 最大値）で示している。
昼間放牧では運動が制限できているものの、12 時間以上の放牧では放牧地の大きさにかかわらず 8～10km 程度運動してしまうことがわかった。

群	頭数	年齢	時間	距離	静止	常歩	速歩	駈歩
昼放牧 (砂 P)	2 (全頭めす)	1 歳 1 頭 2 歳 1 頭	3.5 (2-5)	2.4 (1.2-3.5)	71.6	26.6	1.7	0.4
昼放牧 (P)	5 (全頭めす)	3 歳 3 頭 2 歳 2 頭	3 (2-6)	2.8 (1.0-4.4)	67.8	28.9	3.1	0.4
昼夜放牧 (P)	4 (全頭めす)	2 歳 4 頭	18 (18-18)	8.2 (6.8-8.8)	78.4	19.9	1.6	0.1
昼夜放牧 (大放牧地)	3 (全頭めす)	2 歳 3 頭	17 (17-17)	8.6 (6.4-9.8)	78.1	19.9	1.3	0.1
夜間放牧 (大放牧地)	3 (全頭めす)	3 歳 2 頭 2 歳 1 頭	12 (12-12)	10.0 (6.4-10.0)	73.3	24.7	2.0	0.2

マーゴーフームの馬の移動距離のまとめ

以前ダービーダンファームの 1 歳馬で調査した際、セリに上場される馬（夜間放牧；約 13 時間）と上場されない馬（昼夜放牧；約 22 時間）でやはり移動距離に差は認められなかった。

群	調査頭数	放牧時間	移動距離 (km)
①パドック	5 頭 (牡 4 めす 1)	13 (12-14)	3.5 (3.3-4.1)
②細長い放牧地	5 頭 (全頭めす)	13 (13-13)	7.1 (5.0-8.7)
③正方形の放牧地	5 頭 (全頭めす)	13 (13-13)	9.1 (7.3-9.9)
④大放牧地（非上場馬）	5 頭 (牡 2 めす 3)	22 (20-23)	8.6 (8.4-11.6)

ダービーダンファームの 1 歳馬の移動距離のまとめ

以上のことから、約 12 時間を超えると放牧時間を延ばしてもそれ以上運動量は増えないということになる。このことは 1 歳馬のセールス・プレップでは有利になり（日焼けを防ぐため夜間放牧に切り替えても運動量は減少しない）、休養馬のリハビリには不利になる（運動制限するため夜間放牧に切り替えても効果がない）と言えそうだ（正しくは頭数が少なくて統計できていないため、あくまでも推測）。

なお、今回の調査では、時速 0～0.5km を静止（Stop）、0.5～4km を常歩（Walk）、4～10km を速歩（Trot）、10～20km を駈歩（Canter）と分類した。

・所感

育成馬を調教していると、坂路での迫切の速度が上がるのに比例して、周回コースでの通常調教時には馬を抑える必要が出てきて馬の走行フォームを崩してしまう（どんどん“前のめり”のバランスになってしまう）ケースが多々あり、それを坂路で立て直している場合が多いのだが、本来であれば長く乗る周回コースでこそ走行フォームを作るのが理想的である。そうした意味で、この牧場は私が現時点で考えている理想に近いやり方で調教していた。「勾配付き周回コースを作ったこと」と「調教時間を遅くするという発想で良い乗り役を確保できるようになったこと」がマーゴーフームの最大の特長だといえる。

さらに、調教時間を遅くしていることの副産物として、オーナーが見に来やすいというメリットもあった。特に毎週土曜日にはたくさんのオーナーが見に来ており、さらに彼らが連れてきた友人が「じゃあ、私もここに預けようかな」と新規の顧客として定着するという好循環が生まれていた。

日本人バイヤーの中にも私が研修した 2016 年からこの牧場に 1 歳馬を預託する者が現れた。具体的には、セプテンバーセールで購入した 1 歳馬をこの牧場でブレイキングし、来年の春まで調教した後、ファシグティプトン・フロリダセールや OBS マーチセールといったフロリダのトレーニングセールで購入した 2 歳馬と一緒に検疫し、日本へ輸入するという計画だそうである。現在、フロリダでは検疫が行われておらず、フロリダで育成された馬も全部ケンタッキーに輸送されて検疫を受けてから日本へ出発している状況であるため、ケンタッキーで調教ができるならフロリダへの往復の輸送が必要なくなるというわけである。フロリダには温暖であるというメリットがあるが、私の知る限り坂路のある育成牧場は皆無である。マーゴーフームのように有酸素運動を周回コースでやり、無酸素運動（迫切）を坂路でやるという調教スタイルの方が日本で調教を再開する際にスムーズに移行できるのではないかと思う。

6. 競馬場での調教および出走

スティーヴン・アスムッセン厩舎 (Steven Asmussen Racing Stable)

「10月のキーンランド開催に合わせて、どこか競走馬厩舎で研修したい」とダービーダンのオーナーであるジョン・フィリップスに相談したところ、スティーヴン・アスムッセン師が開幕日から最終日まで通して滞在するとのことで紹介してもらい、研修することになった。

・スティーヴン・アスムッセン調教師

アスムッセン師は、父が調教師、母が牧場主という競馬一家に生まれ、兄のキャッシュ・アスムッセン氏は騎手として第1回ジャパンカップをメアジードーツで制している。自身も騎手であったが1986年に調教師として開業し、カーリン、クリエイター、ガンランナーなどの活躍馬を管理している。2009年には年間623勝をあげ全米最多勝記録を更新し、2016年に名誉の殿堂入りを果たした。

・アスムッセン師のポリシー

2015年の北米リーディング（賞金ベース）は7位であった。その内容を見てみると、アスムッセン師のポリシーが見えてくる。すなわち出走回数および出走頭数が群を抜いて多く、勝率は低いものの入着回数の多さで賞金を稼ぐというタイプの厩舎である。

順位	調教師名	総賞金	出走回数	出走頭数	勝率	3着内率
1	Todd A. Pletcher	\$26,278,647	1,124	317	24%	53%
2	Chad C. Brown	\$20,256,459	768	242	26%	57%
3	Bob Baffert	\$16,221,741	388	132	21%	53%
4	Mark E. Casse	\$13,697,149	896	265	18%	49%
5	Jerry Hollendorfer	\$11,625,395	1,114	262	20%	51%
6	William I. Mott	\$11,435,065	720	213	18%	46%
7	Steven M. Asmussen	\$10,768,759	1,499	384	17%	48%
8	Kiaran P. McLaughlin	\$9,635,721	393	118	24%	50%
9	Christophe Clement	\$9,218,937	505	166	20%	50%
10	H. Graham Motion	\$7,751,107	700	231	14%	42%

2015年の北米リーディング

・Steven Asmussen Racing Stable at Keeneland

36号厩舎の全部（32馬房）および35号厩舎の一部（8馬房）をキーンランド競馬場から借りて使用していた（計40馬房）。9月27日（火）にまずスタッフだけ先に来て馬房に麦稈を敷くなど馬の受け入れ準備を行い、翌9月28日（水）に馬の輸送（受け入れ）を

行った。馬はサラトガ（ニューヨーク州）、エリスパーク（ケンタッキー州）、チャーチルダウンス（ケンタッキー州）などの競馬場のほか、育成牧場から2歳新馬や休養馬も集まってきた。

人（スタッフ）の方はベルモントパーク競馬場（ニューヨーク州）に常駐し、ベルモントパークの開催（5～10月）およびアケダクトの開催（1～4月、11～12月）のほか東海岸の競馬場に遠征するチームと、季節毎にフェアグラウンズ競馬場（ルイジアナ州、1～3月および11～12月開催）、オークローンパーク競馬場（アーカンソー州、1～4月開催）、ローンスタールパーク競馬場（テキサス州、4～7月開催）、キーンランド競馬場（4月および10月開催）、チャーチルダウンス競馬場（5～6、9、11月開催）、サラトガ競馬場（7～9月開催）、レミントンパーク競馬場（オクラホマ州、8～12月開催）と競馬場を移動するチームの二手に分かれているらしい。そして、後者は開催が重なることもあり、さらに二手に分かれるように2名のアシスタントトレーナーがいる（計3名）。さらに、開催競馬場の近くの非開催競馬場を“外厩”として使用し、開催競馬場にはレース直前の馬しか置いていなかった。

かつてはフロリダ州（ガルフストリームパーク競馬場など）やイリノイ州（アーリントンパーク競馬場など）にもチームを送り込んでいたそうだが、地元から遠く利用している育成牧場からの便が悪いため、止めたそう。西海岸（カリフォルニア州）にチームを送り込んだことはない。どちらも、チームとして滞在することはないという意味で、ブリーダーズカップなど狙っているレースがあればもちろんピンポイントで遠征する。

ちなみに、私が研修した前年の2015年10月のキーンランド開催では8勝を挙げ、見事リーディングに輝いている。

・入厩

輸送時、ダービーダンでは革の無口に白い布を巻いていたが、短距離輸送だからか巻いていなかった。全頭四肢に厩舎肢巻（stable bandage）が巻かれ、安全ピンで留められていた。馬によってはベトラップで四肢の蹄を巻き、落鉄を予防していた。馬はチェーンシャックで引き、うるさい馬はチェーンシャックを上唇に掛けてリップチェーンとして使用していた。

輸送されたのはサラブレッド競走馬のほか、リードポニーとロバも各1頭いた。リードポニーは全体で12～15頭おり、開催に応じて輸送されている。ペイントホースやアパルーサのほか、引退後もしくは走るのが遅く見込みがないとして未出走だったサラブレッド競走馬も使用されている。ロバは熊癪のひどい神経質な牝馬のルームメイトとして飼われている。競走馬と同じくワクチン接種を受けている。



熊癩のひどい神経質な牝馬のルームメイトのロバ

馬房は敷料に麦稈を使用、乾草はチモシー約5kgにルーサンを1スライスの半分載せる（チモシーの嗜好性が良くないため）。ヘイネットは使用せず、代わりにコーナーにゴム板で囲みを作りその中に入れる。キーンランド競馬場の馬房にもともと付いている緑色の扉は使用せず、馬が首を出せるようにV字の切れ込みがなされている白い扉をわざわざ持ち込み、設置する。このことで馬が馬房から顔を出して隣の馬の顔が見えるので、安心する。また、ゴムマットを持ち込み、馬房の入口に敷き馬が前掻きしても地面が掘られないようにする。馬房の大きさは縦350cm×横360cm。



コーナーのゴム板内に乾草



白い扉を持ち込み設置

グルームなどスタッフたちは馬房のすぐ近くの居室にマットレスを持ち込み、そこで寝泊まりしていた。2～3人の相部屋である。シャワーは共同トイレに付いている。自家用車を所有している者は少なく、ほとんどは自転車で場内を移動し、必要があれば車を持っている者が運転して買い出しに行く。プライベートがほぼない、かなり過酷な環境である。そのせいか、今までの研修先で最も英語を話せる者の割合が低かった（スペイン語のみ）。

その他細かい話だが、セリの際に各厩舎に設置されている緑色のベンチがおそらく危険

防止のため撤去されていた。

・スタッフ

<トレーナー (Trainer) >

調教師。前述のようにアスムッセン師のようなリーディング上位の調教師は全米各地に厩舎を構えているため、週に1~2回馬体のチェックもしくはレースの立ち会い（臨場）に来るだけである。スタッフからは“Big Boss”と呼ばれている。日本でいうと「大テキ」みたいな感じだろうか。

<アシスタントトレーナー (Assistant Trainer) >

キーンランド競馬場には Galen Pruitt というアシスタントトレーナーが滞在していた。調教師が基本的に不在なので、やっている仕事はほぼ調教師と変わらない。調教メニューが書かれたリスト（chart）を作成し、調教時にはリードポニーに乗って調教に立ち会い、出馬投票や輸送などに関する事務作業をする。調教メニューはアスムッセン師と毎日電話で相談しながら作成するが、基本的にはアスムッセン師が全米各地にいる自身の管理馬全頭の調教メニューを考えているらしい。Galen いわく「アスムッセン師は恐ろしく賢くて、そして恐ろしく働き者」なのだそうだ。従業員の契約も彼の仕事で、初日にスタッフを1人ずつ自分の車の中に呼び出し、契約を交わしていた。米国では牧場でもそうであるが能力と経験に応じて1人1人給料の額が異なるのが普通であり、待遇に不満のある者は簡単に転職する。

<フォアマン (Foreman) >

アシスタントトレーナーの下、グルームやホットウォーカーの上といった感じの立場で、アシスタントトレーナーの補助のほか、ホットウォーカーが調教後にどの馬を引くかなどを決める。また、飼料を配合し、与えるのもフォアマンである。調教時はうるさい馬を引いて馬場まで行く。競馬の際は2人引きが必要な馬を右側から引く。最も厩舎全体の動きがわかる役職とのことで、今回私はこのフォアマン見習いとして研修させてもらった。2名プラス私。

<グルーム (Groom) >

日本語の「厩務員」を英訳すると“Groom”となるようだが、日本の厩務員とは仕事の内容が少々異なる。米国では1人4頭持ちもしくは5頭持ちで、5頭持ちの場合は4頭持ちよりも給料が高くなる。担当馬が決まっているわけではなく、“担当馬房”が決まっているのであり、キーンランド競馬場では厩舎の構造的に4頭持ちというか4馬房持ちになる（計40馬房で10名のグルーム）。自分が担当する馬房のボロ出し、馬の手入れおよび馬装、厩舎肢巻の装着などが仕事となり、調教時間は基本的に厩舎から外に出ない。調教

後、馬を洗う際にはホットウォーカーが馬を持ち、グルームが馬を洗う。例外的に競馬の際は馬をパドックまで引いていく。肢巻を巻くなど技術が必要とされるため、ホットウォーカーよりもベテランが多かった。毎日 15 時からの午後作業にはグルームは来るが、ホットウォーカーは来ない。週給 400～550 ドル。そのほか、レースに立ち会うと 25 ドルもらえる。ベストターンドアウト賞をもらう権利があるのはグルームであり、実際に見事賞金 300 ドルを手に入れた名厩務員もいた（週給の半分以上なのでかなり大きい）。しかし、日本のように進上金はもらえない。余談だが、ベストターンドアウト賞をもらったベテランの名厩務員（メキシコ人）はレースの日だけでなく日頃から調教後の引き運動から帰ってきた馬の蹄に付いたウッドチップをブラシでさっと落とすなど、受賞が納得できる人物であった。

<ホットウォーカー (Hot Walker) >

無理矢理日本語訳すると「引き馬手」という感じか。調教後の引き運動が主な仕事であるが、引き運動だけでなく朝の調教時は雑用も行う。引き運動メインの厩務員というイメージである。洗い場の準備（馬を洗うためのお湯やスポンジなどを用意する）、前日塗布したポルティス（アップタイトのこと）をスポンジとお湯で洗って落とす、厩舎周りの清掃（レーキ掛け）、ブランケット（馬を洗った後に掛ける馬服）を干すなどがホットウォーカーの雑用であった。競馬の際には道具を持ってついていき、レースの後は引き運動する。詳細は後述するが、引き運動の時間は、通常の調教の後は約 20 分、追切の後は約 40 分、レースの後は約 60 分である。午後の厩舎作業には参加しない。グルームと同じく 10 名おり、騎乗割の関係で人手が足りなくなったらフォアマンが代わりを務める。週給 400～550 ドル（グルームより安い）。レースに立ち会うと 25 ドルもらえる。進上金はなし。

<ワークライダー (Work Rider) >

米国では乗り役（ライダー）は基本的に“外注”であり、彼らは厩舎スタッフではない。フリーのライダーが各厩舎に営業に回り、自分の乗り馬を確保している。1 鞍 15 ドルが相場らしい（ブレーキングは 20 ドル）。ライダーのうち、追切にも乗る体重が軽くて上手い者がワークライダーとなり、体重が重い者はエクササイズライダーとなり追切には騎乗しない。アスムッセン厩舎は所属馬が多いため、Martin というメキシコ人の専属のワークライダーがいた。彼は厩舎でグルームやホットウォーカーと共に寝泊まりし、毎日アスムッセン厩舎の馬だけに騎乗していた。体重は 120 ポンド（約 54kg）。実家が牧場で、メキシコ版ロデオ（チャレアーダ Charreada といい、実はこちらがロデオの原型だそう）で乗馬を覚えてらしい。彼のほかには何人ものライダーが「乗せて欲しい」と営業にきたが、結局 Wilson というワークライダーに落ち着いた。Martin、Wilson そして Ricardo Santana, Jr. という騎手の 3 名が追切に騎乗した。Santana はパナマ出身の黒人騎手で、アスムッセン厩舎の所属騎手に近い形でほとんどのレースで騎乗していた。余談だが、乗り役には血

の気が多い者が多く、ある日ワークライダーの一人とフォアマンが殴り合いのケンカをしたことがあった。その後、ワークライダーの方が翌日から来なくなった。フォアマンは厩舎所属のスタッフであり、ワークライダーはフリーという立場なので、フォアマンの方が守られるらしい。

<エクササイズライダー (Exercise Rider) >

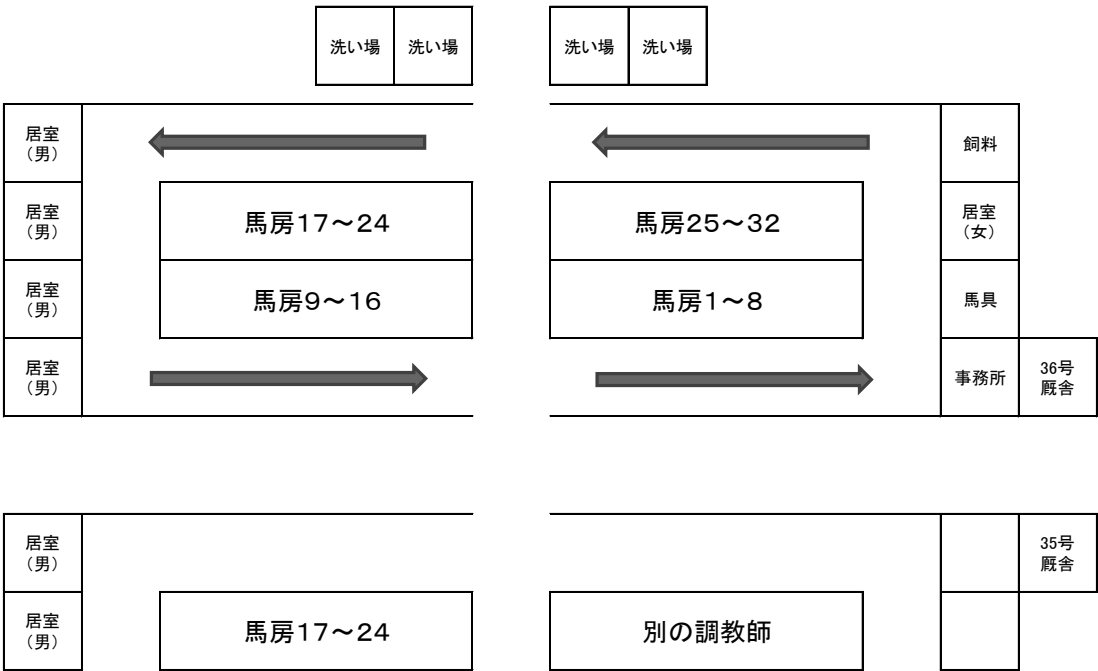
乗り役のうち、体重が重く迫切には騎乗しない者。たくさんのフリーの乗り役が営業にきて、終始メンバーは固定されなかった（日によって2～4名が乗りに来ていた）。毎日7～8鞍騎乗する体力が必要である。1鞍15ドル。

なぜ米国の厩舎ではここまで仕事の細分化が進んでいるか疑問に思ったが、実際に働いてみて感じたのが「細分化しないといつまでも仕事が終わらない」ということ。実際、アシスタントトレーナーやフォアマンは競馬が週に5日開催されており全てに立ち会うため、労働時間がとんでもなく長くなった。もう1つはこの方法だと乗り役の数が少なくなくて済むことというメリットがあり、馬に乗れる者が多いヨーロッパと異なりかつて少なかった米国独自で発展してきた方法なのだと思う。現代では米国でも乗れる者は多いのだが、上手くてかつ体重の軽い乗り役に騎乗部分は集中して任せるという意識が今も残っているように感じた。

・厩舎

36号厩舎の全部（32馬房）と35号厩舎の一部（8馬房）を借り受けていた。牡とめすは極力隣り合わせにはせず、リードボニーやセン馬を間に挟んでいた。36号厩舎と37号厩舎の間にゴムマットを敷き、洗い場として使用していた。また、初日にダンプカー2台でウッドチップが搬入され、36号厩舎のシェッドローに敷かれ、引き運動は全てこの上で行われていた。シェッドローは必ず左回りで歩いていた。35号厩舎の馬も36号厩舎のシェッドローで引き運動していた。

6. 競馬場での調教および出走



アスムッセン厩舎@キーンランド競馬場



ダンプカーでウッドチップが搬入され、シェッドローに敷かれた

・タイムスケジュール

3:00 朝飼付（当番制）。スウィートフィードを1スクープ（約2kg）。

5:00 集合。グルームはボロ出し（一輪車もしくはブルーシートを用いてボロ置場まで持っていき、後はキーンランド競馬場の職員がトラックで運んでくれる）、ホットウォーカーはポルティス（アップタイト）をお湯で流す。獣医師が来て、迫切の馬にラシックスを静脈内投与していく（フォアマンが立ち会う）。



グルームはボロ出し

ホットウォーカーはポルティスを洗う

5:30 アシスタントトレーナーが騎乗割を貼り、追切以外の通常調教の馬にアセプロマジンを経口投与していく（濃度が 25mg/ml の製剤を 1~2ml）。フォアマンは水桶に水を入れビタミン剤をスプーン 1 杯ずつ入れていく。ホットウォーカーは Walker（引き運動のみ）の馬を洗い場に連れて行く。グルームはその馬を洗い、終わったら 1 鞍目の馬装開始。乗り役は馬具を準備する。



追切以外の馬にアセプロ



水にはビタミン剤

6:00 調教開始。乗り役は馬具を 2 組用意し、馬房の前に置く。馬装はグルームが行う。うるさい馬はフォアマンが馬場まで引いていく。1 鞍 20 分程度で、調教後はホットウォーカーが引き運動してクーリングダウン（通常調教後は約 20 分、追切後は約 40 分）。途中、洗い場で馬を洗う。調教で馬が馬房にいない間にグルームが新しい寝藁（麦稈）および乾草を足す。



馬装はグルームが行う

うるさい馬はフォアマンが引く

8:20～8:40 ハロー掛け休憩（この時点で4～5鞍終わっている）。

8:40 調教再開。

10:00 調教終了（馬場閉鎖）。アイシング、ボルティスおよび厩舎肢巻の装着。

11:00 昼飼付（フォアマン）。スウィートフィードを1スクープ（約2kg）＋電解質スプーン1杯。一時解散。

11:00～15:30 基本的に昼休みだが、獣医師の治療や装蹄などがあればフォアマンが立ち会い対応する。開催日はレースもしくはスクーリングの予定に合わせて再集合。

15:30 再集合。厩舎肢巻の除去、ボロ拾い。乾草は足さない。

16:30 夕飼付（フォアマン）。スウィートフィード（Stake Horse 12）3スクープ（約6kg）をベースに各種サプリメントが多数加えられる（詳細は後述）。無口を外して、終了（無口は扉に掛けておく）。乾草は足さない（朝のみ）。扉は閉めず、白い後付けしたフェンスのまま（寒い時期には扉も閉めるそう）。夜飼はなし、夜警もいない（どうせ皆厩舎に泊まっている）。

・飼料

<粗飼料>

米国の競馬場ではヘイネットを使用し馬房の外（扉の前）に吊るしている厩舎が多いが、アスムッセン厩舎では馬房の隅にゴムマットで囲いを作り、その中に乾草を投与し給餌していた。ヘイネットを好む調教師は、馬がヘイネットの乾草を食べることで隣の馬房に居る馬の顔を見る機会が増え安心するのと、ヘイネットには網目の大きいものと細かいものがあり競走馬の体重に応じて使い分けられることがメリットと考えているようである（太り易い馬には網目の細かいものを使用し乾草の採食量を制限する）。ヘイネットを嫌う調教師は、呼吸器のためには馬が地面に近い位置で草を食べることが重要だと考えている。馬が上を向いたもしくは水平の状態では乾草を食べると、塵が鼻道から気管に入り上気道に炎症を起こすと考えられている。

毎日、朝の調教中にチモシー約 4kg の上にルーサン 1 スライスの半分を置く。チモシーは嗜好性が良くないため、ルーサンを上少量置くことで食べているうちにチモシーの中にルーサンが混ざり、ルーサンを食べたい馬は探しているうちにチモシーもつつい食べてしまうという仕組み。



チモシーの上にルーサンを置くと、チモシーも食べる

<濃厚飼料>

スウィートフィード (Stake Horse 12) をベースとしている。1 日 3 回飼い葉である。3:00 に朝飼付 (1 スクープ=約 2 kg)。11:00 に昼飼付 (1 スクープ=約 2kg+電解質スプーン 1 杯)。16:30 に夕飼付 (3 スクープ=約 6kg をベースに各種サプリメントを添加)。

ベースとしているスウィートフィード「Stake Horse 12」Woody's Performance Horse Feed Products 社製の成分は下記。比較のためカッコ内に Margaux Farm でも使用されていた同じく競走馬用飼料「Race 13」Hallway Feeds 社製の成分を記載する。

粗タンパク質 (最小)	12.5% (13.0%)
リジン (最小)	0.60% (-)
メチオニン (最小)	0.15% (-)
粗脂肪 (最小)	8.0% (6.0%)
粗繊維 (最大)	8.0% (10.0%)
カルシウム (最小)	0.70% (0.75%)
カルシウム (最大)	1.20% (1.25%)
リン (最小)	0.70% (0.55%)
塩化ナトリウム (最小)	0.35% (-)
塩化ナトリウム (最大)	0.55% (-)
マグネシウム (最小)	0.30% (-)
カリウム (最小)	0.80% (-)
銅 (最小)	60ppm (40ppm)
セレン (最小)	0.30ppm (0.30ppm)

亜鉛（最小）	160ppm (110ppm)
ビタミン A（最小）	3200IU/lb (6000IU/lb)
ビタミン D（最小）	672IU/lb (750IU/lb)
ビタミン E（最小）	102IU/lb (100IU/lb)
ビタミン B12（最小）	150mcg/lb (-)
ビタミン K（最小）	1.0mg/lb (-)
コリン（最小）	320mg/lb (-)

合計で 12kg 以上濃厚飼料が与えられているため、ボロは牛糞様であり決して健康的とは言えない。



Steak Horse



ボロは牛糞様

<夕飼の内容>

夕飼にはスウィートフィードをベースに、サプリメントが多数添加されていた。トレーナーの指示を受けて、フォアマンが調合する。非常に工夫されている印象だが、給餌量は全頭同じであった。

- ①スウィートフィード（Stake Horse。成分は前述）・・・ 3 スクープ（約 6kg）
- ②ふすま ・・・ 1 つかみ
- ③ビタミン剤（赤い） ・・・ 1 スプーン
- ④サプリメント（EPIC。米ぬかをベースに卵の蛋白質を加えたもの。成分：粗タンパク質（最小）20%、粗脂肪（最小）15%、灰分（最大）10%、水分（最大）8%）・・・ 1 スプーン
- ⑤電解質（ELECTRO DEX。成分：カルシウム（最小）0.25%、カルシウム（最大）0.75%、塩分（最小）68%、塩分（最大）73%、カリウム（最小）11%、マグネシウム（最小）0.4%）・・・ 1 スプーン
- ⑥電解質（LETMSWEAT という製品）・・・ 1 スプーン
- ⑦LETMSWEAT の容器に入ったサプリメント（内容不明）・・・ 1 スプーン

- ⑧ペレット（内容不明、緑色でウサギの餌様）・・・・・・・・・・1 スプーン
- ⑨サプリメント（ONE AC。成分：L-チロシン（最小）36%、ナイアシン（最小）36288mg/lb、ビタミン B₆（最小）35380mg/lb、d-パントテン酸（最小）66225mg/lb、重酒石酸コリン 145152mg/lb）・・・・・・・・・・1 スプーン
- ⑩甲状腺ホルモン製剤（Thyro-L。成分：レボチロキシナトリウム 0.22%）・・・・・・・・・・1 スプーン
- ⑪鉄剤（Lixotinic。成分：カルシウム（最小）0%、カルシウム（最大）0.5%、リン0%、鉄75mg、銅1.2mg、チアミン12mg、リボフラビン6mg、ナイアシン60mg、ビタミン B₆6mg、ビタミン B₁₂12.5mcg。もしくはIRON XCELL。成分：粗タンパク質（最小）1%、粗脂肪（最小）0.5%未満、粗繊維（最大）0.6%未満、灰分（最大）0.5%、鉄2,155ppm、ニコチンアミド1,295mg、チアミン846mg、D-パントテン酸516mg、リボフラビン476mg、ビタミン B₆159mg、葉酸119mg、ビオチン3mg、ビタミン B₁₂938mcg）・・・・・・・・・・2 スプーン
- ⑫ライスブランオイル・・・・・・・・・・1 スプーン
- ⑬燕麦をお湯で約7時間蒸したもの・・・・・・・・・・1 スクープ（約2kg）

⑬は最後に加えられる。甘みが増して食欲をそそるらしい。夕飼はフォアマンがシェッドローに吊るされた飼桶の中に作り、よくかき混ぜて与えられる。



夕飼には多数のサプリメントが添加される



最後に燕麦をお湯で約7時間蒸したものが加えられる



夕飼はフォアマンがシェッドローに吊るされた飼い桶の中に作る

<水桶および飼桶>

水桶および飼桶の移動が独特だったので記載する。まず移動初日にシェッドローの外壁（コンクリートブロック）にナイロン紐を結び、水桶および飼桶をそこに吊るせるようにする。グルームは朝調教が始まる前に水桶をそのシェッドローの外壁のナイロン紐に吊るし、水を入れておく。するとフォアマンが赤いビタミン剤をスプーン1杯ずつその水の中に入れていく（水はピンクになる）。調教中および調教後はその水を飲ませる。特に追切時は朝獣医師によりラシックスが投与されているので、非常に喉が渇いている状態だが、あえて一度には飲ませずに引き運動でクーリングダウンしながら少量ずつ飲ませる。水桶は調教終了後、朝まで馬房内に取り付けられ、水が無くなったら足す（ビタミン剤はもう入れない）。

飼桶は朝水洗いし、昼飼い前にシェッドローの外壁のナイロン紐に吊るす（その頃には水桶は馬房の中）。11:00 になったらフォアマンが昼飼（スウィートフィード Stake Horse を1スクープ＝約2kg＋電解質スプーン1杯）を飼桶の中に入れていくので、グルームが飼桶を馬房内に取り付けて一旦解散となる。15:30 に再集合した際にはグルームは飼桶を

外しシェッドローの外壁のナイロン紐に吊るす。フォアマンが夕飼を飼桶の中に入れていくので、16:30 にグルームが飼桶を馬房内に取り付けて解散となる。ちなみに、当番制で 3:00 に朝飼付（スウィートフィードを 1 スクープ＝約 2kg）が行われる。なお、Tie-Back 手術を受けている馬は地面に柔らかいゴム素材の飼桶を置き、飼付していた。

<BCS>

在厩馬のボディコンディションスコア（BCS）は 4.5～5.0 程度で、日本より 0.5～1.0 高い（太い）印象。米国ではクラシック三冠レース（中でも特にケンタッキーダービー）およびブリーダーズカップは賞金も名誉も段違いに高く、皆本気で仕上げて勝ちに行くので、その際にはもう少し低くなる（4.0～4.5 程度）。

<グラスピッキング>

ストレスで飼い食いが悪くなった牝馬には調教後の引き運動時にグラスピッキングを行っていた。厩舎と厩舎の間の草地（セリの際、下見をする場所）の草を 10 分間程度食べさせる。給与量としてはたいしたことはないので、ストレス解消の意味合いが強い。なお、隣にいた Mark Casse 厩舎（Tepin を管理）では、毎日午後にグラスピッキングするのを日課にしており、調教師ごとの考え方に違いがあることがわかった（アスムッセン師はあえてストレスを利用している）。

・コスト節減

アスムッセン師は余計なコストをかけず、むしろ顧客に無駄に預託料を払わせるようなことを良しとしていなかった。名門厩舎にもかかわらず、スタッフのユニフォームや帽子などは一切なし（ただし帽子はレースのスポンサーが作ったものが各厩舎に 2～3 個ずつ配布された）。厩舎には小さな看板が掛けられているだけ。調教師によっては、例えば隣に厩舎を借りていた Mark Casse などは引き運動に使用するブランケット（馬服）を赤地の布に白いロゴマークが入った特注の物を使用していたが、アスムッセンはバラバラであった。しかし、中にはブリーダーズカップを勝った時にもらったブランケットなどが無造作に使われており、これはこれで厩舎の実績が伝わって格好良かった。馬に普段付ける無口も、牧場で使われてきたものをそのまま使い、馬によっては壊してしまい別の馬が使っていた無口を使用していたため、ネームプレートに書いてある馬名は正しくない場合も多々あった。その代わり、乾草など馬に与える飼料などは最高の品質のものを使用しており、この辺りウインスターと共通する考え方でありウインスターが預託先の厩舎として選択しているのも良く理解できた（アスムッセン師がウインスターのオーナーであるケニー・トラウト氏と同じテキサス出身ということもあるのだろう）。



小さな看板が掛けられているだけ

BCのブランケット

・調教

<馬装>

ライダーの道具（ヘルメット、安全ベスト、チャップス、ブーツ、鞭）は自前。馬具は厩舎の備品で Tack Room に置いてある。ライダーが頭絡、鞍、鞍下、腹帯を2組用意し、馬房の前に置いておく。馬装を行うのはグルームである。肢巻と舌縛り（Tongue Tie）用の紐はグルームが用意する。



馬具は厩舎の備品で Tack Room に置いてある

肢巻は、通常調教および TackWalk（乗り運動）の際は両前肢にエラスティック（伸縮性のバンテージ、安全ピンで留める）、両後肢にポロバンテージ（ベトラップで留める）。追切時は両前肢に Equi Support（ベトラップより伸縮性の強い使い捨てのバンテージ）を巻いた後、Rundown Patch というクモズレ予防のシールを球節後面に貼る。両後肢にはエラスティック。



追切時は両前肢に Equi Support、Rundown Patch

調教では革製の頭絡にリングビット、ゴム製のクロス鼻革 (Figure Eight= 8 の字という意味)、舌縛り、ビブマルタン (Rings)、鞍、鞍下、腹帯が基本。口向きが悪く抑えが効かない馬には折り返し手綱 (Draw Rein) が使用される (その際はビブマルタンを外す)。ただし追切では使わない。追切ではビブマルタンを外す馬もいる。その場合でも落馬防止のためネクストラップは付けておく。ハミは顔と革の間に指が4本入るぐらいのテンションで。1頭終わる毎に乗り役がヒビテンでハミを消毒する。



リングビットが基本



1頭終わる毎にヒビテンでハミを消毒

鞍は、通常調教の際は調教鞍で、追切時は競走鞍。追切時には内側 (左) の鐙革を1~2穴長く、外側 (右) の鐙革を短くし、遠心力に対抗しやすくする。

腹帯は両側がゴムになっているもの。きつそうなイメージだが、馬の呼吸に合わせて広がるため、かえって馬は苦しくないとのこと。さらに、腹帯はナイロン製であらかじめボアが付いており、腹帯カバーを被せる必要がなく汚れたら洗濯機でそのまま洗える。

ちなみに、馬は朝からタイチェーンで後ろの壁に繋がれており、調教後に外す。すなわち、タイチェーンで繋がれていない馬イコール調教が終わった馬であることを意味する。

馬装は馬房内で、騎乗はシェッドローで行う。騎乗後、うるさい馬はフォアマンが馬場

まで引いていくが、その際はチェーンシャンクではなく革の引手で。

なお、鞍などの馬具の手入れは、調教後にライダーが毎日行っていた。革はサドルソープを使って磨き、エナメルは水拭きする。



馬は後ろの壁に繋がれる

調教後にライダーが毎日手入れ

<通常調教>

キーンランドには1周 1,000m のオールウェザーの調教用馬場もあるのだが、アシスタントトレーナーの Galen は合成素材 (synthetic) を嫌っており、調教は全て本馬場 (競馬に使用されるダートコース、1周 1,700m) で行われた。合成素材はグリップが効き過ぎて、足腰に良くないとのこと。ちなみに、本馬場は 8:20~8:40 に一度中間ハロー掛けがあるが、調教用馬場には中間ハローはない。本馬場は 5:30 開場だが、朝一の混雑 (での事故) を避けるためアスムッセン厩舎ではあえて 6:00 から調教を開始していた。

騎乗割には馬房番号、馬名、馬装および駈歩を始める位置 (ハロン棒) が書いてある。基本的には、4 コーナーの外側に切られた出口から入場し、通常調教の場合はそのまま順方向 (左回り) で速歩し、指定されたハロン棒に到達したら駈歩を始める。迫切の場合は一旦馬場の外ラチ沿いを逆方向 (右回り) で速歩し、内側に反転してから駈歩で発進し、指定されたハロン棒に到達したら襲歩に移り指定されたタイムで走る。必ず決勝線

(Finish Line もしくは Wire と呼ばれる) までしっかり走り、決勝線を過ぎてから流す。このように、「順方向なら通常調教」「反転したら迫切」「ゴールは常に決勝線」という調教パターンを繰り返すことで馬にいつ全力で走ったら良いか教え込んでいく。

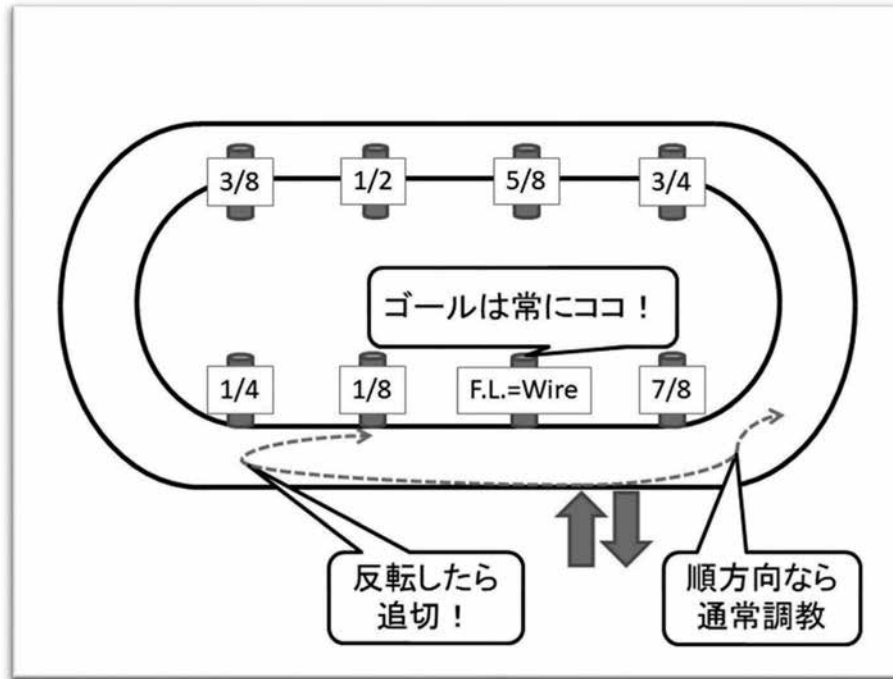
アスムッセン厩舎の調教の特徴として、「迫切のタイムは速い、しかし通常調教のタイムは遅い (思いっきり抑える)」ということが挙げられる。迫切は実戦なみのタイムで行い、中間の通常調教は「抑えられるだけ抑えて (馬によっては折り返し手綱を使用)、走りたい気持ちを溜める」イメージである。さらに迫切ではなく通常調教の馬には毎朝 5:30 にアシスタントトレーナーがアセプロマジンを経口投与していた。ハロン 20 秒程度。基本的に単走。通常調教時に抑えている副産物か、米国の競走馬としては珍しくアスムッセン厩舎の馬には差し馬が多い印象である。走りたい気持ちを溜めることが、結果として折

り合いの練習になっているのだと思われる。

ゲート練習も頻繁に行う。向正面にあるゲートから発進して、そのまま 1,500m 走る。

調教時間は通常調教も追切も厩舎を出発してから戻ってくるまでが約 25 分間と短い。

その分、クーリングダウンはホットウォーカーを使って長く行うイメージである。



アスムッセン厩舎の調教パターン



通常調教は抑えられるだけ抑えて、走りたい気持ちを溜める

<追切>

2 歳馬は 2 頭併せ、古馬は単走で行われることが多かった。前進氣勢が欲しい馬には 2 頭併せ、すでに前進氣勢がある馬には単走という扱いである。米国では道中逃げもしくは先行し、直線入口ではすでに抜け出し先頭に立ち、いかにそのまま“ソラ”を使わずに

(失速させずに) 持たせられるかというところが重要となるので、レースを2~3戦経験し前進気勢がある馬には単走で調教するのが基本である。4~5ハロンの追切を行ってから中4日で出走というのが基本で(月曜日追切して土曜日出走、火曜日追切して日曜日出走)、途中でプランが変わった場合は出走まで中2日で3ハロンのみの追切をすることもある。①4ハロンを50秒、②4ハロンを50~51秒、③4ハロンを52秒、④4ハロンを61秒、⑤5ハロンを62秒そして前述のとおり例外的に⑥3ハロンを38秒という6つのパターンがアスムッセン厩舎での追切である。米国ではレーシングプログラムに追切のタイムが掲載されるが、これは他の厩舎と比較して速い。一方で、前述したとおり追切以外の通常調教のメニューは軽い。非常にメリハリをつけている感じである。追切に騎乗するのは体重120ポンド(約54kg)程度のワークライダーもしくは騎手で、体重の重いエクササイズライダーは乗ることができない。アスムッセン厩舎ではワークライダーの Martin、Wilson そして稀に騎手の Santana の3名が追切に騎乗していた。多く追切る日などはワークライダーである Martin と Wilson が7~8鞍乗るのに対し、エクササイズライダーたちは3~4鞍しか乗らないという状況が起きていた。

追切の具体的な流れだが、アシスタントトレーナーの Galen が馬場の入口にある「Racing Office (普段は出馬投票などをするとところ)」にいる Clocker と呼ばれるタイム計測係にこれから追い切る馬がいることを伝えとタイムを計測してくれる。続いて Galen が誘導しながら馬場の外ラチ沿いを逆方向(右回り)で速歩し、内側に反転してから駈歩で発進し、向正面までは行きたがる馬を必死に抑えてゆっくりとした駈歩をする。そして、指定されたハロン棒に到達したら手綱をゆるし襲歩に移り指定されたタイムで走る。Galen は直線の入口付近でリードボニーに乗って息遣いなど追い切られている馬の様子を見る。決勝線まで全力で走らせ、その後向正面まで流す。帰りは馬場の外ラチ沿いを右回りで速歩して出口まで戻る。Galen が Clocker に調教タイムを聞く。



Racing Office

Clocker にタイム計測を依頼

6. 競馬場での調教および出走



外ラチ沿いを速歩



反転して駈歩発進



向正面の指定されたハロン棒までは行きたがる馬を必死に抑える



指定されたハロン棒に到達したら手綱をゆるし襲歩に移る

6. 競馬場での調教および出走



直線入口で馬の様子を見る

決勝線まで全力疾走

<調教メニューの例>

入厩してから出走するまでの調教メニューを2歳馬および古馬で1例ずつ挙げる。

・2歳馬の例(Lookin At Lee、翌年のKYダービー2着)

9/26(月)	9/27(火)	9/28(水)	9/29(木)	9/30(金)	10/1(土)	10/2(日)
		入厩	5/8(1600m) 馬なり	5/8(1600m) 馬なり	Wire(2300m) 馬なり	1/4(2600m) 馬なり
10/3(月)	10/4(火)	10/5(水)	10/6(木)	10/7(金)	10/8(土)	10/9(日)
1/2(2300m) 追切 (50-51秒/4F)	Walker (引き運動) 20分	5/8(1600m) 馬なり	Gate(1500m) 馬なり	Gate(1500m) 馬なり	Grade1 (1700m ダ) 2着	Walker (引き運動) 20分
10/10(月)	10/11(火)	10/12(水)	10/13(木)	10/14(金)	10/15(土)	10/16(日)
Walker (引き運動) 20分	退厩					

・古馬の例(Cinco Charlie、後の種牡馬)

9/26(月)	9/27(火)	9/28(水)	9/29(木)	9/30(金)	10/1(土)	10/2(日)
				入厩	Wire(2300m) 馬なり	1/8(2400m) 馬なり
10/3(月)	10/4(火)	10/5(水)	10/6(木)	10/7(金)	10/8(土)	10/9(日)
1/2(2300m) 追切 (50-51秒/4F)	Walker (引き運動) 20分	5/8(1600m) 馬なり	Gate(1500m) 馬なり	Grade2 (1200m ダ) 7着	退厩	

<競走馬のハミ受け(育成牧場と競馬場での乗り方の違い)>

ライダーのうち、ワークライダーなど体の小さな者は騎手と同じく鍔革を短くして“モンキー乗り”、エクササイズライダーなど体の大きな者は鍔革を長くしていわゆる“楽乗り”を

している。拳をキコウに静定し、決して鞍に腰を掛けず背中を解放して乗る。

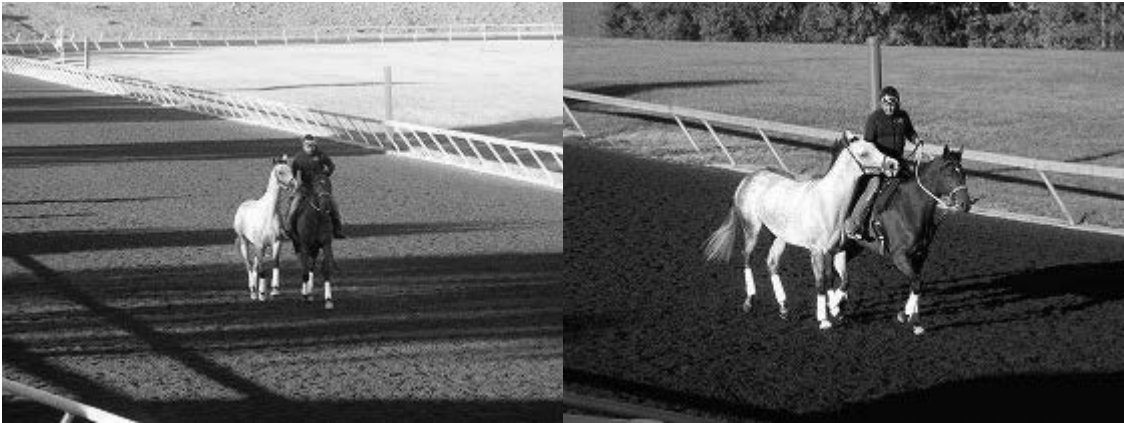
マーゴーフームで乗っている Memo というライダーがキーンランドでも乗っていたので、育成牧場と競馬場での乗り方の違いを実感することができた。すなわち、育成牧場では手綱をルーズにして乗り馬がセルフキャリッジした状態で走れるように調教していくが、競馬場では馬に前進氣勢があるのでそれを利用してハミで受け止め、溜めたエネルギーを後軀に伝えて踏込を深くし、どんどんストライドを伸ばしていく。後者の方がはるかに難しく、鐙1点だけのワンポイントで乗れて（膝でつかまらない）背中を解放できることと、キャンターの動きに合わせて一步ごとに完璧に随伴できることが求められる。この“競走馬としてのハミ受け”が完全にできている馬は後軀を踏み込むため前で着地するようになり、相対的に前軀が持ち上がるので、坂路で調教されているのと同じ状態となる（馬術でいう“関係起揚”の状態）。このことを十分に理解せず、馬に前進氣勢がない状態で“形だけ”真似しようとする馬がハミに頼った“前のめり”のフォーム（5本足）となってしまう。ベースとして、相当な前進氣勢が必要なため、JRAの育成牧場で求めるとするなら4月のBUセール直前か。



同じライダーによる育成牧場（左）および競馬場（右）での騎乗スタイルの違い

<ボニーイング?>

米国では伝統的にリードボニーに乗った者が鞍を付けていない競走馬を引いて、そのまま馬場に出て速歩および駈歩をするという調教法がある。しかし、アスムッセン厩舎では行われていなかったため目的など詳細は不明。なお、過去に同研修に行った春田氏や小寺氏は同調教法を「ボニーイング」と記載していたが、Galenを始め複数のホースマンに聞いてみたがその名称はわからなかった。



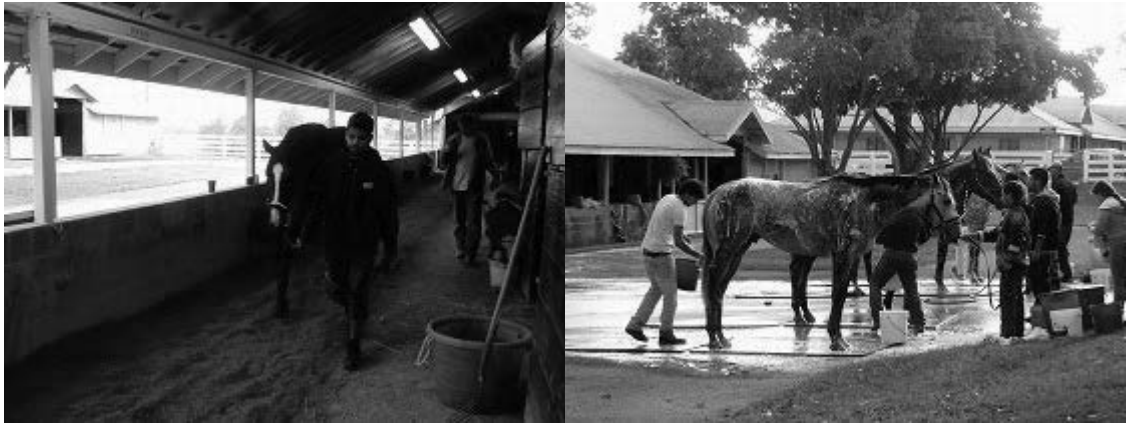
リードポニーに乗った者が競走馬を引いて行う電伝統的な調教法

<乗り運動 (Tack Walk) >

馬によってはレースの前日から馬場に出ず、馬装してライダーが乗るがシェッドローを20分間常歩するのみという乗り運動が行われた。馬がうるさい場合はライダーが乗った状態でフォアマンかホットウォーカーが引く。

<調教後の引き運動>

通常調教の後はクーリングダウンとしてホットウォーカーによる引き運動が20分程度、追切後は40分程度、レース後は60分程度、シェッドローで行われる。追切後およびレース後は水桶をシェッドローに吊るし、水を少量ずつ飲ませながら引き運動を行う。追切やレースの後、息が入るのに時間がかかる馬は長めに歩かせるのだが、途中馬房でオシッコをさせる。乗り運動の後も引き運動を20分行う（計40分常歩することになる）。追切の翌日は引き運動のみ（walker）、レースの後3日間は引き運動のみが基本。引き運動のみの際は馬が元気でうるさいので、チェーンシャンクを上唇に掛けてリップチェーンとして使用し、歩かせる。調教後の引き運動ではチェーンシャンクを鼻の上に回して歩かせ、暴れて馬が怪我をする恐れがあるようであれば一旦馬房に入れてリップチェーンに切り替える。途中、洗い場で馬を洗う（馬を持つのはホットウォーカー、洗うのはグルーム）。水とお湯を混ぜてぬるま湯にし、毎日シャンプーを使う。その際にグルームがバンテージを外す。汚れたバンテージは毎日競馬場内にあるコインランドリーに持っていき洗濯する。馬を洗った後、涼しい日は薄手の馬服（ブランケット）を着用して引く。この時のブランケットは共用なので、皮膚病を拡げる恐れがあるとのことでGalenはブランケットの着用を嫌っており（リングワームだと出走できないというルールはないそうだが）、肌寒いぐらいの日でも着せないことが多かった。さらに寒い日はそもそも全身を洗わず、下肢部をぬるま湯で洗って、腹帯の部分を濡らしたスポンジで拭く。



調教後の引き運動

途中で馬を洗う

肝心の歩くスピードはそれほど速くなかった。バイタルウォークでストライドを伸ばすといった発想はなく、むしろ馬を落ち着かせることを重視していた。印象的だったのは馬がうるさく特に蹴る場合はすぐにチェーンをリップに回すように指示され、シェッドローの外壁（コンクリートブロック）を蹴らないように Galen が繰り返し注意していたこと。馬の怪我には非常に気をつけていた。

なお、隣に入っていた Katherine Ritvo 厩舎（Mucho Macho Man の調教師）では、毎日午後にもシェッドローの引き運動を行っていた。アスムッセン厩舎では、すくんだ馬のみ午後引き運動を行っていた。

<グラスピッキング>

アスムッセン厩舎では精神的なストレスをあえて上手く利用して馬を仕上げて行くため、基本的にはグラスピッキングは行っていない。しかし、飼い食いの落ちてきた牝馬など、“精神的なストレスが過度にかかっている”と判断された馬に関しては、調教後の引き運動の後に短時間グラスピッキングを行っていた。他の厩舎では、例えば隣に入っていた Mark Casse 厩舎（2015 年の北米リーディング 4 位の名門、Tepin などが所属）では毎日、それも午前も午後もグラスピッキングを行っており、調教師のポリシーの違いが反映されていた。



ストレス過多の馬にピッキング

毎日やっている厩舎もある

<調教師による馬体チェック>

アスムッセン師は週に2回ほど厩舎に来て、全頭ではなく選抜で（追切後の馬、出走が近い馬）馬体のチェックをしていた。馬はチェーンシャंकをリップに回した状態でスタッフに引かれ、アスムッセン師が両前肢を触診し、その後速歩の歩様を見る（片道のみ、調教師から馬が遠ざかる方向に行って終わり）。アスムッセン師が来られない時はアシスタントの Galen が電話で指示を受け、代行する。特に注意していたポイントは両前肢の関節の関節液、球節の関節液と腱鞘液が増量していないか、また浅屈腱に腫脹はないか、である。関節液の増量が見つかった馬は直ちに開業獣医師に指示されヒアルロン酸およびトリウムシノロンの関節内投与がなされる（後述）。その後、昼飼付となるがアスムッセン師は飼い食いもチェックしていた。追切後でも食欲が落ちていないかをコンディション判定のバロメータにしていた。

なお、追切時の息遣いが悪いなど仕上がっていないと判断された馬は、現在開催を行っていない競馬場に輸送され、代わりに新たな馬が入厩する。この辺りトレセンに近い感覚で、米国でも一流の調教師はスタンバイのできた馬のみを開催場に入厩させて出走回数を稼ぐ。ケンタッキーの場合、キーンランドの後はチャーチルダウンズでの開催があるので、チャーチルダウンズに輸送される馬が多かった。今は仕上がっていないが、来月までには仕上がるだろうという判断である。

・厩舎作業

<クリッピング（毛刈り）>

アスムッセン厩舎の馬はフォアマンにより全頭バリカンで全身を毛刈りされていた。タテガミと尾を除き、下肢部も含めて全ての体毛を刈る。チェーンシャंकをリップに回して、鎮静なしで行う。顔の毛を刈る際には、鼻捻子をした状態で無口を外す。アスムッセン厩舎だけでなく、米国の競走馬は伝統的にこの全身の毛刈りが行われている。

毛刈りもそうだが、米国の競走馬は「馬体の冷却」にとにかくこだわっていた。追切後

は引き運動をする前に馬体に水をかけ、暑い日はレースの前に水をかけ、レースの後には必ず馬場内検量前で水をかけていた。



全頭バリカンで全身を毛刈りする

<扇風機の設置および馬服の装着>

レキシントンの10月は夏のように暑い日もあれば、冬のように寒い日もある安定しない天候である。暑い日に備えて、馬房の前の天井に扇風機が設置された。また、下旬から馬服の着用が始まった。余談だが、ストレスのせいか退屈のせいか、馬房前の扇風機を噛んで壊してしまう馬がいた。

<西海岸の調教師の“間借り”>

Shadwell Turf Mile という10月のキーンランド開催最高賞金のレースに出走するため、サンタアニタにベースがある Kenny Black という調教師がアスムッセン厩舎内の1馬房だけ“間借り”して滞在したことがあった。調教師とグルームの2名だけで来て、調教師が騎乗していた。ちなみに、グルームは以前 Bobby Frankel 厩舎で働いていた時にジャパンカップに遠征したことがあるとのことであった。レースの2日前の木曜日に到着し、土曜日にレースをした後、日曜日にカリフォルニアに帰った。飼料や馬具は持参し、シェッドローヤ洗い場はアスムッセン厩舎のものを借りていた。調教師同士の信頼関係が重要だと思われるが、非常に効率の良いシステムである。

・獣医療

<開業獣医師とオフィシャル獣医師>

アスムッセン厩舎には2人の個人開業獣医師が出入りしていた。1人はベテランの Dr. M. W. Cheney 獣医師で、名前をもじって「ドクターチャイニーズ」と呼ばれていた。基本的な診療は彼が行う。もう1人は中堅の獣医師で、迫切を行う馬に早朝にラシックスを打つなど、サブ的な扱い。2人ともレキシントン在住で、キーンランド開催時以外はセリの購買馬検査などを行っているとのこと。スタッフと異なり、開催ごとに動いている

わけではなかった。

オフィシャルはKHRC (Kentucky Horse Racing Commission) に雇用された獣医師が務めており、こちらはケンタッキー州内を開催ごとに移動する (キーンランドのほか、チャーチルダウンズ、エリスパーク、ターフウェイパーク、ケンタッキードウンズ)。調教時間内にその日出走する馬の出走前検査 (両前肢の触診および速歩での歩様検査) を行い、レースが始まるとパドックで歩様検査をするチームと、発走時刻の4時間前にラシックスを投与し、レースが始まると検体採取所で働くチームの2つに分かれていた。詳細は後述する。ICRAV に出席するのは後者のラシックス&検体チームで、ある女性獣医師は本会獣医師の草野寛一氏のことを知っていた。

<アイスバケツによる冷却>

下腿部 (特に浅屈腱) に帯熱する馬については、プラスチック製の巨大なバケツに水と氷を入れ、その中に両前肢を入れて冷却していた。当初かなり豪快な方法に感じたが、馬も馴れるものである。チェーンシャックをリップに回して保定する。初めてで拒否する馬には馬房の後ろで、尻を壁に付けた状態にし (後がない状態にし)、そこで肢を持ち上げて入れる。約25分間。冷水が馴染みやすいように、事前にポロバンテージを巻いてから水に入れる。馬によってはレース前にも行っていた (タテガミを編みながら冷やす)。アイスバケツを使うほどではない場合、ホースから水を出して冷却することもあった。



アイスバケツによる冷却



流水による冷却

<厩舎肢巻>

調教後、肢元に問題がない馬でも全頭厩舎肢巻が巻かれていた。すなわち、四肢は厩舎肢巻かポルティスかスウェットバンテージのどれかは必ず巻かれているという状態である。四肢の管部に70%イソプロをかけて手でマッサージした後、“布団”を当てて肢巻を巻き、安全ピンで留める。午後作業の際に除去する。ずっと圧迫して浮腫みを取るのではなく、圧迫と解放を経験させて血管を刺激するのが良いのだそうである (前述のアイスバケツも同様の発想)。なお、厩舎肢巻は毎日洗濯せず、汚れたら洗う。



アルコールでマッサージ

肢巻は安全ピンで留める

<ポルティス>

アスムッセン厩舎では「Kwick Relief」という Poultice、Tightener、Freeze の3剤があらかじめ混合された特殊な湿布剤を使用していた。調教後、薬を塗った後、ペーパータオルを貼り、“布団”を当てて肢巻を巻き、安全ピンで留める。午後作業の際に“布団”と肢巻は除去するが、薬とペーパータオルは翌朝までそのままにしておく。



「Kwick Relief」という3剤があらかじめ混合された湿布剤



薬を塗った後、ペーパータオルを貼り、肢巻を巻く

<スウェットバンテージ>

マーゴーファームと同じく、外傷を負った馬にはスウェットバンテージが用いられていたが方法は少し違った。ニトロフラゾン軟膏を塗り、“布団”が汚れないように使い捨ての薄いコットンを当てた後、“布団”を巻いてラップを肢巻代わりにして包帯する。これは翌朝までそのままにしていた。



スウェットバンテージ

<フーフパッキング>

毎日調教後に全頭にフーフパッキングを蹄の裏に詰めて、紙を貼る。フーフパッキングは粉と水を混ぜて粘土のように練って自作する。



フーフパッキング

<Succeed>

毎日調教後にフォアマンが「Succeed」というサプリメントを経口投与していた。

<胃潰瘍予防>

胃潰瘍予防のため、毎日午後作業時にフォアマンがオメプラゾールとラニチジンの合剤を全頭に経口投与していた。10mlに2.2gのオメプラゾールと1gのラニチジンが含有され

ている製剤を 5ml ずつ経口投与。オメプラゾールとして約 2mg/kg でこれは胃潰瘍予防の投与量。青リンゴ味がついている。

<すくみ (Tying-up) >

すくんだ馬はアシスタントトレーナーの Galen がダントロレン（筋弛緩薬）を経口投与し、午後もしき運動を行う。獣医師に診せてフルニキシンの投与が必要なほど重度な症例はなかった。むしろ、かなり軽度なものでもすくみとして取り扱っているというか、閾値が低い印象であった（調教後にほんの少しでも歩様が硬かったら Tying-up と言われる、調教前から硬いと Stiffと言われる）。

<ラシックス>

レースの前に投与するのは有名だが、追切の前にも同様に投与されている。目的は鼻出血（正しくは EIPH）の予防である。レースの日は発走時刻の 4 時間前に KHRC のオフィシャル獣医師が来て打つのだが、追切の日は朝 5:30 に開業獣医師が来て、その日追切を行う馬全頭一律で同じ時間に打つ。Salix という製剤を 5ml（フロセミドとして 250mg）静脈内投与する。

<内視鏡検査>

追切後およびレース後は開業獣医師により全頭内視鏡検査（ファイバースコープ）が行われる。EIPH を確認する。

<関節内注射>

アスムッセン師による馬体チェックで両前肢の球節もしくは腕節の関節液の増量が見つかった馬は直ちに開業獣医師に指示されヒアルロン酸およびトリウムシノロンの関節内投与がなされる。キシラジンとデトミジンの混合で鎮静（同系統の薬剤だが、Dr. Cheney は確かにそう言っていた）。スクラブした後、滅菌手袋を装着し、掌側囊の外側から 21G の針を穿刺する。関節液を抜いて、粘ちょう性を主観的に評価した後、トリウムシノロン製剤（1V に 18mg/3ml、粉末）をヒアルロン酸ナトリウム製剤（1V に 22mg/2ml、液体）を用いて溶解し（本来は注射用水で溶解するところを、注射用水の代わりにヒアルロン酸ナトリウム製剤を用いて溶解する）、関節内に投与する。腕節は上段（橈骨手根関節）と下段（手根間関節）をしっかりと区別して、掌側から（副手根骨の外側）穿刺する。正直かなりのご高齢で、手も震えているぐらいなのに必ず一発で入れる技量に驚いた。処置後はフェニルブタゾン 10ml（200mg/ml なので 2g）静脈内投与し、穿刺部に Alu Spray を塗布した後、乾包帯。腕節は“美浦巻き（管のバンテージの近位に腕節の包帯）”にする。関節内注射は出走の 7 日前まで使用可能というルールがあり、トリウムシノロンをデポ剤にするとさらに長くなるので、デポ剤ではない方を使っていた。なお、関節内投与以外の一

一般的な治療（投薬）はレースの3日前まで可能である。



トリアムシノロン製剤



掌側囊の外側から針を穿刺



腕節も掌側から穿刺



“美浦巻き”

<ショックウェーブ>

起始部繋靱帯炎、いわゆる深管の症例には Dr. Cheney とは別の獣医師が来て、ショックウェーブが当てられていた。使用されていた機械は日高育成牧場と同じくベーサトロ

ン。余談だが同症例は JRA 育成馬に多く見られる悩みの種の一つであったため、米国研修に来る前、深管の新しい治療はないものかと探していたが、米国の獣医師もショックウェーブぐらいしかないと考えているようだ。そもそもデビュー前の若馬に起こる疾患で、競走馬生命を奪うような重篤なものではなく、「いずれ治る」と考えられているため、積極的には治療されないことも多かった。

<下痢>

下痢を呈する馬には開業獣医師によりセフチオフル（Excede という製剤、エクセネルと一緒に、6.6mg/kg）が筋肉内投与されていた（1回のみ）。

<EqStim>

呼吸器症状を呈する馬には EqStim という生菌製剤が投与されていた。4ml を静脈内投与。

<疲労回復>

頻度は非常に少なかったが、日本と同じようにビタミン剤の静脈内投与を疲労回復処置として行ったこともあった。他に電解質と DMSO（消炎作用がある）を「DMSO は発癌性があるけどな。ハハハ」とか言いながら経鼻投与することもあった。伝統的に行われているらしい。

<ワクチン>

必要に応じて随時打つ。入厩要件は入厩日から 1 年以内の日付の伝貧の陰性証明、入厩から 180 日前以降でかつ 14 日前以前に EHV-1 (Equine Herpes Virus Type 1) のワクチンを打っていないなければならないこと。競走馬だけでなく、リードボニーおよびルームメイトのロバも同様。

<駆虫>

厩舎の薬品置場に Panacur があるのは見たが、実際に使っている場面は見なかった。定期的に投与しているようである。

・装蹄

装蹄師は毎日来場し、こまめに改装していた。蹄鉄については、ダートではレース・調教ともに前肢は 2mm 以上、後肢は 1/4 インチ以上のスパイクの付いた鉄 (Toe Grab) を使用してはならない。芝では Queen's Plate もしくは Queen's Plate XT という種類の蹄鉄のみ使用できる。日本の競走馬と比較して、ロングトゥアンダーランヒールが少ない印象。ダートが主体だからか？



装蹄師は毎日来場

・パドック（装鞍所兼下見所）のスクーリング

調教時に馬場入りする前にパドックを通過するのと、競馬の際にレースの合間にパドックに入りパドックでの装鞍を行い馴致するのと、2つのスクーリングが行われていた。

前者ではフォアマンが厩舎から引いて、パドックを通過し、実際にレースの際に使われる入場口から馬場入りする。そのまま調教して終了。私自身が馬を引いていてスクーリング最中の写真を撮れなかったもので、別の機会に撮ったパドックの写真を掲載する。



パドックの入口

ここだけ少し狭い



入場した直後

手前で装鞍し、奥で騎乗する



奥が騎乗するサークル

本場馬への入場口

後者では、1～3 レースの合間にパドックに連れて行く。厩舎で肢巻（通常調教用）および頭絡（調教用）を装着し、その上から革の無口を付け、チェーンシャンクを上唇に回してリップチェーンとして使用する。さらに耳栓をし、暑い日は馬体に水をかけて厩舎を出発する。この時引くのはグルームで、うるさい馬はフォアマンが右側から引く（チェーンシャンクではなく革の引手を使用）。実際にレースに出走する馬たちがパドックに入り切ったらすぐにスクーリングの馬たちも入場する。キーンランド競馬場では厩舎側から馬房形の装鞍所と木の下で装鞍所があり、出走馬はどちらで装鞍するか選ぶことができる。その後、装鞍した馬が順番を整えて、下見所を1周だけするとジョッキーが騎乗し、すぐに本場馬入場となるのがレース本番の流れ。アスムッセン師は基本的に馬房形の装鞍所で装鞍するというスタイルで（稀にうるさい馬は木の下で装鞍する）、スクーリングではまず全頭馬房に入れる。そして Galen が競走鞍を持ってきて、1頭ずつ馴致を行う。馴致の方法は競走鞍を載せ、下腹帯を締めた後、一度真っ直ぐ歩かせてまた馬房に戻り、かぶったりしなければ今度は上腹帯を締めて1周歩かせる。それで問題なければ鞍を外して次の馬へ。全頭終わったら、下見所を1周して厩舎に戻る。

スクーリングは新馬および休養明けの馬のほか、前回パドックでうるさかった馬に対して行われる。実際、私が引いていた馬が下見所で突然止まり急にバックし、尻もちをついてひっくり返ったことがあった。左側から引いていたグルームも右側から引いていた私も瞬時に引手を放し、馬が立ち上がった後すぐに捕まえたので事なきを得たが、何の前触れもなかったのが驚いた。Galen に謝罪すると、「そういう馬だからこそスクーリングが必要なんだよ」と笑っていた。

6. 競馬場での調教および出走



耳栓



水をかけて出発



引くのはグルームで、うるさい馬はフォアマンが右側から引く



馬房形の装鞍所



競走鞍を載せる



下腹帯だけして一度歩く

上腹帯を締めて1周

・出走

レースに出走する日の朝は引き運動 20 分のみ。調教時間内に KHRC の獣医師が各厩舎を回り、出走馬全頭の出走診断（両前肢の触診および速歩での歩様検査）を行う。発走時刻の 4 時間前に KHRC の獣医師が来てラシックス（現在は Salix という商品名の製剤が使用されている、薬品名はフロセミド）を投与するか、投与する場合は投与量をどうするか聞かれる。投与量は 150mg 以上 500mg 以下と決まっている。通常は 250mg（Salix を 5ml）静脈内投与する。投与後、KHRC の獣医師が馬房にラシックスを投与したことがわかるように蛍光色の札を貼る。その後、出走馬には口カゴが装着され、絶食絶水となる。Stakes 競走（オープン特別以上）出走馬には、この時間（発走時刻の 4 時間前）からキーンランド競馬場の職員が見張り（厩舎監視）につく（重賞がない日はメインレース）。この厩舎監視員は出走馬がパドックに向けて厩舎を出発するまで、出走馬に触れた全ての人の名前および ID 番号、何時に何をしたかを記録する。



KHRC の獣医師による出走診断

ラシックスの投与

6. 競馬場での調教および出走



ラシックス投与を示す札



口カゴが装着され、絶食絶水



Stakes 競走出走馬には厩舎監視がつく

グルームとフォアマンが発走時刻の1時間半前、ホットウォーカーが1時間前に厩舎に集合する。レース前にはタテガミを編み、口洗いをし、両前肢にエラスティックバンテージを巻き、両後肢の球節部分にのみ黒いベトラップを巻きランダウンパッチ（クモズレ予防のシール）を貼り（芝のレースで巻かないこともある）、2歳馬にはネーザルストリップ（カリフォルニアクロームが付けていたことで有名な鼻孔を拡げるシール）を貼る。デビューから2～3戦付けてみて、様子を見て外す。「馬がレースを苦しいものだと思う要素を1つでも減らしたい」という考え方から行っている。レースでは調教で使用している革製ではなく白いナイロン製の頭絡にリングビット、ゴム製のクロス鼻革、舌縛りが基本。

6. 競馬場での調教および出走



出走馬は全頭タテガミを編む



口洗い

ネーザルストリップ

前のレースの出走馬が本馬場入場したタイミングで「第何レースの出走馬は 21 号厩舎に引き付けてください」という放送が入るので、馬体に水をかけてから厩舎を出発する（発走時刻の約 45 分前）。競走用頭絡の上から革の無口を付け、チェーンシャックを上唇に回しリップチェーンとして使った状態で歩かせる。暑い日は体を冷やすため、厩舎で水をかけてから行く。グルームが左側から馬を引き、必要があればフォアマンもしくはアシスタントトレーナーが右側から引く。ホットウォーカーが水とスポンジが入ったバケツ（レース直後に馬体に水をかけるのに使う）およびプリンカーと洗剤（馬具用）と腹帯パッドが入った袋を持って馬の後ろからついて行く。



水をかけて出発

グルームが左側から引く

21号厩舎でキーンランドの職員が個体確認をし、グルームは番号の書かれたビブスを着用する（余談だが、この21号厩舎は撮影禁止なのか、写真を撮っていたら注意された）。全頭揃ったところでパドック（装鞍所兼下見所）へ移動する。パドックでは馬房もしくは木の下で装鞍し、両前肢のエラスティックバンテージは外す。グルームが左側を持ち、アシスタントトレーナーもしくはフォアマンが右側を引く。キーンランドのリードポニーに乗っている職員に本馬場入場前に引き渡して終了である。

レース後はグルームが競走用頭絡の上から無口を掛け、アシスタントトレーナーもしくはフォアマンが馬体に水をかけて体を冷やしてから退場する。平場であれば1～2着馬、重賞であれば1～4着馬が検体採取所（Detention Barn、厩務員たちからの通称は Test Barn）に向かう。大本命が不可解な負け方をした時など、裁決委員が特別に指定した馬も入着馬とは別に検体採取所に向かわなくてはならない。レースによってはプレ・レース・テスト（48時間前にも検体採取）を行っているそう。検体採取所にはシェッドローと洗い場があり、普段厩舎で行っているのと同様に引き運動できるような作りになっている。シェッドローには番号の書かれた水桶が吊るされており、馬は指定された水桶の水を飲みながらシェッドローを引き運動される。途中、洗い場（3つある）で馬体を洗い、頃合いを見て新しい麦稈の敷かれた馬房（8つあるが使われているのは4つ）で採尿する。馬房で採尿する際には採尿する人間の危険防止のため、タイチェーンを使う。気にするようであれば外してフリーで採尿していた。必ず採血も行う（プレーン管3本）。着外だった場合はまっすぐ厩舎に帰り、水を飲ませながら約60分引き運動を行う。禁止薬物の検査は各地の大学で行っているそう（キーンランドはケンタッキー大学、サンタアニタ競馬場は U. C. Davis）。

6. 競馬場での調教および出走



水をかけて退場



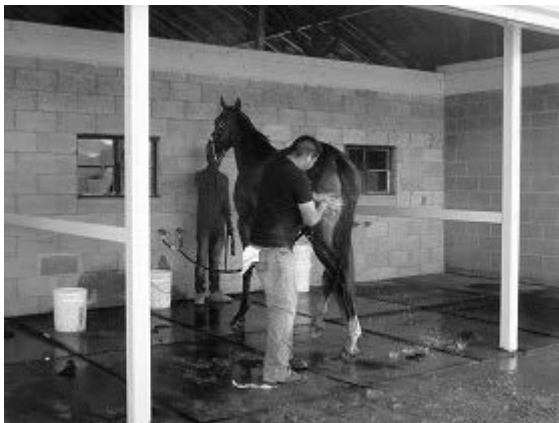
検体採取所に向かう



シェッドローで運動できる



水桶は馬毎に指定



洗い場もある



馬房で採尿



必ず採血も行う

検体は大学へ送付される

<厩舎関係者への馬券販売>

余談だが、開催日には厩務員食堂（Tack Kitchen）で馬券が販売されている。米国では厩舎関係者も馬券が購入可能である。むしろ積極的に売っている。

・ケンタッキー州の競馬のルール（Condition Book より）

競馬のルールは主催者毎に異なる。各主催者は「Condition Book」というルールブックを発行し、関係者にルールを周知している。以下、キーンランド競馬場の「Condition Book」の内容の抜粋。

- 総賞金のうち、60%が1着、20%が2着、10%が3着、5%が4着、3%が5着だった馬の馬主のものになり、残り2%の賞金を6着以下だった馬の馬主で均等に分ける。
- 全ての出走馬の上唇に番号のタトゥーが入っていないといけない。タトゥーを入れる料金は1頭80ドルで、馬主がタトゥー業者に直接支払うこと。



上唇にタトゥーを入れる

- 競馬場内で馬に乗る者は、競走馬でもリードポニーでも、厩舎地区でも馬場でも、必ずヘルメットと安全ベストを装着していなくてはならない。

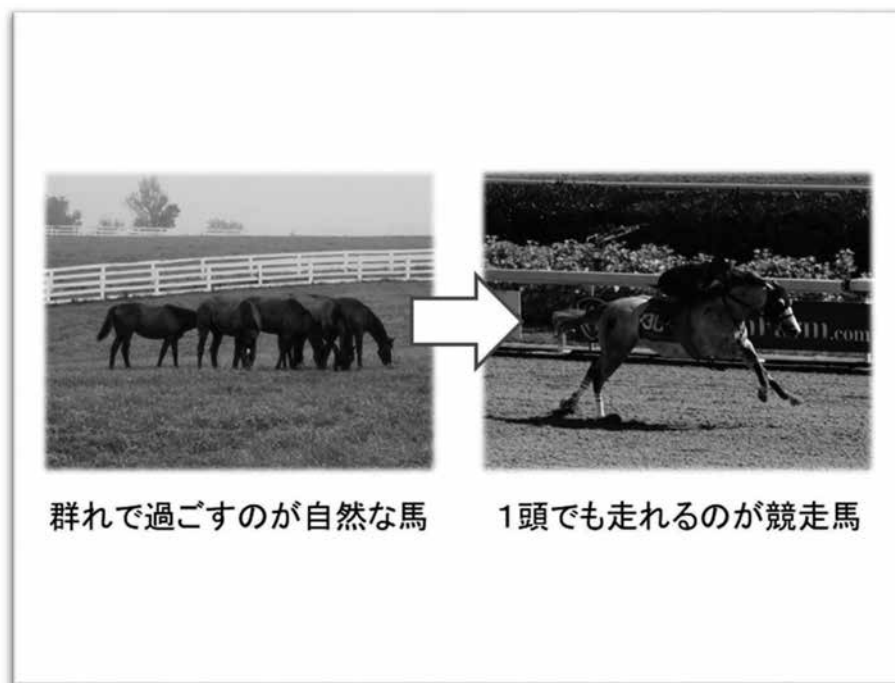
- 蹄鉄については、ダートではレース・調教ともに前肢は 2mm 以上、後肢は 1/4 インチ (6.35mm) 以上の付いたスパイク鉄 (Toe Grab) を使用してはならない。芝では Queen's Plate もしくは Queen's Plate XT という種類の蹄鉄のみ使用できる。
- 競走馬もリードボニーも、入厩する馬は入厩日から 1 年以内の日付の伝貧の陰性証明、入厩から 72 時間以内の日付の CVI (Certificate of Veterinary Inspection) が必要である。入厩から 180 日前以降でかつ 14 日前以前に EHV-1 (Equine Herpes Virus Type 1) のワクチンを打っていないといけない。
- レースの前のフロセミド (ラシックスもしくは Salix) は KHRC (Kentucky Horse Racing Commission) の獣医師が打つ。発走時刻の 4 時間前に静脈内投与する。投与量は 150mg 以上 500mg 以下。馬主が 20 ドルを支払う。
- キーンランド競馬場でレースに出走する馬は遅くともレースの時間の 4.5 時間前にはキーンランド競馬場に到着していなくてはならない (当日輸送も OK)。
- 馬房の敷料はウッドシェービングか麦稈を使用すること。
- ダートコースは 1 周 1,700m で、ケンタッキー産の約 19,000 トンの砂 (sand) とシルト (silt) と粘土 (clay) のブレンドで、約 87.5% が砂で約 12.5% が粘土とシルトである。
- トレーニングコースは 1 周 1,000m で、オールウェザー。
- 前走から出走間隔が 45 日以上あいた馬は出走から 20 日以内に少なくとも 1 回 Published Work Out (調教タイムが公式に発表される追切) を行わなくてはならない。
- 初出走の馬は少なくとも 3 回の Published Work Out を行わなくてはならない。そのうち 1 回はゲートからスタートしたもので、1 回は出走から 20 日以内でなければならない。
- 芝コースでの追い切りは、芝のステークス競走に出走する馬に限定する。日曜日もしくは火曜日のダートコースが閉場した直後に行わなくてはならない。
- レース、レース前の準備、表彰式、レース後、馬場での調教に関する放映権はテレビ局が有する。
- 馬主、調教師、騎手、厩務員は KHRC のライセンス (写真入りの ID) が必要。
- 出馬投票はレースの 3 日前もしくは 4 日前。開催日によって異なる。Condition Book に記載されている。

・所感①：キーワードは「“Independent”な馬を作る」

ここまで米国の競馬を見てきて、また育成牧場や競馬場で実際に研修してみて、そしてアスムッセン師や Galen と話してきて、米国の競走馬を調教する上でキーワードとなるのは「“Independent (独立した、他に頼らない)”な馬を作る」ということだという考えに至った。小回り・平坦で直線の短い米国の競馬場では、逃げもしくは先行して直線入口では先頭に立ち、そのまま押し切るという勝ちパターンが圧倒的に多い。そのため、調教では単走で目標とするタイムで走れるようになるまで仕上げることを目指していく。米国の競馬場は基本的に外側のダートコースが約 1,600m とサイズまで統一されているので、調教

では「同じコースでどれだけ自分の持ち時計を短縮していけるか」を目指していく形になり、ヒトのアスリートに近いイメージである。そもそも米国の競馬場が全て左回りであることも、ヒト用の陸上競技会場が左回りであるというところから来ているのである（米国では競馬場を意味する英語は race course ではなく race track である）。2歳新馬の追切は2頭併走で行われるが、数回レースを経験した後はひたすら単走で追切が行われ、自身の持ち時計をつめていくという言わば自分自身との戦いが続く。相手がどうであろうと、自分はこのタイムで走れるんだという自信を持ってレースに臨むのである。すなわち、「“Independent”な馬を作る」ということである。

同時に、この考え方が米国の調教師が追切時の走行タイムを非常に厳密に乗り役に指示し、またマスコミが新馬戦であれば追切のタイム、古馬であれば前走のタイムを根拠にオッズを決定していく（ベイヤー指数など多数のインデックスがある）いわば「タイム重視の考え方」の理由となっている。さらに言えば、「米国のトレーニングセールはなぜ単走で全力疾走で行っているか？」という疑問に対する答えにも繋がってくる（単走で全力疾走できる馬が調教が進んだ馬という考え方。各調教師は全力疾走できる距離を徐々に延ばしていき、出走に向かう）。そして、本来群れで暮らす馬にとって“Independent”な状態が自然な訳がないため、そのストレスを調教時やレース前にリードボニーが付くことで緩和している。リードボニーが付いている時は“OFF”であり、放れたら“ON”というように調教されているという訳である。



“Independent”な馬を作る

余談だが、米国では開業獣医師のことを Independent doctor と呼ぶが（Private doctor

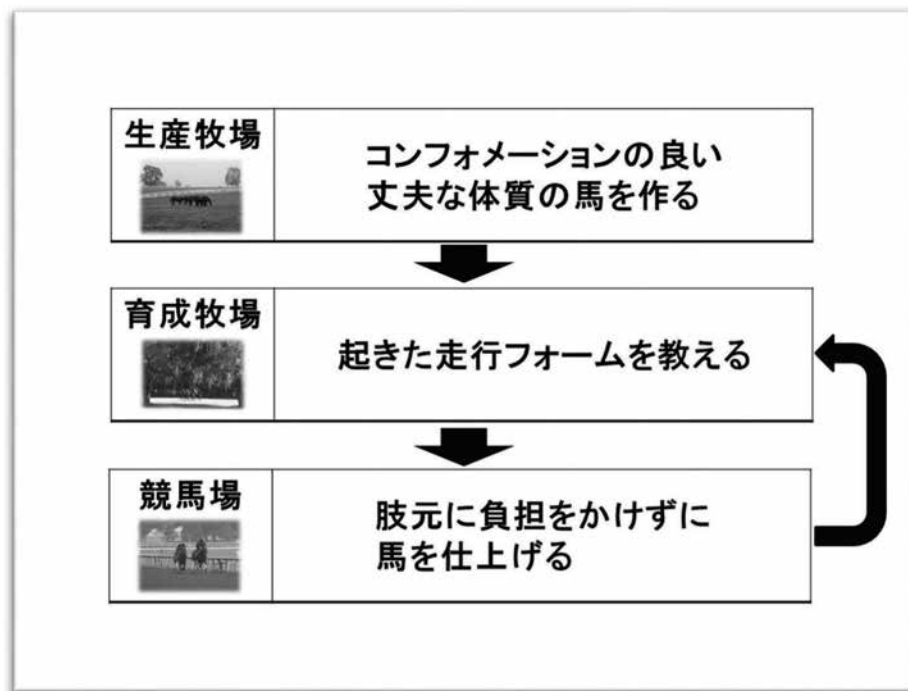
だと特定の厩舎や牧場の“お抱え獣医師”というイメージになる、牧場に常駐する獣医師は Resident doctor と呼ぶ)、アスムッセン師に「Dr. Cheney は Independent doctor なのか？」と質問したところ、「そうだ。さらに彼はそもそも Independent doctor である前に、Extremely independent man (極端に人の話を聞かないひと、一匹狼) だ。君はああいふ獣医師になるなよ。」と冗談を言っていた。

・所感②：育成牧場と競馬場の役割分担

育成牧場ではブレイキング後、まずは正しい走行フォームの形成に重点が置かれる。芝の上などの不整地を利用し、将来馬が捻挫しないようなバランス感覚および筋力を鍛える。また、牧場によってはグラス坂路を利用したり (ウインスターファーム)、あえて勾配 (Undulation) のあるコースを走らせたりして (マーゴーフファーム)、起きた (セルフキャリッジをした) 走行フォームを形成する。育成牧場の段階では昼夜放牧もしくは昼間の短期放牧をして、馬にストレスを掛けないように注意しながら調教する。米国の生産牧場では 24 時間もしくは昼夜放牧が基本であり、逆に競馬場では放牧地がなく放牧できないので、育成牧場にいるうちに徐々に放牧時間を短くしていき、急激な飼養環境の変化を避けている。同時に、濃厚飼料の量も徐々に増やしていき、疝痛を防ぐ。

競馬場では逆にそのストレスを利用して、ある意味で馬を精神的に追い込むことで走る気を出させている。アスムッセン師は軽い調教 (ただし、追切は強い)、放牧をしない、濃厚飼料の多給 (1 日約 14kg) で馬のエネルギーを満タンにして、走ることに對するフラストレーション (欲求不満) を極限まで高めて、レースに臨む。風船を空気でパンパンに膨らませて、爆発させるイメージである。そのように精神的なストレスは掛けられている一方で、運動量はそれほど多くないので肉体的なストレス、特に肢元に掛かる負担は少ない。すなわち故障 (運動器疾患) が少ない。そのため、競馬の出走回数を多くすることができ、賞金を稼ぐ可能性を増やすことができるというわけである。

さらに言えば、生産牧場まで含めて、生産牧場と育成牧場と競馬場がそれぞれの役目をしっかりと理解し、上手く分担して出走まで持っていくというのが現在の米国競馬産業の主流だと思われる。すなわち、生産牧場では「(将来の故障を防ぐため) コンフォメーションの良い、丈夫な体質 (特に骨・腱) を作ること」、育成牧場では「馬に起きた (速く走れて、疲労を軽減し、故障しにくい) 走行フォームを教え込むこと」、競馬場では「(故障を防ぐため) できるだけ肢元に負担のかけない調教法で馬を仕上げ、出走回数を多くしてより多くの賞金を稼ぐこと」を目標にし、それぞれが忠実に任務を行うというのが新しい米国流なのだと考えられた。



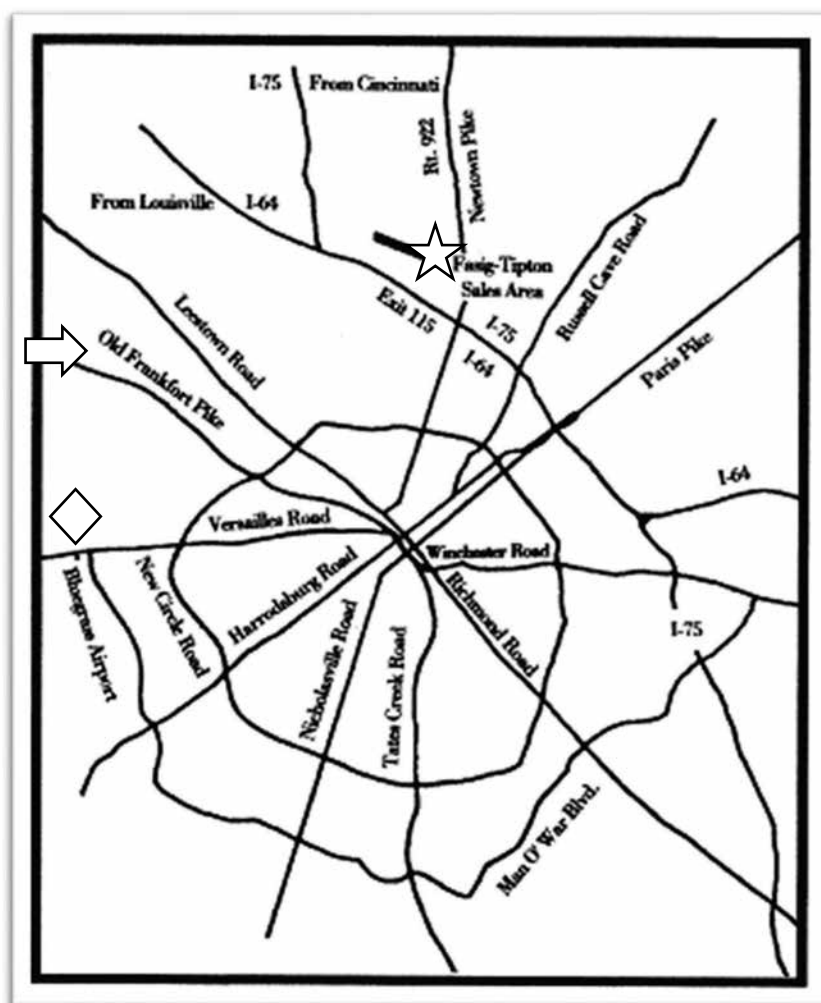
米国では、生産牧場と育成牧場と競馬場の役割分担がはっきりしている

・競馬場の預託料

サンタアニタ競馬場のオフィシャル獣医師である Dr. Dana Stead によると、並みの調教師で月 2,000～2,500 ドル程度。ボブ・バファートのような一流の調教師で月 4,000 ドル程度。

7. セリ

レキシントンには民間のセリ会社であるファシグティプトン社 (Fasig-Tipton) と、生産者団体かつキーンランド競馬場で競馬開催を行っているキーンランド協会 (Keeneland Association) という2つのセリ主催者があり、それぞれセリ会場を保有している。



☆がファシグティプトン社、⇒がダービーダンファーム、◇がキーンランド協会

セリの種類については、騎乗馴致前の1歳馬を扱う1歳セリ (Yearling Sale)、主に繁殖牝馬と離乳後の当歳馬を扱う混合セリ (Mix Sale)、そして実際に馬場で人が乗って走らせる調教供覧を行う2歳トレーニングセール (2YO in Training Sale) がある。そのうち、2歳トレーニングセールについては、キーンランド競馬場で開催されていた年もあるが私が研修中ではなかったため、フロリダ州およびカリフォルニア州で開催されたセリを視察に行った。

1) 1 歳セリ

・ Fasig-Tipton The July Sale

2015 年 7 月 9 日にファシグティプトン社で行われる Fasig-Tipton The July Sale（以下ジュライセール）および連続開催される Fasig-Tipton Summer Selected Horses of Racing Age Sale（以下 HORA セール）の上場馬の移動に合わせて、7 月 7 日からはダービーダンファームではなく直接セリ会場に出勤した。

ジュライセールは 1 歳馬のみが上場できるイヤリングセールであり、数ある米国のイヤリングセールの中でも中級に位置するセリである。332 頭の登録があったが 43 頭の欠場馬（Out）が出たため 289 頭の 1 歳馬が上場されることとなった。

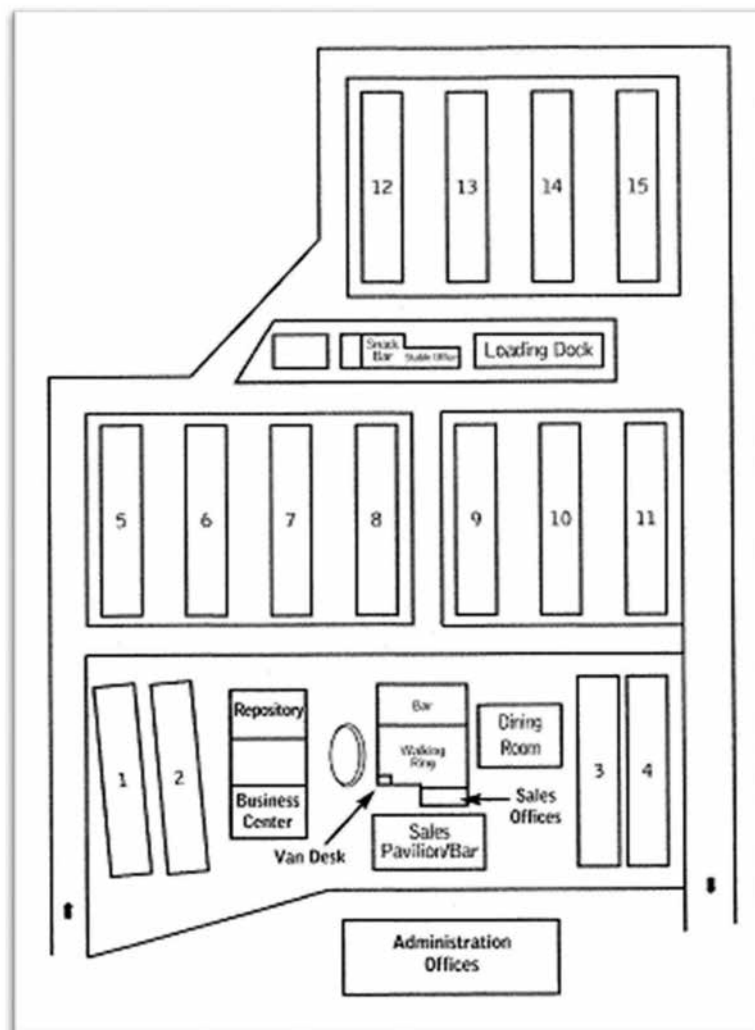
一方の HORA セールは 10 時より開催されるジュライセールに引き続いて同じ会場で行われる 2 歳馬以上を対象とした現役競走馬のセリで、ジュライセールの Hip ナンバーは 1 番から 332 番が割り振られているのに対し、HORA セールは 401 番から 524 番が割り振られていた。ちなみに、こちらも 124 頭の登録があったが 28 頭の欠場馬が出たため結局上場されたのは 96 頭であった。

ちなみに登録料は 1 頭 500 ドルで、これはファシグティプトン社が主催するセリでは全て同額とのことであった。ちなみに、キーンランド協会主催のセリもほとんどが同額の 500 ドルだが、選抜セリであるセプテンバーセールの登録料のみ 1 頭 1000 ドルとのこと。欠場は馬主の気が変わった（セリで売る気がなくなった）際に行われ、理由のいかんにかかわらず登録料が返金されないとのこと。購買者向けの配布資料には欠場の理由は書かれていなかった。

さて、ダービーダンからの登録馬は、ジュライセールが 4 頭（うち 1 頭欠場して 3 頭）、HORA セールが 18 頭（うち 5 頭が欠場して 13 頭）であった。

今回、セール本番は 7 月 9 日であったが、購買申込者は 7 月 7 日から下見が可能であった。それに向けて、ダービーダンからの上場馬は 7 月 6 日に全頭入厩を済ませており、他のコンサイナーも 7 月 7 日の午前中までには入厩を終わらせていた。ちなみに、下見可能時間は朝 8 時から夕方 17 時までである。

まず、レキシントンのファシグティプトン社のセリ会場の構造について簡単に説明したい。厩舎（Barn）は 1 から 15 まであり、1 つの厩舎に 43 馬房がある。厩舎と厩舎の間には歩様検査用の砂地があり、下見対応時の歩様検査は必ずそこで行われ、芝の上を歩くことはタブーであった。また、下見は原則厩舎の片側だけで対応し、反対側から下見に来た客には移動してもらっていた。セリ会場は 2 号厩舎と 3 号厩舎の間にあり、セリ当日上場馬はまず屋外のパレードリングに 4 頭が入場し、次いで屋内のパレードリングに 4 頭が入場し、ステージへと入場していた。ちなみに、レポジトリールームは 2 号厩舎と屋外のパレードリングの間にあった。



ファシグティプトン社のセリ会場



厩舎と厩舎の間の歩様検査用の砂地

7月7日は朝6時、8日および9日は朝5時から仕事開始。ダービーダンの上場馬は1歳馬3頭が8号厩舎に、2歳以上の競走馬13頭が9号厩舎に、それぞれ入厩していた。私はイヤリングの8号厩舎に配属された。他にスタッフは Regional Sales Director の Renee Logan、イヤリング部門の Julio と Abel(共にメキシコ人)、そして Don (アメリカ人) の4名であった。Julio と Abel そして私が Show Man としてお客さんの前で馬を引く係、Don は Groom として馬体の手入れなどを担当するという役割分担になった。

ちなみに、競走馬の方は Sales and Bloodstock Director である Carl McEntee プラス7名のスタッフで下見対応をしていたが、ジュライセールが終わった後はイヤリングチームが競走馬チームの応援に行った。

どの厩舎も購買者がわかりやすいようにコンサイナー名が書かれた看板が用意されていた。ダービーダンではさらに、繋養している種牡馬の宣伝用の看板も同じく掲示されていた。これらの看板は専門の業者に作成を依頼しているとのことであった。さらに、競走馬の厩舎ではビデオルームを設け、レース映像がここで見るできるようになっていた(レポジトリーは別)。



コンサイナー名の看板

ビデオルーム

朝行くと、まずは馬房から馬を引き出し水道水で洗浄し、その間に手の空いた者がボロ出しを行った。ボロ出しは馬房の前にファシグティプトン社が用意した布袋を敷きその中にボロと捨てる麦稈を入れ縛り、それを厩舎の端に置いておくのである。すると午前中のうちにトラクターが来てそれを積んで行ってくれるというシステムであった。ちなみに、布袋は夕方再度配布していた。細かい話ではあるが、馬房掃除後の床は箒で掃かずにブローワーで飛ばしていた。そしていわゆるボロみがないため、馬房内に掃き入れていた。これは牧場での作業でも同じであった。ちなみに、米国のセリでは契約後は新しいオーナーが勝手に馬を連れて帰るのであるが、退厩時に麦稈を掃除する必要はなかった。



朝はまず馬体洗浄



馬房の前の布袋にボロ出し



布袋を厩舎の端に置いておく



トラクターが回収

競走馬の方は頭数が多い上に直前に追加された馬が多く、さばき切れなかったためか、下見会場でもレポジトリー検査が行われていた。



セリ 2 日前までレポジトリー検査

朝 8 時から下見が開始されるため、馬体が乾いたのを見計らって 7 時半頃から馬体の手

入れが行われた。ヒップナンバーはダービーダンオリジナルのものを用意していた。



ダービーダンオリジナルヒップナンバー

下見対応であるが、まず馬の調教進度について、はっきり言って何もできていない状態であった。日本のコンサイナーであれば昼放牧に切り替え、引き運動やランジングなどを行って人の指示に従うことを覚えさせ、かつ筋肉を付けて見た目を良くするものであるが、ここでは「セリに向けて馬を馴致する」というよりは「セリを通して馬を馴致する」と言った方が適切であった。

アメリカでは引き馬や展示にチェーンシャンクが使用されるのが一般的であるが、チェーンシャンクの特徴として装着の仕方によって制御力が異なるという点が挙げられる。チェーンシャンクの使い方には、大きく分けて下記の4段階があることがわかった。

- ① リップチェーンのように上唇にかけて使用する
- ② 鼻の上に直接チェーンが当たるように回して使用する
- ③ ハミのように口の中を通して使用する
- ④ 無口頭絡に付けて使用する

※①>②>③>④、番号が若いほど制御力が強い



チェーンシャンクの様々な使用法

さらに、ゴム製のリップチェーンを使用してかつ②や、チェーンにゴム製のカバーを付けて②など無数のオプションが存在し、非常に多様な対応が可能であった。引き手は馬を全く触ったことがないメキシコ人から、より恵まれた環境を求めて移籍してきた経験豊富なイギリス人・アイルランド人まで Show Man のレベルがバラバラなのである。この“多様性”こそが米国では重要なのではないかと考えられた。

使用法としてはまず、最も強力な①から試し、馬が会場に慣れて落ち着いたら徐々に番号を上げていく、もしくはチェーンシャンクの使用を止めてチフニーに変えるという感じであった。ちなみに、チフニーは革無口に装着するタイプのものが使用されていた。JRA が使用している棒ハミ付きの展示用頭絡を使用している馬は見かけなかった。



チフニーは革無口に装着するタイプを使用

このチェーンシャンクであるが、私も挑戦したが慣れていないため非常に難しかった。まず①のリップチェーンのように上唇にかけて使用方法で常歩をさせられたのだが、緩めすぎるとすぐに上唇からチェーンが外れてしまい、かといって緩めないと制御力が強過ぎて馬が前に進まなくなった。会場には慣れたハンドラーがたくさんいたが、慣れているとはいえやはり馬の動きは強く制御されているためぎこちなく、本来の歩様を見るのには不向きな方法であると感じた。②はチェーンシャンクの使用法としては最もポピュラーな方法であり、特に習熟を要することなくすぐに常歩を行うことができた。普段は緩めておき、立ち上がりそうになった時にグッと手綱を引けば良いのである。これなら、歩様もぎこちなくならなかった。③はハミとして使用したいにもかかわらず馬の右の口から左の口へという方向でチェーンが走行しているためどうしても左右差が生じ、左の口ばかり引っ張ってしまう結果に陥るため、使いづらかった。④の方法で展示している馬は非常に稀で、②もしくは③の方法で支障なく展示できている馬はたいていチフニーに移行していた。

下見対応で馬を引いている時、「引手から片手を離すな！」と繰り返し注意を受けた。馬をバックさせる時など、片手を引手から離して胸前を反対の手で押した方が馬に教え易いと思うのだが、常に革引手を両手で保持していることを強要された。そうこうしているうちに、馬が1頭放馬し、下見会場を走り回り、パニックとなった。この時は何事もなく捕捉さ

れたのであるが、訴訟社会のアメリカである、問題が起こると非常にややこしくなるらしい。マネージャーたちはその辺を過剰なくらい心配していた。

12 時頃、下見客がランチに行き少なくなったタイミングを見計らって昼飼が付けられていた。セリ会場ではペレットではなく、スイートフィードが使用されていた。そのほか、同じく下見客が少なくなったタイミングを見計らって適宜ルーサン乾草が与えられていた。



昼飼はスイートフィード

合間を見て他のコンサイナーの展示も見ていたが、1 歳馬はほとんどが両前肢の装蹄を行っていた。肢勢に関しては購買者サイドが日本よりもうるさいらしく、ハグヤードでも肢勢矯正手術がたくさん実施されていたし、セリの前も装蹄により肢勢を可能な限り矯正して上場されるとのことであった。

下見対応の途中で、ジョッキークラブの職員が特徴を取りにきていた。こちらでは生産頭数が多過ぎるため、日本の JAIRS のように牧場に出向いて全頭検査を行うのは不可能であるため、セリなどのイベント時に個体識別検査を行うとのことであった。なのでセリ本には「Dark Bay or Brown Filly」などと記載されている。セリに登録された段階では毛色が定まっていないのである。ちなみに、2015 年時点で米国の競走馬はマイクロチップを使用していなかった(2018 年産駒から義務付けられた)。2 歳以上になると、上唇に入れ墨を入れる。



ジョッキークラブ職員による馬体検査

米国のセリでは通常の下見客のほか、興味深い業者が下見に来ていた。まずは Cecil Seaman & Co. LLC という会社。この会社は Cecil O. Seaman という人が個人でやっているのだが、馬のバイオメカニクスを研究しており、彼独自の理論に基づき巻尺で馬体各所の測尺を行っていた。このデータを基に、顧客に推奨馬の情報提供を行っているのだそうである。彼によると、2013 年のセリで彼の推奨馬から勝ち上がった馬が 135 頭出て、特別競走の勝ち馬が 26 頭（通常は 3.4%の馬しか勝てないのに、Cecil Seaman 社の推奨馬からは 11.6%の馬が特別競走を勝った）、重賞勝ち馬が 18 頭（通常は 0.8%の馬しか勝てないのに、Cecil Seaman 社の推奨馬からは 8.0%の馬が重賞を勝った）、G1 勝ち馬が 10 頭出た、総獲得賞金は 17,684,794 ドルであったとのことである。

もう 1 社、Equine Analysis Systems という会社が、脾臓および心臓のエコー検査を行っていた。心肺機能（赤血球の動員能力）の指標にするのだそうである。さらに尾の毛を抜いて持って帰った。ミオスタチン遺伝子で有名なエクイノム社ではなく、自分の会社で独自に DNA 検査を行っているとのことであった。



Cecil O. Seaman による測尺



Equine Analysis Systems の検査

下見終了前の 16 時頃に客足を見計らって検温が行われた。電子体温計を使用していた。昔は水銀体温計を使用していたとのことであった。両後肢が浮腫む馬についてはバンテージ（厩舎肢巻）が巻かれていた。17 時に来客がいないことを確認して、夕飼（スイートフィード）をつけて終了した。イヤリングの下見数はセリ前々日が約 50 件、前日が約 40 件であった。この後、22 時にファシグティプトン社の夜警が夜飼と投げ草を行うとのことで、馬房の前にスイートフィードとルーサン乾草が用意された。夜脱走した時にすぐに個体認識ができるように、ヒップナンバーは剥がされず貼られたままであった。



両後肢に肢巻



夜飼を馬房の前に準備しておく

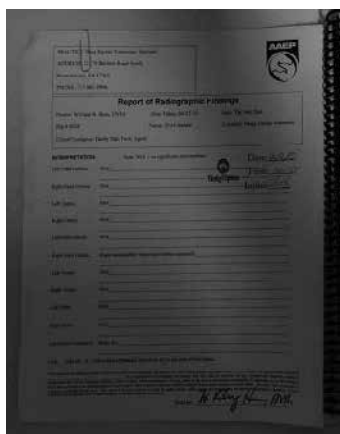
下見の合間を縫ってレポジトリールームを視察した。ひょっとしたら購買登録者と同行しないと入室できないかと思っていたが、受付で獣医師である旨を告げると大丈夫であった。まず受付で Username と Password のほか、電話番号やメールアドレスなどの必要事項を登録した。同じ Username と Password を使用して、以後全てのファシグティプトン社主催のセリでレポジトリールの閲覧が可能であった。

入室すると、1 名ずつ PC のモニターが閲覧できるブースとなっていた。PC の前に座り、最初の画面で Consigner（上場者）、Veterinarian（獣医師）、Administrator（管理者＝ファシグティプトン社）を選択する（私は Veterinarian を選択）。次の画面で Username と Password を聞かれるので、受付で登録したものを入力すれば OK であった。その後、見たい馬の番号を入力すると、Document と Image と出てくる。上場馬に関して特別な開示事項があれば Document に反映されていた。

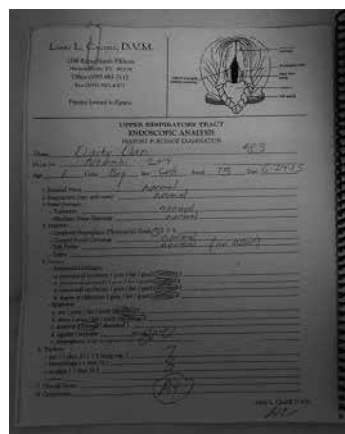
X線画像は Image を選択すると見ることはできたが、日本のように画像の順番がきちんと整理されておらず、馬によってバラバラであり、非常に見にくかった。1 例を挙げると（1 歳馬）、左前球節 4 枚、左腕節 2 枚、左前腕節屈曲 1 枚、左前球節屈曲 1 枚、左後球節 1 枚、左飛節 1 枚、左後球節 2 枚、左飛節 2 枚、右後球節 1 枚、左後球節 1 枚、右後球節 1 枚、右飛節 1 枚、右後球節 2 枚、右飛節 2 枚、右前球節 4 枚、右前腕節 2 枚、右腕節屈曲 1 枚、右前球節屈曲 1 枚、右膝 3 枚、左膝 3 枚の計 36 枚である。写真を見ているうちに、どの関節をすでに見て、どの関節はまだ見ていないか、わからなくなってくる。これはどうやら撮影された順番が整理されずそのままアップされているようであった。ちなみに、2 歳以上の馬に関しては、36 枚プラス腕節のスカイビュー左右 1 枚ずつ（第 3 手根骨の列のみ）、飛節の逆斜め（背外 - 蹠内）左右 1 枚ずつの計 40 枚であった。

内視鏡画像に関しては、そもそもビデオスコープではなく検査者しか見ることができないファースバースコープで検査しており、X線所見を含めた獣医師の診断書に「Scope A+」などと記載されるか、内視鏡所見専用の診断書に結果が記載されるかのどちらかであった。この診断書類はレポジトリールームの PC で Document としては見るのが不可能であり、

下見の際に上場者（コンサイナー）に聞く必要があった。そして、場合によっては購買者側が依頼した獣医師により再度ファイバースコープによる検査が行われていた。ビデオスコープが導入されていれば購買者側の金銭的な負担および馬が検査を受ける負担の両方とも軽減できると思うのだが、なぜ導入されていないのか謎が残った。



X線画像所見の診断書



内視鏡所見の診断書

セリ当日、いつもと同じように朝8時から下見対応を行った後、10時からのセリ開始に向け、9:57に1～8番の馬の引き付けの放送が入った。時間ギリギリのようであるが、最初の10分間はセリに関する説明や欠場馬のお知らせなどであり、実際に1番の馬のセリが開始されたのは10:10頃であった。セリ会場は2号厩舎と3号厩舎の間にあり、上場馬はまず屋外のパレードリングに4頭が入場し、次いで屋内のパレードリングに4頭が入場し、ステージへと入場するという仕組みである。放送が流れているほか、各厩舎にTVモニターが備え付けられており、コンサイナーはそれを見て状況を把握できる仕組みになっていた。



屋外のパレードリング



屋内のパレードリング



ステージ



各厩舎の TV で実況中継

上場馬の準備であるが、いつもどおりブラシ掛け、裏掘り、蹄油が塗られた後、タテガミが左側に倒れないようにヘアスプレーをし、ヒップナンバーをダービーダンオリジナルからファシグティプトン社が用意したものに変え、全身をショーシーンで艶出しした後、足元にもオリーブオイルスプレーをして艶出しし、最後に鼻先にヴィックスヴェポラップを塗り他馬の匂いを感じさせなくしてセリ会場で悪さするのを防いでいた。



ヘアスプレーで鬣が左側に倒れないようにする



本番用ヒップナンバー



オリーブオイルスプレー



ヴィックスヴェポラップを鼻先に塗り、匂いを感じさせなくする

セリの途中、ダービーダンのイヤリングマネージャーである Ian が来て写真撮影を行っていた。これはジュライセールに上場されている 1 歳馬だけでなく、HORA セールに上場されている競走馬も対象である。イアンは毎月 1 回、記録のためダービーダンのイヤリング部門で預かっている馬を全頭写真撮影しているとのことであった。

このセリであるが、日本のセレクトセールやセレクションセールと同じく鑑定人が明らかに「主取り」であることを言わないため、売れたのか売れなかったのか、非常にわかりづらかった。正確に把握するためには場内各所に設置されているファシグティプトン社の PC で確認する必要があった。例えばダービーダンからの最初の上場馬である 20 番であるが、TV 実況上では 55,000 ドルで落札されたかに見えたが実は売れておらず、同馬はセリ後の個人取引（Private Sale）にて 40,000 ドルにて落札されたというのが正しい結果であった。

馬はセリの翌日までに新しい馬主が引き取るのがルールで、場内には大小さまざまな馬運車が集まってきていた。日本と異なり再上場という仕組みはなかった。

上場頭数が多かったため、HORA セールまで全て終了したのが 21:45 であった。ジュライセールが開始されたのが朝 10 時なので、約 12 時間のセリである。我々スタッフは朝 5 時から夜 22 時までなんと 17 時間も労働したことになる。セリではダービーダンファームの牧場スタッフのほか、米国各地のセリを渡り歩くプロのハンドラーも働いており、セリ後に彼らには給与が入った封筒を手渡していた。気になる金額であるが、牧場スタッフの一人に見せてもらったところ、下見が始まった火曜日からはセリ当日の木曜日までの 3 日間で 700 ドルもらっていた。火曜日と水曜日は朝 5 時から夕方 17 時までの 12 時間労働、そしてセリ当日の木曜日は朝 5 時から夜 22 時までの 17 時間労働である。1 ドル 123 円換算で時給 2,100 円というところか。中にはまだ新しい馬主が引き取りに来ていない馬もいたが、例によってヒップナンバーは装着されたまま、投げ草のみ行い、馬をそのまま馬房に残して解散となった。

さて、セリの結果であるが、ジュライセール全体として売却頭数、売却率、売却総額、平均価格、中間価格すべて前年を上回った。

年	売却頭数	主取頭数	売却率	売却総額	平均価格	中間価格
2015	205	83	71.2	\$20,005,000	\$97,585	\$77,000
2014	162	72	69.2	\$14,253,000	\$94,154	\$70,000
2013	163	59	73.4	\$14,635,000	\$89,785	\$72,000

ジュライセール結果

・ Fasig-Tipton Saratoga Sale

2015 年 8 月 10 日および 11 日に開催された Fasig-Tipton the Saratoga Sale（以下サラトガセール）に視察に行ってきた。場所はニューヨーク州サラトガ・スプリングス市 (Saratoga Springs) にあるサラトガ競馬場 (Saratoga Race Track) である。ニューヨーク市から約 300 キロに位置し、最も近い Albany 国際空港から競馬場まで車で北へ約 35 分（約 45 キロ）かかる。レキシントンからは約 1,285km 離れており（日本でいうと東京駅から襟裳岬までの距離に相当）、車で約 13 時間の長旅であった。

サラトガ・スプリングスは米国的高级避暑地で、多くの資産家たちが別荘を所有している。サラトガ競馬場では夏に競馬開催が行われ、3 歳限定 G1 トラヴァーズ S が行われるなど単なる夏のローカル開催ではなく非常にレベルの高い競馬が行われている。競馬場にファシグティプトン社のセリ会場が併設され、そこで競馬開催と同時にセリが行われるのである。強いて日本に例えるなら、軽井沢に競馬場とセリ場があり、競馬とセリが同時開催されるようなものである。

8 日の朝 8 時から下見が開始されたが、13 時より競馬開催が始まり、来場者は大部分がそちらに流れ競馬を楽しんでいた。特に 8 日は第 8 レースと第 9 レースが G1、第 10 レースも G3 と重賞が 3 つも組まれ、非常に盛り上がった。最終 11 レースが 19 時に行われ、その後はセリ関係者でカクテルパーティが開かれた。9 日も朝 8 時から下見開始で、13 時より 19 時まで競馬開催が行われていた。10 日も 13 時より競馬開催が行われたが、セリを考慮してか最終は第 9 レースで、17 時半には開催が終了した。11 日は競馬開催がなく、19 時のセリまで下見対応のみであった。

・ サラトガセール

サラトガセールは 1 歳馬のみが上場できるイヤリングセールであり、数ある米国のイヤリングセールの中でも選抜された馬しか上場することのできない最上級に位置するセリである。このセリに上場するためにはまず 2 月の段階で登録が必要とのことである（登録時に 500 ドル必要）。そして、3～4 月に Fasig-Tipton 社の職員により実馬検査が実施され、上場馬が決まるとのことである（さらに登録料 500 ドル必要）。208 頭の登録があったが 37 頭の欠場馬が出たため 171 頭の 1 歳馬が上場されることとなった。なお、カタログを見ると 209 番までであるが、これは 2013 年にアメリカンファラオがこのセリの 85 番で上場されたのを記念して 85 番が欠番にされたためである。上場順は母馬（繁殖牝馬）のアルファベ

ット順で、今年はイニシャル T で始まっていた。

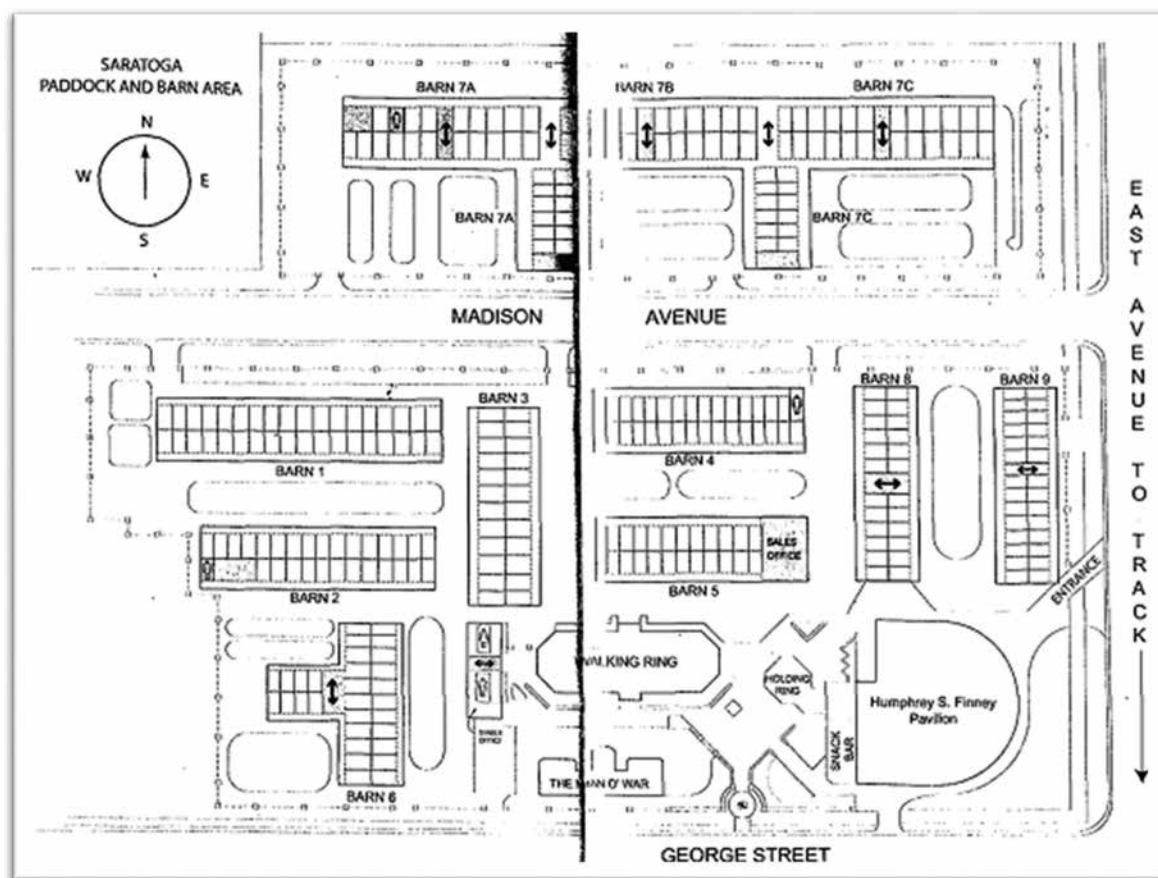
下見はセリの前々日の 8 日の朝 8 時から開始された。セリ自体は 10 日および 11 日の 19 時から開始のナイターで、各日約 85 頭のセリに約 3 時間ずつかかっていた（終了は 22 時頃）。ダービーダンからの登録馬は、私が研修している本場から 4 頭（うち 1 頭欠場して 3 頭）、Regional Sales Director の Renee Logan が運営するペンシルベニアの牧場から 2 頭であった。まず、サラトガのファシグティプトン社のセリ会場の構造について簡単に説明したい。入り口には昨年までの同セール出身の活躍馬の勝負服を着た人形が飾られており、2 年前の同セール出身のアメリカンファラオの人形が中心に置かれていた。このほか、アメリカンファラオ関連の掲示物が場内に多々あった。厩舎（Barn）は 1 から 9 まであり、I の字型もしくは T の字型であった。入り口付近にセリ会場およびパレードリングが整備され、8 日の夜には購買者および上場者を対象としたカクテルパーティが開かれた。厩舎と厩舎の間には歩様検査用の砂地があり、夏季の暑さに配慮し随所に大木が配置され、涼しい日陰で下見ができるようになっていた。レポジトリールームは 8 号厩舎の 2 階という非常にわかりにくい位置にあった。レキシントンにある会場とは異なり、仕切りがなく隣の PC が覗ける構造になっていた。ダービーダンからの上場馬の医療情報を確認したが、Document にはセリ前に受けた手術の情報など（関節鏡による OCD の摘出など）が記載されていたものの、当歳時の情報は開示する必要がないらしく肢軸矯正のための螺子固定などの情報は開示されていなかった。なお、右第 3 中手骨遠位の Bone Cyst のため欠場した 185 番の X 線画像が取り下げられることなくそのまま閲覧できる状態になっていた。セリ当日上場馬はまず屋内のパレードリングに 4 頭が入場し、ステージ前の待機場所に 2 頭が待機し、ステージへと入場していた。セリ会場はレキシントンと比べて非常にコンパクトであり、全ての座席が指定席であった。なお、1 日目の方が来場者が多くセリ会場は満員御礼であったが、売り上げを見る限り来場者が少なくなった 2 日目もバイヤー自体の数は減っておらずむしろ観光客の姿が減っただけという印象であった。セリ会場の 2 階には購買者のみが入れるブースが設けられておりシャンパンが振る舞われ、購買者の優越感を満足させる仕組みとなっていた。



セリ会場



セール出身の活躍馬の人形



ファシグティプトン社サラトガのセリ会場



カクテルパーティの様子



下見の様子



パレードリング

待機場所



セリの様子

購買者のみが入れるブース

セリの結果であるが、売却頭数、売却率、売却総額、平均価格、中間価格すべて前年を上回った。

年	売却頭数	主取頭数	売却率	売却総額	平均価格	中間価格
2015	145	26	84.8	\$46,755,000	\$322,448	\$250,000
2014	114	27	80.9	\$33,284,000	\$291,965	\$237,500
2013	108	29	78.8	\$31,870,000	\$295,093	\$250,000

サルトガセール結果

高額落札馬ベスト 20 を表にまとめた。当時のリーディング・サイヤーである Tapit の産駒が上位 8 位までに 5 頭もランクインするなど大人気である。そのほか、歴史的な名馬ゼニヤッタの父である Street Cry、ケンタッキー・ダービー馬オーブなどを輩出している Malibu Moon、牝馬ながら年度代表馬に輝いたレイチェル・アレクサンドラの父である Medaglia d'Oro 産駒が複数ランクインした。その他、新種牡馬の人気も高い印象で、The Factor（父 War Front）の産駒が 2 頭、Bodemeister（父エンパイアメーカー）の産駒が 1 頭ランクインした。なお、ランキングの一番下の 2 頭の種牡馬 Tale of Ekati および Jersey Town はダービーダンファーム繋養の種牡馬である。今年の種付料がそれぞれ 15,000 ドルおよび 10,000 ドルにもかかわらず産駒が 500,000 ドルの値段がついたのは立派な成績ではないだろうか。

産地で見るとやはりほとんどがケンタッキー州産馬であったが、1 位の Dress Rehearsa の 14 はアイルランド産馬であった。

コンサイナーを見ると、Four Star、Paramount、Denali Stud、Hunter Valley、Lane's End、Taylor Made、Eaton Sales、Gainesway が複数の上位馬を輩出しており、上場頭数 6 頭以上の大手が強かった中、3 頭しか上場していない Hunter Valley の健闘が目立った。

なお、このセリには Winchester Farm の吉田直哉氏の生産馬が上場されていたのだが（88 番の Medaglia d'Oro 産駒）、落札価格は 585,000 ドルで見事 13 位にランクインした。母 Gabriellina Giof、母の父 Ashkalani、牡、黒鹿毛、2/3 生、落札者は Al Shaqab Racing（カタール）、コンサイナーは Eaton Sales Agent であった。

順位	落札価格	性別	父	母	コンサイナー
1	\$2,000,000	牡	Tapit	Dress Rehearsal	Four Star
2	\$1,400,000	牡	Street Cry	Rcuandry	Paramount
3	\$1,200,000	牡	Tapit	Appealing Zophie	Denali
4	\$800,000	めす	Malibu Moon	Red Hot Bertie	Hill'n'Dale
5	\$750,000	牡	Tapit	Carriage Trade	Hunter Valley
5	\$750,000	めす	Tapit	Princess Arabella	Lane's End
5	\$750,000	牡	The Factor	Street Scene	Top Line
8	\$700,000	牡	Tapit	Savvy Supreme	Taylor Made
9	\$675,000	牡	Arch	Quickest	Paramount

10	\$600,000	牡	Blame	Be My Prospect	Eaton Sales
10	\$600,000	牡	Scat Daddy	Miss Dolce	Hurstland
10	\$600,000	牡	The Factor	Smiling Eyes	Taylor Made
13	\$585,000	牡	Medaglia d'Oro	Gabriellina Giof	Eaton Sale
14	\$575,000	めす	Malibu Moon	Old Time Chicago	Paramount
15	\$570,000	めす	War Front	Hostess	Denali
16	\$550,000	牡	Street Cry	Element of Truth	Gainesway
16	\$550,000	牡	Bernardini	Sky Beam	Four Star
18	\$500,000	牡	Pioneer of the Nile	True Blessing	Gainesway
18	\$500,000	めす	Malibu Moon	Tulipmania	Denali
18	\$500,000	牡	Bodemeister	Awesome Humor	Dromoland
18	\$500,000	牡	Medaglia d'Oro	Dancing in her dreams	Gainesway
18	\$500,000	牡	Unbridled's Song	Escape with Me	Lane's End
18	\$500,000	牡	Tale of Ekati	S'Avall	Hunter Valley
18	\$500,000	めす	Jersey Town	Setting Mist	Four Star

高額落札馬ベスト 20

サラトガセールでの日本人バイヤーの落札馬は 30 番の Speightstown 産駒であった。母 Akilina、母の父 Langfuhr、めす、栗毛、2/24 生、落札価格は 250,000 ドル、落札者は了徳寺健二、コンサイナーは Winter Quarter Farm Agent であった。なお、同馬はダービーダンファームに預託されることになった。代理人の飯山剛至氏によると、キーンランドセプテンバーセールでも 1 歳馬を購入予定で、そこで購買した馬と合わせてダービーダンにて検疫を受け、日本へ運ぶとのことである。



了徳寺健二氏が購買した 30 番（後のリエノテソーロ）

・ Keeneland September Yearling Sale

今まで見てきたジュライセールやサラトガセールは全てファシグティプトン社主催のセ

りであったが、今回のセリはキーンランド協会主催のセリである。キーンランド協会はセリおよびキーンランド競馬場での競馬開催を主な業務としている。セリ会場も競馬場に併設されている。

Keeneland September Yearling Sale（以下セプテンバーセール）は1歳馬のみが上場できるイヤリングセールであり、数ある米国のイヤリングセールの中でもカタログ掲載頭数が何と4,164頭、セリは12日間、下見を含めると計16日間も開催される世界最大規模のセリである。カタログがBook1からBook6の6冊に分けられており、血統および馬体が最も良い馬がBook1に登場し、最も悪い馬がBook6に登場するという仕組みである。

まずBook1の下見がセリの3日前の9月11日の朝8時から開始された（夕方17時まで）。セリ自体は9月14日から26日までで、Book1のみ午前11時開始、Book2以降は午前10時開始である。なお、Book2の前日はセリが行われず（Dark Dayと呼ばれる）、購買者がじっくり下見を行えるような仕組みになっていた。Book3以降はセリの開催と下見が重なっており、最も購買者の多いBook1、そして次いで購買者の多いBook2の下見に多く時間をかけられるような仕組みになっていた。

Book 1	9月14日（月）：Hips 1－241（241頭）	セリ開始 11 時
	9月15日（火）：Hips 242－483（242頭）	
	9月16日（水）：Hips 484－724（241頭）	
Dark Day	9月17日（木）	
Book 2	9月18日（金）：Hips 725－1127（403頭）	セリ開始 10 時
	9月19日（土）：Hips 1128－1530（403頭）	
Book 3	9月20日（日）：Hips 1531－1932（402頭）	セリ開始 10 時
	9月21日（月）：Hips 1933－2334（402頭）	
Book 4	9月22日（火）：Hips 2335－2734（400頭）	セリ開始 10 時
	9月23日（水）：Hips 2735－3133（399頭）	
Book 5	9月24日（木）：Hips 3134－3532（399頭）	セリ開始 10 時
Book 6	9月25日（金）：Hips 3533－3850（318頭）	セリ開始 10 時
	9月26日（土）：Hips 3851－4164（314頭）	

2015年セプテンバーセール日程

米国のトップトレーナーである Todd A. Pletcher も Book1 の下見に来ており、そのことが Blood-Horse 誌の電子版に掲載されていた。ちなみに、師のコメントを抜粋すると「我々は将来種牡馬となり得るような馬を探している。Book1 の上場馬は全頭見るが、最初の下見ではそれほど時間をかけない。私のリストに残った馬を、時間をかけて 2 度目の下見を行う。そして残った馬を獣医検査にかける。バランス、アスリートとしての能力、常歩、全体のコンフォメーションが一般的に注目されるが、私は特に中型サイズの、肢の曲がっていない、良くバランスのとれた馬を好む。他者のように新種牡馬には関心がない。まず馬を見て、その後血統の裏付けを確かめる。」



Todd A. Pletcher 調教師

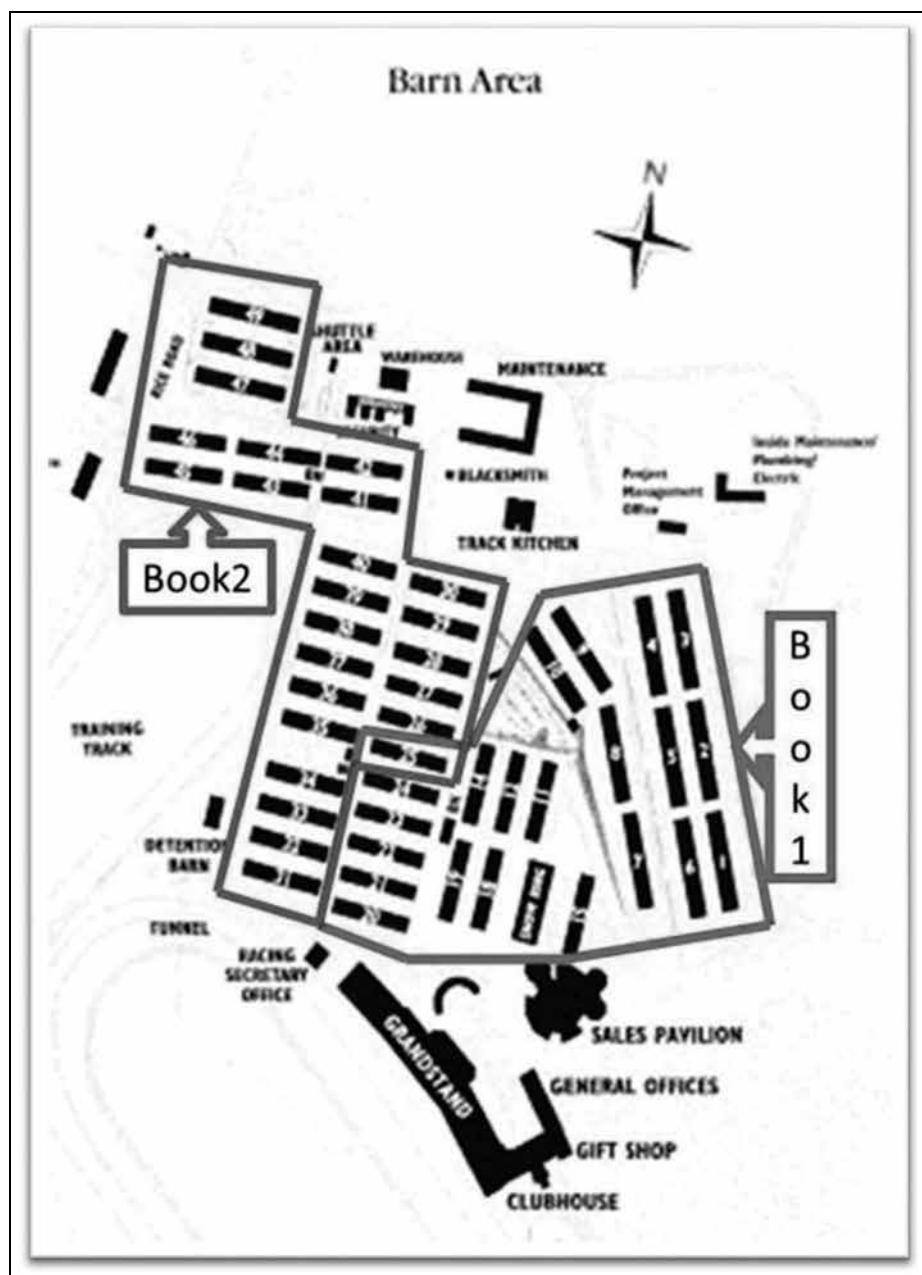
今回私はダービーダンのメンバーとして上場者サイドからセリを見た。ダービーダンのスタッフの仕事の流れを前述の表を改変して説明する。スタッフの数はマネージャーおよび私を除いた数である。なお、解散時刻は上場がない日が 17:00 まで、上場があった日はダービーダンからの上場が終わるまでであった。

Book 1	9/10 (木) : 8:00 集合(10 号厩舎), スタッフ 2 名	5 頭到着(Book1, 10 号厩舎)
	9/11 (金) ~13 (日) : 5:30 集合(10 号厩舎), スタッフ 6 名	5 頭下見対応(Book1)
	9/14 (月) : 5:30 集合(10 号厩舎), スタッフ 6 名	1 頭上場(Book1), 4 頭下見対応(Book1)
	9/15 (火) : 5:30 集合(10 号厩舎), スタッフ 6 名	4 頭上場(Book1), 7 頭到着(Book2, 25 号厩舎)
	9/16 (水) : 5:30 集合(25 号厩舎), スタッフ 7 名	7 頭下見対応(Book2)
Dark Day	9/17 (木) : 5:30 集合(25 号厩舎), スタッフ 7 名	7 頭下見対応(Book2)

Book 2	9/18 (金) : 5:30 集合(25号厩舎), スタッフ 8 名	7 頭上場(Book2), 12 頭到着(Book3, 10 号厩舎)
	9/19 (土) : 5:30 集合(10号厩舎), スタッフ 9 名	12 頭下見対応(Book3)
Book 3	9/20 (日) : 5:00 集合(10号厩舎), スタッフ 10 名	12 頭上場(Book3), 6 頭到着(Book4, 38 号厩舎)
	9/21 (月) : 5:30 集合(38号厩舎), スタッフ 6 名	6 頭下見対応(Book4)
Book 4	9/22 (火) : 5:30 集合(38号厩舎), スタッフ 8 名	6 頭上場(Book4), 11 頭到着(Book5, 10 号厩舎)
	9/23 (水) : 5:00 集合(10号厩舎), スタッフ 8 名	11 頭下見対応(Book5)
Book 5	9/24 (木) : 5:30 集合(10号厩舎), スタッフ 9 名	11 頭上場(Book5), 6 頭到着(Book6, 30 号厩舎)
Book 6	9/25 (金) : 5:30 集合(30号厩舎), スタッフ 4 名	6 頭下見対応(Book6)
	9/26 (土) : 6:00 集合(30号厩舎), スタッフ 4 名	6 頭上場(Book6)

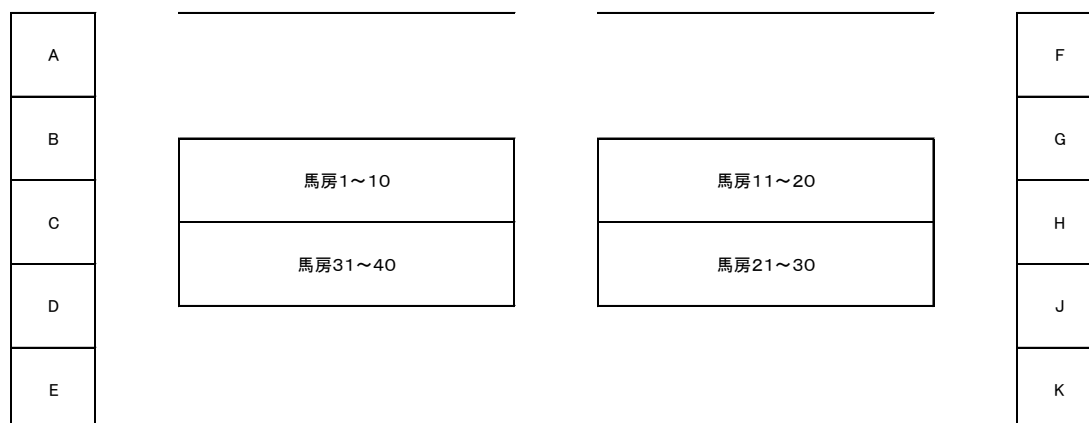
ダービーダンスタッフの動き

上記表のように、集合する厩舎が日によって変わる。これは、下見客の利便性を考えて、Book 毎に厩舎が固められているためである。例えば、Book1 および Book2 の厩舎は下記図のとおりである。Book1 に上場される馬が 1～25 号厩舎に入厩しており、一部重複するものの Book2 に上場される馬が 25～49 号厩舎に入厩しているのである。Book1 の馬を買いたい人は 1～25 号厩舎の馬だけを下見すれば良く、Book2 の馬を買いたい人は 25～49 号厩舎の馬だけを下見すれば良い。同じく Book3 の馬は 1～26 号厩舎、Book4 の馬は 27～49 号厩舎 (一部 1～2 号厩舎)、Book5 の馬は 1～12 号厩舎、Book6 の馬は 12～35 号厩舎に入厩していた。



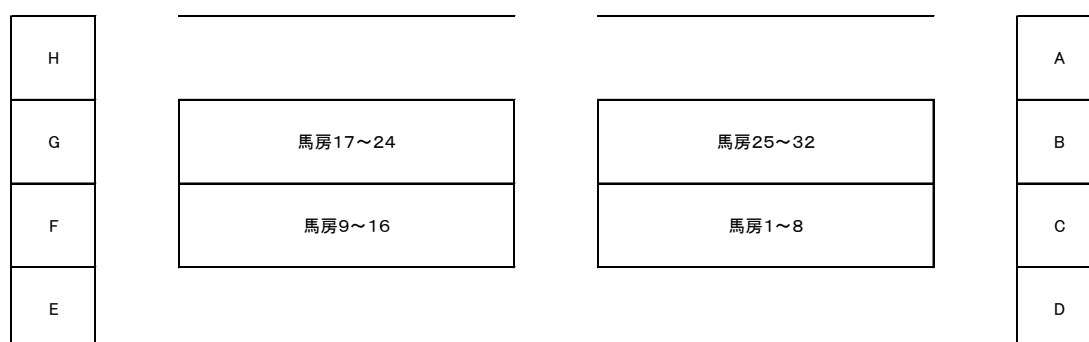
キーンランド厩舎

厩舎内の構造であるが、2つのタイプに分けられるようである。Book1、3、5で使用した10号厩舎は、下記図のように馬房が40あり、両側に Tack Room（馬具庫）が5つつある作りであった。



10 号厩舎

Book2、4、6 で使用した 25、38、30 号厩舎は一回り小さく、下記図のように馬房が 32 あり、両側に Tack Room（馬具庫）が 4 つずつある作りであった。



25、38、30 号厩舎

いずれにせよ、ダービーダンの Colt Barn と同じくシェッドローを持つ独特の作りで、入り口が限られるため下見の際の厩舎の出入りには注意を要した。

毎日の仕事の流れであるが、基本的には朝 5:30 に集合した後（日によって集合時間に変動あり）、まずはボロ出しと並行して馬体洗浄および引き馬が行われる。その後馬を手入れし、8:00 から下見対応、上場馬のいる日は 10:00 からセリ開始（Book1 のみ 11:00 セリ開始）という感じであった。ボロ出しはファシグティプトンのジュライセールと同様布を用いて所定の位置まで運んでおけば、後はキーンランド協会の職員が運んでくれる仕組みであった。1つの Book が終わって厩舎を変更する際の敷料はそのまま馬房内に放置して OK で、次の Book までにキーンランド協会の職員が全出ししておいてくれた。乾草や敷料（麦稈）はコンサイナーが各自用意することになっており、ダービーダンメンテナンス部門の職員が牧場から運搬していた。そのほか、厩舎を飾る看板および花を用意するのも彼らの仕事であった。ファシグティプトン同様夜警がいて、夜飼や見回りは彼らがやってくれる。解

散時は水と乾草、必要のある馬は肢巻をし、夕飼付をして終了という流れであった。



ボロ出し



馬体洗浄



下見対応 (Book1)



ボロはキーンランドの職員が回収



終わった後の馬房も職員が清掃



厩舎の装飾はメンテナンス

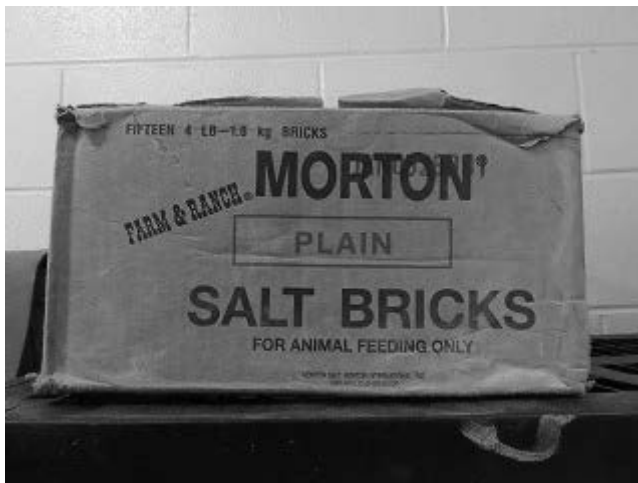
下見の際、よく歩く馬から順に①チェーンシャンクをリップチェーンのように使う、②リップチェーンを鼻の上に回して使う、③チフニーを使う、④チフニーを使わず無口に引き手

のみというのはジュライセールと同じであった。なお、なかなか歩かない馬には水鉄砲を使っていた。これはダービーダンに限らず、どのコンサイナーも行っていた。下見を行っているバイヤーの邪魔にならないことが前提だが、基本的には引く人間の反対側（右側）から打つのが最も効果的であるとのことであった。



歩かない馬には“水鉄砲”

下見客が少なく暇な時など、馬が退屈して扉を齧る場面が多々見られた。これはさくへきなどの悪癖に繋がるため、そんな場面ではすぐに鉋塩のブロックを入れていた。すると馬が鉋塩を舐めるため、退屈しのぎに有用であった。



馬が退屈している時には鉋塩を与える

下見客が多く、馬がたくさん歩いた日には最後にフーフ・パッキングを蹄に詰めていた。疲れが取れるという感覚らしい。



馬がたくさん歩いた日には最後にフーフ・パッキングを蹄に詰める

キーンランドのレポジトリールームはセリ会場の中にある。レポジトリールームを利用するには、まず入口の受付で住所や電話番号などを登録してカードをもらう。さらに内側の受付で1頭につき1枚ずつ指定の用紙に見たい馬のヒップナンバーと自分のサインを書くと、職員が空いているPCにその馬のレントゲンを映し出してくれるので、それを見るという仕組みであった。その馬のレントゲンを見終わるとまた別の用紙に見たい馬のヒップナンバーと自分のサインをいちいち書いて提出しなくてはならず、非常にストレスを感じた。ファシグティプトンより良い面はレントゲンの順番が全くのバラバラではなくある程度決まっていたことである（左前球節⇒右前球節⇒左腕節⇒右腕節⇒左後球節⇒右後球節⇒左飛節⇒右飛節⇒左膝⇒右膝）。利用後はまた指定の用紙に最後に見た馬のヒップナンバーとサインを書いて提出し、ログアウトする。なお、レポジトリールーム内の診断書およびレントゲン画像は撮影禁止であった。

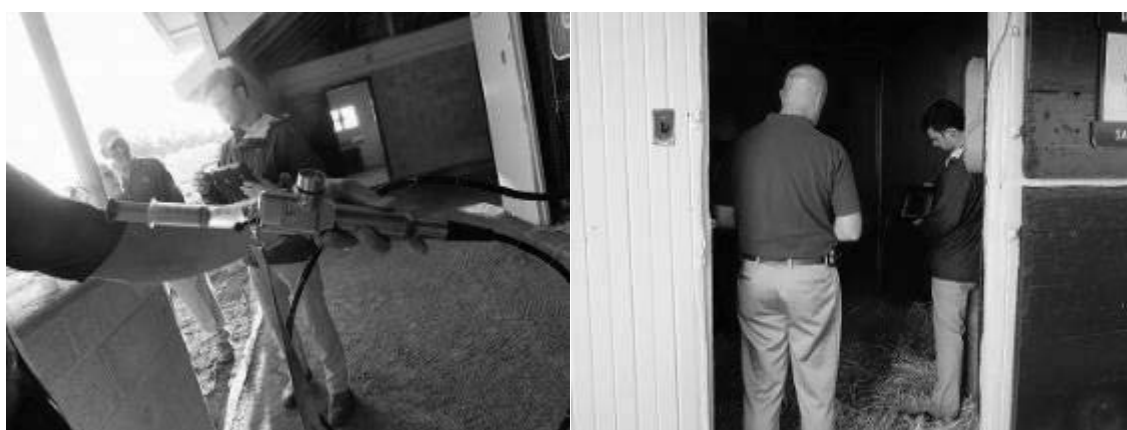
バイヤーは多くの場合、購買候補馬の獣医検査を頼んでいた。内容は獣医師により若干異なるものの、概ね内視鏡検査（ファイバースコープ）、心臓の聴診、視覚の検査、歩様検査、レポジトリールームに提出されているレントゲン画像の読影である。費用は1頭あたり5万円程度。Dr. Fallonに聞いたところ、これは獣医師であれば誰でもできるとのこと。しかし、州の免許が必要であるとのことである。キーンランドのセリならケンタッキー州の、サラトガのセリならニューヨーク州の免許が必要らしい。州の免許は獣医師免許を持っていれば簡単な試験に合格し登録料を支払えば受かるとのことであった。

日本との大きな違いは内視鏡検査である。日本の馬はビデオスコープによる検査が行われているため、基本的には内視鏡検査は1回受ければ良いが（その画像をバイヤーが皆で見る）、こちらではファイバースコープのため特に人気のある馬については10回以上も内視鏡検査を受けることもあり、鼻出血を起こすこともしばしばあるとのことであった。こちらの獣医師に日本はビデオスコープであることを話すと、たいがい「そっちの方が良いね」と言っていたので、こちらの獣医師にも同じ馬が何度も内視鏡検査を受けている現状につ

いて変えたいという認識はあるらしい。しかし、機器の関係でなかなか進んでいないようだ。最近では日本のビデオスコープのように大型ではなく、ファイバースコープに小さな画面がついているポータブルのビデオスコープが出回り始めており、ルードアンドドリドルの獣医師などはそれを使っていた。しかし、バッテリーの持続時間が短いなど問題点も残っているようである。



獣医検査



ポータブルのビデオスコープ（フランス Optomed 社製）

厩舎にはファシグティプトンのセリ会場と同様 TV が備え付けられており、コンサイナーがステージの様子を知ることができるようになっていた。悪癖等についてはさくへき（CRIBBER）および片側陰嚙（RIDGLING）が表示されていた。このセリもジュライセール同様、日本のセレクトセールやセクションセールと同じく鑑定人が明らかに「主取り」であることを言わないため、売れたのか売れなかったのか、非常にわかりづかった。キーンランド協会が設置した PC で確認すればわかるのであるが、ファシグティプトンのセリ会場と比較して PC の台数が非常に少なく、バイヤーおよびコンサイナーは自分たちで iPad を用意して、確認していた。なお、セリ会場では無料 WiFi が使える。しかし、厩舎地区では電波が十分届いておらず、使い勝手が悪かった。



さくへき（CRIBBER）および片側陰騷（RIDGLING）は表示される

セリに上場される馬は、前日にキーンランド協会の職員による馬体検査（特徴検査）が行われ、尾に上場番号の付いたタグが付けられる。そして当日の朝、また職員が来て、そのタグを見てオフィシャルのヒップナンバーを配布する。なお、下見対応時はジュライセールと同じくダービーダンオリジナルヒップナンバーを使用していた。



前日に尾にタグが付けられる

オフィシャルヒップナンバー

セリ会場への引き付けは、キーンランドの職員が「1st Call」「2nd Call」の2回呼び出してくれる。すなわち、「1st Call」で準備を開始し、「2nd Call」でセリ会場に向けて厩舎を出発すれば良い。セリ会場を図に示す。実際にセリが行われる「Sales Ring」の前に、まず上場馬は「Show Ring」に入る。ここには2つのリングがあり、最初のリングでは6頭が全周を周回し、次のリングでは4頭が各個にマローをする。次に入る「Holding Area」では2頭が全周を周回し待機する。最後に「Lead In」に入り、次かもしくは次の次に迫った上場の時を待つ。

そしていよいよ本番、「Sales Ring」に入るとグリーンジャケットを着たキーンランドの職員にコンサイナーは馬を引き渡す。声が掛かっている間はキーンランドの職員が馬を引き、コンサイナーはステージの端で待機するのである。そして、落札が決まると、再びコン

サイナーが馬を引き、退場する。「Sales Ring」で馬を引くのはなぜか全員黒人であった（女性もいた）。そして、ビットスポッターは全員白人男性であった。



職員による呼び出し



Show Ring



Holding Area



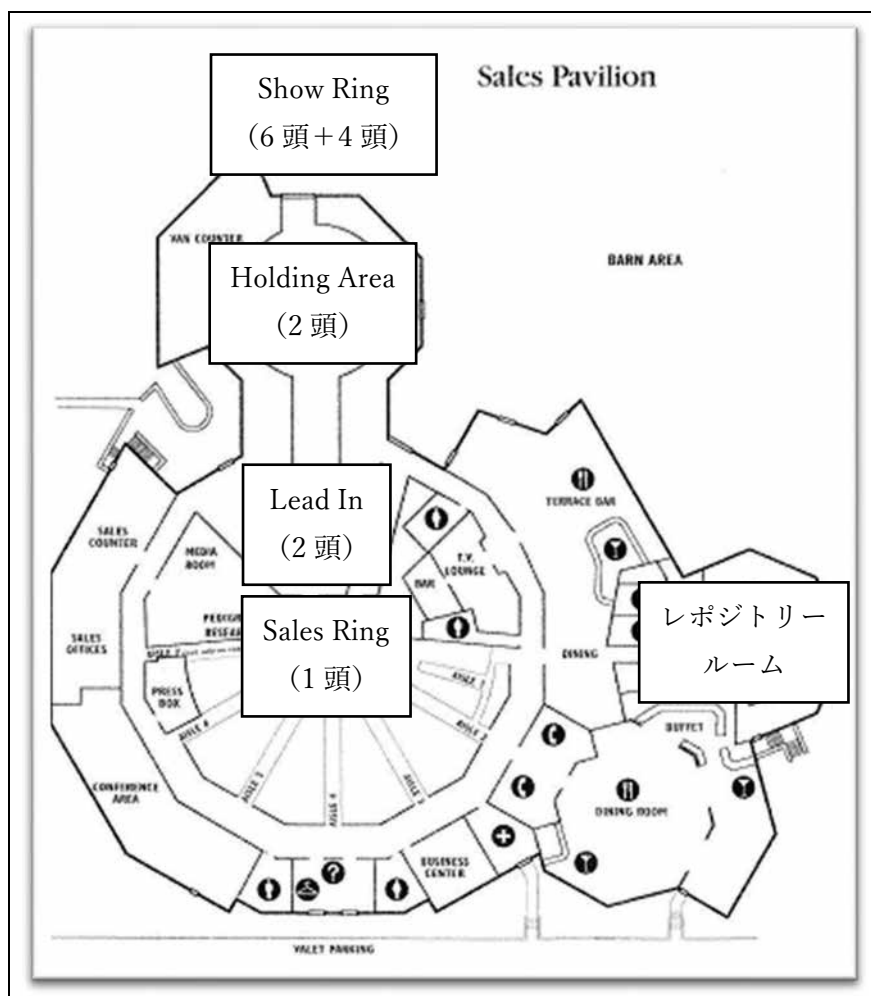
Sales Ring で馬を引き渡す



ステージの端で待機



退場



キーンランドのセリ会場

・Book1 総括

さて、セリの結果であるが、前年と比較し、売却頭数は 6.3%の減少、売却総額も 5.5%減少したが、平均価格は 1.0%上昇、また中間価格も 4.2%上昇した。なお、前年の Book1 は 4 日間に分けて開催されていたとのことで、毎年少しずつマイナーチェンジを行い、少しでも売上を上昇させようというキーンランド協会の努力が感じられる。

年	上場頭数	売却頭数	売却率	売却総額	平均価格	中間価格
2015	641	443	69.1%	\$134,361,000	\$303,298	\$250,000
2014	651	473	72.7%	\$142,153,000	\$300,535	\$240,000
2013	740	546	73.0%	\$153,385,000	\$280,295	\$207,500

過去 3 年間の成績 (Book1)

最高価格馬は、このセリでもリーディングサイヤー Tapit の産駒であった。Hip No. 614 の Silver Colors-14 が 210 万ドル（約 2 億 5200 万円、1 ドル 120 円換算）で落札された。

祖母が牝馬ながらケンタッキーダービーを勝った Winning Colors で、母の父は Mr. Greeley である。父の Tapit を繋養する Gainesway から上場されていた。Tapit のほかには、War Front、Medaglia d'Oro が人気であった。

父	母	購買者	価格
Tapit	Silver Colors	Whisper Hill Farm	\$2,100,000
Tapit	Pure Clan	Lael Stable	\$1,650,000
Distorted Humor	Forest Music	Three Chimneys Farm	\$1,525,000
War Front	Orate	M. V. Magnier	\$1,150,000
Medaglia d'Oro	Kid Kate	Solis, Litt, Winchell, & Gainesway	\$1,100,000
War Front	Bauble Queen	John Ferguson	\$900,000
War Front	Magnificent Honour	M. V. Magnier	\$900,000
War Front	Satans Quick Chick	Hideyuki Mori	\$900,000
Medaglia d'Oro	Afleeting Lady	John Ferguson	\$875,000
Tapit	Keertana	Woodford Racing	\$850,000
Medaglia d'Oro	Poof Too	Todd A. Pletcher, agent	\$850,000

牝の高額馬 (Book1)

父	母	購買者	価格
Bernardini	Pilfer	Zayat Stables	\$1,500,000
War Front	Betterbetterbetter	Shadwell Estate Co.	\$1,450,000
Street Cry	Tizso	Whisper Hill Farm	\$1,050,000
War Front	Azzedine	R. S. Evans	\$1,000,000
Fastnet Rock	Maryinsky	Spendthrift Farm	\$1,000,000
War Front	Siren Serenade	Mayberry Farm	\$1,000,000
Bodemeister	Minig My Own	Crupi's New Castle	\$850,000
Tapit	Pretty City	John C. Oxley	\$825,000

めすの高額馬 (Book1)

次にコンサイナーのランキングである。売却総額ベースだと、Taylor Made、Gainesway、Lane's End の 3 つが抜きん出た存在である。平均価格ベースだと、Claiborne、TapitGainesway の順となる。第 3 位の Timber Town の平均価格が高いのは頭数が少ないのにもかかわらず牝馬で第 2 位の高額馬となった Betterbetterbetter-14 などをコンサイニングしたからであろう。同馬はおそらくクールモア（米国ではアシュフォード）からの預託ではないかとのことである。ダーレーやクールモア、そしてウインスターも生産馬を上場し

ているそうだが、自分たちではコンサイナーをしていないためどの馬がそれらの牧場の出身なのか、カタログを見ただけではわからないようになっていた。

なお、セリ馴致期間の預託料 (boarding fee) は一流のコンサイナーであれば日額 35 ドル以上、成功報酬 (sales commission) はほとんどのコンサイナーが売却額の 5% で、例えば 30,000 ドル以下の場合は 1,500 ドルと言ったような最低報酬価格を設定しているコンサイナーもあるとのことである。

コンサイナー	上場頭数	売却頭数	売却総額	平均価格
Taylor Made	90	61	\$18,795,000	\$308,115
Gainesway	36	30	\$15,900,000	\$530,000
Lane's End	52	39	\$12,575,000	\$322,436
Denali Stud	27	18	\$6,825,000	\$379,167
Eaton Sales	28	17	\$5,995,000	\$352,647
Hill 'n' Dale	23	17	\$5,840,000	\$343,529
Warrendale	21	13	\$3,810,000	\$293,077
Claiborne	6	5	\$3,155,000	\$631,000
Paramount	22	11	\$3,155,000	\$286,818
Timber Town	7	6	\$2,690,000	\$448,333

コンサイナーランキング (Book1)

購買総額ベースの購買者ランキングでは、ダーレーの代理人である John Ferguson がダントツの 1 位となった。2 位の Shadwell Estate Co. はシェイク・モハメド殿下の兄のシェイク・ハムダン殿下の会社である。5 位の M. V. Magnier はクールモアの代理人、6 位の Zayat Stables はアメリカンファラオのオーナーである。日本の社台ファームが 4 頭購買し、12 位にランクインした。

購買者	購買頭数	購買総額	平均価格
John Ferguson	22	\$7,965,000	\$362,045
Shadwell Estate Co.	8	\$4,475,000	\$559,375
Crupi's New Castle	10	\$4,345,000	\$434,500
Whisper Hill Farm	3	\$3,550,000	\$1,183,333
M. V. Magnier	6	\$3,525,000	\$587,500
Zayat Stables	7	\$3,445,000	\$492,143
Courtlandt Farm	5	\$2,605,000	\$521,000
Lael Stable	4	\$2,470,000	\$617,500
F. Brothers, agent for Starlight	9	\$2,425,000	\$269,444
Todd A. Pletcher, agent	6	\$2,355,000	\$392,500

Spendthrift Farm	4	\$2,125,000	\$531,250
Shadai Farm	4	\$2,050,000	\$512,500

購買者ランキング (Book1)

種牡馬ランキングでは、平均価格ベースにすると新種牡馬 Frankel が 1 位となった。次いで高額馬を多数出した War Front、Tapit、Medaglia d'Oro と続く。Unbridled's Song は 2015 年の 1 歳馬がラスト・クロップであった。

種牡馬	上場頭数	売却頭数	平均価格	最高価格
Frankel	4	2	\$650,000	\$800,000
War Front	29	19	\$636,842	\$1,450,000
Tapit	41	29	\$540,172	\$2,100,000
Medaglia d'Oro	33	24	\$409,583	\$1,100,000
Fastnet Rock	7	5	\$358,000	\$1,000,000
Distorted Humor	35	26	\$354,231	\$1,525,000
Unbridled's Song	17	13	\$340,385	\$700,000
Bernardini	29	22	\$327,273	\$1,500,000
More Than Ready	11	8	\$323,375	\$750,000
Galileo	4	1	\$320,000	\$320,000
Speightstown	29	17	\$315,882	\$700,000
Pionneof the Nile	14	11	\$296,364	\$480,000
Lemon Drop Kid	12	9	\$295,000	\$535,000
Street Cry	14	10	\$294,000	\$1,050,000
Blame	9	6	\$286,667	\$385,000

種牡馬ランキング (Book1)

・全体総括

まず、キーンランド協会のホームページから結果を書き出すと、興味深い傾向が見られた。すなわち、Book1→Book2・・・Book6 と進む毎に、平均価格および中間価格はおおよそ半減していく。逆に、売却率は上昇していくのである。米国でのもう 1 つのセレクトセールであるサラトガセールで、2013 年に後のアメリカンファラオが 30 万ドルで主取りとなったように、オーナーは期待している馬ほど容易に手放さない傾向があるのかもしれない。

Book	Session	売却頭数	未売却頭数	売却率	売却総額	平均価格	中間価格
1	1	150	68	68.8	\$44,642,000	\$297,613	\$265,000
1	2	142	66	68.3	\$42,965,000	\$245,000	\$245,000
1	3	151	64	70.2	\$46,754,000	\$309,629	\$250,000

2	4	258	102	71.7	\$38,462,000	\$149,078	\$120,000
2	5	267	101	72.6	\$32,095,000	\$120,206	\$100,000
3	6	266	102	72.3	\$19,618,000	\$73,752	\$55,000
3	7	270	95	74.0	\$21,034,500	\$77,906	\$55,000
4	8	292	74	79.8	\$14,192,700	\$48,605	\$35,000
4	9	280	76	78.7	\$10,684,100	\$38,158	\$25,000
5	10	283	64	81.6	\$6,513,000	\$23,014	\$17,000
6	11	216	32	87.1	\$3,017,000	\$13,968	\$9,000
6	12	170	35	82.9	\$1,518,800	\$8,934	\$7,000
Total		2745	879	75.7	\$281,496,100	\$102,549	\$50,000

セプテンバーセール結果

・ダービーダン総括

セリ本番のみ預かった馬も含めた全体で売却頭数 36 頭、未売却頭数 11 頭、売却率 76.6%、売却総額 2,300,400 ドル、平均価格 63,900 ドル、中間価格 43,500 ドルであった。ダービーダンで 2 か月間しっかりセールス・ブレップした馬は売却頭数 20 頭、未売却頭数 9 頭、売却率 69.0%、売却総額 1,545,400 ドル、平均価格 77,270 ドル、中間価格 43,500 ドルと売却率は落ちたものの、平均価格は上昇した。また、ダービーダン生産馬は売却頭数 17 頭、未売却頭数 9 頭、売却率 65.4%、売却総額 1,356,400 ドル、平均価格 79,788 ドル、中間価格 40,000 ドルと売却率はさらに落ちたものの、平均価格はさらに上昇した。

2) 混合セリ

・ November Sales

ブリーダーズカップの翌日より米国最大の繁殖牝馬セールであるノベンバーセールがスタートした。正しくは繁殖牝馬 (Broodmare)、離乳後の当歳馬 (Weanling) および競走馬 (競走馬として見込まれる Racing prospect、繁殖牝馬として見込まれる Broodmare prospect、種牡馬として見込まれる Stallion prospect) の混合セリ (Mix Sale) であり、11 月 1 日 16 時からファシグティプトン社主催の The November Sale が始まり、続いて 11 月 2 日から 11 月 13 日までキーンランド協会主催の November Breeding Stock Sale が連続開催される。

・ Fasig-Tipton The November Sale

まずは 11 月 1 日に開催されたファシグティプトン社主催の The November Sale について。当日は 16 時からの准ナイターセリであった。下見は 10 月 30 日から行われており、午前中は下見客が多数訪れたが、午後には大部分がブリーダーズカップ観戦に行ったため閑散としていたとのこと。キーンランド協会主催の November Breeding Stock Sale の Book1

の下見も同じく 10 月 30 日から行われており、下見客は会場の移動（渋滞なしで 15 分程度）を強いられた。

カタログ掲載頭数が当歳馬 73 頭、繁殖牝馬および競走馬（Racing prospect、Broodmare prospect）127 頭（元々 116 頭プラス別刷で追加 11 頭）の計 200 頭で、カタログの 1 番から 73 番が当歳馬（母馬の名前のアルファベット順、今年は H から）、74 番以降が繁殖牝馬および競走馬（名前のアルファベット順、今年は H から）となっており、購買者にわかりやすい配慮がなされていた。

今回も私はダービーダンのスタッフとして、上場側からセリを経験した。前日までブリーダーズカップを観戦していたため、ファシグティプトンは当日のみ参加した。まずスタッフは朝 6 時に集合。ダービーダンからは繁殖牝馬の上場はなく、当歳馬 4 頭の上場である。それらに対し、スタッフは 4 名＋ケンタッキー大学のインターン＋私の計 6 名であった。スタッフは全員牧場従業員ではなくセリ専門のフリーハンドラーで、1 日 200 ドル程度で雇用されている。彼らは米国各地で一年中行われているセリを渡り歩き、セリのない期間は馬とは関係のないパートタイムの仕事（すなわち休みが取りやすい仕事）に就いている。報酬はもちろんコンサイナーによって異なるが 200 ドルから 225 ドル程度で、滞在用のホテル代まで出してくれる場合もあるとのことであった。

作業内容については今まで経験したセリと大差なかったが、セプテンバーセールまでは朝一で馬を水で洗っていたのがさすがに寒くなったので馬は洗わず、ショーシーンをたっぷり入れたお湯に布を入れ、その布で馬体を拭いていた。当歳馬の下見対応は、革無口にチフニーを使うか、もしくは無口に直接革のリードを付けていた。セリのステージまで引き付ける際はさすがに無口のみということではなく、必ずチフニーを使用していた。蹄鉄は履いていなかった。



ショーシーンをたっぷり入れたお湯に布を入れ、その布で馬体を拭く



革無口にチフニー

無口に直接革のリード

上場馬のBCSについては4.5～5.5で、冬毛が伸びており、日焼けしている馬も散見された。この点、離乳してからセリまでの準備期間が短く、買い手側からすれば素材そのままの馬を見れる良い機会であると思われた。

上場馬のレポジトリーに関しては、当歳馬は1歳馬と全く同一であった。繁殖牝馬についてはレントゲンの提出はなく、競走馬についてはRacing prospectもしくはRacing/broodmare prospectという馬主が引退させず引き続き競走馬として出走する可能性のある馬に関しては1歳馬と同じであり、Broodmare prospectという馬に関してはレントゲンの提出はなかった。また、当歳馬に対しても1歳馬同様、獣医検査が行われていた。内容は1歳馬と同じく、内視鏡検査（ファイバースコープ）、心臓の聴診、視覚の検査、歩様検査、レポジトリーに提出されているレントゲン画像の読影などであった。



内視鏡検査

歩様検査

・ Fasig-Tipton The November Sale 総括

さて、セリの結果であるが、昨年と比較し、売却頭数は14.8%の減少、売却総額も31.4%の減少、平均価格は19.5%減少したが、中間価格は17.5%上昇した。

まず、繁殖牝馬および競走馬（Broodmare prospect）の高額馬を表に示す。最高価格馬は、

Hip.152、2014 年の G1-シャンデリア S 勝馬の Angela Renee で、300 万ドルで落札された。
2012 年生の 3 歳、父 Bernardini、母 Pilfer、(母父 Deputy Minister) という血統である。
購買者は Don Albert Corporation。

馬名	年齢	父	受胎種牡馬	購買者	価格
Angela Renee	3	Bernardini	空胎	Don Alberto	\$3,000,000
Callback	3	Street Sense	空胎	Elevage	\$2,800,000
Sweet Reason	4	Street Sense	空胎	Katsumi Yoshida	\$2,700,000
Aubby K	6	Street Sense	Tapit	Summer Wind	\$2,400,000
Let Faith Arise	5	Kafwain	Tapit	Marie Jones	\$2,100,000
More Hennessy	8	Hennessy	Galileo	Summer Wind	\$1,500,000
Starship Truffles	7	Ghostzapper	Tapit	Shadai Farm	\$1,500,000
Condo Commando	3	Tiz Wonderful	空胎	Katsumi Yoshida	\$1,500,000
Molly Morgan	6	Ghostzapper	空胎	Stonestreet	\$1,350,000
Double Tapped	5	Tapit	Medaglia d'Oro	Bridlewood	\$1,300,000
Renda	9	Medaglia d'Oro	Paynter	Bridlewood	\$1,100,000
Gamay Noir	5	Harlan's Holiday	Tapit	Summer Wind	\$1,100,000
Reneesgotzip	6	City Zip	Medaglia d'Oro	Shadai Farm	\$1,000,000

繁殖牝馬および競走馬 (Broodmare prospect) の高額馬 (ファシグティプトン)

一方、当歳馬の高額馬を表に示す。最高価格馬は、Hip.47、父がリーディングサイヤーの Tapit、母が G1Humana Distaff S.の勝ち馬 Aubby K、(母父 Street Sense) という血統の牡馬で、60 万ドルで落札された。購買者は Mill Valley Racing。

父	母	性別	購買者	価格
Tapit	Aubby K	牡	Mill Valley	\$600,000
Malibu Moon	Erhu	めす	Spendthrift	\$370,000
Malibu Moon	Starship Truffles	めす	Spendthrift	\$360,000
The Factor	V V S Flawless	めす	A&J Lieblong	\$350,000
The Factor	Flash Act	牡	Lane's End	\$190,000
Animal Kingdom	Spice Island	牡	Carrol Castille	\$180,000
Bernardini	Cash No Credit	牡	Cavalier	\$160,000

当歳馬の高額馬 (ファシグティプトン)

当セリでの売却総額ベースのコンサイナーランキングを表に示す。頭数が少なくあてにならない数字であるが、このセリでも Taylor Made が定位置の首位であった。ほか、イヤリングのセリから撤退している Three Chimneys が3位にランクインした。

コンサイナー	上場頭数	売却頭数	売却総額	平均価格
Taylor Made	25	21	\$12,385,000	\$589,762
Bluewater	7	5	\$5,362,000	\$1,072,000
Three Chimneys	4	4	\$3,670,000	\$917,500
Spendthrift	1	1	\$2,800,000	\$2,800,000
Hill 'n' Dale	6	4	\$2,195,000	\$548,750
Eaton Sales	3	3	\$2,110,000	\$703,333
Paramount	6	2	\$1,860,000	\$930,000

コンサイナーランキング（ファシグティプトン）

・ Keeneland November Breeding Stock Sale

ファシグティプトンに引き続きダービーダンのスタッフとして、上場側からセリを経験した。スタッフはセリの上場頭数に応じて朝5～6時に集合。作業内容については今まで経験したセリと大差なく、朝一でボロ出し＆馬の手入れ。寒いので馬は洗わず、ショーシーンをたっぷり入れたお湯に布を入れ、その布で馬体を拭く。馬服（ブランケットと呼ぶ）も使用していた。毎日概ね8時から下見対応が始まる。当歳馬の下見対応は、革無口にチフニーを使うか、もしくは無口に直接革のリードを付けていた。繁殖牝馬および競走馬の下見対応は、革無口にチフニーを使うか、もしくはチェーンシャンクを付けていた。繁殖牝馬の下見では、バイヤーの中には尾を持ち上げて陰部を観察する者もいた。また、上場されていた繁殖牝馬には球節の関節液が増量している馬、メラノーマを発症している馬などがいて、マネージャーはその対応（説明）に追われていた。



球節の関節液が増量

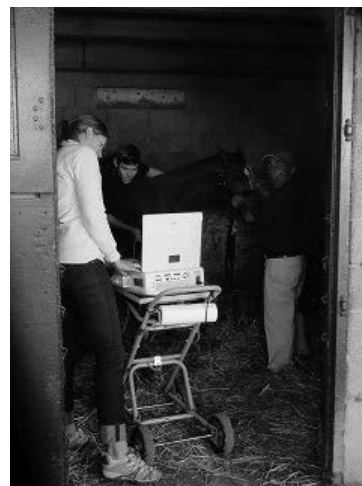
メラノーマを発症している馬

当歳馬および繁殖牝馬の下見には、1歳セリと同じく Cecil O. Seaman が来て、巻尺で馬

体各所の測尺を行っていった。血統（ニックス）を見て馬を選別してから測尺と歩様を見て馬をピックアップするのだそうである。Equine Analysis Systems 社も同様に、脾臓および心臓のエコー検査を行い、尾の毛を抜いて DNA 検査用に持ち帰っていった。



Cecil O. Seaman による測尺



EAS 社による心エコー

上場馬の BCS については、当歳馬は 4.5~5.0、繁殖牝馬は 5.0~5.5、競走馬は 4.0 の馬が多かった。レボジトリーおよび獣医検査に関しては、ファシグティプトンと一緒にあった。

繁殖牝馬のうち、妊娠馬に関しては現在 USD による妊娠鑑定で胎子の性別までわかるようになっているので、胎子の性別を教えるコンサイナーもいるようであったが、ダービーダンではトラブル防止のため（USD による妊娠鑑定は 100%ではない）、教えていなかった。

しかし、反対に馬ウイルス性動脈炎（EVA）の抗体価が上昇している馬（当歳馬）については、その旨明記し説明していた。ちなみに、この時期の当歳馬にとって1日中下見対応で常歩するのは非常に疲れる。馬たちは馬房で横臥するが、そうすると糞の跡が体に残って見栄えが悪くなるので、スタッフに発見され次第叩き起こされる。セリとは離乳して間もない当歳馬たちにとっては、非常に過酷な日々なのである。



EVA (+) を明記



当歳馬にとってセリは過酷

セリのステージまで引き付ける際は、当歳馬はチフニーを使用し、繁殖牝馬および競走馬は、革無口にチフニーを使うか、もしくはチェーンシャンクを付けていた。当歳馬は蹄鉄を履いていなかった。繁殖牝馬は両前のみ装蹄しているか、もしくは蹄鉄を履いていなかった。競走馬は四肢に装蹄していた。細かい話だが、たてがみが左に倒れてしまう馬に関しては三つ編みをして右に倒すのだが、セリ本番も三つ編みを外さずそのままであった。なお、傷のある馬に関しては、「BLU-KOTE」という青チンのような外用薬を塗布した後、「WONDER DUST」というイサロパンのような粉薬を傷に掛けて目立たなくしていた。



左腕節部の挫創

薬を使用し目立たなくする

厩舎地区ではセプテンバーセールと同じくテレビでステージの様子が見れるのであるが、CRIBBER（さくへき）およびPREGNANT（妊娠している）、NOT PREGNANT（妊娠していない）もしくはABORTED（流産した）という表示がなされていた。

妊娠馬に関しては、落札後獣医師が厩舎に来て直腸検査し、妊娠を確認していた。



落札後、獣医師が直腸検査して妊娠を確認

熊癩で発汗している繁殖牝馬に対して鎮静剤を使用したことがあった。キシラジンとジアゼパムを静脈内投与していた。ジアゼパムは運動失調が少なく、静脈内投与だけでなく経口投与できるペースト剤もあるらしく、汎用されていた。後半になるほど安い馬になり、中

には容易に捕ませない馬（当歳馬）が出てきた。それらについては無口に顎紐を付けたり、エサで釣ったりして日本とあまり変わらない対応であった。



鎮静剤を打たれた繁殖牝馬

捕ませない馬に顎紐

・Book1-3 総括

さて、セリの結果であるが、昨年と比較し、売却頭数は 8.7%の減少したが、売却総額は 5.6%増加し、平均価格は 15.7%上昇、中間価格も 6.7%上昇した。

まず、繁殖牝馬および競走馬（Broodmare prospect）の高額馬を表に示す。最高価格馬は、Hip.450、2014 年の G1-BC ジュヴェナイル・フィリーズ勝馬の Take Charege Brandi で、600 万ドルという超高額で落札された。2012 年生の 3 歳、父 Giant's Causeway、母 Charming、（母父 Seeking the Gold）という血統で、2 代母の Take Charge Lady が自身 G1 を 3 勝している上に産駒として Will Take Charge および Take Charge Indy という 2 頭の G1 ウイナーを輩出しており、現在最も活気のあふれるファミリー出身であることが評価された。購買者は John G. Sikura および Hill 'n' Dale Equine のパートナーシップである。

馬名	年齢	父	受胎種牡馬	購買者	価格
Take Charege Brandi	3	Giant's Causeway	空胎	Sikura & Hill 'n' Dale	\$6,000,000
Photo Call	4	Galileo	空胎	Crup's New Castle	\$3,000,000
Hard Not to Like	6	Hard Spun	空胎	DATTT F.	\$2,200,000
Terrific	4	Galileo	War Front	Moyglare	\$1,900,000
Wonderfully	4	Galileo	Smart Strike	Ballylinch	\$1,800,000
Aurelia's Belle	4	Lemon Drop Kid	空胎	Sikura & Hill 'n' Dale	\$1,800,000
Shook Up	3	Tapit	空胎	Three Chimneys	\$1,650,000
Spring in the Air	5	Spring at Last	War Front	Nawara S.	\$1,650,000

Colonial Flag	6	Pleasant Tap	Tapit	Alpha Delta	\$1,600,000
Bella Jolie	8	Broken Vow	Cairo Prince	Stonestreet	\$1,600,000
Comedy	11	Theatrical	Tapit	Stonestreet	\$1,500,000
Sunset Glow	3	Exchange Rate	空胎	Pursuit of Success	\$1,375,000
Lacadena	10	Fasliyev	Bernardini	Heider FamilyS.	\$1,300,000
Don't Tell Sophia	7	Congaree	Medaglia d'Oro	Katsumi Yoshida	\$1,200,000
Sam's Sister	4	Brother Derek	空胎	Colts Neck S.	\$1,150,000

繁殖牝馬および競走馬 (Broodmare prospect) の高額馬 (Book1-3)

一方、当歳馬の高額馬を示すと、最高価格馬は前述の 600 万ドルで落札された Take Charge Brandi のすぐ後の Hip.451、父が War Front、母が Take Charge Lady、(600 万ドルの馬の 2 代母、母父はデヒア) という血統の牝馬で、320 万ドルで落札された。購買者は Whisper Hill Farm。なぜ高額馬の順番が続いたかと言えば、キーンランドのこのセリでは、カタログ掲載の順番が繁殖牝馬および競走馬 (すでに名前が付いている馬) はその名前のアルファベット順、当歳馬 (まだ名前の付いていない馬) はその母馬の名前のアルファベット順であるため、Take Charge Brandi の次が Take Charge Lady-15 となった、という訳である。Tapit と War Front 産駒の人気が高いのはいつもどおりだが、高額馬に牝馬が多いという傾向があった。

父	母	性別	購買者	価格
War Front	Take Charge Lady	めす	Whisper Hill F.	\$3,200,000
War Front	Serena's Cat	牡	M. V. Magnier	\$2,600,000
War Front	Awesome Maria	めす	Willis Horton	\$2,000,000
Tapit	Refugee	めす	New Castle	\$1,300,000
Galileo	Untouched Talent	めす	Hunter Valley	\$1,200,000
Tapit	Marketing Mix	めす	Shadwell E. Co.	\$1,100,000
Declaration of War	Hanky Panky	めす	Glen Hill F.	\$800,000
Street Cry	Namaste's Wish	牡	New Castle	\$525,000
War Front	Shawara	めす	New Castle	\$525,000

当歳馬の高額馬 (Book1-3)

受胎種牡馬（繁殖牝馬が受胎している胎子の父）の平均価格ベースのランキングを表に示す。頭数が3頭以上の種牡馬限定の結果である。ここでも Tapit と War Front の2頭が抜けた人気であり、その他リーディング上位馬が並ぶという結果であった。リーディング上位馬以外では、来年生まれる当歳が初年度産駒となる Cairo Prince（父 Pioneerof the Nile）と今年の1歳が初年度産駒の Declaration of War（父 War Front）が人気であった。

種牡馬	上場頭数	売却頭数	売却総額	平均価格
Tapit	3	3	\$3,550,000	\$1,183,333
War Front	9	4	\$4,700,000	\$1,175,000
Medaglia d'Oro	12	8	\$5,353,000	\$669,375
Bernardini	7	6	\$2,575,000	\$429,167
Speightstown	15	7	\$2,890,000	\$412,857
Pioneerof the Nile	13	10	\$3,435,000	\$343,500
Candy Ride	8	8	\$2,615,000	\$326,875
Malibu Moon	6	4	\$1,300,000	\$325,000
Scat Daddy	24	14	\$4,165,000	\$297,500
Cairo Prince	8	6	\$1,776,500	\$296,083
Tiznow	11	9	\$2,392,000	\$265,778
More Than Ready	18	12	\$2,655,000	\$221,250
Declaration of War	25	14	\$2,802,000	\$200,143
Curlin	13	13	\$2,510,000	\$193,077
Street Sense	10	8	\$1,405,000	\$175,625

受胎種牡馬ランキング (Book1-3)

・ November Sales 総括

ファシグティプトンおよびキーンランドを合算して結果を出してみた。ファシグティプトンの数字はキーンランドの Book1 と遜色なく、事実上 Book1 の Session 0 と考えて良さそうである。セプテンバーセールと同じく、Book1→Book2・・・Book6 と進む毎に、平均価格および中間価格はおおよそ半減していく傾向が認められたが、売却率の上昇はセプテンバーセールと比較して緩やかであった。

注目すべきは Book5。Session9 の数値が異様に良い。理由を考えると、普段コンサイニングを行っていない某大牧場がこの日のみ上場を行っていた。私がブレーキングの研修を行っているウインスターファームである（コンサイナーとしての名義は WinStar Racing, Agent）。彼らの成績を表に抜粋したが、売却率が9割を超え、平均価格および中間価格も全体平均と比較して2倍近く高かった。ちなみに、彼らは現役の競走馬のみ上場していた。すなわち、自分たちには「不要」と判断した馬のみ売っていたことになるが、それでこの好成绩である。人気のほどがうかがえた。

Book	Session	売却頭数	未売却頭数	売却率	売却総額	平均価格	中間価格
FT	0	92	48	65.7	\$43,666,000	\$474,630	\$235,000
1	1	136	58	70.1	\$45,094,000	\$337,574	\$202,500
1	2	143	48	74.9	\$63,784,000	\$446,042	\$250,000
2	3	229	86	72.7	\$30,788,000	\$134,445	\$100,000
2	4	224	86	72.3	\$25,013,000	\$111,665	\$90,000
3	5	236	89	72.6	\$14,099,000	\$59,742	\$45,000
3	6	238	94	71.7	\$11,750,000	\$49,370	\$40,000
4	7	256	84	75.3	\$7,406,700	\$28,932	\$21,000
4	8	253	71	78.1	\$7,242,300	\$28,626	\$22,000
5	9	243	62	79.7	\$6,844,900	\$28,168	\$15,000
5	10	242	70	77.6	\$3,963,600	\$16,379	\$10,000
6	11	175	61	74.2	\$1,754,500	\$10,026	\$6,000
6	12	200	59	77.2	\$1,219,400	\$6,097	\$3,700
Total		2,667	916	74.4	\$286,401,400	\$75,230	\$14,000

November Sales 結果

Book	Session	売却頭数	未売却頭数	売却率	売却総額	平均価格	中間価格
5	9	29	3	90.6	\$1,444,500	\$55,558	\$29,000

WinStar Racing, Agent 結果



Book5 のみウインスターがコンサイニングを行っていた

なお、Book6 の馬など日本円にして 1 頭数十万円しかない安価な馬もアメリカにはいる。こうした馬は、競馬の盛んでない州で競走馬および繁殖牝馬として活躍することとなる。こうした安価な馬は当然普段から手が掛かっていないため、手入れ中に吹っ飛んで行った

り、馬房に入らないなどお行儀が悪くて大変だが、一方でこうした安い馬が新人スタッフにとって格好の練習台となるのである。マネージャーは「安い馬だし、お前引いてみるか？」という具合だし、バイヤーも「新人か。仕方ないね。」という雰囲気になるのである。こと人材育成に関しては、馬の“質より量”なのかもしれない。写真は娘に馬の見せ方を教えるお父さん。こんな光景も Book6 では見られた。



手入れ中に吹っ飛ぶ馬



馬房に入らない馬



娘に馬の見せ方を教えるお父さん

・ダービーダン総括

全体で売却頭数 50 頭、未売却頭数 22 頭、売却率 69.4%、売却総額 2,989,400 ドル、平均価格 59,788 ドル、中間価格 21,000 ドルであった。

・Keeneland January Horses of All Ages Sale

2016 年 1 月 11～15 日にキーンランドで January Horses of All Ages Sale（通称ジャニユーアリーセール）が行われた。繁殖牝馬と明け 1 歳馬の混合セリである。中間価格を見ると、Book1 がノベンバーセールの Book3 相当、Book2 が同 Book5 相当、Book3 が同 Book6 相当であり活発なセリとは言えず、購買者も掘り出し物を探しに来ている印象が強かった。

Book	Session	売却頭数	未売却頭数	売却率	売却総額	平均価格	中間価格
1	1	182	89	67.2%	\$13,631,200	\$74,897	\$39,500
1	2	193	68	73.9%	\$13,020,400	\$67,463	\$35,000
2	3	220	67	76.7%	\$3,817,300	\$17,351	\$9,000
2	4	248	45	84.6%	\$3,204,000	\$12,919	\$7,250
3	5	197	78	71.6%	\$1,790,100	\$9,087	\$5,000
Total		1,040	347	75.0%	\$35,463,000	\$34,099	\$11,000

2016 年ジャン્યアリーセール結果

私もダービーダンのスタッフとして参加したが、馬の磨き方や展示方法などは同じ混合セリであったノベンバーセールと特に変わらず。ただ、時期的にセリ場で妊娠馬が分娩してしまうことがあり、その場合子馬は母馬の“付属品”として母馬を落札した者の物となる（注：馬は“物”ではありませんが、他に適切な表現が浮かびませんでした）。

・ウインスターファーム David Hanley 氏の馬の見方

ここでウインスターファームで購買を担当している David Hanley 氏の馬の見方を紹介したい。ウインスターのブレイキング部門で彼の選んだ馬たちを見てきたが、皆骨太で胸が深く、前肢帯および後肢帯の筋肉が発達している馬ばかりであり、そして集放牧の引き馬時など本当に良く歩ける（大きなストライドでかつきびきび歩ける）馬ばかりで驚いた。彼の馬の見方で特徴的なのは、馬の歩様を“横から”見ることである。まず馬を立たせ左表から見て、その時点でボディラインが悪ければ厩舎に返す。良ければ常歩させて、まず横から見る。肩と股関節を大きく使って歩くことができるかを選ぶ際に最優先している。次に前から見て、肢勢をチェックする。ウインスターファームが作り始めた雑誌「Constellation」によると、David はまず当歳馬から 1 歳馬にかけてのピンフックをすることで馬の見方を学び始めたそうである。筋肉や脂肪を付けることで体形を誤魔化せる 1 歳馬よりも、当歳馬の方がコンフォメーションがわかりやすいので、馬を見る良いトレーニングになるとのこと。



ウインスターファームの David Hanley 氏は歩様を“横から”チェックする

余談であるが、日本でも（以前 HBA オータムセールで行われていたが）もっと離乳後の当歳馬のセリが活発化すれば馬の見方の訓練になると思われる。また、当歳馬から 1 歳馬にかけてのピンフックは騎乗するわけではないので放牧地と厩舎があれば始められるため、生産牧場に“間借り”する形で資本はないが馬業界に挑戦したい若者たちの新規参入の門戸として良いのではないだろうか。実際ファシグティプトンのジュライセールでは若いカップルが生産牧場に間借りして 1 頭の馬をピンフック（当歳で買って 1 歳で売る）している光景を見た。現在、育成業者に関しては BTC という施設があるため、馬さえいれば馬房を借りて育成牧場を始めることができるが、生産牧場を始めたい若者にとっては新規参入のハードルが高いと思われる。当歳から 1 歳にかけてのピンフックをそのきっかけにすることはできないだろうかと思ふと考へた。

・ Fasig-Tipton Kentucky Winter Mixed

2016 年 2 月 8～9 日にファシグティプトンで Kentucky Winter Mixed（通称フェブラリーセール）が行われた。こちら繁殖牝馬および明け 1 歳馬の混合セリである。中間価格を見るとノベンバーセールの Book5 相当で、やはり掘り出し物目当てのセリのような。自身このセリには参加せず。セリ前に子馬が生まれた際の対応はキーンランド同様。

Session	売却頭数	未売却頭数	売却率	売却総額	平均価格	中間価格
1	184	64	74.2%	\$3,294,500	\$17,905	\$8,000
2	157	32	83.1%	\$4,966,100	\$31,631	\$12,000
Total	341	96	78.0%	\$8,260,600	\$24,225	\$9,500

2016 年フェブラリーセール結果

3) トレーニングセール

・ The Fasig-Tipton Florida Sale

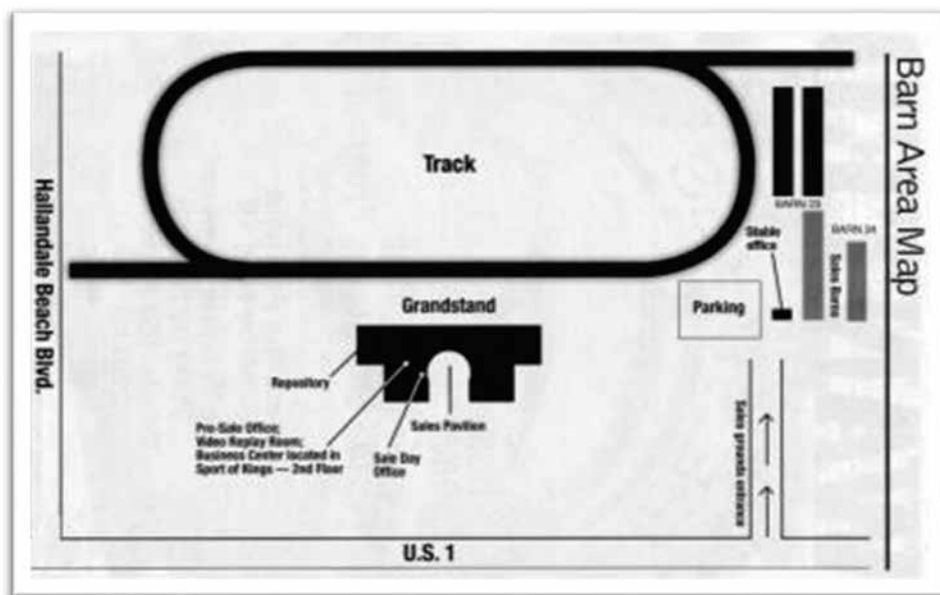
2016 年 2 月 29 日から 3 月 2 日にかけてフロリダ州マイアミの北にある Hallandale Beach という町にあるガルフストリームパーク競馬場にて開催された「The Fasig-Tipton Florida Sale」を視察した。スケジュールは 2 月 29 日の午前 10 時から調教供覧（Undertack Show；tack とは馬具という意味なので、馬具の下で見せるショーすなわち鞍を付けて見せるショーという意味）があり、3 月 1 日は一日下見対応（比較展示はない）、セリは 3 月 2 日の 16 時から行われるという准ナイター・セリであった。前年（2015 年）のこのセリから 2 歳王者の Nyquist 号（コンサイナーは Niall Brennan Stables）が輩出されたこともあり、例年以上に注目されていた。日本で活躍した競走馬だと、クロフネ、エーシンフォワード、ゴールデンバローズが同セリの出身である。2010 年まではコールドー競馬場（現ガルフストリームパーク・ウエスト）、2011 年から 2013 年まではパームメドウズ・トレーニングセンター、2014 年はアデナスプリングス・サウス（オカラ）で開催されていたが、2015 年からガルフストリームパーク競馬場に会場が移った。馬場および厩舎は競馬場のものをそのまま

利用し、ステージはパドック内に設けられた。



入口にあるペガサス像

スタンド



セリ会場

<調教供覧>

全頭単走であったが、順番は上場番号順という訳ではなく、バラバラであった。タイムは自動計測であり、走行が終わると即時にターフビジョンに表示される。ターフビジョンには走行中の風向き（東が海なので、東からの風がほとんどであった）も表示される。バックアップとしてファシグティプトン社の職員がストップウォッチで時計を測り、自動計測システムの故障に備えていた。気を付けなくてはならないのが1秒以下は5分の何秒が表示されることで、例えば「10.2」と表示された場合「10秒20」ではなく「10秒2/5」という意味なので「10秒40」のことを意味する。



供覧は全頭単走

タイム表示

芝・ダートのどちらを走行するかは選べるらしく、ほとんどがダートコースを走行し、芝コースを走っていたのはわずか2頭のみであった（54番の Lemon Drop Kid 産駒と 119番の Smart Strike 産駒）。芝コースの走行は先に行われた。



芝で追い切られたのは2頭のみ

1頭ずつ向正面にある入退場口から入場し、速歩でスタートする。誘導馬（リードポニー）が3コーナー辺りまで付いていた。タイム計測は1ハロンと2ハロンが選べ、事前にコンサイナーがファシグティプトン社に申告するシステムとなっている。ほとんどが1ハロンのみのタイムを計測しており、2ハロンのタイムを計測していたのはわずか2頭のみであった（芝1頭21秒40、ダート1頭22秒60）。基本的にゆっくり入り、4コーナーを内埒びったりではなくわざと外側にふくれて回り、直線手前で一気に加速していた。騎乗者についての情報開示（体重など）は特になかった。スタンドで見ている購買者に目立たないように、鞭を左手（内側）に持つ騎乗者が多かった。たいてい直線の入り口で一発使い、道中は適宜肩鞭を入れるという騎乗者が多かった。1ハロンだけのいわばスプリントダッシュであり、言われていたほど“虐待”とは思えなかった。馬を全力で走らせて、そのフォームを見て評価してもらうという姿勢である。



誘導馬（リードポニー）が3コーナー辺りまで付く



4C まではゆっくり

直線の入り口で鞭

ほとんど直線のための走行になるため出す手前はバラバラで、ゴール板の陰に驚いて手前を変える馬が多かった。それを予防するためかシャドーロールを装着している馬も多く、物見をする馬にはさらにブリンカーが装着されていた。

アデナスプリングスから上場された馬のみタイムを計測せず「Gallop」とだけ表示されていた。これはオーナーのポリシーで、この時期の2歳馬に速いタイムで走らせることは酷だという考えらしい。走行中騎乗者は鞭を使用していなかった。ちなみに、アデナスプリングスのオーナーのフランク・ストロナック（Frank Stronach）氏は開催場所であるガルフストリームパーク競馬場のオーナーでもある。

途中ハロー掛けが3回ある関係で、4ロットに分かれていた。ハロー掛けは散水車が1台（最内）を走った後、ハロー車が4台走っていた。購買者からするとちょうど良い休憩になっていたようである。食事が提供された時代もあったらしいが、現在は有料。



散水およびハロー掛けが3回

調教供覧当日は日差しが強く、アメリカ人バイヤーの多くが冷房の効いているスタンド内から見ていたのに対し、日本人バイヤーは皆「馬の息遣いが聞こえないから」という理由から外で見ていたのが印象的であった。アメリカ人バイヤーの中にはストップウォッチを使用して自分自身で測っていた人もいた。ゴールした後の1ハロンなど各自こだわりの位置を測っていたようである。

調教供覧前、1頭が向正面で放馬した。放馬に備えて競馬場と同じく誘導馬（リードポニー）に乗った職員が待機しているのであるが（向正面に3頭、4コーナーに1頭）、その時は上手く機能せず逆走（右回り）で1周してもなお捕まらず、向正面の入退場口から厩舎地区へと走って行ってしまった。その馬は欠場せず、その後順番を変えて調教供覧を実施した（10秒40と平均より遅くなってしまった）。



1頭放馬し逆走

捕まらず厩舎地区へ

調教動画は随時ファシグティプトン社のWebサイト上にアップされていき、購買者が確認できるようになっていた。また、スタンド2階にVideo Replay Roomが設けられ、PCが苦手な人でも閲覧しやすいようになっていた。同室では1台のTVに15頭ずつの調教動画が流れるようになっており、自分が見たい馬の動画を早く見られるように配慮されていた。

欠場馬を除く、調教供覧での走行タイムは以下のとおり。

- 10.0 (10 秒 00)・・・10 頭
- 10.1 (10 秒 20)・・・21 頭
- 10.2 (10 秒 40)・・・38 頭
- 10.3 (10 秒 60)・・・23 頭
- 10.4 (10 秒 80)・・・13 頭
- 11.0 (11 秒 00)・・・6 頭
- 11.1 (11 秒 20)・・・1 頭

上記からはすでに除外されているが、11 秒台で走った馬のうち 2 頭が欠場した。これは馬の価値が下がると判断されたためと思われる。

<レポジトリー>

2 月 29 日の調教供覧は 15 時頃終了したが、この日は下見対応を行っていないという。理由を聞くと、調教供覧の後、全頭レポジトリー用のレントゲン撮影を行うとのこと。レポジトリーのオープンが 3 月 1 日の正午からなので、遅くとも 3 月 1 日の午前中までには 154 頭（カタログ掲載時）にはレントゲン撮影を終え、画像を提出しなくてはならない。これは獣医師およびコンサイナー（育成業者）にとっては大変な作業であるが、購買者サイドから見れば強調教後の最新の画像が閲覧できるため、非常に大きな安心感を与えているようであった。レントゲンの撮影部位は 1 歳セリと同じく左前球節 4 枚、左前球節屈曲 1 枚、左腕節 3 枚、左前腕節屈曲 1 枚、右前球節 4 枚、右前球節屈曲 1 枚、右腕節 3 枚、右腕節屈曲 1 枚、左後球節 4 枚、左飛節 3 枚、右後球節 4 枚、右飛節 3 枚、左膝 3 枚、右膝 3 枚の計 38 枚（順番はバラバラ）。急いでいるせいか、画像のクオリティは低かった（ぶれている写真多数）。しかし 1 件、Equine Medical Center of Ocala という病院から提出されていたレントゲンのクオリティが非常に高く、聞けばオカラで最も大手の病院のようだ。レポジトリールームの開場時間は 3 月 1 日 12 時から 18 時、3 月 2 日 8 時からセリ終了まで。

<下見対応>

上場馬はセリの 10 日前頃から入厩している。2 月 29 日の調教供覧後はレポジトリー用のレントゲン撮影があるため、下見が可能な時間は実質 3 月 1 日および 2 日のセリ開始まで。日本のセリのように比較展示はない。肢元が見やすいように砂の上にゴムマットが敷かれ、その上で歩様検査していた。馬はチェーンシャंकを鼻の上に回すカリップチェーンのように使用し、チフニーを使用している馬は見かけなかった。3 月 1 日の 18 時から関係者向けにカクテルパーティが開催された（会場はパドック）。



下見の様子



カクテル・パーティ

<セリ>

上場順は母馬のアルファベット順(今年はFから)。ステージはパドック内に設けられた。前日のカクテルパーティを片付けて組み立てたことになる。厩舎地区からステージまでは馬場内を引いて来て、まず装鞍所で待機する。その後、パドックのステージ裏に2頭待機し、その後ステージへという流れであった。パドックを見下ろすグランドスタンドは2階建てであるが、2階からは競ることができない。19:30頃には日没となり、以降ナイター・セリとなった。



パドック内にステージ

馬場内を引いてくる



装鞍所で待機

パドックで2頭待機

<結果>

前年（2015 年）のこのセリから 2 歳王者の Nyquist 号（コンサイナーは Niall Brennan Stables）が輩出された効果か、売却率・売却総額・平均価格・中間価格ほぼ全ての数値が前年を上回った。しかし、欠場頭数が 58 頭と非常に多く（“欠場率”を計算すると 37.7%にもなる）、現場では「自分の狙っていた馬がいつの間にか欠場していて、競ることさえできなかった」という声が多く聞かれた。欠場の理由だが、調教供覧にて剥離骨折などの故障を発症した馬も数頭いたようだが、良い金額を事前に提示された上場サイドがセリの直前に売ってしまった例も多かったようだ。当然、セリとしては少々白けたムードが漂っていた。

年	名簿掲載	上場	落札	売却率	売却総額	平均価格	中間価格
2016	154 頭	96 頭	66 頭	68.75%	\$21,590,000	\$327,121	\$250,000
2015	175 頭	132 頭	89 頭	67.42%	\$20,095,500	\$225,792	\$130,000
2014	156 頭	85 頭	47 頭	55.29%	\$13,370,000	\$284,468	\$180,000

過去 3 年間の The Fasig-Tipton Florida Sale の結果一覧

最高価格馬は Hip.131 の Tapit 産駒の牡馬であった（3/20 生、母 Betha、母父 Giant's Causeway）。落札価格は\$1,800,000 ドルで、落札者は Woodford Racing/La Penta。

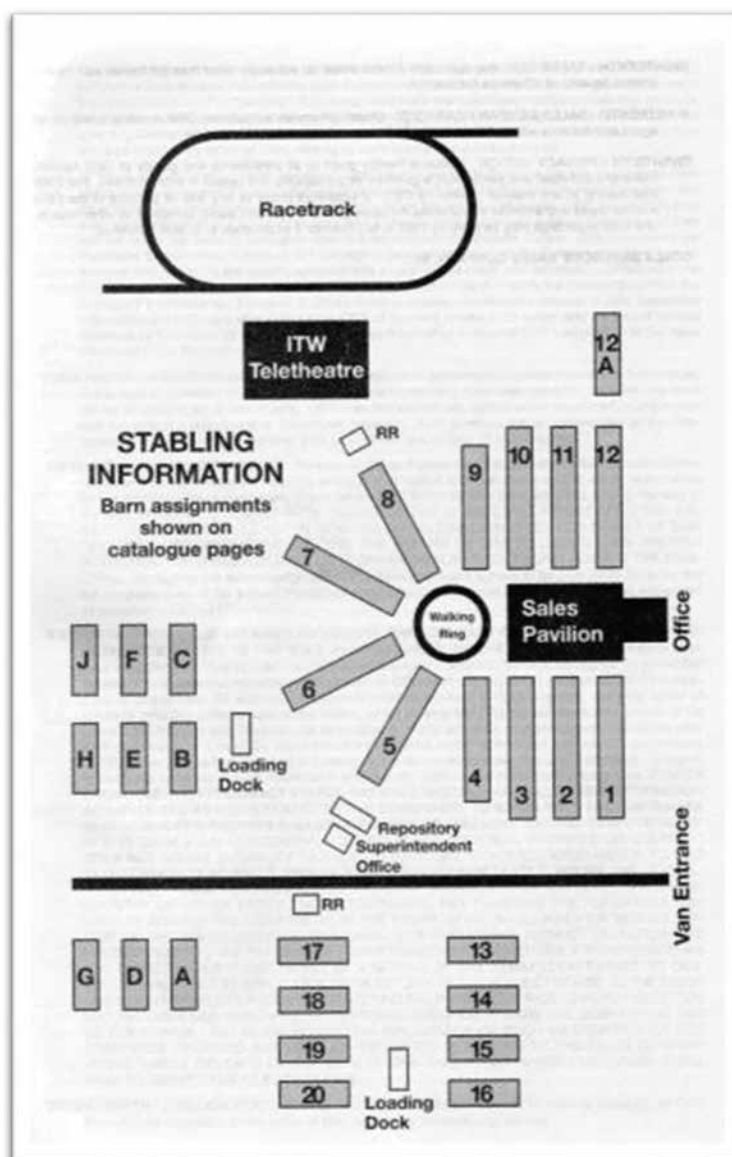
・ OBS March Sale of 2YO in Training

2016 年 3 月 9 日から 16 日にかけてフロリダ州オカラにある OBS (Ocala Breeders' Sales Company の略) で開催された「March Sale of Two-Years-Olds in Training」を視察した。スケジュールは 3 月 9 日から 11 日までの 3 日間で調教供覧を行い（約 200 頭ずつ、朝 8 時から）、12 日から 14 日までの 3 日間で下見対応、15 日および 16 日の 2 日間でセリ（約 300 頭ずつ、午前 11 時から）という流れ。モーニン、アジアエクスプレス、ゴスホークケンが同セールの出身である。モーニンは 2014 年のこのセリで 335,000 ドルで Narvick に落札されている（調教タイムは 10 秒 00）。生産者団体である OBS が主催ということもあり、ファシグティプトンと比較してセレクト色は薄まる。しかし、OBS は他に 4 月に Spring Sale of Two-Year-Olds in Training（約 1,200 頭が上場される）、6 月に June Two-Years-Olds & Horses of Racing Age（約 1,000 頭が上場される）というトレーニングセールも開催し、その中では最も選抜されたセリという位置づけ。OBS はトレーニングセールだけでなく、8 月に Selected Sale of Yearlings および連続して開催される Open Sale of Yearlings という 1 歳セリ、Fall Mixed Sale という混合セリを開催している。会場はオカラ国際空港の目の前にある。しかし、同空港は定期便の運航がないため、プライベートジェットを持たない我々一般市民はオーランド空港もしくはゲインズヴィル空港から約 1 時間かけて来ることとなる。会場は静内の北海道市場に周回コースが隣接しているようなイメージである。



OBS セリ会場

目の前にオカラ空港



OBS セリ会場

<調教供覧>

コースは1周 1600m のオールウェザーのみ。ファシグティプトンと同じく、タイム計測は1ハロンの馬と2ハロンの馬があり（コンサイナーが事前に申告）、1ハロンの馬の馬が多い。単走だが走行順は番号順ではなく、事前に走行順が書かれたリストが配られるのだが、実際の走行がそのリストのとおりではなく、購買者にはわかりづらかった。騎乗者についての情報提供はなかった。2コーナーの外側に待避所があり、乗り役はそこで乗り替わる。乗り方はファシグティプトン同様、基本的にゆっくり入り、4コーナーを内埒びったりではなくわざと外側にふくれて回り、直線手前で一気に加速。たいてい直線の入り口で鞭を一発入れ、道中は適宜肩鞭を入れるという騎乗者が多かった。タイムは自動計測され、測り始めて

から電光掲示板にリアルタイムで表示され、タイム計測に嘘偽りがないことの証拠にしていた。タイムの表示方法自体はファシグティプトンと同じく 1 秒以下が 5 分の何秒であった。電光掲示板には今走行中の馬の番号とタイム(On Track)と次に走る馬の番号(Up Next)しかなく、次の走行が始まると前に走った馬のタイムがすぐに消えてしまうため、メモをとるのが大変だった。購買者の中にはファイシグティプトン同様自らストップウォッチで任意の地点のタイムを計測している人もいた。ファシグティプトンと比較して馬と馬の間隔が短く、テンポよく進行していた。途中 3 回のハロー掛けがあり、購買者にとって良い休憩となっていた。ハロー車は内側 2 台で、ダートでないためか散水はなかった。ハロー掛け休憩中、朝食はドーナツとコーヒーが無料で提供された。昼食は有料だがホットドッグが 3 ドル程度と安価で提供された。



2 コーナーの待避所で騎乗



直線入口で一気に加速



タイム表示はファシグと同様



途中 3 回ハロー掛け

ブリンカーの装着率が高く、ほとんどの馬が装着していた。4 コーナーでごねて行かなくなる馬が多く、そのような馬は 3・4 コーナー中間地点辺りまで戻り、誘導馬（リードポニー）のサポートを受けながら再度 1 ハロンの追い切りに臨んでいた。この辺り、ファシグティプトンに上場された馬より洗練されていない感じがした。なお、誘導馬は向正面に 3 頭、

4 コーナーのポケットに 1 頭いた。風についての情報はリアルタイムでは表示されないが、VTR には風向きと風速が表示された。ここもガルフストリームパークと同じく主に東風が吹いていたが、スタンドが南向きのため追い風となり、風速のチェックはファシグティプトン以上に重要だと思われた。例えば 2 日目と 3 日目の朝に好時計が連発したが、馬場の含水率に加え風速も影響していたのかもしれない。

なお、昔はこの場所で競馬開催を行っていた時期もあったらしく、スタンドの 2 階には過去のレースの写真が飾られてあった。今は場外馬券発売所として使用されている。

調教供覧は 3 日間とも朝 8 時に開始し、14:30 頃終了した。

調教動画は随時 OBS 社の Web サイト上にアップされていき、購買者が確認できるようになっていた。また、ファシグティプトン同様会場内に Video Replay Room が設けられ、PC が苦手な人でも閲覧しやすいようになっていた。

調教供覧での走行タイムは以下のとおり（欠場馬込み）。馬場がダートではなくオールウェザーのため、ファシグティプトンよりも全体にタイムが速かった。

・1 ハロン計測馬

9.3 (9 秒 60)・・・3 頭

9.4 (9 秒 80)・・・45 頭

10.0 (10 秒 00)・・・93 頭

10.1 (10 秒 20)・・・139 頭

10.2 (10 秒 40)・・・110 頭

10.3 (10 秒 60)・・・36 頭

10.4 (10 秒 80)・・・13 頭

11.0 (11 秒 00)・・・2 頭

・2 ハロン計測馬

20.2 (20 秒 40)・・・3 頭

20.3 (20 秒 60)・・・7 頭

20.4 (20 秒 80)・・・8 頭

21.0 (21 秒 00)・・・9 頭

21.1 (21 秒 20)・・・14 頭

21.2 (21 秒 40)・・・16 頭

21.3 (21 秒 60)・・・11 頭

21.4 (21 秒 80)・・・4 頭

22.0 (22 秒 00)・・・4 頭

22.1 (22 秒 20)・・・1 頭

<下見対応>

調教供覧の1日目は下見できず。2日目は1日目に調教供覧を終えた馬の下見が可能であったが、グルームの労働時間の関係なのか16時までで終了であった。同じく調教供覧の3日目は2日目までに調教供覧を終えた馬の下見が可能であった(16時まで)。本格的な下見対応は12日から14日までの3日間で、朝8時から下見が可能であった。下見中、レキシントンのセリと一緒に働いたことのあるメキシコ人数名と会った。彼らは自家用車でオカラまで来て、宿泊代はコンサイナーが負担してくれるらしい。

馬は基本的に四肢装蹄していたが、牧場視察もさせてもらった Wavertree Stables では調教供覧後に両後肢の蹄鉄を除去していた。スパイク鉄を履いているため、下見で硬い地面を歩かせていると負担になるという理由だそう。そのほか、ファシグティプトン同様肢元が見やすいように砂の上にゴムマットが敷かれ、その上で歩様検査していた。また、馬はチェーンシャックを鼻の上に回すかりップチェーンのように使用し、チフニーを使用している馬は見かけなかった。

<レポジトリ>

レポジトリのレントゲン画像はセリの3週間前(21日前)までに提出することとなっていた。今回初めて OBS 社のレポジトリを利用したが、初回に住所等連絡先を書類に記載して提出し、ID とパスワードを設定すれば見ることができた(日本の獣医師だと言える)。下見2日目の13日11時の時点で名簿後半(400番以降)のレントゲン画像がアップロードされておらず、翌14日朝9時にもう一度確認したところ全頭の画像がアップされていた。画像が見られる PC は16ブースあった。レポジトリ内は撮影禁止であった。レントゲンの撮影部位は1歳セリと同じく左前球節4枚、左前球節屈曲1枚、左腕節3枚、左前腕節屈曲1枚、右前球節4枚、右前球節屈曲1枚、右腕節3枚、右腕節屈曲1枚、左後球節4枚、左飛節3枚、右後球節4枚、右飛節3枚、左膝3枚、右膝3枚の計38枚(順番はバラバラ)。手術歴などがあればレントゲン画像の前に診断書の PDF ファイルが自動的に開かれるようになっていた。レントゲン画像は DICOM ビューアーでストレスなく見ることができた。

オカラには Equine Medical Center of Ocala ともう1つ Peterson & Smith Equine Hospital という病院が手術施設もある大手らしく、この2つの病院から提出されていたレントゲン画像のクオリティが非常に高かった。

他のセリと同様、レポジトリルームで確認できるのはレントゲン画像と手術歴などが書かれた獣医師の診断書のみ。コンサイナーに聞けばレントゲン画像の評価を含めた獣医師の診断書を見せてくれるが、内視鏡検査(ファイバースコープ)を改めて獣医師に依頼する場合は1頭あたり80~90ドルの費用がかかる。

また、EVA の抗体価の検査の結果は主催者に聞けば教えてくれる。

＜セリ＞

2日間で行われるが、カタログ（セリ本）は1冊のみ。1日目に良い馬が出るかと言えばそうではなく、単純に母馬のアルファベット順（今年はHから）。結果も分けられず1つにまとめられていた。

特に初日の午前中、駐車スペースが足りなくて溢れる車が続出していたが、これはどうやら近隣に牧場が多いため関係者（従業員）が見学に多数来場し、購買者の駐車スペースを占領してしまっていたようである。自分が育成した馬がどう評価されるか見たい気持ちは十分理解できるが、あくまでもセリは購買者を優先すべきであることを改めて意識させられたとともに、我々もセリで馬を売却する際は肝に銘じなくてはならないと感じた。

ステージまでの導線は、屋外パレードリング⇒屋内パレードリング⇒待機所⇒ステージの順。屋外パレードリングでは基本的に外周を円形に引き馬しているのであるが、バイヤーが下見したい時に対応できるスペースとしてリングの内側にレーンが設けられてあった。屋内パレードリングでは4頭が待機、ラストのステージ直前の待機所では2頭が待機していた。馬はコンサイナーに引かれ、ステージ上でOBSの職員と代わる。



駐車スペースが不足

屋外パレードリング



屋内パレードリング

ステージ

<結果>

過去3年間の同セールの結果は下記表のとおり。2年前までは上場頭数をしばって“セレクト感”を出していたようだ。前年から上場頭数を約600頭に増やしているが、平均価格および中間価格ともに2年前までと遜色ない値となっている。

年	名簿掲載	上場	落札	売却率	売却総額	平均価格	中間価格
2016	613 頭	434 頭	325 頭	74.88%	\$51,650,000	\$158,923	\$100,000
2015	610 頭	422 頭	325 頭	77.01%	\$55,432,000	\$170,560	\$105,000
2014	411 頭	261 頭	201 頭	77.01%	\$37,627,500	\$187,201	\$135,000

過去3年間の OBS March Sale の結果一覧

欠場した179頭のうち、調教供覧前の欠場は95頭、調教供覧後の欠場は84頭であった。こんなにも多数の馬が調教供覧で故障するはずはないので、やはりセリ場での庭先取引とでもいべきセリ開始前に契約が成立しているケースがかなりの数存在しているようだ。以前、ダービーダンの Sales Director の Carl に「日本は狭いので関係者が牧場を直接回って、庭先取引されるケースが多い」と話したところ、彼は「おお、それは良い！我々もセリに出したくて出している訳ではない。セリに出せば馬が怪我をすることもある。庭先で決められるならその方が良いが、米国は国土が広くなかなか牧場まで直接馬を見に来る馬主は少ない。」と言っていた。セリ場が「馬見せの場」として機能していることは確かだが、我々が目指している「開かれた公正な取引をするためのセリの振興」とは隔たりがあることがわかった。米国のセリでは、カタログにはコンサイナー名しか載っておらず、その馬がどのような経緯で育成されてきたかは Blood-Horse 社が出版している Auction Edge を別途購入するなどして調べるほかない。それとて生産者の欄には繁殖牝馬所有者名が書いてあるだけであり、生産牧場はわからない。海外のセリを視察に行く場合、その辺りを考慮しながら見る必要があると思われた。

本セールの最高価格馬は Hip.591 の Smart Strike 産駒の牡馬で、なんとイリノイ州産馬であった(3/21 生、母 Glamorista、調教タイム 9.4)。落札価格は\$1,700,000 ドルで、落札者は L.E.B.。

前述の走行タイムと中間価格(米ドル)を出してみた。タイムが遅い馬に関してはサンプル数が少ないため信頼できないが、やはりタイムの速さと比例して価格は上昇するようである。特に1ハロンおよび2ハロンともに、最速タイム(9.3 および 20.2)を出した馬の評価は高騰するようだ。

・1ハロン計測馬

9.3 (9 秒 60)・・・3 頭・・・\$550,000

9.4 (9 秒 80)・・・45 頭・・・\$192,500

10.0 (10 秒 00)・・・93 頭・・・\$170,000

10.1 (10 秒 20) . . . 139 頭 . . . \$97,500
 10.2 (10 秒 40) . . . 110 頭 . . . \$60,000
 10.3 (10 秒 60) . . . 36 頭 . . . \$27,000
 10.4 (10 秒 80) . . . 13 頭 . . . \$40,000
 11.0 (11 秒 00) . . . 2 頭 . . . \$12,000

・ 2 ハロン計測馬

20.2 (20 秒 40) . . . 3 頭 . . . \$375,000
 20.3 (20 秒 60) . . . 7 頭 . . . \$240,000
 20.4 (20 秒 80) . . . 8 頭 . . . \$280,000
 21.0 (21 秒 00) . . . 9 頭 . . . \$210,000
 21.1 (21 秒 20) . . . 14 頭 . . . \$155,000
 21.2 (21 秒 40) . . . 16 頭 . . . \$80,000
 21.3 (21 秒 60) . . . 11 頭 . . . \$62,500
 21.4 (21 秒 80) . . . 4 頭 . . . \$97,500
 22.0 (22 秒 00) . . . 4 頭 . . . \$15,000
 22.1 (22 秒 20) . . . 1 頭 . . . \$12,000

・ Barretts Select 2YO in Training Sale

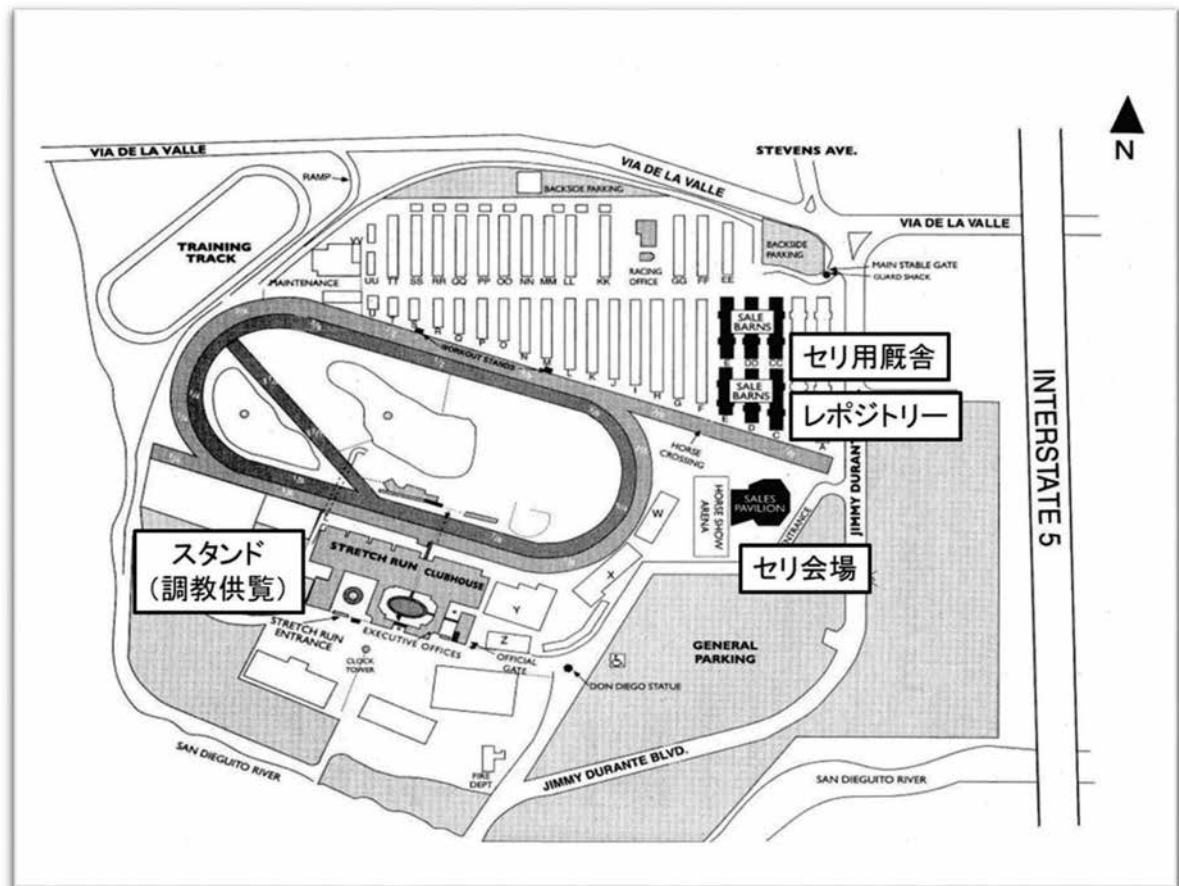
2016 年 3 月 28 日から 30 日にかけてカリフォルニア州ソラナビーチ (Solana Beach) に隣接するデルマー競馬場で開催された「Barretts Select 2YO in Training Sale」を視察した。スケジュールは 3 月 28 日に調教供覧が行われ (朝 10 時から)、29 日が下見対応、30 日がセリ (14 時から) という流れ。テストマッタ、スーニ、ダノンレジェンド、ヘニーハウンド、エスメラルディーナなどが同セールの出身である。

バレッツはカリフォルニアのセリ会社で、他に January Mixed Sale (1 月)、May Sale of Two-Year-Olds in Training & Horses of Racing Age (5 月)、The Paddock Sale of Race Ready Horses (7 月)、August Select Yearling Sale (8 月)、Fall Sale of Yearlings and Horses of Racing Age (10 月) とほぼ 1 年中セリを開催している。

前年 (2015 年) の 3 月まではカリフォルニア州アルカディア (Arcadia) の同社のフェアグラウンド (fairground、特定の場所のことではなく、セリや競馬などが開催できる場所のことを一般的にこう呼ぶらしい) で開催されていたが廃止されたらしく、5 月のセリからデルマー競馬場に移ったとのこと。デルマー競馬場までのアクセスはサンディエゴ国際空港から車で約 30 分、ロサンゼルスからだと約 2 時間である。なお、同セールの出身馬のみが出走できる Barretts Juvenile S. (牡馬のみ) および Barretts Debutante S. というレースが用意されている。2015 年までは同社のフェアグラウンドで開催されていたが、2016 年はおそらくデルマー競馬場で開催されるであろうとのこと。ちなみに、開催時期についても毎年変

化しており、2014 年は 3 月 1～3 日、2015 年は 2 月 21～23 日に開催されていた。

余談であるがセリ前後の同地はフロリダよりも涼しかった。夏涼しく冬は暖かい年中過ごしやすい気候（地中海性気候）のため、カリフォルニア地区の夏の競馬開催はここデルマーで行われている。



Barretts セリ会場

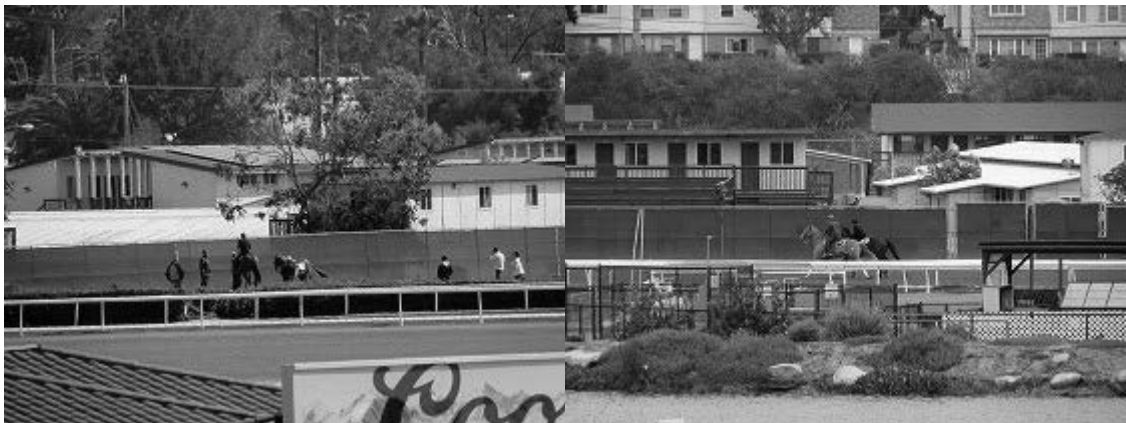
フロリダのコンサイナーに聞いてみたところ、馬はオカラ空港からサンディエゴ国際空港まで飛行機（チャーター便）で輸送し、自分たちの牧場からデルマー競馬場までのトータルで約 8 時間かかるとのこと。これはレキシントンからオカラまでの輸送時間（約 12 時間）よりも短く、しかも飛行機での輸送は信号機でのストップ＆ゴーがないため、離陸時と着陸時にさえ注意すれば馬へのストレスはそれほど大きくないのではないかと話していた。調教供覧の 10 日程前にデルマーに到着したとのこと。滞在期間中に追い切りを一度行うというコンサイナーとしないというコンサイナーの両方がいた。どうやらカリフォルニアにはあまり大手の牧場はなく、ケンタッキー州のレキシントンやフロリダ州のオカラのように牧場が集まっている地区もないようである。

＜調教供覧＞

コースは外側に 1 周 1,600m のダートコース、内側に 1 周 1,400m の芝コース。ダートコースの直線は 280m。全頭ダートコースで追い切られた。他のトレーニングセールと同様、タイム計測は 1 ハロンの馬と 2 ハロンの馬がおり（コンサイナーが事前に申告）、1 ハロンの馬が多い。単走だが走行順は番号順ではなく、例によって事前に配布されたリストのとおりでもなかった。騎乗者についての情報提供もなし。調教供覧が始まる前の時点ですでに 54 頭も欠場馬がおり、やや白けた雰囲気。

乗り役は 2 コーナーで乗り替わる。誘導馬（リードポニー）と一緒に向正面をスタートし、3 コーナーで切り離される。4 コーナーを内埒ぴったりではなくわざと外側にふくれて回り、直線手前で一気に加速。たいてい直線の入り口で鞭を一発入れ、道中は適宜肩鞭を入れる。タイムは自動計測され、測り始めてから電光掲示板にリアルタイムで表示される。タイムの表示方法自体は他のトレーニングセールと同様 1 秒以下が 5 分の何秒であった。競馬場のターフビジョンは閉まっており、液晶テレビに今回の番号およびタイム、前回の番号およびタイム、そして次の番号が表示されていた。購買者の中には他のトレーニングセール同様自らストップウォッチで任意の地点のタイムを計測している人もいた。ブリンカーおよびシャドーロールの装着率が高かった。

途中 2 回のハロー掛けがあり、購買者にとって良い休憩となっていた。主催者が馬場コンディションを見てタイムが遅いと判断したのか、散水車（1 台）が 2 周して水を撒いていた。ハロー車は 3 台で、1 周のみであった。ハロー掛け休憩中、サラダとハンバーガーが無料で提供された。ハロー掛け後は好時計が連発した。2 回目のハロー掛け休憩時には合田直弘氏から日本人バイヤー向けに日本語でのアナウンスがあった。競馬開催時の実況席のマイクを利用したとのこと。



向正面で乗り替わり

リードポニーとスタート



3 コーナーで切り離し



直線手前で一気に加速



タイムは液晶テレビに表示



散水車が2周



ハロー掛け



食事が無料提供

<レポジトリー>

レポジトリーのレントゲン画像は基本的にはファシグティプトン同様調教供覧後に撮影が行われていたが、一部供覧前の画像が提出されている馬もあり、統一感に欠けていた。レ

ポジトリールームは厩舎地区にあり、プレハブを利用した簡素な作りであった。受付では他社のレポジトリーのように利用初回時に住所等連絡先を記載するフォームが用意されていなかったため、とりあえず住所等連絡先をメモ用紙に記載して提出し日本の獣医師である旨を伝え、仮の ID とパスワードが書かれた紙をくれたのでそれを入力して画像を閲覧した。

下見が行われた 2 日目の 29 日午前中にはレントゲン画像がほとんどアップロードされておらず、「何時に編集作業が完了するのか？」問い合わせたところ「15 時までには」とのことだったのでその時間にまた来ると全頭の画像が閲覧可能となっていた。しかし、OS が Mac で私が慣れていないこともあり、DICOM ビューアーの操作が非常に面倒でストレスが大きかった（ワンクリックでさくさく次の画像が見られるようになっていなかった）。

レントゲンの撮影部位は 1 歳馬のセリと同様の左前球節 4 枚、左前球節屈曲 1 枚、左腕節 3 枚、左前腕節屈曲 1 枚、右前球節 4 枚、右前球節屈曲 1 枚、右腕節 3 枚、右腕節屈曲 1 枚、左後球節 4 枚、左飛節 3 枚、右後球節 4 枚、右飛節 3 枚、左膝 3 枚、右膝 3 枚の計 38 枚に、腕節のスカイビュー左右 1 枚ずつ（第 3 手根骨の列のみ）がプラスされ、計 40 枚が 2 歳馬および現役競走馬セールスのレポジトリーの基本のようだ。しかし、膝が 3 枚ではなく 2 枚（正面と真横のみで斜めがない）の馬もあり、これまた統一感がなかった。写真の質も正直良くなかった。

<下見対応>

3 月 28 日調教供覧後の下見は可能であったが、前述のとおりレポ用のレントゲン撮影を行っていたため、本格的な下見対応は 29 日朝 8 時から。今回も、レキシントンのセリで一緒に働いたことのあるメキシコ人数名と会った。

調教供覧で好時計を出した馬を中心に視察したが、ファシグティプトンや OBS の上場馬と比較して小柄な馬が多く、BCS も低めであった。



下見の様子

＜ウェルカム・パーティ＞

今までの文章からご察しのとおり、今回のバレッツのセールは上場馬の数と質、そして運営面に至るまで正直なところあまり良い印象は持っていなかったが、このセリ前日のパーティに関しては別格であった。当地の有名シェフの自宅（別荘）で行われたのだが（移動は公式ホテルであるヒルトンがマイクロバスで送迎）、海岸沿いの崖の上に位置し景観が良く、そして無料で提供される料理が素晴らしかった。こうした類の“ホスピタリティ”は日本人が苦手とするところで、ブリーズアップセールはもちろん競馬開催が主たる業務である我々 JRA 職員が最も海外から学ばなくてはならないことの一つであると思われる。こちらでは主催者側だけでなく、購買者側にも「セリだけでなく、せっかくデルマーまで来たのだから楽しもう」という気持ちがあり、その点が主催者側からの一方的な“サービス”を求める日本人との本質的な違いであると思う。後述するレポジトリーのあり方も含めて、もしブリーズアップセールの 2 日間に分けて開催するようなことになればこのようなパーティ的なイベントも開催する必要があるであろうが、成功させるためには我々主催者側の努力はもちろん、購買者側の意識の変革（ただ“良い馬を買いたい”という気持ちだけでなく、“社交の場”という位置づけを持ってもらう）も必要となるであろう。もしかしたらこの辺りに、馬主になりたいという人を調教師等の関係者と結びつける機会を増やして、結果新規馬主を増やすことに結び付けられる重要なヒントがあるのかもしれない。



ウェルカム・パーティの様子

＜セリ＞

30 日の 14 時からセリが行われた。調教供覧の後、欠場馬が 8 頭追加され 62 頭に。上場馬のステージまでの導線は、厩舎地区から競馬場のダートコースを横切り、テントによる仮設のパレードリングを周回し、ゴムマットが敷かれた通路をとってステージへという流れ。セールスバヴィリオンは普段は場外馬券発売所として使われている建物であり、構造上ステージの手前ですれ違わなくてはならなかったが、危険だと感じる場面はなかった。なお、他のセリ同様ステージではコンサイナーからセリ会社の職員に引き手が代わる。さらに Polo Green Stable の新木信隆氏によれば、ビットスポッターはキーンランドや OBS など全米各地のセリに年中参加しているプロで、馬のセリだけでなく車などのオークションの際にも活躍しているとのこと。例外的にファシグティプトン社のみ独自のビットスポッター

を採用しているようだ。欠場馬が多かった結果、なんとセリ開始からたったの2時間半後、16時半には終了してしまった。



ダートコースを横切る



パレードリング



ゴムマットが敷かれた通路をとってステージへ



ステージの手前で引き手が代わり、すれ違う

<結果>

過去3年間の同セールの結果は下記表のとおり。昨年は2月21～23日に開催し売り上げが良くなかったため、今年は3月28～30日と1ヶ月以上時期をずらしたようだが、売却総額は減少した。

年	名簿掲載	上場	落札	売却率	売却総額	平均価格	中間価格
2016	126 頭	64 頭	43 頭	67.18%	\$5,356,000	\$124,558	\$100,000
2015	113 頭	65 頭	45 頭	69.23%	\$6,148,000	\$136,622	\$100,000
2014	140 頭	94 頭	60 頭	63.82%	\$10,665,000	\$177,750	\$112,500

過去3年間の Barretts Select 2YO in Training Sale の結果一覧

本セールの最高価格馬は Hip.12 の The Factor 産駒の牡馬であった(4/13 生、母 Broadway Lullaby、調教タイム 9.8)。落札価格は\$460,000 ドルで、落札者は Narvick International。同馬は後に日本に輸入され、中央で3勝したライバーバード。

【総括：米国内および日本国内のトレーニングセールの比較】

2016 年3月に米国内で開催された3つのトレーニングセールおよび2015 年日本で開催されたトレーニングセール（九州を除く）の結果を下記表にまとめる。金額については桁が多くなるためドルで統一した。

セリ	名簿掲載	欠場	上場	落札	売却率	売却総額	平均価格
FT	154 頭	58 頭	96 頭	66 頭	68.75%	\$21,590,000	\$327,121
OBS	613 頭	179 頭	434 頭	325 頭	74.88%	\$51,650,000	\$158,923
Barretts	126 頭	62 頭	64 頭	43 頭	67.18%	\$5,356,000	\$124,558
JRA	79 頭	12 頭	67 頭	67 頭	100.00%	\$5,505,446	\$82,170
千葉	60 頭	3 頭	57 頭	53 頭	92.98%	\$11,094,642	\$209,332
HBA	299 頭	32 頭	267 頭	166 頭	62.17%	\$9,007,142	\$54,259

米国内および日本国内のトレーニングセールの比較（1ドル112円で計算）

この表を見ていてまず気になるのが、米国のセリの欠場馬の多さである。前述したが、国土の広い米国では牧場を気軽に訪問するのが難しいため庭先取引ではなく市場取引が主流である。そのため、セリに上場し各種ウェブサイトにも馬の情報が載った時点でかなりの頭数がセリ会場に運ばれる前に取引されているものと思われる。さらに“セリ会場での庭先取引”とでも呼ぶべきセリ開始直前の欠場（契約成立）も相当数あるようだ。セリでの取引をうながすため例えばバレッツ社は同社のセール出身馬限定レースを行ったりしているが、そうした施策の効果は薄いようだ。

次に気になったのが米国のセールでの平均価格の高さ。2016 年現在円安ドル高ということもあるが日本の生産・調教馬が強くなっている現状であえてダート血統が主流の米国产

馬を高い価格で購買するメリットは少ないのではないだろうか。とはいえ、血の行き詰まりを防ぐため繁殖用にある程度の頭数を輸入する必要はもちろんあるわけで、最も賢い方法は円高の際に繁殖牝馬もしくは将来の繁殖価値を加味した上での牝馬の購買だと思われる。

【考察：トレーニングセールのレポジトリのあり方】

ファシグティプトンとバレッツのレポジトリに提出されるレントゲン画像は、調教供覧後に撮影されていた。もちろんセリ自体が3日間（1日目調教供覧、2日目下見対応、3日目セリ）あるため可能となることではあるが、米国の購買者には「調教供覧後のレントゲン画像を見せて欲しい」という強い要求があり、それに応えてのものだということは容易に想像がつく。

ブリーズアップセールに関して、現在我々は前日展示会こそ開催しているものの、調教供覧とセリを1日で実施し、売却率100%という数値を達成している。医療情報についてはレントゲン画像こそ調教供覧前のものであるが、米国のレポジトリールームでは見ることができない内視鏡動画や病歴も徹底的に公開し、さらに両トレセン診療所の協力を得て売却後のバックアップ体制も万全であり、それらの施策があって高い評価を得ているものと自覚している。

そもそもセリのコンセプトが「速い時計で走って、全速力時の走行フォームその他パフォーマンスを評価する」という米国のトレーニングセールと異なり、「セール時のみのパフォーマンスよりもむしろ競馬本番で高いパフォーマンスを発揮できるように」調教されてきたJRA育成馬たちとは同列に比較できないものであろう。しかし、購買者には「調教供覧後のレントゲン画像を見せて欲しい」というニーズがあり、「米国のトレーニングセールでは実際にそれを行っている」という事実は認識しておく必要があると思われた。

米国のホースマンたちの名誉のために補足しておくが、一見競馬とは関連が低そうな「1ハロン全力疾走」であるが、Wavertree StablesのCiaran Dunneいわく「競馬で最も苦しいゴール直前で全力を出す訓練が、競馬での活躍に繋がっているはずだ」という考え方もある。そして実際に2015年のBCジュヴェナイルと2016年のケンタッキーダービーを制したNyquistが、ファシグティプトン・フロリダセール出身馬（コンサイナーはNiall Brennan Stables）であるという事実を忘れてはならない。

8. 獣医療

レキシントンにはハグヤード (Hagyard) とルードアンドリドル (Rood and Riddle) という 2 大馬病院がある。ダービーダンファームはハグヤードの Dr. Luke Fallon が主治医であることもあり、ハグヤードで研修を行うこととなった。

ハグヤード馬医療機関 (Hagyard Equine Medical Institute)

ハグヤードはケンタッキーで最も大きい馬病院で、1876 年創業と歴史が長いため、大牧場の多くはハグヤードの獣医師が往診に来ていた。所属している獣医師は 40 名もあり、往診部門、外科部門、跛行部門、内科部門、繁殖部門に分かれていた。薬局もあり、薬品やサプリメントのほか包帯などの器材も直接販売していた。内科には検査室が併設されている。診療助手など獣医師以外のスタッフも 29 名おり、さらに世界各国からインターンが集まっていた。



ハグヤード馬医療機関

・症例別の診療科目

Hagyard には 5 つの診療科があり、概ね下記のように担当が分けられていた。

Hagyard Field Care (往診)

繁殖検診、レポジトリー、眼科疾患 (易)、跛行 (易)

McGee Fertility Center (繁殖)

Problem mare (主に子宮内膜炎)、胚移植&人工授精

McGee Medicine Center (内科)

子馬の救急救命 (NICU)、子馬の感染症、疝痛の診断、眼科疾患 (難)、高圧酸素療法、血液検査、細菌培養検査

Davidson Surgery Center (外科)

難産、子馬の肢軸、レポジトリー、疝痛の手術、眼科疾患 (手術)、MRI&シンチグラフィ

Hagyard Sport Horse (跛行)

跛行 (難)

・往診部門 (Hagyard Field Care)

ハグヤードの一次診療 (往診) 担当で、24 名の獣医師が在籍している最大の部門である。誰に帯同するかはダービーダンの主治医である Dr. Luke Fallon が考えてくれたのだが、アシュフォードスタッド (Ashford Stud) やスリーチムニーズファーム (Three Chimneys Farm) といった名門牧場の診療まで組み込んでくれていた。その結果、単純に獣医療だけでなく、各牧場の飼養管理についても広く浅くではあるが知ることができた。

・各獣医師の紹介

<Dr. Fallon>

Dr. Fallon は 5 世代も続く獣医師一家の出身で、コーネル大学を卒業後ハグヤードで研修し、そのままハグヤードで働いているとのことであった。往診先はダービーダンのほか、キャッスルトンライオン (Castleton Lyons) など。

<Dr. Martinez>

オクラホマ大学の出身で、奥さんは小動物の獣医師でレキシントン市内で勤務している。往診先はカルメットファーム (Calumet Farm)、スリーチムニーズファーム、レーンズエンドファーム (Lane's End Farm) など。

<Dr. Stivers>

往診先はアシュフォードスタッドおよびエアドリースタッド (Airdrie Stud) など。ハグヤードに所属する獣医師だが、アシュフォードスタッドが彼に社宅を提供し、牧場内に住んでいる。

<Dr. Rathgeber>

女性獣医師。鍼を得意としており、「Understanding Equine Acupuncture」という教科書を2001年に出版している。診療も鍼治療が中心。夫はジャドモンドファーム（Juddmonte Farms）のマネージャーで、自分たちでも繁殖牝馬を数頭所有し、自宅およびオーヴァーブルックファーム（Overbrook Farm）に繋養している。

<Dr. Wells>

まだ若手のため、私が研修した2016年時点ではハグヤードのホームページに名前と写真が載っていなかった。インターン時代からアシュフォードスタッドの主治医である Dr. Stivers を師匠（mentor）としており、現在はアシュフォードスタッドの“第二獣医師”として診療に回っているほか、徐々に独自の顧客を獲得しているところであった。

<Dr. Monge>

米国領プエルトリコの出身で、英語とスペイン語の両方が堪能である。米国の馬臨床獣医師の中には彼のようにプエルトリコ出身の獣医師がしばしばいるが、実際に馬の世話をするラテンアメリカ出身のグルームたちにスペイン語で直接細かい指示を出せるので、皆人気があるらしい。彼は繁殖検診のほかに鍼とカイロプラクティックが得意なのだがシーズン中は“封印”しており、繁殖検診が暇な時期に鍼とカイロプラクティックで稼いでいる。同じく鍼が得な Dr. Lu や Dr. Rathgeber が繁殖検診に鍼治療を応用しているのとは対照的である。往診先はミレニウムファーム（Millennium Farms）、モルフォランドスプリングス（Mulholland Springs）など。

往診部門の繁殖検診について、下記にまとめる。

◎交配（種付）適期の判断

そもそも、どの牧場も翌年の産駒数に影響する最重要な診療と考えており、ベテランが担当することが多い。特に頭数の多い大牧場では Dr. Stivers（アシュフォードスタッド）や Dr. Pumphrey（ウインスターファーム）などハグヤードでも大御所と呼ばれる獣医師が担当し、若い獣医師たちはキャスリック縫合や子宮洗浄を“下請け”しながら顔を売り、一方で小さな牧場（安い馬）で技術を磨き、自分たちにチャンスが回ってくるのを伺っている。熾烈な競争があるのである。

基本的には日高育成牧場での基準と大差なかったが、基準とする卵胞の大きさが獣医師によって異なり（そもそもきちんと計測する獣医師としない獣医師がいる）、また子宮の浮腫や子宮外口の軟化は省略する獣医師もいた。ベテランほど検査を省略する傾向にあった。文章にすると概ね下記のとおりとなるが、個々の繁殖牝馬のクセを把握する必要があるなど経験がとにかく重要視される分野であることは間違いない。

- 1) 卵胞が成長過程で（1日に3～5mm）、大きさが35mm以上（※）ある
 ※Dr. Lu は37mm以上、Dr. Stivers は30～40mm、Dr. Fallon は40mm以上
 Dr. Monge は25mmなら4日先、30mmなら3日先、35mmなら2日先、40mmなら翌日
- 2) 超音波検査で子宮の浮腫が認められる（Dr. Fallon は+、++の2段階で評価、Dr. Monge は1、1+、2、2+の4段階で評価）
- 3) 膣検査で子宮外口の軟化が認められる
 以上の所見が確認されたら、排卵誘発剤を投与し（24時間前にデスロレリン製剤）、翌日交配（種付）へ

なお、種付の予約については基本的に“早い者勝ち”であるため、獣医師が検査後マネージャーに例えば「Check Monday, Book Tuesday（月曜日に再診する、火曜日に種付を予約して）」と伝えるので、その直後にマネージャーは種馬場に電話し、交配したい種牡馬を仮予約する（Dr. Monge は3～4日先の予約を指示していた）。そして再診時に万が一1日付がずれるようなことがあれば再度種馬場に電話し、予約を変更するという流れであった。なお、何時の種付になるかは種馬場側が決めるため、マネージャーはその時間に合わせて（24時間前に）排卵誘発剤（デスロレリン）を投与する。

◎妊娠鑑定

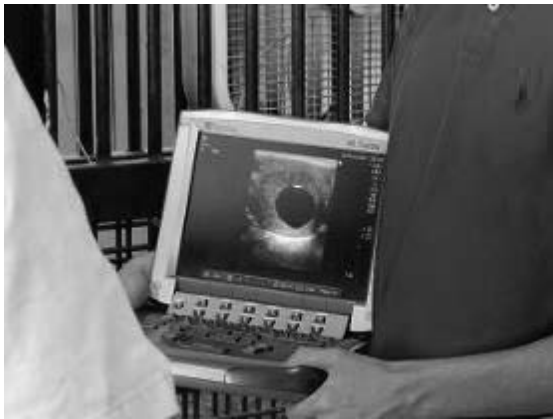
基本的には下記のとおりであった。14日後および28日後に血中プロゲステロン濃度を測定して低ければ早期胚死滅を防ぐためにプロゲステロン製剤（Regu-Mate）を投与する（しかも妊娠期間中ずっと、分娩1ヶ月前まで）のが米国流と言える。また、60日後に雌雄判別を行うところも合理的な米国人らしい。繁殖牝馬のセリではその結果をバイヤーに広報しているコンサイナーもいる。

- 1) 交配後約14日・・・双胎が認められれば破碎。子宮内のシストと鑑別が必要な場合は2～3日後に再診し、成長していれば胚胞、していなければシストと判断する。交配後14～20日の繁殖牝馬は同時に採血も行い、血清中のP4レベルを測定する。低ければ（牧場によって基準が異なるが、概ね4ng/ml以下であれば）プロゲステロン製剤（Regu-Mate）を投与する。投与量は10～12ml、1日1回。濃度2.2mg/mlなので、体重500kgとして0.044～0.053mg/kg。繁殖牝馬の頭数が多い牧場では、連続投与器が使用されていた。
- 2) 交配後約28日・・・固着した子宮角の確認すなわちPRH（Pregnancy Right Horn＝右の子宮角で妊娠）あるいはPLH（Pregnancy Left Horn＝左の子宮角で妊娠、いずれもその卵巣から排卵したという意味ではない。あくまでも現時点で胚がどこに着床したかというだけのこと）および子宮内の液体貯留をグレード付け（Fluid Grade）していた。異常がなければドップラーでの心拍確認、体長の計測など詳細な検査は実施しない。成長

が遅いなど異変があれば実施する。胎子が死亡していた場合、とりあえず無処置で様子見し、後日再診。処置が必要ではない症例がほとんどとのこと（自然に吸収される）。キャスルトンライオン、カルメットファーム、スリーチムニーズファームといった大牧場では 28 日目の妊娠鑑定&プロゲステロン濃度の測定もルーチンにしていた。

3) 交配後 40~60 日・・・同じく異常がなければドップラーでの心拍確認、体長の計測も実施しない。60 日前後になると雌雄の鑑別が可能。その後、基本的に分娩まで USD は実施しない。

4) まれに交配後約 90 日の妊娠鑑定を依頼されることがあったが、この時期になると胎子は一部しか見えないため、羊水の状態をチェックしていた。



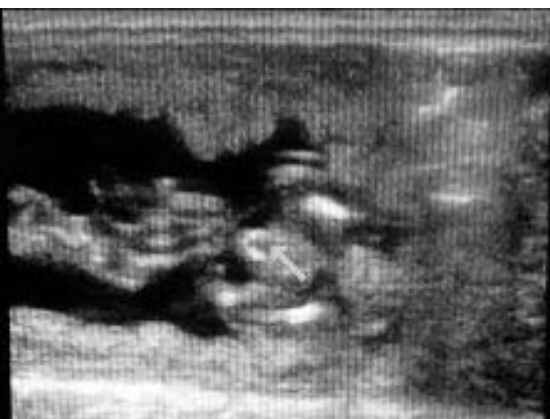
交配後 16 日目の胚胞



採血し P4 レベルを測定



交配後 33 日目の胎子



交配後 60 日目の胎子（牡）

・繁殖部門（McGee Fertility Center）

繁殖分野の 2 次診療を行う施設で、3 名の獣医師が在籍している。その中の 1 人、Dr. Lu の下で研修を受けさせてもらう機会を得た。Dr. Lu は父が中国人、母がドイツ人で、夫はニュージーランド人でしかもルードアンドリドルの獣医師という、何とも国際的な人物で

ある。フィラデルフィア出身で、ペンシルベニア大学の出身である。フロリダ大学で鍼治療を学んだこともあるという。

すでに Hagyard Field Care の獣医師が日常診療に入っている牧場の繁殖牝馬のうち、なかなか受胎しない、いわゆる“プロブレムメア (Problem Mare)” の治療がメインで、特に難治性の子宮内膜炎の治療が多かった。さらに、治療対象はサラブレッドだけでなく、繋駕競走 (ハーネス) に用いられているスタンダードブレッド種や、乗用馬にも及び、それらの種ではいわゆる本交以外による繁殖も認められているため、胚移植や凍結精液による人工授精が行われていた。



McGee Fertility Center

子宮内膜炎の治療であるが、Hagyard Laboratory (検査室) が行っている細菌培養検査に基づいて行われていた。過去の結果では、グラム陽性である β 溶血性連鎖球菌 (*Streptococcus*) とグラム陰性菌である大腸菌 (*E. coli*) が子宮内膜炎の 2 大原因菌であるとのこと。Hagyard Laboratory に子宮頸管スワブもしくは子宮洗浄液を検査に出すと、1 時間程度で速報としてグラム陽性菌およびグラム陰性菌の有無が携帯電話に転送され、さらに概ね 24 時間後には細菌培養検査の結果が同じく携帯電話に転送される仕組みになっていた。非常に便利なシステムである。ちなみに、Hagyard Laboratory は開業獣医師でも利用可能とのこと。獣医師はその結果に基づき、治療を行うのであるが、まとめると下記のとおりである。

◎子宮内膜炎の治療

- 1) 細菌が検出されないが、貯留液のみ認められる場合
→アセチルシステインを使用。製剤は 10%なので、3%に薄めて使用 (製剤 20ml に対し生理食塩水を 40ml 添加)。60ml をポンプで 2 本、120ml を子宮内に注入。
- 2) β 溶血性連鎖球菌 (*Streptococcus*) のみが検出された場合

→子宮洗浄（生理食塩水 2 リットルで 2 回）を行った後、アンピシリンを使用（ペニシリン系であれば何でも良いらしい）。1V(2g)を注射用水（滅菌水）で溶かして、60ml のポンプで 1 本子宮内に注入。

3) 大腸菌 (*E. coli*) のみが検出された場合

→子宮洗浄（生理食塩水 2 リットルで 2 回）を行った後、ポリミキシン B を使用。1V(500,000U)を注射用水（滅菌水）で溶かして、60ml のポンプで 1 本子宮内に注入。

4) β 溶血性連鎖球菌 (*Streptococcus*) および大腸菌 (*E. coli*) の両方が検出された場合

→子宮洗浄（生理食塩水 2 リットルで 2 回）を行った後、Timentin (Ticarcillin3g と Clavulanic acid100mg があらかじめ混合された合剤) を使用。1V を注射用水（滅菌水）で溶かして、60ml のポンプで 1 本子宮内に注入。

5) その他の細菌が検出された場合

→今回は遭遇しなかったが、感受性試験の結果に基づいて抗菌薬を選択。

6) 真菌が検出された場合

→真菌培養は Hagyard Laboratory では行っておらず、コーネル大学もしくはケンタッキー大学に検査に出すとのことであった。感受性試験の結果に基づいて抗真菌薬を選択するとのこと。

・内科部門 (McGee Medicine Center)

4 名の獣医師が在籍し、主に二次診療を引き受けていた。研修を受け入れてくれた Dr. Slovis は「Color Atlas of Diseases and Disorders of the Foal」の著者である。ハグヤード全体の“エース”的な存在で、外科的処置が必要な症例以外の二次診療は彼が中心となっていた。特に感染症が得意分野であるほか、疝痛の外科的処置が必要かどうかの診断も彼が中心となっていた（外科の獣医師ではないのが意外である）。疝痛は手術自体は外科で、入院は内科でというのが基本で、軽症であれば外科で入院することもあるとのこと（内科の方が入院料が高い）。

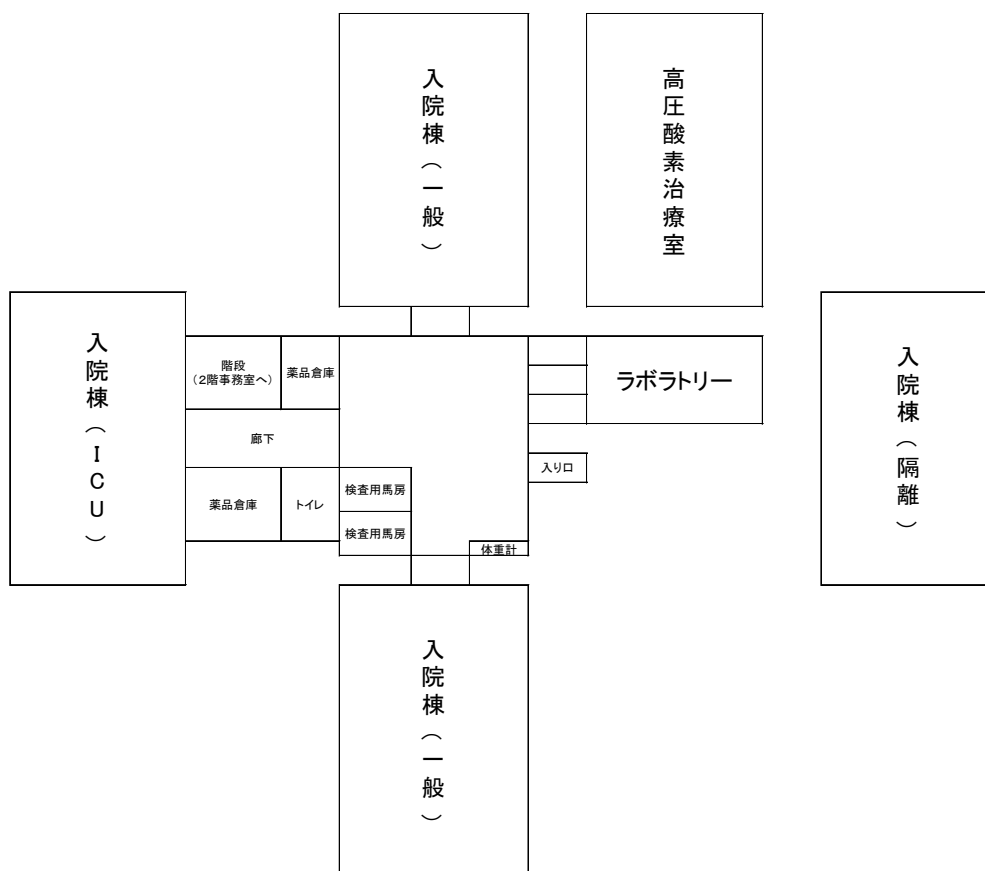
Dr. Slovis は主に二次診療を担当しているため、McGee Medicine Center の入院馬の治療および来所馬の診療を基本としている。McGee Medicine Center には入院棟が 4 つあり、内訳は一般病棟（6 馬房+12 馬房）、ICU（13 馬房）、感染症罹患馬のための隔離棟（12 馬房）である。そのほか、高圧酸素治療室も備えている。今回は残念ながら高圧酸素治療室を実際に使用している場面を見ることはできなかったが、主に骨髄炎などの子馬の感染症と、欠損創に有効であることが確認されているほか、現在様々な症例に応用し可能性を探っているところらしい。

世界的な権威がいるだけあって、この McGee Medicine Center には世界各国からインターンが集まっていた。2015 年 6 月時点で 5 名おり、出身地はブラジル、イングランド、スコットランド、ルイジアナ、パラグアイと様々で、卒業後 1～4 年の新米獣医師ばかりで学生はいなかった。ちなみに、男性 2 名、女性 3 名で女性の方が多かった。アシスタント（診療助手）もほとんど女性なので、女性だらけである印象を受けた。



McGee Medicine Center

高圧酸素治療室



McGee Medicine Center 見取り図

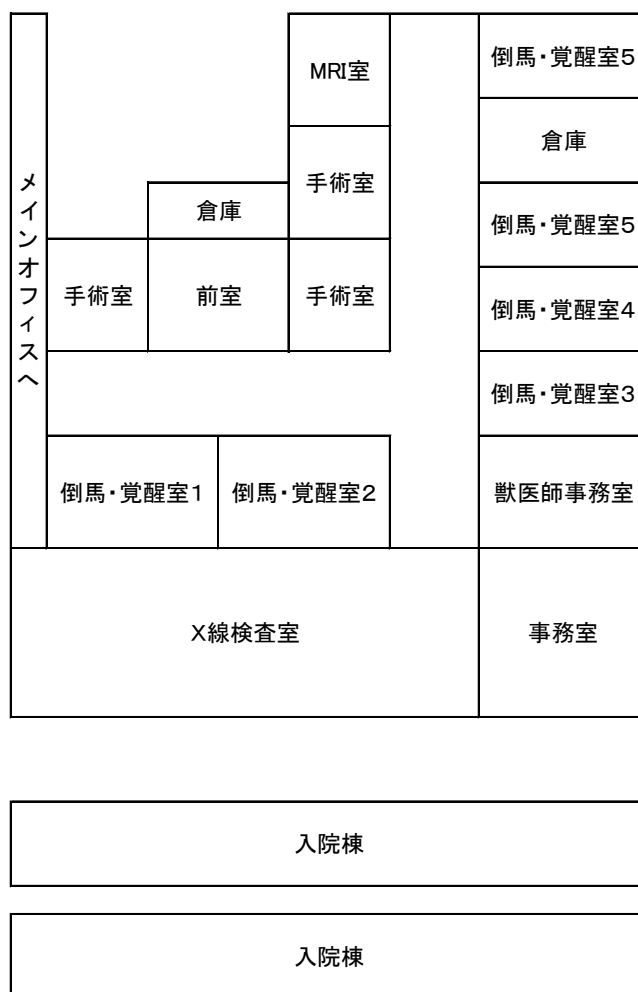
訪問した4月頃は、当歳馬の下痢および肺炎、繁殖牝馬の結腸捻転による入院が多かった。入院馬の情報は全て電子カルテで管理され、McGee Medicine Center 内のどのPCからも閲覧できるようになっていた。感染症のうち、ロドコッカス肺炎の症例は一般病棟に入院しており、隔離病棟には重症のロタウイルス、クロストリジウム、サルモネラ、腺疫の罹患馬のほか、ポトマック熱など日本では見られないような感染症の罹患馬が入院していた。最も一般的な感染症4つについての標識は、それぞれロタウイルス（青）、クロストリジウム（紫）、サルモネラ（ピンク）、腺疫（灰）に色分けされ、一目で分かるようになっていた。診療助手（獣医師ではない、主に白人女性）は3交代制で、Day（10名、7:30～15:30）、Eve（10名、15:30～23:30）、Night（10名、23:30～7:30）に分かれており、24時間体制での治療を可能にしていた。

・外科部門（Davidson Surgery Center）

6名の獣医師が所属しており、それぞれが手術日と往診日に分けて働いていた。私は若手のDr. True Baker氏の下で研修させてもらった。彼の父はDr. Bill Bakerという同じくケンタッキーの高名な馬臨床獣医師で、区別するために単にBakerではなくTrue Bakerとミドルネームも名乗っているそうである。インターン生も、内科より多い11人が在籍していた。出身地はメキシコ、オーストラリア、ポーランド、ベルギー、アイルランド（2名）、デンマーク、アルゼンチン、ハンガリー、スペインそしてペンシルバニアと様々であった。ここでもまた女性の方が多かった。また、診療助手はメキシコ人（いわゆるヒスパニック）の男性が多かった。研修中見ることはできなかったが、Davidson Surgery CenterにはMRI室、核シンチグラフィー棟がある。また、入院棟は2つあり、それぞれ26馬房と29馬房。特徴的なのがハグヤード自体元々牧場だった場所を改築してできた病院なので、放牧地があること。放牧されている馬のほか、診療助手が入院馬をグラスピッキング（引き馬しながら地面に生えている草を食べさせる）している姿がしばしば見られた。入院馬のストレス緩和および疝痛の防止に大いに役立っているものと思われる。



Davidson Surgery Center



Davidson Surgery Center 見取り図

・手術

◎手術代（麻醉代込み）

球節関節鏡：1,200～1,600 ドル

腕節関節鏡：2,400 ドル（両側）

飛節関節鏡：750～1600 ドル

膝関節鏡：600～1,900 ドル

肢軸矯正（当歳・球節螺子固定）：500～1,600 ドル

肢軸矯正（1歳・腕節螺子固定）：400～1,400 ドル

屈腱々鞘の洗浄：900 ドル

去勢：600 ドル

臍ヘルニア整復術：650 ドル

結腸捻転：2,200～4,000 ドル

EE 切開術：500 ドル

眼球摘出術：650 ドル

◎麻酔

まず麻酔に関してだが、前処置はキシラジンおよびジアゼパムで鎮静し、ケタミンで倒馬していた。1 歳以上の馬に対する投与量は下記のとおりである（もちろん全て静脈内投与）。

キシラジン（濃度 100mg/ml）を 3～5ml＝体重 500kg として 0.6～1.0mg/kg

ジアゼパム（濃度 5mg/ml）を 3～5ml＝体重 500kg として 0.03～0.05mg/kg

ケタミン（濃度 100mg/ml）を 13～15ml＝体重 500kg として 2.6～3.0mg/kg

当歳馬に対する前処置は下記のとおり。キシラジンとジアゼパムの投与量を若干落としている（同じく全て静脈内投与）。

キシラジン（濃度 100mg/ml）を 1ml＝体重 150～200kg として 0.50～0.67mg/kg

ジアゼパム（濃度 5mg/ml）を 1ml＝体重 150～200kg として 0.025～0.033mg/kg

ケタミン（濃度 100mg/ml）を 5ml＝体重 150～200kg として 2.5～3.3mg/kg

維持管理について、1 歳以上はイソフルラン（3 % 前後）、当歳はセボフルラン（3～4 %）による吸入麻酔を行っていた。短時間の麻酔の場合、ベンチレーターを使用せず補助呼吸を行っていた。麻酔器は VETLAND というメーカーのものを使用していた。

倒馬をした後に頸静脈への留置針を挿入していた。動脈留置はさらにその後に挿入していた。カテーテルによる導尿は全症例で行っていなかった。心電図は関節鏡手術では使用し、肢軸矯正など簡単な手術では付けていなかった。その他、SpO₂を日本と同様舌で測定していた。術中は乳酸リンゲルおよびドブタミンの輸液を行っていた。ちなみに麻酔はインターン 2 名が担当し、ベテランのインターンに新人のインターンが付いて習いながら行っていた。



麻酔器は VETLAND 社製



留置針は倒馬後に挿入していた



関節鏡手術の麻酔では心電図を使用していた

手術が次から次へと行われるため、倒馬および覚醒についてはしっかり見なかったが、診療助手（獣医師ではない、屈強なメキシコ人男性）が馬につき、補助を行っていた。馬は外から直接倒馬覚醒室にアクセスできるようになっている。前述のとおりケタミンで倒馬した後、ホイストで吊られてまず倒馬・覚醒室と手術室の間にある廊下に運ばれる。そこからは 3 パターンで、廊下で術野の消毒が行われそのまま廊下で手術をするパターン（当歳馬の肢軸矯正手術など）、廊下で術野の消毒が行われた後手術室に移動し手術をするパターン（関節鏡手術など）、手術室に移動し術野の消毒が行われそのまま手術をするパターン（同じく関節鏡手術など、廊下で手術が行われていてスペースがない時にこのパターンがとられる？）がある。手術室から廊下はホイストが繋がっていないので、人力で手術台を押して移動する。覚醒は逆の流れで。再鎮静にはキシラジンが使用されていた（1 歳以上の馬で 0.5ml と前処置の 1/10 量）。基本的に自由起立。



手術後、覚醒室に運ぶ様子

◎手術の準備

手術は基本的に仰臥位で行っていたが、手術室の天井にはホイストが 4 つ設置されているか、もしくは天井に穴が開けられヒモが直接通され、患肢がどの肢であろうとそれぞれ吊

るせるようになっており、非常に便利であった。



天井に4つのホイスト

天井に穴とヒモ

術野の毛刈りおよび消毒は診療助手（獣医師ではない、主に白人女性）が行っていた。バリカンで毛を刈るのみで、カミソリによる剃毛は行っていなかった。消毒はクロルヘキシジンのスクラブと 70%イソプロで行い、その間に術者と助手（インターン）が手洗いをし、オイフを敷きアイオーバンを貼って手術開始となる。そのほか、術者は手術中自分が立つ位置にあらかじめ滑り止めのゴムマットを敷いていた。



術野の消毒

◎関節鏡手術

関節鏡装置は Stryker というメーカーの機械を使っていた。基本的な手術の手順は下記のとおり。

- 1) 関節を針で刺し、灌流装置をその針に繋いで関節をふくらませる
- 2) メスでカメラ孔と機械孔を切皮する
- 3) プローブは使わず、いきなりロンジャーで骨片摘出
- 4) そのままロンジャーで骨片周囲の傷んだ軟骨をデブリードメント（鋭匙は使用せず）
- 5) 灌流し、軟骨などの細かい破片を関節外へ

6) 2-0 のモノクリルで皮膚のみ縫合（単純結節）

その後、DR で確認。包帯を巻く前にゲンタマイシン（濃度 100mg/ml）を約 20ml 関節内に注入していた。最初はヒアルロン酸かと勘違いしたが、感染予防のため行っているとのこと。抗生剤の全身投与は行っていない。包帯は基本的に Biozide Gel という日本のイソジン軟膏のようなものを塗った後、Combine（コットンバンテージ）をベトラップで巻いた後、エラスチコンでさらに巻く。



術後の包帯

◎肢軸矯正手術

電動ドリルを使用。基本的な手術の手順は下記のとおり。腕節の手術では術野を消毒する前に蹄から腕節下まで直検手袋をかぶせる。内反の矯正が目的のため、腕節の場合は橈骨の外側から、球節の場合は第3中手（足）骨の外側から、近位から遠位に向かって、斜めに成長板をまたぐように螺子を入れる。螺子は全てセルフタップ（挿入前にタップを切る必要がないタイプ）。左右両側の場合、手術室に運んでいたが、片側の場合手術室には運ばず倒馬・覚醒室でそのまま手術していた。

- 1) 目印として針を刺す（腕節の場合、外側茎状突起）
- 2) 切皮
- 3) ドリル
- 4) 螺子挿入（腕節で 58mm 程度）
- 5) DR で確認
- 6) 螺子を完全に締める（ほとんどドリルを使用。たまに用手）
- 7) 2-0 のモノクリルで皮膚のみ縫合（単純結節、各孔 1～2 糸）

手術時間は 15 分程度。包帯を巻く前に感染予防のためゲンタマイシンを皮下に注入していた。包帯は基本的に Biozide Gel を塗った後、腕節の場合、ガーゼとエラスチコンのみ（コットンバンテージなし）で、螺子を入れた箇所を中心に近位半分のみ包帯。球節の場合、Combine（コットンバンテージ）を使用することもある。

◎螺子抜去術

肢軸が十分矯正された後にスクリューを抜く手術。電動ドリルを使用。基本的な手術の手順は下記のとおり。手術室には運ばず倒馬・覚醒室で倒馬し、そのまま手術していた。簡単なので、インターンが手術することもあった。

- 1) 切皮
- 2) ドリルで螺子除去
- 3) 2-0 のモノクリルで皮膚のみ縫合（単純結節、各孔 1～2 糸）

◎立位による螺子固定術

2 歳。朝の調教で右第 3 中手骨外側顆を骨折。鎮静はキシラジン（濃度 100mg/ml）を 1.5ml（体重 500kg として 0.3mg/kg）、ブトルファノール（濃度 10mg/ml）を 1.5ml（体重 500kg として 0.03mg/kg）、デトミジン（濃度 10mg/ml）を 1.5ml（体重 500kg として 0.03mg/kg）静脈内投与。メピバカイン（カルボカイン）を管近位に 1 周、皮下投与することで局麻。バリカンで毛刈りし、スクラブ。切皮し、ドリリング後 DR で確認。その後、螺子を挿入し DR で再度確認。この作業を繰り返し、計 3 本螺子を挿入。螺子はセルフタップ。螺子を締めるのも用手ではなく電動ドリルで。ドリル使用時、冷却用に水を掛けていなかった。縫合は皮膚のみ。Combine（コットンバンテージ）、ベトラップ、エラスチコンで包帯（キャストはしない）。



術前のレントゲン



立位での手術



術後のレントゲン

術後の包帯

◎去勢（手術室にて）

去勢については馬房で立位で行う獣医師、放牧地で倒馬して行う獣医師、手術室で倒馬して行う獣医師の3パターンがいたが、Dr. Spirito は手術室で倒馬して去勢を行っていた。どの獣医師もヘンダーソン式去勢具は使用せず、従来式の去勢鉗子（一撃で挫折されるタイプ）を使用していた。手術台の上で仰臥位。心電図は使用せず。ベンチレーターは使用されず、補助呼吸。乳酸リンゲルのみ輸液。イソジンスクラブで術野を消毒した後、オイフを1枚だけかけ真ん中に鋏で穴を開け、タオル鉗子で固定。短く切皮し、睪丸にタオル鉗子をかけて引っ張り出していた。1歳で睪丸が小さかったため、そのまま閉鎖法（総鞘膜を切開しない）で挫折は左右1回ずつ。挫折の前に精索に鉗子を2本かけ、遠位の鉗子を外してその跡を結紮していた。そして、さらに遠位を去勢鉗子で挫折。去勢鉗子はすぐに外さずそのまま放置し、2個目の睪丸に取りかかっていた。2個目の睪丸を同様の方法で挫折した後、やはり去勢鉗子はすぐに外さずに軟部組織をデブリードメントした後外していた。洗浄はせず、そのまま終了（自由起立）。

・往診

往診は Field Care 所属の獣医師と異なり“檀家”が決まっている訳ではなく、基本的に自分が手術をしたウマの抜糸などのアフターケアに出向く。

◎去勢（放牧地にて）

Dr. True Baker は放牧地で倒馬して去勢を行っている。3歳の競走馬の去勢をするところを見ることができた。まずキシラジン（濃度 100mg/ml を 5ml）＝1mg/kg、ジアゼパム（濃度 5mg/kg を 4ml）＝0.04mg/kg で鎮静し、ケタミン（濃度 100mg/ml を 14ml）＝2.8mg/kg で倒馬をした。2%メピバカイン（カルボカイン）で局所麻酔し、助手がスクラブした後、露臍法で去勢した。この馬は精巣が大きかったため、去勢鉗子で挫切する前にその近位で血管および精管をそれぞれ吸収糸で結紮していた。去勢鉗子で挫切する際、Dr. True Baker と

私が同時に「ナットトゥナット！」と発声したので、お互いに笑ってしまった。ナットトゥナットは去勢時の米日共通の合言葉であるらしい。途中、馬が動いたので、ケタミンを追加投与していた。GGE を使用していないが、精巣は去勢するのに十分創外に引き出すことができた。挫切は3分程度そのままにしておき、終了後は補助せず自由起立とした（放牧地に放置）。GGE を打っていないため、覚醒はすこぶる早く、放置した10分後にはスムーズに起立した。そのまま別の馬の往診へ行き、一応帰りに様子を見に行ったがなんら問題なかった。



放牧地での去勢。



覚醒はすこぶるスムーズであった

◎螺子拔去

左前肢および左後肢の球節の肢軸矯正手術を2か月前に行った当歳馬に対して、立位鎮静下にて螺子の抜去を行った。キシラジンとブトルファノールで鎮静した後、助手が患部をスクラブし、その後皮下に2%メピバカイン（カルボカイン）を投与し、さらにもう一度スクラブしていた。局所麻酔が十分に効いたか針を刺して確認した後、メスで切皮し、螺子を抜去していた。馬は非常におとなしくしており、全く問題なく螺子を抜去することができた。その後、包帯を巻いていた。ちなみに、米国ではブトルファノールは麻薬（controlled drug）

であるとのこと。



立位鎮静下で螺子抜去

◎気管切開術

異常呼吸音を呈するという繁殖牝馬。内視鏡にて気管虚脱を確認。何とその場（馬房内）で気管切開術を行った。鎮静し、バリカンで毛刈りした後、スクラブ。メピバカイン（カルボカイン）で局麻。ゴム手袋を装着し、メスで気管まで切開（柄は使わず、刃を直接保持）。指で鈍性剥離し、専用の器具を装着して終了。牧場マネージャーに、器具は汚れたら外して洗うよう指示。ほか、どうしても気管の粘液が出るので普段から器具の周囲にワセリンを塗布するように指示。この器具は重篤な蕁麻疹もしくは腺疫で呼吸困難に陥った際にも使用される。その他、血液検査とコルチコステロイド、オキシテトラサイクリンの投与（濃度 200mg/ml の製剤を 25ml、乳酸リンゲル 25ml で 2 倍に薄めて、留置針を使用して投与）。



内視鏡にて気管虚脱を確認

メスで気管まで切開



指で鈍性剥離し、専用の器具を装着して終了

◎レポジトリー

ジュライセールに上場される 1 歳馬のレポジトリー検査を見せてもらった。鎮静剤を打つ前に内視鏡検査を受けたが、ビデオスコープではなくファイバースコープ（操作者一人しか見ることができないもの）であり、セリ当日は内視鏡画像は公開されない。

内視鏡検査の後、キシラジンで鎮静し、X線検査（DR）を実施した。撮影部位は四肢球節 4 方向＋両腕節 3 方向＋両飛節 33 方向＋膝関節 3 方向、さらに両前肢の球節および腕節は屈曲のラテラル（真横）が加わり、1 頭あたり合計 38 枚のレントゲンを撮っていた。この枚数は基本的にどのセリも一緒であるが、トレーニングセールはこれに腕節のスカイビュー（第 3 手根骨の列のみ）が加わる。DR にあらかじめ撮影する順番をプログラミングしておき、助手と 2 人で非常に手際よく撮影していた。飛節の斜位像は外側斜め後ろからではなく、内側の斜め前から撮影していた。全ての撮影が終わった後画像を確認し、必要に応じて再撮影を行っていた。この馬は右橈側手根骨遠位に突出が認められたが、特に問題ないと説明していた。この部位の評価には屈曲位が非常に有用であった。なお、撮影費用は全額馬主持ちとのことであった（補助金等はない）。



セリに上場する 1 歳馬のレポジトリー検査

まとめ

・繁忙期の対応

繁殖に伴う繁忙期は2月1日から6月1日までという認識で、Hagyard Laboratory はその期間は24時間体制で検体を受け入れている。

各獣医師の繁忙期の対応だが、まずは繁殖シーズン（1～6月）のみ獣医師ではない診療助手を雇う（Dr. Fallon 以外の Field Care の獣医師）、もしくは特定の（毎日同じ）インターンを帯同させて助手にする（Dr. Fallon）ことで、基本的に2人で往診に回っていた（若手の Dr. Wells 以外）。

従業員の勤務時間が6:00～15:00 という牧場が多いので、基本的に往診時間もそれに合わせていたが、回り切れない場合、早朝にマネージャー＋従業員1名（昼夜放牧されている繁殖牝馬を集牧する）が早出して対応する（Dr. Monge）、1つの牧場に2回行き、朝は直腸検査のみ行い、キャスリック縫合や子宮洗浄など時間のかかる処置は午後に回す（同じく Dr. Monge）、1つの牧場に2人の獣医師が行き、ベテランが直腸検査を行い、若手がキャスリック縫合や子宮洗浄など時間のかかる処置を行う（Dr. Stivers、Dr. Fallon）などの方法を駆使して、乗り切っていた。

それでも、この時期は日曜日でも休みなく働かなくてはならず（日曜日は交配適期の判断など必要最低限の診療のみ）、みんな目の下にクマを作って働いていた。

・所感

ハグヤードの獣医師たちは個々のレベルが高いのはもちろん、その上で症例に応じて得意な獣医師が優先的に診療をする仕組みとなっていた。獣医療とは1人突出して優秀な獣医師がいてもダメで、優秀な獣医師が何人もいてさらにその上でチームで診療に当たらなければ馬本位の最高レベルの獣医療は提供することはできないと感じた。牧場側もそれを心得ていて、1つの牧場に複数の獣医師が出入りしており、「この症例はどの先生」という風に使い分けている様子がわかった。

各獣医師が自分の得意分野を伸ばすために、米国ではまず専門医（Diplomate）制度がある。専門医になるためには、インターンとして最低1年研修した後、レジデント（resident）としてさらに3年間研修し、論文の執筆・掲載と専門医試験に合格しなくてはならない。研修先は大学のほか、ハグヤードなどの大病院でも良い。専門医には外科（DACVS）、内科（DACVIM）、繁殖学（DACT）など各種ある。米国では大学の教官になるのに博士号（Ph.D）は必ずしも必要なく、特に臨床講座の教官には博士号を持っていない獣医師が多い（その代り専門医の資格は持っている）。そもそもインターンになる時点で競争があり、専門医になるのはかなりの狭き門のようである。

専門医までは行かなくても、短期間の講習会を受けることで自分の得意分野を持つ獣医師も多い。例えば歯科や鍼、カイロプラクティックなどの講習会がある。これらの講習会を受講することで、例えば繁殖シーズンには主に繁殖検診をしてシーズンオフには主にブレ

ーキング前の1歳馬の歯科処置をする獣医師、プロブレムメア（受胎しにくい繁殖牝馬）の治療に鍼を応用する獣医師、診断麻酔で跛行の原因となっている部位を特定しカイロプラクティックで治療する獣医師など、様々な組み合わせが生まれ、そのことが獣医療の多様化に繋がり、様々な症例に対応できる米国の獣医療の強みになっていると感じた。

なお、専門医の取得は最低4年を要するためなかなか難しいが、短期間の講習会は日本人でもビザなし（ESTA）で受講することができるため、本会獣医師も挑戦してはどうかと感じた。今後、受講可能な講習会を挙げ、具体的に提案していきたいと思う。

9. フロリダ

ケンタッキーの生産育成との違いを学ぶため、2017 年 1～2 月にフロリダのオカラストッドで研修を行った。

オカラストッド (Ocala Stud)

育成牧場として 1957 年に創業。現在のオーナーは 2 代目の J. Michael O'Farrell, Jr.。実質、3 代目の David O'Farrell が仕切っている。創業者である初代が 2 歳トレーニングセールを世界で初めてフロリダで開催。主な生産馬に Musical Romance、Bellamy Road、Turbulent Descent、Rigoletta、Calculator。日本関連ではアジアエクスプレス、エルフィンコーブを生産。

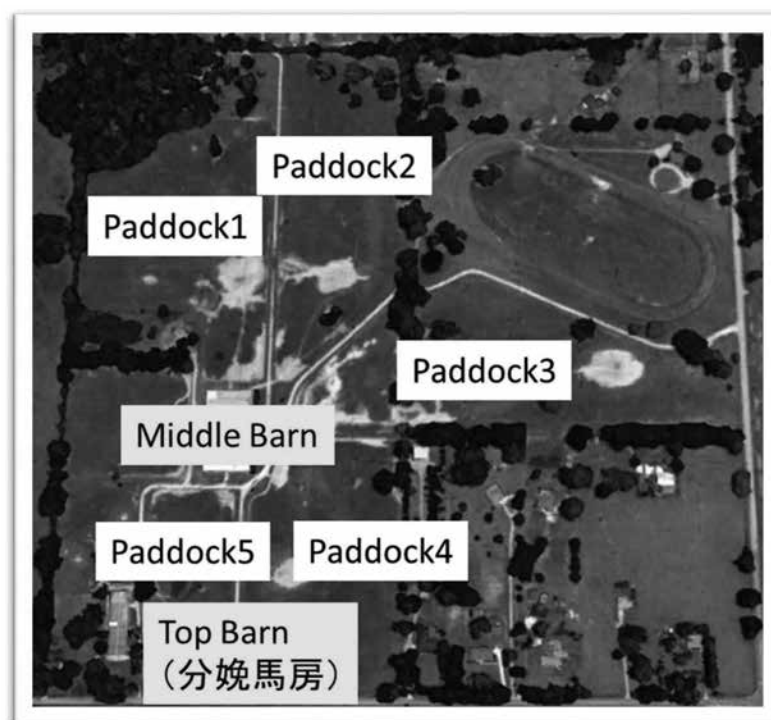
現在は種牡馬、繁殖、イヤリング、トレーニングの 4 部門がある総合牧場。本場に事務所、種牡馬、トレーニングと子なし繁殖。2 マイル離れた分場 1 (Shady Lane) に子付き繁殖。10 マイル離れたノースウェスト・ゲインズビル・ロード沿いの分場 2 にイヤリング。メンテナンス部門はなく、牧柵修理、草刈りも各部門のスタッフが行う。種牡馬 13 頭。繁殖牝馬約 75 頭（約 50 頭が預託馬、約 25 頭が自己所有）。当歳馬約 75 頭。1 歳馬約 130 頭（ホームブレッッド約 75 頭、預託馬約 55 頭）。



本場の入口



本場（種牡馬部門、トレーニング部門、子なし繁殖）



分場 1（Shady Lane、繁殖部門）

・繁殖部門

繁殖マネージャー(Broodmare Manager)は Amanda というアメリカ人女性。夫の Gerardo というメキシコ人男性がアシスタントマネージャーを務めていた。牧場内の社宅に住んでいる。夫妻には小学生の息子がおり、平日は朝 6 時の始業時には Gerardo しか来ず、Amanda は息子を送った後 7 時過ぎに出勤していた。また、週 1 回の休日を Amanda は日曜日、Gerardo は土曜日とずらして取得していた。ちなみに、夫妻はかつてニューヨーク州の牧場で働いていたとのこと。良い研修先はないか聞いてみたが、個人馬主が所有している牧場が多いらしく（ニューヨークに住んでいる馬主が近いので頻繁に見に行ける）、大きな牧場はないとのこと。また、馬病院も遠く、例えば子馬の IgG 測定も初乳投与が間に合う分娩 24 時間以内までに結果が出ないなど不便だとのこと。ニューヨーク州は環境が北海道に似ているため、今後研修生を送り込んでどうかと考えたが、難しそうだ。

スタッフは 10 名。勤務時は 6:00～11:00、13:00～15:00、5:00～6:00 および 15:00～19:00 は牧場内に社宅が与えられている Gerardo とスタッフの Miguel が交代で分娩監視。19:00～5:00 は分娩マネージャー (Foaling Manager) の Chris が助手のプエルトリコ人 Rei とともに分娩を担当。ユニークな W マネージャー体制で、昼は繁殖マネージャーの Amanda が担当し、夜は分娩マネージャーの Chris が担当。Amanda は分娩には立ち会わない。Chris は毎年分娩シーズンである 1～5 月のみオカラスタッドで働いている。その間、休みは 1 日も取らないとのこと。6～12 月は不動産関係の仕事をしている。勤続 20 年以上の大ベテランで、難産も Chris が整復する。

・概要

私が研修していた 1 月下旬から 2 月下旬にかけての気候は、最高気温が 25℃前後、最低気温が 10℃前後であった。暖かいからか、分娩前の繁殖牝馬たちが活発で四肢の浮腫が認められず、放牧地での移動距離を GPS で測定したところ、日高およびケンタッキーより多く動いていることがわかった（後述）。6 月～11 月にはハリケーンが襲来するらしい。

前年不受胎だった繁殖牝馬 (barren mare) もしくは上がりの繁殖牝馬 (maiden) は Hill と呼ばれている本場の一番奥のエリアで管理している。10～11 月に空胎馬は子宮の超音波検査およびスワブ検査を行い、貯留液および細菌が検出されたら治療（子宮洗浄および抗生剤の子宮内注入）し、繁殖シーズンに備える。HBA の不受胎馬検査のようである。

獣医師は Peterson & Smith Equine Hospital から Dr. William B. Russell および Dr. Rhiana McFarlain が来ている。繁殖だけでなく、育成も診る。Dr. Russell は他にフロリダ最大手の育成業者の 1 つである Eddie Woods Stables も診ている売れっ子のベテラン獣医師で、David からの信頼は非常に厚い。ライトコントロールは行っていない。フロリダは日照時間が長いので、必要ないとのこと。

妊娠馬は Shady Lane と呼ばれている分場（元 Shady Lane Farm を買収）で管理している。Shady Lane には厩舎が 3 棟あり、分娩 30 日前に分娩馬房のある厩舎 (Top Barn) に

移動し、近くの監視が行き届く放牧地での昼放牧に切り替えられる。夏期、繁殖牝馬にはフライマスクの代わりに目の周りにハエ除けのピンクの薬が塗られる。当歳馬は 5 ヶ月齢で離乳し、11 月までに半数が、12 月までに全頭がイヤリング部門に移動する。

良くも悪くもマネージャーが薬好きで、例を挙げれば分娩後の繁殖牝馬全頭に 1 日 3 回オキシトシンを投与し、子宮内貯留液の排出を促していた。また新生子馬全頭にペニシリンを 3 日間筋肉内投与。メトロニダゾールを 5 日間、ラニチジン一緒に経口投与して、感染症を予防していた。血漿製剤は IgG の低い子馬にのみ投与。ダミーフォールには呼吸促進剤ナロキソン (Naloxone) を使用。呼吸していない子馬には別の呼吸促進剤であるドキサプラム (Doxapram) を投与する。ストック初乳は保存していない。初乳の Brix 値も測定せず。後産もチェックせずそのまま捨てる。種付シーズンに入ったら毎日試情。当て馬はテストステロンを打ったポニーのセン馬 (“ホルモン乳母”ならぬ“ホルモン当て馬”)。

・厩舎

<分場 (Shady Lane) >

妊娠馬が繋養されている。分娩用の広い馬房を備えた厩舎 (Top Barn = Foaling Barn) 1 棟および通常の厩舎 (Middle Barn) 2 棟。いずれも、屋根が高く常に空気が入るように隙間がある南国的な作り (open air) だった。



分場 (Shady Lane) の入口

Top Barn (分娩厩舎)

一般の馬房は 36 個あり、大きさは縦 410cm × 横 385cm。分娩馬房は 4 個あり、大きさは縦 540cm × 横 540cm。Chris によると分娩馬房は正方形が良いとのこと。壁にクッションが付いているとなお良いとのこと。特にコーナーにクッションがあると良い。敷料は麦稈。分娩予定日まで 1 カ月以内の妊娠馬および子馬が生まれたばかりの母子が入る。分娩時のみ分娩馬房を使用し、前後は通常の馬房使用。なお、暖かいため分娩前後にかかわらず水バケツは馬房にもパドックにも 2 つ付けていた。また、従業員が熱中症にならないようにウォ

ウォーターサーバーを置き、いつでも冷たい水が飲めるようにしていた。



Top Barn（分娩厩舎）

分娩馬房は4つ



敷料は麦稈

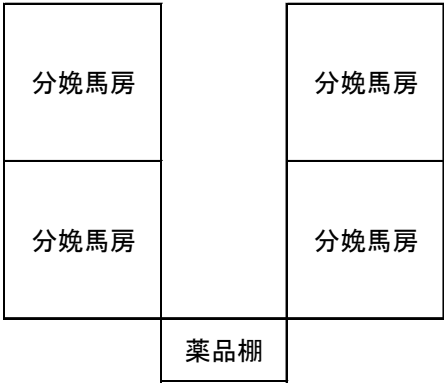
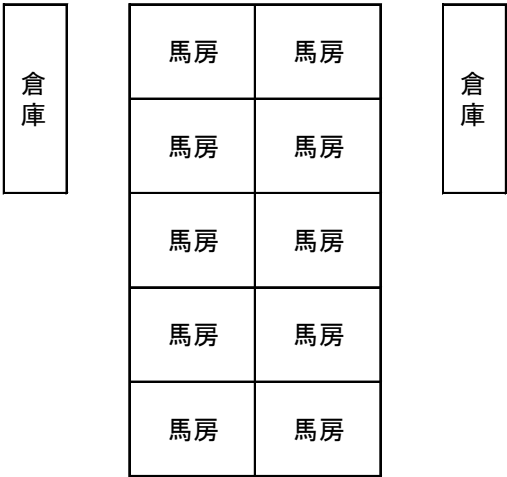
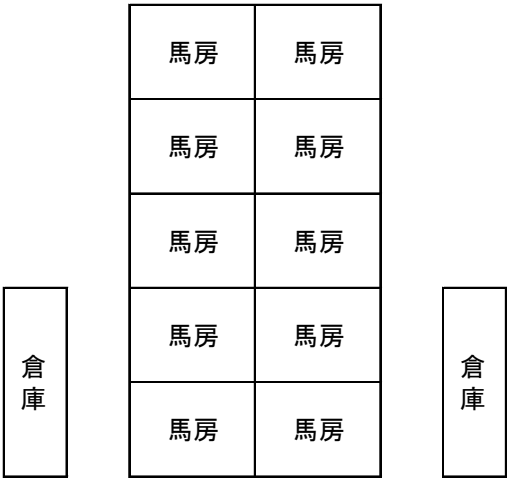
分娩後は通常の馬房へ



水桶は2つ



ウォーターサーバー



Top Barn（分娩厩舎）

Middle Barn (妊娠馬厩舎)

分場の真ん中にあるためこう呼ばれている。分娩予定日まで 1 カ月以上ある妊娠馬および分娩後 1 週間以降の母子が入る。馬房の大きさは縦 360cm×横 355cm。横壁が低く (185cm)、首を伸ばせばギリギリで隣の馬が見える。



Middle Barn (妊娠馬厩舎)

妊娠馬の馬房

<本場>

空胎馬が繋養されている。厩舎 (Hill Barn) 1 棟。

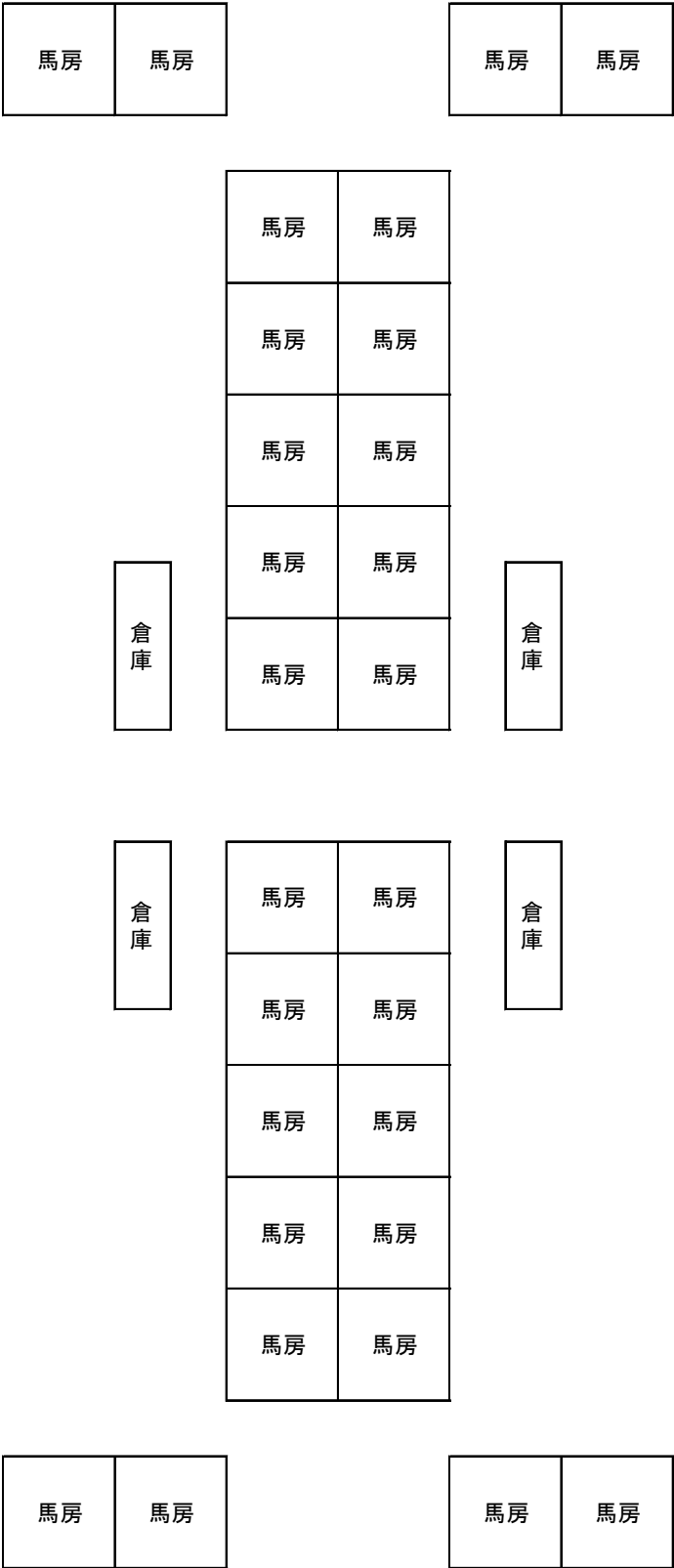
Hill Barn

本場の中でも小高い丘の上に位置しているためこう呼ばれている。2つの厩舎が繋がった形をしており、大きな馬房は縦 330cm×横 390cm、小さな馬房は縦 320cm×横 340cm。背中合わせ。計 40 馬房。



Hill Barn

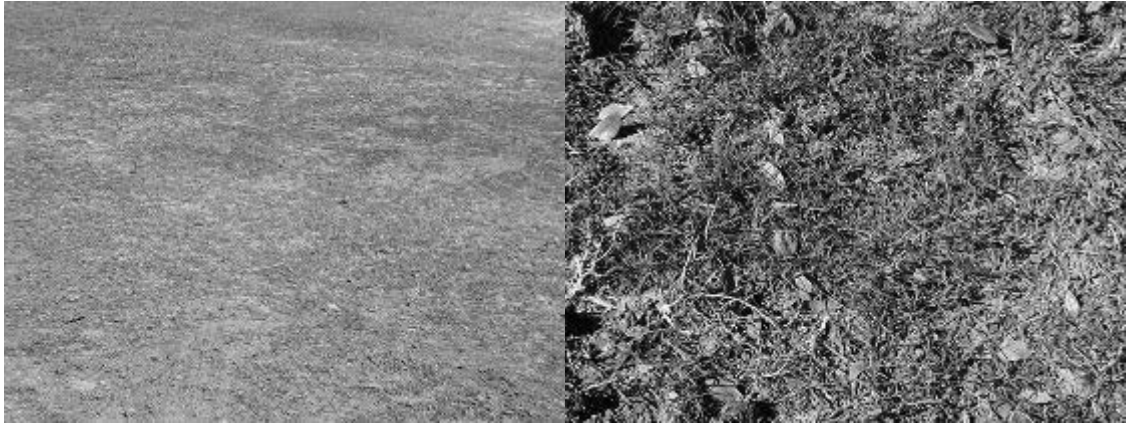
馬房



Middle Barn（妊娠馬厩舎）

・放牧地

牧柵の高さ（地表に出ている部分）は約 135cm で、ケンタッキーの牧場と変わらない。しかし、ケンタッキーの牧場が 4 枚板だったのに対し、フロリダは 3 枚板。大放牧地 5 つ（Paddock1～5）、パドック 6 つ（Paddock6～11）、ラウンドペン 1 つ。馬の頭数の割に放牧地は足りていない印象。もともと砂地で、放牧地に生えている牧草はバヒアグラス。



放牧地はもともと砂地

バヒアグラス

・繁殖牝馬の放牧管理

妊娠馬は分場（Shady Lane）で繋養。分娩予定日の 1 ヶ月前になったら Middle Barn から Top Barn（=Foaling Barn、分娩厩舎）に移し Paddock5 で昼放牧（6:30～14:30 の 8 時間）。分娩予定日が 1 ヶ月以上先の馬は Middle Barn（Paddock1～4）で昼夜放牧（10:00～6:00 の 20 時間）。空胎馬は本場で 24 時間放牧。

リード（引き手）はスナップ（金具）が付いていないただのロープを折り返して使用。成馬用は長さ 2m23cm。南国故か馬のテンションが高く、放牧時に誤ってリードを付けたまま放してしまわないように、このような方法を採用している。別に報告するが、分娩前の妊娠馬に GPS 装置を取り付け移動距離を測ったところ、ケンタッキーよりも多く、馬が活発であることがわかった。



金具のないロープ



折り返して使用

・子馬の放牧管理

生まれた日は馬房（放牧しない）。翌日からラウンドペン（円馬場、草は生えていない）に放牧。1週齢でパドック放牧。1ヶ月齢で大放牧地に放す。ただし、一緒に放牧する母子がいらない場合パドック放牧を継続し、放牧のパートナーが1ヶ月齢まで成長するのを待つ。初めて複数組を一緒に放牧する際はキシラジン（濃度 100mg/ml を 0.5ml 静脈内投与、体重 500kg だとして 0.1mg/kg）で母馬を鎮静。2ヶ月齢で昼夜放牧開始。子馬は1ヶ月齢からリードを使用。リードはスナップが付いていないただのロープを折り返して使用。子馬用は長さ 1m50cm。



ラウンドペンに放牧

パドック放牧

・タイムスケジュール

<月曜日から土曜日>

6:00 集合

まだ夜が明けていないうちに、Middle Barn にいる昼夜放牧している妊娠馬（分娩予定日が1ヶ月以上先）を集牧、朝飼付。



昼夜放牧馬の集牧

朝飼付

Top Barn にいる昼放牧している妊娠馬（分娩予定日が1ヶ月以内）を放牧に出す。母子

を検温。子馬は 103° F (39.4°C) 以上だと発熱とみなす。投薬、放牧に出す。昼放牧馬の馬房のボロ出し。トラクターで牽引する荷台に汚れた麦稈を積んでボロ山まで運ぶ。ボロ出し完了後は米国の他の牧場と同様筭ではなく、ブロワーで残った麦稈を吹き飛ばす。



子馬は朝夕検温

母子の放牧



Top Barn のボロ出し

ブロワーを使用

Top Barn のボロ出し後、Middle Barn の投薬をする班と、Hill に朝飼付に行く班に分かれる。昼夜放牧馬の投薬（レギュメイトなど）。作業（装蹄師の来場、あて馬など）。

10:00 昼夜放牧馬の放牧、昼夜放牧馬の馬房のボロ拾い。

11:00～13:00 昼休み。繁殖スタッフの Sue が残って分娩予定日が 1 ヶ月以内の妊娠馬がいる放牧地（Paddock5）の分娩監視。ちなみに、Sue は足が悪く、そういう人物を適材適所で配置している。



Paddock5 の分娩監視

分娩兆候を示すこともある

13:00 再集合

Hill Barn（本場）

放牧地で昼飼付し、食べ終わったら飼桶を回収し、その場にルーサン乾草を 2 スライス置く。飼桶を使うのは食べ残しを野生動物が食べに来るから（キツネやコヨーテがいる）。



放牧地で飼付

飼桶を回収し、ルーサンを置く

Top Barn（分娩厩舎）

母子の集牧。昼飼付、乾草および水を足す。子馬の検温および投薬。昼放牧馬を集牧。1 月 31 日から暑くなったので、Top Barn では集牧後、馬房の扇風機を回していた。

15:00 解散

15:00～19:00 は牧場内の社宅が与えられているスタッフ（Gerardo と Miguel）が交代で分娩監視し、19:00～ナイトウォッチに引き継ぐ。

<日曜日>

6:00 集合

Middle Barn にいる昼夜放牧している妊娠馬は日曜日は集牧せず、朝昼ともに放牧地で飼付する。Top Barn にいる昼放牧している妊娠馬は平日と変わらず管理(放牧してボロ出し)。

8:30～13:00 昼休み

13:00 再集合

Hill Barn (本場) の夕飼付。Top Barn (分娩厩舎) の母子の集牧。昼飼付、乾草および水を足す。子馬の検温および投薬。昼放牧馬を集牧。

14:00 解散

14:00～19:00 は Gerardo と Miguel が分娩監視。

ちなみに、日曜日は主治医の Dr. Russell も休みとなり、Peterson & Smith Equine Hospital から若手の獣医師が当番としてやってくる。

<夜警>

19:00 Top Barn 集合

薬を作る。繁殖牝馬：オキシトシン 1 日 3 回筋肉内投与。子馬：ペニシリン 1 日 1 回筋肉内投与、メトロニダゾール+ラニチジン 1 日 2 回経口投与。投与するのは 2:00。

20 分毎に馬房の見回り。母馬の乳房をチェックする。張っていれば子馬が哺乳できていないということ。子馬に何か異常があると考ええる。



薬の用意



母馬の乳房をチェック

21:00 乾草 (2 枚) および水を足す。

時々泥棒が侵入するらしく、倉庫を中心に懐中電灯を当てて見回っていた。ナイトウォッチは分娩監視対応だけでなく警備も兼ねる。その後、廊下のみ点灯し、馬房内の電気は消しておく。



乾草および水を足す



懐中電灯を当てて見回り

2:00 投薬

子馬の筋肉内投与（ペニシリン）は尻に（半腱半膜様筋に）。メトロニダゾール＋ラニチジンは経口投与。



筋注は半腱半膜様筋に



経口投与

4:00 朝飼付

スウィートフィードのみ。油や塩はなし。分娩したばかりの繁殖牝馬にはマッシュを与えていた。

5:00 解散

5:00～6:00 は Gerardo と Miguel が交代で分娩監視。6:00 から日勤のスタッフが集まる。

・敷料

麦稈を使用。オクラホマ州産とのこと。

・粗飼料

繁殖牝馬の BCS は 5 前後（ケンタッキーより細い印象）。BCS のばらつきは少ない印象。これは放牧地の草の栄養価が低いため、濃厚飼料で調整しやすいからだと思われる。

乾草はルーサン（アルファルファ）2 スライスが 1 回量。分娩 1 ヶ月以上前（昼夜放牧時）は放牧地で昼飼を与えた後、飼桶を回収し、その場に 2 スライス置く（1 日 2 スライス）。分娩予定日まで 1 ヶ月以内（昼放牧に切り替えた後）は馬房内で朝昼夜 2 スライスずつ与える（1 日 6 スライス）。分娩後の母馬は飽食。なお、産地から離れているため、フロリダの乾草はケンタッキーで買うより高い。ケンタッキーではコンパクト 1 個が 5 ドル程度なのに対し、フロリダでは 16～20 ドルもするとのこと。この辺りもケンタッキーより不利な点である。



ルーサン乾草



放牧地でも与える

・濃厚飼料

OBS 製のスウィートフィード「Special 12」を基本にしていた。組成は下記。比較のため、カッコ内にダービーダンの基本飼料「Option 14 Pelleted」の成分を示す。繊維、カルシウム、ビタミン E は少なめ、その他は変わらずである。

粗タンパク質（最小）	12.0% (14.0%)
粗脂肪（最小）	3.5% (3.0%)
粗繊維（最大）	8.0% (13.0%)
カルシウム（最大）	0.9% (1.7%)
カルシウム（最小）	0.5% (1.2%)
リン（最小）	0.4% (0.7%)
銅（最小）	40ppm (30ppm)
セレン（最小）	0.5ppm (0.4ppm)
亜鉛（最小）	120ppm (100ppm)
ビタミン A（最小）	5000IU/lb (4000IU/lb)
ビタミン D（最小）	500IU/lb (-)

ビタミン E (最小)・・・・・・・・・・・・・・・・・・40IU/lb (100IU/lb)



基本となるスウィートフィード OBS 製「Special 12」

分娩前は1スクープを1日2回飼付が基本量。朝飼(6:00)を馬房で、昼飼(13:30)を放牧地で与える。月水金日曜日は塩を、火木土曜日は電解質を混ぜる。痩せている馬は朝飼を1と1/4スクープに増やし、オメガプラザールを投与。

分娩後3日間はマッシュを与える。スウィートフィード、ふすま、コーン油、糖蜜をお湯でふやかしたもの。その後は「Special 12」を1日2回、朝飼(6:00)、昼飼(14:00)どちらも馬房で与える。量は1スクープが基本だが、BCSに応じて増量する。

高齢の繁殖牝馬には Purina 社製の「Healthy Edge」というペレットが使われていた。組成は下記。比較のため、カッコ内にダービーダンファームで使用されていた McCauley Bros. 社製の高齢馬用飼料「ALAM」の成分を示す。通常の繁殖牝馬用の飼料と比較して、タンパク、カルシウムは少なめ、脂肪、繊維、亜鉛、ビタミン E は多め、その他は変わらずである。「Healthy Edge」と「ALAM」を比較すると、銅と亜鉛の量が異なる(Healthy Edgeの方が多い)。

粗タンパク質 (最小)・・・・・・・・・・・・・・・・	12.5% (11.0%)
リジン (最小)・・・・・・・・・・・・・・・・	0.9% (-)
粗脂肪 (最小)・・・・・・・・・・・・・・・・	8.0% (6.0%)
粗繊維 (最大)・・・・・・・・・・・・・・・・	18.0% (20.0%)
酸性デタージェント繊維 (最大)・・・・・・・・	22.0% (-)
中性デタージェント繊維 (最大)・・・・・・・・	36.0% (-)
カルシウム (最小)・・・・・・・・・・・・・・・・	1.1% (0.7%)
カルシウム (最大)・・・・・・・・・・・・・・・・	1.6% (1.2%)
リン (最小)・・・・・・・・・・・・・・・・	0.6% (0.5%)
銅 (最小)・・・・・・・・・・・・・・・・	80ppm (30ppm)
セレン (最小)・・・・・・・・・・・・・・・・	0.6ppm (0.4ppm)
亜鉛 (最小)・・・・・・・・・・・・・・・・	280ppm (120ppm)

ビタミン A (最小).....3000IU/lb (4000IU/lb)

ビタミン E (最小).....125IU/lb (160IU/lb)



高齢馬には Purina 社製の「Healthy Edge」というペレットを給餌

・子馬の飼料

ダービーダン同様、子馬の盗食防止措置はなく、子馬も母馬の飼いを食べる。



子馬の盗食防止措置はない

・空胎馬の飼養管理

空胎馬は 24 時間放牧で、獣医師もしくは装蹄師が来場した時のみ集牧する。朝 (8:00) 昼 (13:00) 放牧地で飼付。スウィートフィード「Special 12」1 スクープを 1 日 2 回。ルーサン乾草 2 スライスを 1 日 2 回。

・あて馬の飼養管理

あて馬は 24 時間放牧。寒い日は馬服を着せる。濃厚飼料は与えられず、乾草のみ。

・分娩

オカラストッドには繁殖マネージャーの他に分娩マネージャーという役職の Chris とい

う人物がおり、夜間に行われる分娩のほか病馬の治療など繁殖牝馬および子馬の管理全般を任されていた。Chris は現在 53 歳のベテランで、祖父の代から 3 代続けてオカラスタッドで働いているという（父はスタリオンマネージャーだった）。幼少期より父から馬の飼養管理について学び、高校卒業後すぐにアシスタントマネージャーとして働き始めたとのこと。学校では学んでいないが、実戦経験は非常に豊富という人物で、彼からは興味深い経験談をたくさん聞くことができた。

最終週は夜警として分娩対応を研修させてもらい、日中働いていた期間も破水したら電話をもらって駆け付けた。オカラスタッドでは計 5 頭の分娩を見ることができたが、ケンタッキーと比較して乳ヤニがつく前に前兆なく分娩する馬が多い印象。南国だからか？なお、ケンタッキーでも暖かくなったシーズン終盤は乳ヤニなしで分娩する馬が多かった。

分娩予定日が過ぎても兆候がない馬にはドンペリドン[®]を 2g 投与していた。分娩前に漏乳する牝馬については、先に初乳を搾って冷凍保存しておき、子馬が生まれたらそれを解凍して哺乳瓶で与えるとのこと。なお、搾乳する際は乳房をお湯で温めてから行くと乳汁の出が良くなるとのこと。Chris は牛の初乳を与えた経験もあるそうで、1 ダース（12 本）で 30 ドルと非常に安いのがメリット。米国では冷凍された馬の初乳が売られているが 1 本 350 ドルと高価。

分娩対応の手順は下記のとおり。

- 1) 破水したら分娩馬房に引き付ける
- 2) 分娩馬房の乾草を撤去する（分娩が終わるまで食べさせない）
- 3) 寝そうになったら、馬房の真ん中で寝るように誘導する（端だと介助しにくい）
- 4) クロルヘキシジン（ヒビテン）で手を洗い、手を入れて胎子の両前肢と鼻先を確認
- 5) 二人で胎子を引っ張る（左前肢一人、右前肢一人、頭は持たない）。娩出後母馬が立ち上がってしまいそうな時は母馬を抑えて臍帯が切れてしまうことを防ぐ
- 6) 臍帯の拍動がなくなったら子馬を母馬の鼻先へ運び、臍を止血（クリップは使用せず、手で止血）、ポピドンヨード（イソジン）で消毒
- 7) 子馬を拭く（暖かい時期は拭かない）
- 8) 後産を縛る（紐付きのビニール袋で、後肢や尾が汚れない）
- 9) 子馬全頭に浣腸
- 10) 後産が排出されたら母馬にフルニキシン（バナミン）10ml を静脈内投与。後産は払げてチェックせず廃棄
- 11) 哺乳の補助。通常は乳に誘導するだけ。弱い子馬の場合は 3～4 時間経っても飲めなかったら指を吸わせて乳首に誘導する



破水



胎位を確認



子馬を引っ張る



臍の止血



後産は袋に入れて縛る



子馬全頭に浣腸



母馬にフルニキシン静注



後産は払ってチェックせず廃棄



子馬を乳に誘導



指を吸わせて乳首に誘導

馬房内をぐるぐる回るがなかなか破水しない時はレッドバッグに注意する（怪しい時には手を入れて人為的に破水させる）。分娩前の NI テスト（新生子溶血性黄疸のリスクチェック）は実施していなかった。乳汁の Brix は測定せず、ストック初乳も搾らない（翌日の IgG が低かったら血漿製剤を投与する）。

子馬がダミーフォールだった場合は鼻から酸素吸入&ナロキソン筋肉内投与（4mg）。弱くて乳が飲めない子馬には母馬から初乳を搾乳し（16 オンス＝約 454g）、最初はシリンジを使って、次から哺乳瓶で経口投与。自力で飲めるようになるまで繰り返す。搾乳する際は母馬のお尻を壁に向けて、コーナーで保定。体温や血液に異常があれば血漿製剤、補液、抗生剤（ペニシリン&アミカシン）。子馬が尾を挙上し、ローリングしたら便秘（胎便停滞）を疑い、浣腸する。

米国には子馬が 30 分以内に立つとオープン馬（Stake Horse、そういえばアスムッセン厩舎で使っていたエサは Steak Horse という名前だった。ステーキ Steak とオープン馬 Stake Horse をかけたネーミングだったらしい）、1 時間以内に乳を吸ったら重賞勝馬（Graded Stake Horse）になるという迷信がある。逆に立つのに時間がかかったら下級条件馬（クレ

イマーClaimer＝クレイミングレース Claiming Race に出ている馬)。

分娩後母馬が疝痛を示す場合、フルニキシシ 10ml＋キシラジン 2ml 静脈内投与。さらに痛い場合、フルニキシシ 5ml＋キシラジン 1.5ml を追加で静脈内投与。後産がなかなか落ちない時は水を入れたボトルを吊るして重くする（ハーフガロン＝約 1.9 リットル）。それでも落ちない時にはオキシトシン投与。



母馬から初乳を搾乳

シリンジを使って経口投与



胎便停滞



水を入れたボトルを吊るす

前夜分娩があった馬房はその都度乾燥させて消毒を行う。消毒薬は馬専用のものではなく、市販の塩素系漂白剤（ブリーチ）を使用。麦稈は汚れた部分のみ捨てる。



分娩後は馬房消毒

市販の塩素系漂白剤を使用

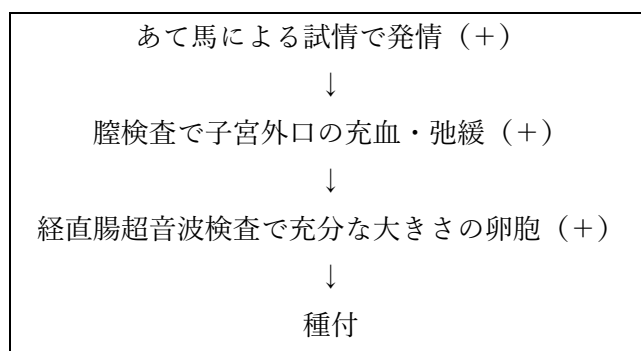
・あて馬による試情

Hill Barn（本場）にいる空胎馬は2月6日からあて馬による試情を開始。あて馬は本場と分場に1頭ずついる。本場のあて馬は30歳のポニーで、牡ではなくセン馬であった。繁殖シーズンのみテストステロンを注射し、“ホルモン乳母”ならぬ“ホルモンあて馬”としていた。こうすることで繁殖シーズン以外の取り扱いが容易となり、乗馬としても使えるとのこと。テストステロンはあて馬として使用する前10～14日間3ml投与する（製剤を見せてもらえなかったため濃度不明、当然禁止薬物であるアナボリックステロイドのため注射のつど Dr. Russel に調合してもらっている）。あて馬にはポニーが適しているとのこと。大きな馬は危ない。JRA 日高育成牧場ではハフリンガーを用いていると繁殖マネージャーの Amanda に伝えたところ、ハフリンガーは賢いので良いとのことであった。

試情の方法は、繁殖牝馬を専用の Box に入れお尻を出した状態でグルームがチェーンシヤンクをリップチェーンのように使用して保定し、マネージャーがあて馬を引いてお尻⇒顔⇒お尻の順番で匂いを嗅がせ、激しく蹴ったら発情が来ていないと判断し終了。反応が微妙な場合は継続し、慎重に判断していた。反応には個体差が大きく、馬によっては発情していても受け入れに時間がかかるとのこと。反応がわかりづらい場合は、リップチェーンを外して試情を行う。＋、±、－の3段階で評価し、記録しておく。なかなか発情が来ない馬には PG を打つこともある。PG はジノプロスト製剤（Lutalyse）を2ml（濃度5mg/mlなので10mg）を1日1回、2日間筋肉内投与。試情用 Box は Top Barn に1つ、Middle Barn に2つ、Hill Barn に1つあり、大きさは長さ320cm×幅125cm×高さ135cm（Top Barn および Middle Barn）もしくは長さ295cm×幅140cm×高さ140cm（Hill Barn）であった。



お尻⇒顔⇒お尻の順番で匂いを嗅がせる



という流れにしている。種付の 24 時間前に全頭にデスロレリンを投与する。



あて馬で発情 (+) なら膣検査

子宮外口が弛緩していれば超音波

・種付

初回発情は基本的にスキップし、PG で短縮。シーズン後半 (5~6 月) であれば初回発情でも種付する。オカラストッドで繋養されている種牡馬に種付することが多い。本場 (Hill Barn) から行く場合はピックアップトラックの荷台にスタリオンのスタッフが乗り、引いて行く。分場 (Shady Lane) から行く場合は馬運車で繁殖のスタッフが連れて行く。興奮する牝馬に対しては鎮静剤投与 (キシラジン 1ml 静脈内投与など)。他の牧場の繁殖牝馬と種

付時間が重なった場合は、他の牧場を優先する。種付の 4 時間後に子宮内から余分な精液を排出するためにオキシトシン 1.5ml 筋肉内投与。



ピックアップトラックで馬を引く

<種付のためのケンタッキー州への輸送>

子馬が 2~4 週齢になった時点で、ケンタッキー州で繋養されている種牡馬との交配を希望する繁殖牝馬は輸送されていた。輸送前にミネラルオイルを経鼻投与する。ケンタッキーまでの輸送費は大手の輸送業者で片道 5,000 ドルとのこと。



輸送前にミネラルオイル

ケンタッキーまで片道 5,000 ドル

・獣医療

飼い食いが悪く、太りにくい繁殖牝馬にはオメプラゾール 2mg/kg1 日 1 回経口投与（ガストロガード 500 ポンド相当）。

米国の他の牧場と同じく、無口に赤いビニールテープが巻かれている妊娠馬はプロジェステロン製剤のレギュメイトを投与されていることを意味していた。レギュメイトは連続投与器で投与される。レギュメイトではなくプロジェステロン（5ml）を注射している繁殖牝馬もいた。経口投与より確実に投与できるメリットがある反面、高価であるというデメリット

ットがあるとのこと。



無口に赤いテープ



レギュメイトの連続投与器

妊娠馬は分娩 1 カ月前にワクチン接種される。オカラストッドで接種されているワクチンは、インフルエンザおよびライノウイルスの混合、東部および西部馬脳炎の混合、破傷風。胎盤炎の兆候（CTUP の増加）が認められた馬には SMZ を分娩まで経口投与。

他の米国資本の牧場と同じく、繁殖牝馬は全頭陰部縫合（キャスリック）が実施されている。縫合は獣医師、切開はマネージャーが行う。切開時は鼻捻子のみで局麻はしていなかった。



局所麻酔



鉋で切開



縫合

マネージャーが切開

分娩後約 1 週間、子宮内貯留液の排出を促すため母馬全頭にオキシトシンを投与していた。8 時間毎に 1.5ml を筋肉内投与×1 週間。初回発情 (Foal Heat) 時に獣医師が子宮外口の視診を行い、悪露 (discharge) がなければ投与を止める。母馬の検温は 1 日 1 回 (朝のみ)。一部の母馬には分娩翌日に子宮洗浄していた。生食 1 リットルにアンピシリンを混合したものを注入 (シュポシュポで)、回収はしていなかった。



オキシトシン

子宮洗浄

<子宮動脈破裂の症例>

妊娠期間 340 日で分娩した牝馬 1 頭が疝痛様症状を示し、腹腔内出血によるショック (筋肉の震え) を呈した。Chris は子宮動脈破裂と判断。血圧を上げない、興奮させないことを優先し、病院には搬送せず、デトミジンによる鎮静 (時々ブトルファノールを併用)、疝痛様症状にはフルニキシン、呼吸速迫時にはナロキソン、止血剤としてアミノカプロン酸、母馬の状態が悪い時は (貧血で倒れた母馬の下敷きにならないように) 子馬を隔離し、見事約 1 週間の治療で回復させた。



子宮動脈破裂による疝痛様症状

母馬の状態が悪い時は子馬を隔離

<出生翌日のベビーチェック>

出生翌朝に採血し IgG を測定。Peterson & Smith Equine Hospital の検査室で測定され、すぐに結果を知らせてくれる。繁殖マネージャーの Amanda はニューヨーク州の牧場でも働いたことがあるが、そこではそのような病院が近くになく測定結果を知るまでに時間がかかったとのこと。目（眼瞼内反など）および口腔粘膜（黄疸など）を視診。肋骨の触診はしていない。血漿製剤の全頭投与はしていない。



出生翌朝に採血し IgG を測定

<新生子馬の感染症予防>

新生子馬全頭にペニシリン 3ml を 3 日間 1 日 1 回筋肉内投与。メトロニダゾール 1.5 錠を 5 日間、ラニチジン 1 錠と一緒に 1 日 2 回経口投与して、感染症を予防していた。

<新生子馬の臍チェック>

毎朝検温時にスタッフが触ってチェックする。滲出液など感染の兆候が認められたらペニシリンを注入。ちなみに、検温は 1 日 2 回で、102° F (38.9°C) までは正常、103° F (39.4°C) 以上だったら獣医師を呼ぶ。

<発情下痢>

子馬が下痢した場合、夕方集牧後に馬房内で洗浄し、ミネラルオイルを肛門周囲に塗布し、皮膚炎を予防する。食器洗い用洗剤の容器に入れてお尻にかける。



発情下痢



洗剤の容器に入ったミネラルオイル

<交配適期の判断>

Dr. Russel の基準は、経直腸超音波検査で、
 20～30mm 大の卵胞⇒3 日後種付
 30～40mm 大の卵胞⇒2 日後種付
 40～50mm 大の卵胞⇒1 日後種付

子宮の浮腫は超音波では評価しない（子宮外口の視診はする）。種付の 24 時間前にデスロレリン投与。種付の翌日に経直腸超音波検査で排卵確認。排卵していなかった場合、交配相手がオカラスタッドの種牡馬で予約が空いていれば再度種付しに行く（連続交配）。



超音波検査における卵胞の大きさによって種付日を決める

<子宮内膜炎>

子宮スワブと同時に細胞診も行う（真菌をターゲットにしている）。種付翌日に子宮内に貯留液が認められたら（交配誘発性子宮内膜炎）、子宮洗浄（生食 1～3 リットル）。



子宮スワブ検査



細胞診検査

<当歳馬の駆虫>

イベルメクチン（エクイバラン）で行っていた。

<副鼻腔炎で円鋸術および気管切開術を行った 1 歳馬>

重度の副鼻腔炎で鼻腔が閉塞してしまったため、円鋸術を実施すると同時に気管切開を行ったとのこと。副鼻腔炎が治癒し、鼻から呼吸できるようになったので器具を外して気管の孔を塞ぎ、競走馬にする予定。サルファ剤（トリメトプリムとスルファメトサザール）およびラニチジンを投与していた。術創の周囲に虫よけを塗って放牧。器具を外した 1 週間後には肉芽増生により気管の孔はほぼ塞がっていた。



副鼻腔炎で円鋸術および気管切開術を行った 1 歳馬



術創の周囲に虫よけを塗って放牧

1 週間後

<日曜日の診療体制>

日曜日は主治医の Dr. Russell も休みとなり、Peterson & Smith Equine Hospital から若手の獣医師が当番としてやってくる。前腕部裂創を負った繁殖牝馬がおり、創は鋭利に切り裂かれており新鮮だったため縫合すれば早く癒合する印象だったが、獣医師が未熟だったためか縫合は選択されず保存療法となり、非常に長い経過がかかった。バリカンで毛刈りした後スクラブし、洗浄、Alu Spray を塗布。SMZ15 錠を 1 日 2 回経口投与。

<虫よけ>

フライマスクではなく、目の周りにハエ除けのピンク色の軟膏を塗っていた。また、アブトラップならぬサシバエトラップが使われていた。

・装削蹄

<繁殖牝馬>

基本的には月 1 回開業装蹄師が来場し、削蹄のみで管理。蹄に問題のある繁殖牝馬は両前のみ装蹄（鉄製の蹄鉄を焼かずに装着）。裂蹄や内向が多い印象。あえてコンフォメーションは悪いが血統の良い馬を安く仕入れて、良い子馬を産ませて、高く売ることが目標にしている。ケンタッキーと比較して、砂地で雨が少ないので、馬が汚れず、皮膚病が少ない。



月 1 回繁殖牝馬の削蹄

問題のある馬は両前装蹄

蹄の細菌感染が疑われる牝馬は、パドックで昼夜放牧していた。水はけが良いため、馬房に入れておくより蹄に良いと考えていた。NSAIDs としてウインスターでも使用されていたフィロコキシブ製剤 (Equixx) および抗生剤としてエンロフロキサシン製剤 (バイトリル) を投与。

<当歳馬>

1 ヶ月齢で最初の削蹄を行う。

・放牧地の管理

繋養頭数の割りに放牧地が少ないため、常に空きがない状態だった。放牧地のボロ拾いは行わず、放牧地で与えているルーサン乾草の食べ残しなどと一緒にチェーンハローで細かく砕いていた。

・GPS 装置を用いた放牧地での運動量調査

温暖なフロリダにあるオカラストッドの繁殖牝馬と、ケンタッキーのダービーダンファームそして JRA 日高育成牧場の繁殖牝馬を比較するため、GPS 装置 (Transystem 社、747ProS) を用いて分娩前の妊娠馬の放牧地での移動距離 (運動量) を調査したので、概要を報告する。南国であるためかオカラストッドの繁殖牝馬たちは非常に活発で、放馬した際にリード (引き手) を踏んで怪我をしないようにスナップ (金具) のないロープを折り返して使用していた。



GPS 装置

ロープを折り返して使用

・結果

まず分娩予定日の1ヶ月前になり分娩馬房のある Top Barn の近くの Paddock5 で昼放牧に切り替えられた繁殖牝馬の移動距離（運動量）を示す。

Paddock 5	分娩までの日数	時間	距離 (km)
Mare A	0	8	5.3
Mare B	1	8	8.0
Mare C	4	8	5.3
Mare D	4	8	6.6
Mare E	7	8	5.3
Mare F	12	8	5.1

Paddock5 で昼放牧されている群の1日の移動距離

次に分娩予定日まで1ヶ月以上あり Paddock1～4 で昼夜放牧されていた繁殖牝馬の移動距離（運動量）を示す。

Paddock 1～4	分娩までの日数	時間	距離 (km)
Mare G	38	22	12.4
Mare H	40	22	11.4
Mare I	43	21	11.7
Mare J	47	21	10.3
Mare K	50	21	13.6
Mare L	50	21	13.8
Mare M	91	21	12.2

Paddock1～4 で昼夜放牧されている群の1日の移動距離

以上のデータをまとめたものが、下記の表である。データは全て上段に中央値を示し、下段に最小値および最大値を示してある。分娩が近づくにつれて、妊娠馬の1日の移動距離は少なくなる傾向が認められた。

群	調査頭数	分娩までの日数	時間	距離 (km)
昼放牧 Paddock 5	6	4 (0-12)	8 (8-8)	5.3 (5.1-8.0)
昼夜放牧 Paddock 1~4	7	47 (38-91)	21 (21-22)	12.2 (10.3-13.8)

オカラスタッド妊娠馬の1日の移動距離のまとめ

結果を、ダービーダンおよび JRA 日高育成牧場の結果と比較すると、興味深いことがわかった。すなわち、北に位置するケンタッキーや北海道では分娩直前(1ヶ月前)の妊娠馬の1日の移動距離は2.3~2.8km 程度まで減少するのに対し、南国のフロリダでは5.3km 程度の移動距離を保てるのである。この数値は JRA 日高育成牧場で分娩1ヶ月前から行っているウォーキングマシンによる運動を合算した数値とほぼ同じであり、フロリダでは分娩前に運動を負荷する必要はないと言えるかもしれない。

群	調査頭数	分娩までの日数	時間	距離 (km)
昼放牧 Foaling Paddock	4	15.5 (7-21)	8 (7-9)	2.3 (1.9-3.4)
昼放牧 Foaling Field	4	19 (14-38)	8 (8-9)	2.8 (1.7-3.7)
24 時間放牧 Pony Paddock	2	24 (22-26)	24.5 (24-25)	5.3 (4.5-6.0)
24 時間放牧 Pony Field	4	29.5 (23-32)	24 (20-24)	7.6 (5.7-10.7)
24 時間放牧 Filly Field	2	42.5 (37-48)	24.5 (24-25)	8.2 (8.1-8.3)
昼放牧 JRA 日高	-	-	7	2.5 (+WM2.5)

ダービーダンおよび JRA 日高育成牧場妊娠馬の1日の移動距離のまとめ

・種牡馬部門

種牡馬厩舎 (Stud Barn) は馬房と Breeding Shed (種付する場所) がくっついた形で、繁殖牝馬の陰部を洗浄する枡場も Breeding Shed の中にあるオールインワン。

David が期待しているのは Uncaptured、The Big Beast、I Spent It、Jess's Dream 種牡馬はパドックに夜間放牧。運動はしない。



種牡馬厩舎



Breeding Shed



I Spent It



放牧地に向かう I Spent It

<種付>

1日2～3回で、2回の場合は1回目が8:00で2回目が17:00、3回の場合は1回目が8:00、2回目が14:00、3回目が19:00となる。

・種付の手順

- 1) 枡場で尾巻、陰部洗浄
- 2) あて馬（枡場⇒乗駕）
- 3) 種牡馬（枡場⇒勃起したら陰茎洗浄⇒乗駕）



陰部洗浄



あて馬を乗駕させる



陰茎洗浄



種付

・イヤリング部門

本場から 10 マイル離れたノースウェスト・ゲインズビル・ロード沿いの分場 2 にイヤリング部門がある。厩舎 5 棟。放牧地が最も広く、天然の石灰岩が豊富で、土壌が良いとのこと。オカラストッドの馬は 1 歳セリに出さず売る馬も全頭 2 歳トレーニングセールに上場することに決めており、セールスプレップに関連するコストをカットし、放牧を中止することによる成長阻害がない。ブレーキング（シェッドローでの騎乗、放牧地での騎乗）までをここでやり、トレーニング部門に移動する。空いている放牧地を使って、牛の育成も行っていた。



イヤリング部門のある分場



イヤリング厩舎



イヤリング放牧地



牛の育成も行っている

・トレーニング部門

厩舎は5棟、シェッドローが真ん中にある対面式。敷料はウッドシェービング、乾草はルーサン。ウォーキングマシンは旧型（ロープに繋ぐタイプ）。1周1,200mのダートコース。ホームブレッドは7月からブレーキングを開始。放牧地での騎乗までを分場2で行い、それから本場へ移動。最大手の預託馬主はSagamore Farmで、調教には元調教師2人が立ち会う。うち1人は第2回ジャパンカップをハーフアイストで勝ったスタンリー・ホッフ氏。現在は調教師を引退し、Sagamore Farmのアドバイザーをしている。乗り役は6名で、11月下旬時点でのトレーニングメニューは速歩600m、駈歩1,600m、速歩200m、ゲート通過、2列縦隊で、リードポニーなし。グラウンドスタッフは朝5:00～11:00、13:00～15:00。2月上旬時点でのトレーニングメニューは速歩600m、駈歩2,400m、2列縦隊もしくはシングルファイル。セリに出さない馬は馬群に慣らすため2列縦隊。セリに出す馬はシングルファイルで前の馬との間隔を徐々にのばしていき、単走に慣らす。ハロン20秒程度。セリに出す馬はラスト2ハロン24秒。馴致用ゲートもある。



育成厩舎は5棟

シェッドローが真ん中の対面式



旧型のウォーキングマシン

1周1,200mのダート馬場



前の馬との間隔をあけた調教

馴致用ゲートの通過

競走馬は昼放牧（調教後から14:00まで）。牡はパドックで1頭ずつ、牝は大きな放牧地で集団放牧。



牝はパドックで1頭ずつ

牝は集団放牧

◎オカラストッドの経営方針

温暖な気候を活かし、血統は良いが問題がありケンタッキーでは見捨てられたような繁殖牝馬を安く買ってきて（子宮動脈破裂既往馬など）、技術で産ませる。それを可能にしているのが繁殖マネージャー（Amanda）と分娩マネージャー（Chris）のWマネージャー体制。主治医の Dr. Russel およびオカラ市内に大きな馬病院が3つ（Peterson & Smith、Equine Medical Center of Ocala、Ocala Equine Hospital）もあるのも心強い。放牧地が砂地で草に栄養がないため蹄病が少ない。子宮動脈破裂でも生かせる高い技術。元が取れたら（2〜3頭産駒を得たら）繁殖牝馬は売る。さらに生産馬は全頭2歳トレーニングセールで売ることになっており、セールスプレップに伴う余計なコストをカットし、付加価値をつけて売る。

・研修の終わりに

オカラストッドでは昔、生産馬がレースに勝つなど慶事があったことを場内に知らせるために鐘を鳴らしていたそうで、最後に David に挨拶に行くと私の前途を祝して鐘を鳴らしてくれた。ちなみに、ケンタッキーでの研修の最後にダービーダンに立ち寄った際には、自宅で使っていたコーヒーメーカーと残ったコーヒー粉を差し入れて持って行ったのだが、一緒に働いていた陽気なメキシコ人のガブリエルが「ヨシ、ありがとう！ところで・・・ミルクと砂糖はどこかな？」というジョークで返してくれ、こちらも印象的な終わり方であった。

オカラストッドに限らず、研修中は実際にスタッフの一員として分娩介助を始め多くの経験を積ませてもらった。米国は入国・滞在するためのビザの取得が大変だったが、入国さえしてしまえば牧場のマネージャー・スタッフはみんな大らかで、どこの牧場でも私のことを歓迎してくれ、こちらの意志をはっきり伝えればほとんどの要望に応じてくれた。あとがきは別にまとめるが、非常に充実した研修であった。



チームオカラスタッドの一員として

10. まとめ（日本と米国の違い）

概論

- ・米国（ケンタッキー州）はライムストーンの地層の上に肥沃な土壌を有する。日本（北海道）は火山性の酸性の土壌で、我々は肥料やサプリメントでミネラル分を補う必要がある。
- ・米国の放牧地は広い。1頭当たり1エーカー以上。日本の放牧地は狭い。JRAは1頭当たり0.5haを推奨しているが、達成できている牧場は少ない。
- ・米国には920万頭の馬がいる。一方、日本には74,000頭の馬しかいない。
- ・2014年におけるサラブレッドの生産頭数は米国が20,300頭に対し、日本は6,887頭。
- ・馬を飼うコストが全く違う。例えばアメリカの飼料は安い。日本は飼料を輸入しなくてはならないため、非常に高い。Hallway Feeds社のStamm30は米国だと24.50ドル(2,867円)だが、日本だと38.77ドル(4,536円)になる（1ドル＝117円で計算）。
- ・米国では自家製乾草を敷料にしている。日本では小牧場は食用にしているが、栄養価が非常に低く、大牧場は輸入している。
- ・米国の競馬場は、各競馬場のオーナーが主催している。日本の競馬場は、中央競馬ではJRA、地方競馬では各地方自治体が主催している。
- ・北米の2015年の馬券の売上は10,676,223,640ドルで、JRAの2015年の年間売上の約半分。そのため、アメリカの競馬の賞金は安く、日本（JRA）の競馬の賞金は高い。このことが日本において馬に高いコストをかけることを可能にしている。
- ・米国の従業員には中南米からの移民が多い。日本の従業員は現在ほとんど日本人であるが、人口の減少により若い従業員の確保が難しくなっている。将来的に外国人を雇用する必要がある。
- ・米国と日本で従業員の給与はそれほど変わらないが、日本ではほとんどの厩舎および牧場が従業員用の社宅を備えている。
- ・米国の従業員は転職が多い。日本は他の業界も基本的に年功賃金制の終身雇用制度であり、転職は少ない。
- ・米国の牧場や馬病院では、ヨーロッパや南米からのインターンが多い。日本では外国からのインターンをほとんど見かけない。
- ・米国では、マネージャーや馬の臨床獣医師に女性が多い。日本は少ないが、今後増えると思われる。
- ・米国の大学ではEquine ScienceやEquine Managementなど馬を学べる学科があるが、日本にはない。獣医学科で少しだけ馬について学べるだけである。

各論

種牡馬の管理

- ・米国の種牡馬は生産牧場内で飼われているが、日本の種牡馬は種馬場という種牡馬専門の牧場で飼われている。
- ・米国ではサラブレッド以外の品種の種牡馬を用いて研究が盛んなため、その技術がサラブレッドにも応用されている。日本では種牡馬の研究自体が難しい。

繁殖牝馬の管理

- ・ケンタッキーの冬は北海道より2ヶ月短い。北海道では放牧地が雪で2～3ヶ月覆われる。
- ・米国では分娩前の妊娠馬に運動を課さないが、日本ではウォーキングマシンもしくは引き運動を行う。
- ・米国では分娩前にNI試験をする。日本ではかつてしていたが、現在は行われていない。
- ・米国では分娩時に人が「介助」する（子馬を引っ張る）が、日本は自然分娩に移行しつつある。
- ・米国では交配時に子馬は「馬房に置いて」母馬のみ行くが、日本では一緒に行く。
- ・米国では交配には「輸送業者」が繁殖牝馬を連れて行くが、日本では牧場従業員が必ず立ち会う。
- ・米国では繁殖牝馬は全頭「キャスリック縫合」されているが、日本では獣医師が必要と判断した馬だけされる。
- ・米国では妊娠鑑定交配後14日および28日での血中P4濃度の測定およびレギュメイトの投与が行われている。日本では行われていない。
- ・米国は預託馬の割合が多く、日本は自己所有馬の割合が多い。

当歳馬の管理

- ・米国では子馬は全頭出生翌日および1ヶ月後にロドコッカス菌の抗体を多く含んだ「血漿製剤」を投与されるが、日本では市販されていないためIgGの低い馬にはストック初乳を与えるほか、母馬の血漿を投与するしかない。
- ・米国（ケンタッキー州）では子馬に「馬服」を着せないが、日本（北海道）では着せる。
- ・米国（ケンタッキー州）ではロドコッカス肺炎が多い。日本（北海道）ではおそらく寒くて放牧地が3ヶ月雪で覆われるので少ない。

1歳馬の管理

- ・セリに上場されない馬は、米国（ケンタッキー州）では24時間放牧が実施されている。日本（北海道）では1日1回は集牧し飼付けする。
- ・米国（ケンタッキー州）では夏季にサシバエが多いため、フライマスクを装着して放牧さ

れる。日本（北海道）ではアブが多く、セリに出さない馬も日中は集牧される。

セリ馴致および上場

- ・米国（ケンタッキー州）では生産牧場がセールスプレップを行っている、日本（北海道）では育成牧場がセールスプレップを行っている。
- ・米国（ケンタッキー州）では夜間放牧を継続しながらセールスプレップを行っている。日本（北海道）では育成牧場に放牧地がないため放牧は中止される。そのことが健全な成長を阻害している恐れがある。
- ・米国のセリは欠場が多い。日本はそもそも庭先取引が多い。
- ・レポジトリリーでの喉の内視鏡検査において、米国ではファイバースコープが使用されており、人気の馬は何度も検査される。日本ではビデオスコープが使用されており、購買者はレポジトリールームでレントゲン写真と一緒に録画された動画を見ることができる。

騎乗馴致

- ・ケンタッキー州で生まれた馬は1歳の秋にフロリダ州へ輸送され、2歳の春まで調教される。その後、各州の競馬場へ輸送される。日本の馬は北海道で生まれ、2歳の春までそのまま北海道で調教される。
- ・米国の育成牧場では円馬場や角馬場を除いて屋根付きの調教コースはない。日本（北海道）は雪が降るので、屋根付きの周回コースや坂路が一般的である。
- ・米国では昼夜放牧を継続したままブレーキングを行う。日本では育成牧場に移動した時点で放牧が中止される。
- ・米国ではダブルレーンによるランジングおよびドライビングは行わない。日本ではヨーロッパ式のブレーキングを行っている。
- ・米国では走路（racetrack）での調教を始める前に、放牧地など芝の上の不整地で騎乗する過程がある。日本では平らな地面の上でしか調教していない。馬が若いうちに不整地で調教されることは、ミスステップしないバランス感覚と筋力を馬に覚えさせることができ、将来の故障防止に役立つと思われる。
- ・米国ではブレーキング直後からリードボニーが横に付いても蹴らないように慣らしていく。日本ではこの過程がない。

競走馬の調教

- ・米国の競走馬は競馬場で調教されている。日本（JRA）の競走馬は美浦か栗東トレーニングセンターで調教され週末のみ競馬場へ行く。
- ・米国の競走馬はダートコースで調教されている。日本の競走馬はウッドチップ、ポリトラック（シンセティック）、ダートなど様々なコースで調教されている。さらに、ヨーロッパのように直線坂路コースでも調教されている。

- ・米国の調教は2頭併せか単走で行われる。日本の調教はヨーロッパのように集団で行われる。
- ・米国では出走時だけでなく追切時にもラシックスが投与される。日本では使用されていない。
- ・米国ではスパイク鉄（Toe Grab）の使用が認められている。日本では使用が禁止されている。

競馬

- ・米国の競馬は全て左回りである。日本は競馬場によって左回りと右回りがある。
- ・一般的に米国の競馬場は最後の直線（ホームストレッチ）が300m程度と短い。日本の競馬場は短いところと500m程度と長いところまで様々である。
- ・米国の競馬場はメイントラックがダートであり、芝コースが内側にある。日本の競馬場はメイントラックが芝であり、ダートコースが内側にある。
- ・米国の競馬のチケットは高い（ブリーダーズカップで425ドルなど）。米国の競馬はアメリカンフットボールなど他のスポーツと同様、エンターテインメントとしての要素が強い。一方、日本（JRA）の指定席のチケットは安い（最高でも4,000円ほど）。JRAは指定席を安くしてリピーターを増やし、馬券を買ってもらうという施策をとっている。

獣医療

- ・米国のHagyard Equine Medical Instituteなど大病院では、外科や内科など診療科が分かれており、症例に応じて得意な獣医師が診療するシステムができている。日本にはそもそも同規模の大病院がなく、専門に分かれていない。
- ・米国では専門医制度があるが、日本にはない。
- ・米国では専門医以外にも、歯科、鍼やカイロプラクティックの短期講習会が各地で開催されているが、日本にはない。
- ・米国では常に客観的な手法を用いて適切な診療が行われている（診断麻酔、画像診断、細菌培養検査、抗菌薬感受性検査など）。日本ではいまだに獣医師の経験と勘に頼った診療が多い。
- ・米国ではサラブレッド以外の品種（ウォームブレッド、スタンダードブレッドなど）に人工授精や胚移植が行われている。サラブレッドに直接応用はできないが、間接的に繁殖技術の向上に貢献している。

参考）預託料および調教科（獣医・装蹄費用別）

ステージ	米国	日本
繁殖牝馬（子なし）	750～900 ドル／月	12 万円／月
繁殖牝馬（子あり）	900～1,050 ドル／月	12 万円／月
当歳馬（離乳後）	325～350 ドル／月	5 万円／月
1 歳馬（セリに出さない馬）	750～900 ドル／月	8～10 万円／月
1 歳馬（セールスプレップ）	1,000～1,200 ドル／月 + 成功報酬 5%	10～15 万円／月 + 成功報酬 0～6%
競走馬（育成牧場）	1,800～2,000 ドル／月	20～40 万円／月
競走馬（競馬場／トレセン）	2,000～4,000 ドル／月	60 万円／月

結論

- ・もともと日本にはサラブレッドはいなかったが、たくさんの日本人が海外で学ぶことで生産と調教の技術を向上させてきた。
- ・現在の日本の生産と調教の技術は、アメリカとヨーロッパのミックススタイルである。
- ・将来的に日本独自のスタイルを確立させたい。
- ・そして、日本でもアメリカやヨーロッパからのインターンを受け入れる体制を作りたい。

謝辞

私はこの 2 年間で非常に多くのことを学ぶことができた。私に付けられていたブリンカーが外されて、視界が 2 倍に広がった気分である。

全てのアメリカにいる友人に深く感謝する。特に私の研修のホストであった John W. Phillips に心から感謝申し上げる。

1 1 . Summary

The differences of Thoroughbred racing industry between USA and Japan

General:

- There is rich soil on the limestone layer in Kentucky. There is acid soil in Hokkaido, so we need to spread fertilizer in the field and add supplement in the feed.
- Horses are turned out into the big field in USA: one acre, one horse. Horses are turned out into the small field or paddock in Japan. JRA recommend “0.5 ha, one horse”, but just the big farm such as Shadai group can do it.
- There are nine hundred twenty million horses in USA. There are only seventy-four thousand horses in Japan.
- The number of Thoroughbreds born in USA was 20,300, but that of in Japan was 6,887 in 2014.
- It costs a lot to keep horses in Japan. We need to import crops for horse feeds or horse feeds themselves from America, Canada or Australia. For example, one bag of Stamm 30 (Hallway Feeds) is \$24.50 in US but \$38.77 in Japan.
- In Kentucky, the blue grass hay made on the field is used as beds. In Japan, those are used for feeds. But Japanese hay is low nutrition value, so some of big farms in Japan such as Shadai group import hay for feeds.
- American racetracks are private but Japanese racetracks are public. In Japan, JRA owns and manages 10 racetracks (Tokyo, Nakayama, Kyoto, Hanshin, Chukyo, Sapporo, Hakodate, Fukushima, Niigata and Kokura) and local governments own and manage 15 racetracks (Obihiro, Monbetsu, Morioka, Mizusawa, Urawa, Funabashi, Oi, Kawasaki, Kanazawa, Kasamatsu, Nagoya, Sonoda, Himeji, Kochi and Saga). Japanese government prohibits owned and managed racetracks by private persons.
- The total betting money of North America was \$10,676,223,640 and that of JRA was \$22,080,272,391 in 2015. The prize money of JRA races is much higher than that of America. So it's the reason why Japanese can pay a lot of costs to keep horses.
- A lot of employees from Latin America work in USA. In Japan, almost all employees are Japanese. But the population of Japan decreases year by year, so we may employ foreign people in future.
- The salary of employee is not different so much between USA and Japan, but almost all Japanese farms have houses for employees.
- In America, it's common that employees change their jobs. In Japan, it's uncommon not only horsemen but also the general public.

- There are a lot of interns from Europe and Latin America in American farms and equine hospitals. But we can hardly see interns from foreign country in Japan.
- A lot of women work in American farms and equine hospitals. Very few women work in Japan. However the numbers of women who work in Japanese farms and equine hospitals will increase in future.
- In America, the students can study about equine science or management at the college. But any Japanese college doesn't have such courses. Japanese students can study about horses a little bit at the veterinary university.

Particular

Management of Stallions:

- American stallions are in big breeding farms (e. g., Darby Dan, WinStar), but Japanese stallions are in the special farms for stallions (we call them “Stallion Stations”, e. g., Shadai SS, JBBA Shizunai SS).
- In America, a lot of researchers investigate about stations except Thoroughbreds, and the results are useful for Thoroughbred stations. It's difficult to research about stations in Japan.

Management of Broodmares:

- The winter of Kentucky seems to be two months shorter than that of Hokkaido. Snow covers the field for a few months in Hokkaido.
- Japanese horsemen take our broodmares for a walk by walking machine or hand walk one month before the due date of foaling. But it's not common in America.
- In America, mares are examined the possibility of Neonatal Isoerythrolysis before foaling. And mares and babies are tested Jaundiced Foal Agglutination just after foaling. Japanese horsemen used to do the same tests but don't do now because the incidence of NI is very low.
- When the mare starts foaling, humans assist the delivery in USA. We don't assist the mare if no problem because the pain stimulate secretion of hormones.
- When the mare is covered with a stallion, a transporter takes the mare to the breeding shed without the foal in USA. The Japanese mare is taken to the breeding shed with the foal by the employee of the farm.
- In America, all mares are sutured their external genitals by veterinarians. In Japan, veterinarians suture the external genitals if they diagnose the mare need it.
- In America, all mares measured their blood level of P4 14 and 28 days after breeding and administrated Regumate if the value is low. In Japan, nobody does it.
- The rate of boarding mares in American farms is much higher than Japanese farms.

Management of Foals:

- In America, all newborns are administered plasma products to prevent Rhodococcus pneumonia. There are no plasma products and it's prohibited to import it from foreign country, so we have to make it by ourselves if we need it in Japan.
- It's not necessary to use blankets on newborns in Kentucky. But we need to use blankets on newborns in Hokkaido.
- The incidence of Rhodococcus pneumonia in Kentucky is higher than that of in Hokkaido. I think it due to the difference of climate. It's like to keep horses in a big refrigerator in Hokkaido.

Management of Yearlings:

- Yearlings not for sale are turned out for 24 hours in Kentucky. All Yearlings are taken to the barn at least once a day in Hokkaido because there are a lot of horseflies at daytime in summer.

Sales Prep and Consignment:

- At the stage of Sales-prep, yearlings are still at breeding farms in Kentucky, but they are already moved to training farms in Hokkaido.
- At the stage of Sales-prep, it continues to turn the yearlings out the field in Kentucky. But it stops in Hokkaido. It may inhibit the growth of yearlings.
- At the sale, there are a lot of "OUT" in USA. In Japan, it's not common to scratch the entry of the sale. But there are a lot of horses to be purchased at breeding farms in Hokkaido before entry to the sale. Japanese trainers often visit farms and look for good foals and yearlings.
- American veterinarians use the fiberscope to inspect the horses at the sale. Japanese veterinarians use videoscope before the sale, so buyers can watch the movie of throat in the repository room.

Breaking:

- Almost all Thoroughbreds born in Kentucky are shipped to Florida after September Sale. And after training, they move to each racetrack. Japanese Thoroughbreds stay in Hokkaido and are trained there just before they move to Miho or Ritto Training Center of JRA.
- It's common to have the roof at the training facilities, not only round pen and arena but also oval track and straight uphill track in Hokkaido because it has a lot of snow in winter.
- The horses are also turned out after they move to training farms in America. But it's uncommon to have fields in Japanese training farms. So, we cannot turn out at training farms in Japan.
- It's uncommon to use "double reins" at the stage of breaking of yearlings in America. We

perform European style breaking, so use “double reins” at longing and driving.

- Before starting to ride on the racetrack, horses are ridden on the grass of the paddock or the field. I think it will be helpful for horses to prevent missteps on the racetrack in future. We ride on the very flat surface only.
- American horses are familiar to the lead pony. Japanese horses may kick the pony if the pony approaches the Japanese racehorses.

Training of Race horses:

- American racehorses are trained in the racetrack. Japanese racehorses are trained in Miho or Ritto Training Center of JRA and shipped to the racetrack in the morning of the race day.
- American racehorses are ridden on the dirt track. Japanese trainers use variety surfaces e. g. woodchip, synthetic, dirt and so on to train racehorses. In addition, they also choose the straight uphill track like Europe.
- The horse runs side-by-side with the buddy or alone at the training in America. The horses run in a group in Japan.
- Furosemide is administrated to the racehorse not only before the race but also before workout in USA. It's prohibited to use Furosemide before the race in Japan.
- Toe grabs are used for racehorses in America. It's prohibited in Japan.

Horse Racing:

- Racehorses run counterclockwise at all racetracks in USA. Racehorses run clockwise and counterclockwise depending on racetracks in Japan.
- In American racetracks, the lengths of the home stretch are short (less than two furlongs). In Japan, those are various.
- The dirt track is outside and the turf track is inside in American racetracks. The turf track is outside and the dirt track is inside in Japanese racetracks.
- The tickets of American horse racing are much more expensive (e. g. \$425 at Breeders Cup) than Japanese (less than \$35). The horse racing is thought as one of the entertainment such as football or baseball. JRA sets the price of tickets low because we think it leads the fans to come repeatedly to racetracks.

Veterinary Medicine:

- The veterinarian who works at American big equine hospital (e. g. Hagyard) belongs to the clinical department such as internal medicine, surgery, sport horse, field care or fertility. The veterinarian can work at the area of specialty in America. There is no big equine hospital which has clinical departments in Japan.

- There is the system of diplomate in USA. We have no system which the veterinarian gets a qualification of diplomate in Japan.
- The veterinarian can take a short course of various medical techniques such as dentistry, acupuncture and chiropractic in America. Japanese veterinarians have to come to America to take it.
- American veterinarians diagnose by objective methods for example diagnostic local anesthesia, imaging, culture, cytology and so on. Japanese veterinarians tend to diagnose subjectively.
- In America, artificial insemination and embryo transfer are performed to Standardbreds and Warmbreds. These methods are prohibited in Thoroughbreds medicine, but I think it contributes to improve American reproductive techniques.

Boarding and Training Fee except services from Veterinarians and Farriers:

Stage	USA	Japan
Broodmare without a foal	\$25-30/day	\$34/day
Broodmare with a foal	\$30-35/day	\$34/day
Weanling	\$11-12/day	\$14/day
Yearling not for sale	\$25-30/day	\$23-28/day
Yearling at sales-prep	\$35-40/day & 5% Sales Commission	\$28~43/day & 0-6% Sales Commission
Racehorse in a training farm	\$60-65/day	\$57-114/day
Racehorse in a racetrack	\$65-135/day	\$171/day

Conclusion:

There was no culture of Thoroughbred racing in Japan. We have learned about racehorse management from Europe and America. Our horse breeding and training are mixed style of European and American. We appreciate to European and American horsemen and would like to establish Japanese style of horse breeding and training by continuing to make efforts. And, I would like Japan to be a country to accept a lot of trainees from foreign countries in future.

Acknowledgement:

I have had a lot of experiences about racehorse management in USA for these two years. American horsemen took me off the blinker and broaden my horizon about horse breeding and training. I appreciate to all friends I met in USA. Especially, I would like to thank Mr. John W. Phillips from the bottom of my heart for always being my perfect host.

おわりに

冒頭にも書きましたが、私が育成部門を志したのは、学生時代に 1 頭の乗用馬の全能力を発揮させてあげられなかった苦い経験が基礎となっています。馬の全能力を発揮させる技術を身につけたい、馬についてもっと総合的に勉強したい、という考えに至り、私の育成経験がスタートした訳ですが、ここ米国ではサラブレッド競走馬に限らず本当に多種多様な馬産業が発達しており、研修先としてまさにうってつけの場所でした。

米国の特長を一言で表せば、「“多様性”と“合理性”の国である」と言えると思います。元々移民が建国したアメリカ合衆国は、人種のるつぼと言われるようにイギリス系、アイルランド系、フランス系、アフリカ系、そしてラテンアメリカ系と様々な国から来た移民で構成されている“多様性”の社会です。文化も宗教も考え方も異なるこれらの人々を 1 つにまとめるためには、何か根拠となるものが必要だったのでしょう。それが理に合っていること、すなわち“合理性”であり、合理性があれば文化背景の異なる人々を納得させ、動かすことができたのでしょう。逆に言えば、理屈で説明がつかないことはできない社会でもあるわけで、日本のように“根性論”はまかりとおらず、私の研修に際しても常に「なぜあなたはそれがしたいのか？」説明することが求められました。しかし、説明がつくことであれば彼らは納得して、協力してくれるのでした。このことは私にとって、「なぜ自分は今これがしたいのか？」自問自答するクセをつけることに繋がり、ひいては「今の自分の目的は何か？」よく考えることになり、研修の目的を見失うことなく、有意義なものにすることができました。

この海外育成調教実践研修が開始された当時は、日本の生産育成技術が欧米各国と比較して明らかに劣っており、馬も技術もひたすら“輸入”すれば通用する時代であったと思います。しかしその後、本会の諸先輩方を含めた関係者の懸命な努力により、日本の生産育成技術および馬そのものの資質も大きく向上し、状況は大きく変わりました。私がブレーキングおよび初期調教を研修してきたウインスターファームには、日本のセレクトセールで購入されその後輸入された 1 歳馬が 3 頭いました。かつて我々が生産育成技術を“輸入”するだけであった欧米各国も今や日本産馬の資質の高さを認め、日本が馬を“輸出”する時代が到来しているのです！

それでは、もはやこの海外育成調教実践研修が必要なくなったのではないかと考える方もいらっしゃるかもしれませんが、私は違うと思います。確かに、海外で生産育成技術を学び、それを“輸入”すれば良いだけの時代は終わりました。しかし、今後は世界中のホースマンたちが世界各地で開催されているセリで自国に向いていると思われる馬を輸入し、走らせる。そういう時代になると思います。例えば、日本のオータムセールで最後まで売れ残っているような馬が、海外のエージェントに見出され高値で取引され、その国で G1 レースを勝つなんていう出来事が実際に起こり得るようになると思います。そういう時代になったとき、本会内に海外競馬に精通した人材が絶対に必要になります。さらに、“輸出”という点を考えると、今まで本会職員が行ってこなかった競馬後進国および生産を行っていない

香港やシンガポール、そして UAE やカタールなどの中東諸国にも目を向けなくてはならなくなるかもしれません。

インターネット、そして SNS などの普及により、海外との通信は一昔前とは比較にならないほど容易になりました。しかし、いつの時代になっても基本となるのは人と人との信頼関係です。実際に会ったことのない人物に高価なサラブレッド競走馬の購買を任せられる馬主が果たしてどれだけいるのでしょうか？また、言葉だけなら今の時代スマホの翻訳ソフトが通訳してくれますが、本当の意味でコミュニケーションを取るには、言葉だけでなく相手の国の文化や置かれている環境を理解しておく必要があります。これはインターネットで検索しただけでは絶対にわからないことです。

古代より「天の時」「地の利」「人の和」が全てそろってなくては戦には勝てないと言われています。「天の時」とは時勢の力ということで、現代ではオイルマネーを味方につけた UAE やカタールが有利でしょう。「地の利」は良質のライムストーンと広い国土を持つ米国や愛国には敵わないと思います。日本は「人の和」すなわち勤勉で和を重んじる国民性を活かし、人材を育成することで対抗するしかありません。この言葉、正しくは「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」という孟子の格言で、「天の与える好機も土地の有利な条件には及ばず、土地の有利な条件も民心の和合には及ばない」という意味、すなわち天地人の中でも「人」が最も重要だと言っているのです。日本のホースマンが不断の努力を続ける限り、競馬の世界でも勝機はあると思います。日本の馬が名実ともに世界一になるその日を信じて、我々日本のホースマンは努力してまいりましょう！

2020 年 7 月吉日

遠藤 祥郎

米国における生産および育成調教

発 行 2020年12月

編集発行 日本中央競馬会
馬事部 生産育成対策室

印 刷 株式会社ファルコンプリント